



コロニア文学

第六号

コロニア文学

第 6 号

1968年・3月



コロニア文学会
SÃO PAULO

コロニア文学・目次・第六号 一九六八年三月

創作

紺 青 の 城 (1 2 3 枚) …… 醍醐 麻沙夫
枯木のある風景 (2 4 枚) …… 弥高 文男
流 離 (3 1 枚) …… 三瀬 喜代志

詩

たくらむ …… 横田 恭平
老人とエスカレーター …… 可児 三平
高原抒情 …… 耕 玄

◆表紙と目次…高橋吉左衛門 ◆扉…関口俊吾
◇カット…沖田正雄・吉留要・半田知雄・高岡由也

荒地の中の雑木のように……狩海 亘

瘤 鯛……水野 林

幻想……藤田 勇

海と浜辺……永田 泰三

もの言わぬもの……小石 茂行

静けき木立の中……竹内 頼母

夜の悔恨……真木 衿子

病める人……小野 政子

大陸の朝……黒田 八重

随筆

異国の味……芦野 民雄

田園詩情……務台 一郎

ウルブプンガの発電所を見る……堀江 一

短歌

流浪の眼……小笠原富枝

雪の下……佐藤 博三

通夜明け……小竹 清子

夜の部屋……藤田美砂子

机の翳り……川原此露思

白い炎……南条由喜夫

夜汽車……陣内しのぶ

川柳

ものの命……………藤田蚊奇智

思考の襞……………安村 玉泉

我 欲……………坪井柳念坊

俳句

スバル・俳句……………推薦・長谷川清水

無疵の虻……………長谷川清水

痒い石段……………殿岡 萩花

兄 急 死……………川崎 春芹

評論

コロニア人の日本美術巡礼・2 (美術)……………半田 知

雄

映画とせりふ (映画)……………山 添 良 一

コロニア短歌の潮流 (短歌)……………安良田 清

詩について (詩)……………横 田 恭 平

特集

「私の終戦」・第四回

終戦前後の思い出……………林 伊 勢

終戦前後の断片……………南 俊 夫

「コロノ時代の思い出」・第二回

ある殺人事件 ……………佐藤 閑人

コロナ新刊書・交流団体紹介

「正木思水歌集」……………正木思水

・歌集「二世」……………細江仙子

「日々新たなり」……………輪湖俊午郎氏追憶記刊行委員会

「老移民の記録」……………山藤 伝

・交流文化団体の機関誌

創作

真夏のできごと（42枚）……………杉村志朗

日照り雨（75枚）……………川原奈美

野 生（29枚）旧作再録・五……………田畑三郎

選考委員の選後評

・選 評……………水野 林

・選 後 評……………山里アウグスト

・選後寸評……………武本由夫

韻文作者へお願い

・感想をどうぞ 「コロナ文学」作品募集

新入全員名簿

雑記

編集後記……………武本生

創作



紺青の城

(123枚)

醍醐 麻沙夫

(一)

宮沢良一がサンパウロ市長距離バス発着所に着いた時は、夜が最も華やかな時刻であった。深夜の頹廃は市民的な雑踏の中にもそのしるしを現わしていたが、圧倒的な覇権を握っていた善良な市民性はそれを鷹揚に黙認していた。だが一時間とたたぬうちにそれは毒花のように成長し、開花し、市民的な善良さを鞭打ち辱かしめ放逐するに違いなかった。

良一は小さなトランクをさげてタクシーから降りると、座席を覗き込むようにした。

「じゃマリヤ、さよなら。三日程で帰るから君も友達の外へ行って遊んで来給え。」

「ハイ、サヨナラ。」

日本語の返事が還った。小柄な可愛い黒人の女だった。マリヤを乗せた車の尾燈がくるくるときらめいて流れる夜にまざれるのを見送って、良一はB市行きのホームへ向って歩き出した。入口から眺めると発着場の建物や広場は強い蛍光色の照明に浮き上っていて、蝟集する人々やバスを蛾の群のように軽々しく見せていた。発着所の構内には雑誌売り場や手軽な飲食店のカウンターがひしめき合って並び、気ぜわしそうな客を集めていた。人々の頭上に君臨するラウドスピーカーがバスの発着を告るたびに、雑誌を手にとったりサンドイッチを頬張った人々は弾丸に当たったようによろめいてホームへの階段を降りていった。

彼が六番ホームへ着いた時、B市行きのバスは、既に荷物の積み込みを開始していた。決して急ぎ足にならず丁度この時刻に着くことは、旅馴れていると自負する良一にとって、無上の愉しみであった。

それは何ものにも制限されずに旅行中の時間や空間を自己の意のままに駆使するための最初の試練に打ち勝つことのように思えたのである。

旅行に浮き浮きしている家族連れや、途中でこれ以上退屈しない為に早くも自分が創った倦怠の中に打ち沈んでいる男の間を、彼は身体を斜めにしながら指定席を探し、老人の隣に坐った。横には日系人の娘が二人坐っていた。何気なく周囲を見廻し、その一人と視線が合った時、良一はその娘を知っていると思った。彼の表情を読みとったように、その娘は軽く頭を下げた。その時彼

は以前ある銀行の主催したパーティーで、その娘と踊ったことを思い出した。良一が会釈を返すと窓側の娘もこちらを向いた。

二人とも美しい娘だった。窓側の女は始めて見る顔であったが、二人共杏仁形の涼しい目をしていてそれ丈で姉妹と知れた。

ぴんと糊で固めた厚手の白シャツを着た運転手と助手が乗り込むと、ドアが閉じられバスは発車した。

暗く曲りくねった倉庫裏の道を通り、電車通りの石畳みの道を過ぎ、国道に出るとバスはヘッドライトを付けてぐんぐんとスピードを増した。

B市迄は八時間の旅である。良一は坐席を後に倒すと車の震動に身をまかせて、直きに眠りに落ち込んだ。二時間置きぐらいにバスは草原の中の港のように点在するドライヴインに停った。車がきしりながら停る度に、一瞬車内はけだるい沈黙に満たされ、それから半数ほどの人々は欠伸をしながらざわめいて立ち上った。何度目かの停車の時、うつらうつらとしていた良一は、鋭く漂う柑橘類の香りに目覚めた。粒子が飛び散るような強い香りだった。

「召し上りませんか、今買ったのです。」

横の娘が綱の中から赤黄色の果実をとり出した。

良一が見ると、それは赤児の頭部ほどの大きさのポンカンである。

「こんなに食べられないな」

「でも皮と実の間に随分隙間があるから、見かけほどではありません。」

「では頂きますどうも有難う。」

ブラジルで、こんなポンカンを作ったのは日本人である。夥しい隙間に篤農家の汗と努力が詰っているようだった。

それから良一は終点まで眠った。バスが終点に着いた時、既に少なくなっていた人々は未だ暗い街に散り、ガランとした待合室には姉妹と良一だけが残った。姉妹はだれかを待つらしく入口近くに坐り絶えず外を眺めていた。良一はG町の友人を訪ねるのだった。彼は始発バスを待とうと思って、G町行きの時刻表を所在なげに眺めた。未だ一時間ほど間がある。

「あのう、失礼ですがG町へ行かれるのですか」
窓側に坐っていた姉らしい娘が声をかけた。

「えゝ、そうです」
「私達もG町へ行くのですが、迎えのタクシーが来る筈になっています。もし、よろしかったら御一緒に行っていただけないでしょうか。未だ暗いのに知らないタクシーに乗るのが心細いのです。」

「はあ、僕は構いません。」

「良かったわ、ではお願いします。」

間もなく三人は迎えの小さなタクシーに乗った。

前部坐席に潜り込んだ彼は隣の運転手の被った幅広い麦藁帽に愕かされた。すぐに街を出ると車は、単調な響きをたてて広野を走った。もう朝だった。東の空が明るみ、道端の草叢や灌木の繁みほ青黒い色調の縛めから解かれて、自己の縁を蘇そうとしていた。運転手が気早くヘッドライトを消した時、小さな光の尺度を

喪った黒い道は、一瞬とらえどころもなく茫洋として前方に遠ざかるように見えた。

やがて蜘蛛糸のように軽く透明な光線が天空に満ち始めると、行手の丘の裾に靄が湧き起った。靄は未だ見えぬ太陽の接近に呼応するように汪々と脹れ拡がり、気の早い尖兵にも似た一握りの陽光がさし始めると、それを得て帛布のように耀いた。その未だ此処迄屈かぬ陽光の戯れは遠い合戦のように華やかに見えた。太陽がその輪郭を見せ始めると、靄は拡がり繋がり合って、幾つかの丘を島のように孤立させ、束の間の多鳥海を現出させてキラキラと行手に燦めいた。

「湖かしら」

と娘が呟いた。事実、数分後に車が膨大な水量の波打際を通過するのが、誰の目にも確実に思える程、それらはのびのびと輝やきながら行手に横たわっていた。

太陽は丘を離れ、既に用意された紺青の中を率直に昇りだした。良一が自然の目まぐるしい変化に見とれていると、隣の麦藁帽は不審そうに首を二、三度傾げた。良一がそれに気付くと同時に、車が喘ぐように遅くなり、がくんと停った。運転手と後部座席の妹が飛び出し前部を開いたが、たちまち蒸気とも白煙とも見分け難いものが噴き出して屈み込もうとした二人を遮った。

妹は、

「貴方が水も入れないでこんなに走らすから、エンジンがすっかり焼けて仕舞ったじゃないの」

と、自分のお抱え運転手を叱るように流暢なポルトガル語で云っていた。あんな高飛車な云い方でも若い娘がいうと朗らかな感じになるな、と良一は思いながら車を降り、姉と顔を見合わせ、どちらからともなく微笑んだ。

乗った時は末だ暗かったので注意して見なかったが随分古い車だった。一九三六年ぐらいの型であろう。運転手は、毀れたというのにむしろ生々として熱気を噴き出しているエンジンの傍で、困惑したように立っていた。それは領氏の一撥になす法を知らぬお人好しで無能な領主のようだった。普通、職業的な運転手達は素速い目配りをし、更に視神経から（顔の表情を変えず）反射的に手足に反応する習性のもたらせた、一種のむっつりした敏感さがある。

彼等にあつては口は冷たい武器である。だが麦藁帽の柔和な目はゆっくりとしばたいたし、粗い亜麻色の無精ひげに囲まれた口にいたっては、目で見た事柄の一つ一つを口笛を吹いたり舌打ちをして表現せずには居られぬあの馭者の陽気さに溢れていた。少気の毒な云い方だが、要するに彼はどう見ても車の運転手には見えなかった。彼は良一達に頼りない云い訳をしたが、良一達が一向故障を苦にしていらないのを知ると、彼もたちまち呑気そうになった。それから折りよく通りかかったトラックを停め、

「アテ・ローゴ、セニヨリータ。アテ・ローゴ、セニヨール（さよなら）。」

と手を振りながらB市へ戻って行った。

トラックが見えなくなると、妹が良一に話しかけてきた。

「もう四十分程でG町行きが始発バスが通るそうよ。」

「やれやれ、未だ大分貴女達と一緒に居なければならぬ訳だな」

「御迷惑ですか」

「いや、冗談ですよ。ところで貴女達の御名前は。僕は宮沢良一。」

「私は桜井順子です。姉さんはゆみ子。」

「こんな誰も居ない処で故障されて仕舞うと、やはり宮沢さんに一緒に来て頂いて良かったわ」

姉のゆみ子が霽々と云った。そこには蝙蝠傘を持って来た人が降り出した雨を満足して眺める様な響もあったが、いずれにしても、姉妹にとって良一は最早曖昧な存在ではなく、身近かに居るべき正当な理由を持った青年なのだ。姉妹は良一に対して親しみを寄せ、打ち解け始めた。それに、良一も美しい容貌を持った青年なのである。

ゆみ子と順子は、草原に分け入り点在する花を摘みだした。姉のゆみ子は枯藁色の厚手なスウェーターを着てコニヤック色のスラックスを穿いていた。妹の順子は赤皮のコートの下にグレーの薄いスウェーターを着て黒いスラックス姿である。二人とも背が高く、のびのびとした肢体は少し離れて眺めると愕くほどよく似ていた。

二人は花摘みに熱中し、花を追って別れ別れになり、良一から

遠ざかった。太陽は夙に高々と昇り、紫色の小さな花を探している姉妹の周囲の草叢からは水蒸気が緩慢に立ち昇っていた。あとから、あとから、それらは草陰や地面をゆらゆらと浮き上り、彼女達の膝ほどの高さで朝日を受けて一瞬あたりを輝やかせては、朝の透徹に身を委ねていった。その光景は名も知れぬ精霊たちの一斉の昇天のようであった。良一は道端に置いたトランクに腰をかけてそれを眺めていたが、ふとこの光景の完全な音の欠除に氣付いた。陽光に溢れた丘や草原は不思議な静謐に被われていた。味爽の小鳥の簇は何処へ行って仕舞ったのだろう。動物の声も遠い自動車の響きも、風の微かなざわめきすらも聞えなかった。彼を包む風景の穏やかで奥深い沈黙、点描派の絵のように明るく彩られたよそよそしさは、彼を密かに不安な気持にした。彼はじつと聴覚を澄ませたがやはり動くもの叫ぶものの証しはなく、耳が痛くなる程あたりは静かだった。それは、自然が彼を無視して彼を置き忘れて、どこかへ立ち去ろうと意図している不吉で美しい前兆のようであった。彼は身を屈めて小石を拾った。そして少時躊躇してから半ば乾いた小石をアスファルトの上に転がせた。それは耳慣れた極く自然な音を立てた。ほっと安心した彼がやゝ大き目の石をとり抛った時、そのカラカラという音の聞えやらぬうちに、チツチツと遠い小鳥の清冽な囀りが天空の一角に蘇った。

良一はまぶしそうに目を挙げて穹蒼の抜けるような紺青さを眺めた。美しく晴れ渡って一片の雲も怒さぬ浩瀚な碧空は、壮大な回教寺院の青い石の中庭のように堅固な感じをあたえた。この空

の色こそはブラジルの支配者だった。緩やかな起伏をもつて拡がる珈琲園、赤茶けた背中の牛の群、木綿の白っぽい服を着た金髪の娘達、それら全ての地上の風景の潜主なのだ。珈琲園の濃すぎる緑、移動する牛群を包む赤い土埃、娘達の輝く頬や翳ったまっ毛、汗ばんでいる胸元のふくらみ。

「なにを見ているの。空を見上げて。」

「きれいな色だから。」

「サンパウロにはない色ね。」

戻って来た順子も空を見上げた。それから胸元の小さな花束に顔をうづめた。そのポーズは順子を優美な彫像のように見せた。

○

やがて始発バスが通った。バスは可成り混んでいた。もつとも二時間置きに出るのであるから始発が一番混むのかもしれない。日曜日の朝らしくバスは陽気だった。土地の人々の気安さから一隅のやりとりは、たちまち笑い声と共に全体に拡がった。使い古された陳腐な冗談が人々の躊躇のない反応や哄笑を得るさまを眺めると、人々は見馴れた札で素速い売り買いをしているようだった。健康で少し退屈だったが、とに角うさん臭い贗物の臭いは無いのだ。

姉妹は別々に坐り、間もなく順子の隣りの少年が母親とバスを降りた。良一が順子の隣りに坐ると、空いた席が窄かったので彼の腕と腿に若い女の弾力が思いがけぬほど密着して伝わった。車体の振動につれて順子のコートの撓やかな赤い皮と滑らかな裏地

のサティンは、夏の午後逃げ水のように二人の間を揺れ動いた。それは二人の節度を無視して、皮膚たちが睦み合い、淫らな会話を始めたような居心地の悪さだった。だがその時、誰かが大声で運転手を揶揄し車内にどっと笑いが渦巻き、良一はそれに気を奪われた。運転手は顔中を笑いに苦しいほど占領され、スピードを落さず振り向いて片手を振り廻し反論していた。それを見て、良一は後部に坐っていて良かったと思った。

車内の騒ぎが静まると、再び順子のしっかりした軀つきが良一に伝わって来た。先刻よりはいくらか馴染んだ感覚になっていたが、やはり良一の若さを刺激した。だが、良家の子女らしい娘に上品な口をきゝながら内心で肉感的な想像を加えるのは失礼なことだと良一は思い、それから、この様子なら順子はきつと大きな足をしているに相違ないと勝手に決めて安心をした。確かに、単なる足の大きさならばあまり肉感的な想像とは云い難いであろう。

「宮沢さんはブラジルに来て何年になりますか。」

順子が月並な質問をした。順子も気詰りな感覚を擔っていたらしい。

「もう五年になりますよ」

「どんなお仕事を仕えいらっしやるの。」

「カフェ（コーヒー）の国内貿易をする会社に勤めているんです。以前クラシファイカドル（品種鑑定人）をしていたんですがね。毎日サントス迄行くのが大変だから辞めて、現在はサンパウロの事務所で働いています。」

「クラシフィカドールなんて、一世の方にしては珍しいお仕事ですね。」

「なに、六カ月の講習で免状がとれるのですよ。」

「でも六力敷いわ。日本でもそんなお仕事だったのですか。」

「学生でした。」

「それでは随分若いのね」

「いや、もう若くはありませんよ。十分な理由を持って自殺してもよいくらいです。」

順子は可笑しそうに笑った。良一は、先週観た三十才の誕生日に自殺する男の映画を想いだして云ったのだったから、順子にはひどく唐突に聞えただろう。彼は二十八才である。

「貴女は幾つですか。」

「二十一です。」

「若いな。それなのに貴女の身のこなしは非常に優雅で完成されていますね。先刻貴女が花の香りをかいだ時、気付きましたがね。」

順子は良一が本気なのか冗談を云っているのか推りかねるような顔付をしたが、素直に、

「どうも有難う。でもそんなことはありませんわ。」

と云った。その素直さに豊かな感じがあった。

「宮沢さんはブラジルに慣れました。」

「え、直ぐにね。食物も好きだな。フェジョアーダなども自分で作りますよ。」

「へえ。自分で作られるの。」

順子は意外そうに良一の顔を見た。そこには独身青年の日常生活に対して、若い女が抱く軽い同情と好奇心があった。(まともな独身者のような云い方をしてしまった。)彼は少し自分を疚しく感じたが、二人の友情の幼さ淡さからして良一が彼の女性関係を改って説明するのも仰々しかった。

「えゝ。自分で作りますよ。」

億劫に答えながら、彼は小さな陥し穴を順子に仕掛けたと思つた。その時、バスは丘を降り、美しい川を渡っていた。

○

良一はブラジルに着いて半年後にブラジル人の若い娘と愛し合い、婚約した。着いてすぐに友人に紹介され、彼は家族ぐるみの暖かい好意を受けていた。

予期に反して婚約してから性格の違いが目立ちはじめ、一年ほどで彼は婚約を解消した。結局外国で一人ぼっちになった彼は、娘の生活していた満ち足りた雰囲気、家族達の醸す愛情の暖かさに惹かれていたに過ぎなかったのだ。それ以後、淋しさと恋愛の区別をさえ付けられなかった自己の理性に対する不信感が彼の心を重苦しく占めていた。婚約中に彼は十八だった娘の軀を知っていた。別れる時、娘は今迄の矜りや高慢を棄て、泣き、嘆願した。彼は娘を哀れに思ったが、その涙や約束は二人の一生を決して保証しないのだ。彼は冷たく娘と別れた。だが若し娘の軀を知らなかったら、二人はこんなに傷つかなかったろう。彼は少女の軀の

上で淫蕩に燃えた彼の情念を忌わしいものに感じた。彼は自己の理性や情念を蔑み、務めて冷淡に扱おうとするようになった。(お前達は乞食のように愛情を欲しがって、ぐるりになって俺を騙し、俺と娘を不幸にしたのだ) 更に彼はブラジルの社会に入りそこなった自分を感じていた。婚約パーティーの記憶がその象徴をなしている。

あの日。約束のドレスがなかなか届かなくて当り散らす娘。おろおろする母親。やっと始まった陽気なパーティー。沢山の笑顔が彼を離さなかった。あの頃、娘とは英語を交せて話していた彼は、ポルトガル語を十分に理解出来なかった。彼は半分も理解出来ぬ人々の饒舌を忍耐強く注意して聴いたが、それは会話のためではなく、相手が良一の笑いを期待した個所で正確な笑い方をし、非難や同感を求める個所でぐさま合槌を打つためにすぎなかった。良一は、哄笑、苦笑、微笑、唸り声、あどけない表情、舌打ち、非難、感嘆、軽蔑等考えられるかぎりの反応を既め用意し、獵師のように油断なく相手の表情と言葉の断片に注意していた。それは二人の漫才師が向い合って立ち、鏡に写る一人の人物を演ずる様にせわしなく滑稽で、彼は腹立たしく物悲しかった。彼は「お前達の云う事など何にも分らないぞ」と叫びたかった。だが異邦人に娘を与えた両親の親しみ深い日差しを見て、彼はそれを堪えた。それに続いたみじめな破局。彼の若さと外国に対する憧れが、あまりに単純に同化について考え跳躍し、彼は飛びつき

そこねて深い溝に落ちたのだ。だが彼の自恃の念は彼に後ろを振り向くことを恕さなかった。後ろには…日本があった。彼がサンパウロに着いた頃、街角でコーヒーを飲んでいると一人の日本人の老人が新来青年の良一に近付いた。老人は不遠慮に彼のシャツの袖を指にはさんで手応えを確かめた。

「日本のシャツはええのう。」

良一は愕ろいた。良一にしてみれば、シャツは布地、型、柄、値段、うつり工合などから成り立っていた。それらを一足とびに飛び越えて、日本のシャツと云って仕舞ったら老人の見ているものはシャツではなく日本であった。良一は、日本では…、日本の何々は…、日本と較べると…、と云う表現でしか自分の考えをまとめられぬ多くの日系人を想い出した。三十年、四十年前の古ぼけた記憶の日本。

黴の生えた鯛の頭にすがって生きている人々。彼らの精神構造は不具なのだ。良一は彼の袖をつかんでいる黄色い手を憐れむように見た。

「アメリカのシャツはもつと良いですよ。」

彼は冷淡に云って歩き出した。

そんな良一にとって今更おめおめと日本に目を向ける事は敗北であった。彼は少数の友人を除いては、ブラジル人とも日本人とも付き合わなくなった。彼はジャルデイン・アメリカ区の繁った街路樹に蔽われた小さな二階家を借りて移り住んだ。隠者のごとく住みたいと願って。週に四日彼は働いた。

坂の途中にある彼の家の二階からは、夜になると遠い空港の灯が見えた。イビラプエラ公園の大きな暗みの向うに、キラキラと青や赤を交ぜた無数の灯火がかたまつて燦めいていた。数秒毎にサーチライトの強い光が、その上を横切った。その灯火はあまり遠いので星のようにチカチカと瞬いて、僅かな霧にも視界から消えた。夜、窓を開いて遠い空港の灯を眺めている時、良一は行方もなくて迷っている彼の魂を感じた。暗い海の上を踉蹌と漂泊している哀れな魂。

ある夜は、空港の星雲のような灯は望郷を囁いて彼を悩ませた。(こゝへ来れば、お前は日本へ行かれる)(こゝからは日本へ行く飛行機が今にも飛ぶのだ。お前を待っているのだ)復或る夜は、未来への憧れと励ましに満ちて灯は瞬いた。(お前は何者になりたいのだ。)と優しく訊ねる導師のように。

彼は迷つてはいけなないと考えた。定着しなければ。

定着！ だが何処へ？ 彼は孤独だった。行く処もなく、頼る人もなかった。苦悩した彼の心は徐々に観念の城を築いた。流謫の彼の魂を凭つて憩ませる仮設の城は、だが日を追うにしたがつて秀麗な城砦を高め、彼の心の裡に聳え始めた。いつの間にか、彼の心はそこで何物かを待つ様になった。彼の魂を漂泊の呪縛から解き放ち、国境や伝統や人種や言語を一挙に越えさせる絶対的な自由への啓示を待ち始めたのだ。

城の中央には啓示を聴く天壇が塵一つない静浄さで構築された。彼は外面の生活をも可能なかぎり単純にして、小さな二階家に

掘った。蓋し小さな二階家は観念の城の外堀の位置を占めつゝあつた。更に此の城は大胆さと臆病さに彩られていた。自由の王笏を得たいと願う魂の大胆さと汗水たらして歩む移民の道程を忌諱する行為の臆病さとに。

その頃の或る土曜日、良一は映画館の待合室で、日本人の子供を連れて二十才くらいの可愛い、黒人の女に逢った。子供が落した菓子を良一が拾うと、女は笑って礼を云った。二人は約束して翌日逢い、女は簡単に良一の云う通りになった。それでも着ているものを脱ぐ時、とても真面目な顔をした。マリヤは夫と別れセアラ州から来て、日本人の家庭で女中をしていると話した。良一はそれ迄は週二日家政婦を頼んでいたのだが、彼女の給料を訊ねて、そのくらいなら払えるから来て呉れないかと願んだ。

「今の家では、とても可愛がってもらっているから」とマリヤは悲しそうにしたが、次に逢った時承知した。彼の住む二階家は急坂に建つので、裏に廻ると三階建てになっていて、下にはガレージと女中部屋がある。良一はマリヤを時々「花ちゃん」などと呼んだが、彼女はちよつと頭を下げながら「ハイ」と返事した。良一はその翳のない素直な笑顔を見ながら（こんな女がどうして夫と別れたのだろうか）と不思議に思った。宮沢はマリヤを束縛しなかつた。

マリヤも将来を思い悩まず現在の日々を楽しんでいるらしかつた。二人は時々恋人のように振舞い、あとは静かに暮らしていた。

バスはいつの間にか砂利道に入り、赤い土埃を舞い上げながら走っていた。ちらほらと黝ずんだ板張りのバラックが見え始めた。この地方は綿の栽培が盛んで、日系の大きな精棉工場の在るG町はその集散地として知られている。三月から五月にわたる収穫期になると多くの季節労働者が集まった。トラックに満載されて未明の綿畠に配置された彼等は、弾けた実の白さが灰かに浮びだす頃一日の仕事を始めた。広大な綿畠に日が昇り、沈み、実の白さが又もとの窈然たる闇に溶ける迄作業は続けられた。品質を低下させないためには、実が開いたら可能なかぎり短期間に収穫するのが望ましかった。隣接した群れを時々眺めては、人々は競争のように綿を摘んだ。

暮れてゆく空の蒼さにふと気付くと大きな月が昇っていることもある。明るい月明の中で働らく人々は、零れ落ちた月の破片を大急ぎで拾い集めているようにみえた。その頃になると工場の倉庫には高い天井迄も綿の包みが押し込まれ、中庭にもトラックがやっと通る丈の幅を残して包の山が城壁のように高々と築かれた。六月になると季節労働者達はそれぞれの故郷に帰って行ったが、故郷に仕事のあてのない人々はG町のはづれに粗末な板張りの小屋を建て、住むようになった。僅かな手仕事にありつきながら次の収穫期を待つて。

「そろそろG町ですよ。」

「まあ、こんな処に踊る場所があるのかしら。」
「踊るって。」

順子は日本人会の日舞コンクールの審査員として姉と招かれたのだと説明した。

「踊る処。まあ倉庫のような処ならありますよ。」

「困ったわ。大変な処へ来て仕舞った。」

良一が冷かし気味に云うと、順子は真にうけて心配そうに窓外を眺めた。だが小さな雑木林を過ぎるとバラックの群れが消え、家が建てこみ始め、舗装された日曜の街を人々が馬や自転車に乗って往き来するのを見て、ほっとした顔付になった。

「なーんだ。随分賑やかじゃないの。」

良一に向けた笑顔には、彼の小さな悪戯を咎め、答めるより迅くたちまちそれを赦してしまふ馴れ合いの密かな徴候があった。良一は、順子の優雅な詰問と赦免を同時に受けながら、声をあげて笑った。

笑ってから彼は自分が少しだらしなく笑い過ぎたような気がした。彼は、（俺は順子とは、姉のゆみ子とよりは仲が良いだけだ）と思った。

街に入ると直ぐに終点だった。三人が降りると、チョビひげを神経質に刈り込んだ小柄な男が駆け寄って大声をだした。

「やあ、楼井さん。お疲れでしょう。タクシーで出た筈なのに何時迄たつても着かれないので心配してましたよ。」

タクシ一の故障を姉妹に説明されながら、彼は「いや、はや」とか「それは、それは」とか合槌をうった。

「では、僕は此処で失礼します。」

「どうも有難う御座居ました。」

姉が丁寧な礼を述べた。

「午後から見に来て下さいね。」

と云う順子に良一はちよつと笑いかけ、怪訝そうな表情のチョビひげに目礼すると、小さなトランクをさげて歩き出した。

陽はもう高くなり、暑かった。

(二)

良一は、ソフトデニムの明るいブルーの背広上下に、もつと淡いブルーのシャツを着ていた。洗い晒した服だが、男達が茶色っぽい服装をしている此の町では、それはお酒落で清潔な印象を人々に与えた。

彼の唯一の贅沢はスリッパオンの靴の横からのぞいている白い靴下だった。何故なら、この土地の細微な土は一日穿くと白い靴下を薄赤く染めてしまい、もう洗っても決して落ちなかったから。

小さな教会の在る広場から、三メートルほども伸びた並木道を曲って直ぐに池田の下宿がある。裏庭に通じる低い鉄製の扉を押して横に廻ると、観音開きの窓越しに友人が朝のコーヒート昨夜の残りものらしいビールをごちゃまぜにして飲んでいるのが見えた。

「やあ。」

「やあ、来たな」

「どう仕事は、綿屋さん。」

「まあ、相変らずさ。」

「女の子は」

「いやー」

三日ほどの無精ひげを生じた友人は、悲しそうに首を振った。

「君も知ってるように、此処ときは女の子と一遍でも映画に行くと皆に知れ渡るからなあ。結婚する気できき合うか、B市の女郎屋へ行くより方法がないんだ。」

池田は溜息を洩らし、こそこそとビールを飲んだ。

（池田がこんなビールの飲み方をするなんて。彼がブラジルに着いた頃は、まるで若い貴公子のように見えたのに）と良一は想い出した。あれから三年たっている。

池田は冷蔵庫から新らしいビールを出すと、裏庭の葡萄棚の下のテーブルに置いた。二人は親しい友人らしくお互を見つめながら、暫くは黙ってビールを飲んだ。まだ青い葡萄の房が沢山をつけていて、そこを涼しい風が吹き過ぎたり、濃い紫色に光る蝶が飛んできたりした。

「どうやら田舎にも疲れてしまったらしい。」

池田がポツツリ云った。

「学生の頃は、ポルトガルの片田舎の海岸で旨い葡萄酒を飲みながら魚料理を食べたいと夢見ていた。だがポルトガルへ行く金もなかったからなあ。」

日本に居たくないという理由だけでブラジルに来たのだし、都

会に居たくないのので田舎に来た。動機が消極的だからなあ。いつかは行き詰るって訳だ。」

「なるほどね。池田、君の可表そうな精神は病んでいるのだ……。だがそれにしては、君は田舎に来てから随分と肥って血色が良くなったではないか。」

精神が病んでいるというのに、君の肉体は此処を居心地良く感じのほほんとしているのだな。怪しからん話だなあ。」

「全く申し訳ない。」

池田は眼鏡を右手で押し上げながら云った。

「自分にもよく分らないのだ。だけど、田舎に三年も居ると変化のない日常にどっぷりと浸ってしまつて、自分が望んでいた自分ではなくだんだん他の自分に変質して行く様な気がするのだ。少しづつ水垢のようなものが身体に溜つてこびり付き、いつの間にかそれが硬いものになり身動きがとれなく成つてしまう様な気がするのだ。あのカスクード（鎧魚）のように。：一人でブラジルに着いた時、自由を手に入れたと思つた。だがすぐに環境というやつが僕の廻りを包むと、空にかゝつた虻のように見せかけの自由は他愛なく消えてしまった。しかもその環境には神とか国とか伝統は不在で、重苦しい生態的なものしか感じられない。」

「とにかく僕達は二十三、四迄日本で育つたからなあ。僕達の心の裡に在る日本は、あのポルトガル人の考案した※四角い輪のように厄介な代物だ。」（註、ポルトガルの農民が四角い車輪を考案して使用していたが、角が磨滅して丸くなったのを見て、そろそろ

新しいのと換えようと呟いたという笑話)

良一が云うと、池田はうなづきながら云った。

「まったく厄介だ。だが最近考えるようになったのだが、我々は多分に農民的な感傷に禍されているのではないか。つまり自分の生きていた土地から引き剥がされて仕舞うと自分の存在そのものが否定されて仕舞うといった農民的な発想が、我々の裡の日本を益々四角い車輪にしているのではないかな。それで僕はそこから抜け出る為には、ブルジョワジュー的な理念で生きる必要があるのではないかと考えるようになったのだ。詰り碎いて云へば日本では得られぬほどの経済的な活動をブラジルで始めることによって、多分に農民的な祖国からの感傷から脱け出ようと思ひ始めたのだ。」

「なるほどね。」

「そんな訳でね」

池田は少し苦笑しながら続けた。

「僕は会社を辞めて、独力で仕事を始めようと思ったんだ。ところがいざ自分で、となると何をしてもよいのか途方にくれて仕舞った。僕には自分でエサを探す能力など全然ないらしいんだ。」

「ふーん。秀才の誉れ高かった君がねえ。もつともブラジルに来た友人達は、どの大学を卒えたにしる成績の悪かった順に独立して成功しているからな。そうしてみると大学では『エサを探す能力』などは教えてくれなかったに違いないよ。」

「大学では『エサを与えられる能力』を教わった丈さ。」

池田は憤慨に堪えぬように云った。

「今更おこつても仕方ないよ。」

「それもそうだ。君自身はどう考えているのだ。」

「僕は待つ。」

「君は何か自分で始めることで四角い輪を丸くしようと考えているのだが、僕はその四角い輪を思い切つて捨ててしまつて待つのだ。僕は今では日本の友人達をまるで死別した人々のようにしか想い出せない。最初は恋しい人々だった。その一人が亡くなった報せを受けた時、僕は心の裡に彼の新墓をつくり真新しい卒塔婆を立てた。だが、友人達が就職したり結婚したりする度に僕には彼らが記憶の中の人々とは変つてしまつたと感じた。

中共の事ばかり云つていた女子学生がいた。彼女はもう結婚した筈だが現在は恐らく中共のことなど忘れてしまつているだろう。夫や子供や僕の知らない違う生活に生きているだろう。だが僕は中共の事ばかりを考えていた彼女しか識らないのだ。

彼等はもう僕の識らない人々なのだ。僕は彼等を喪つたのだ。いつの間にか僕は生きている人々の名にも卒塔婆を立て始めた。日本そのものに大きな卒塔婆を立てたら気持が良いのだがそこ迄は出来ない。だが浦島太郎は、帰る処がある。待つている人が居る、と思つたから不幸になつたのだ。

君が考えたように、人間は耕すことを覚えてから真の悲しみを知るようになつたのかも知れない。

穀物や野菜と一緒に幸福や不幸の種を蒔いては刈りとりだしたの

だ。もしも耕すことを知らない鳥だったら、決して飛び去った巢のことなどを想い出して悲しんだりはせず、ただ自由に空を飛翔するだろうな。だが僕は人間だ。飛び去った巢を想い出さないと云ったら嘘になる。祖国を棄てて幸福に生きるのは容易ではない。たゞ本当の原型的な農民と支配者だけが外国でも幸福に生きられそうな気がする。先刻云ったことと矛盾するようだがね。何故なら彼らは国から生まれるのではなく、国を造る人々だからだ。だが僕達はそのどれにもなる教育を受けなかった。」

「教養が邪魔するというのは本当だ」

池田が云った。

「そうなんだ。我々は実に中途半端だ。先日、アマゾンから帰って来た人の話だが、アマゾンで一日に一匹の魚しか釣らぬ元日本人に逢ったと云っていた。理由はそれ以上獲る必要がないからだ。日本人に逢ってもあまり懐かしそうな顔もしなかったそうだ。アマゾンボケだと知人は云ったが僕はそうとも思えない。僕の考える原型的な農民、原型的な幸福のように思える。」

「そうかも知れないな。だが僕達は原型的な人間ではないよ。原型的な人間になるにはあまりに多くのものを捨てなければならぬ。いい。」

「捨てたほうが自由になるか、捨てないでそれらを使い切った方が幸福になるか、未だ僕には分らない。僕はたゞ偽りの連帯を切りすてゝ個にとじこもり何かを待っているのだ。」

「惚れっぽい君が急に聖人のようになったのもそのためか。」

池田は悪戯っぽく云った。

「そうだ、意識的に避けているのだ。可愛い、女の子達を僕は沢山知っている。彼女達はあどけなく不確かでキラキラした妖精のように見える。僕はそんな彼女達が好きだ。だが彼女達が僕に好意以上のものを持つと、そのキラキラしたものは魔法のように消え去って、家庭とか赤ん坊とか義父や義母の笑顔とかをぞろぞろ引き連れた確実に重々しい存在になってしまう。それ等はあの果てしない移民の道を、僕と一緒にいこうと誘うのだ。」

僕はちよつと待ってくれと云う。あの長い道を苦しまずに歩むには、一度つまずいた僕はあまりに多くの課題を抱えすぎている。重い荷物を持って彼等と歩き出す勇氣はないよ。」

「ふーん成程ね。ところで君はまずい日に来た。」

暫　んでいた会計士が昨日から働きだしたので、僕は今日も仕事があるのだ。会社のジープは空いているから、自由に使ってかまわないが。」

「いや、一人で釣に行ってもつまらないから、舞踊コンクールでも見に行こう。」

「会館であるな。でもどうして知っているのだ。」

「一緒のバスで来た姉妹が審査員なんだ。」

「まったくなあ。女の子には係り合わんと云うそばからそれだからなあ。」

「いや、見に行くと約束した丈で仔細はないのだ。」

「いいですよ。いいですよ。分りましたよ。詰り怖いもの見たさと

「いやつだな。」

池田は少々見当はづれな批評をした。

昼食に会う約束をして会社へ行く池田と表で別れた良一は、ホテルサン・ジヨージへ向って歩き出した。町は五本づつほどの主要道路が直角に交っているだけで、どこに居ても町を囲む緑色のひろがりが見えた。唯、方角によってそれが珈琲園だったり、綿島だったり、灌木の生えている牧草地だったりした。町はずれ迄来た道路は自然にそれらの緑の中に身を隠していたので、空から眺めると此の町は編み始めたばかりの籠のように見えるだろう。

彼はホテルの入口で又、姉妹に逢った。ホテルと称しても、とりたてて大きな建物ではない。外見は普通の家と変らないが、入口にソファやテーブルが置いてあった。

「あら。」

「貴女達も此処に泊るのですか。」

「えゝそうです。宮沢さんもですか。又御一緒だなんて偶然ですわね。」

姉のゆみ子は、人々をして旅に憧れさしむ旅のあのロマンチックな属性の具現でもあるかのように良一を眺めた。

「ところがあまり偶然ともいえないのですよ。何故なら、どうにか泊れるようなホテルは此処しかありませんからね。」

姉妹は町を見物したいと云ったが、別にとりたてて見る処も無いので、良一は彼女達を公園に案内することにした。公園の中には動物が飼われている。

公園は町はづれの広いユーカリ林の中に在った。

風がユーカリの青白い葉うらを見せて過ぎると、林は陽光の明るさに不似合なほどサラサラと淋しい音をたてた。三人は近道を選んで破れた枯木の囲みから、落葉に埋れた小径に入った。真つ直ぐな灰青色の幹は木洩陽を明るく反映させながら、非常に淡い色彩で丹念に描かれたように、繊細にお互を区別し重なりあっていた。一株のユーカリでさえ夜も更けるとひたひたと絶え間なく露を滴らせ、行く人を通り雨かと急ぎ足にさせるほどであるから、これほどの林なら毎夜、夢幻の雨滴、真実の雨よりもつと軽やかに幽艶な雨足が訪れるのだろう。昼近く人気の無い公園には、幾つかの艦が、そこに動物が飼われているとも思えぬほど寂然と静まり返っていたが、三人が近づいて覗いて見ると、湯気の立ちそいうな浅い泥水に半ば乾いて眠っていたワニがうつすらと目を開いたり、禿鷹が太い枯枝の上で羽をゆさつと動かしたりした。三人がゆつくりと歩き遶るにつれて、閑散とした小動物園に動物達のものうげでかすかな反応が陽炎のように揺れて、復消えた。

女性を動物園に案内するなど、堅実な発展を望む男女の交際の第一歩のようだと良一は思った。恋人達はお互に寛大さを示す微笑を浮かべながらマントヒヒやイノシシを眺めるのだ。良一にはそれはひどく無縁で徒爾たることに思えた。良一が自己の生き方を追求する過程には、順子達と末長く交際する必要など無いのだ。

良一は以前此処に来たことがあった。始めて此処を訪れた順子達の反応の亢さと、自分のそれより低い反応との落差を埋めよう

とはせず、むしろその差を保って、良一は知らない女を見守るように順子達を眺めた。そのくせ、順子がキャラメルの箱を開け、最初の一つを渡した時、良一は何となく満足しながらそれを口に入れた。

三人は間もなく公園を出た。正午の日影は動かなかった。

(三)

又、ビールを飲みががらレストランでおそい昼食をして、池田と別れた良一が、教えられた三つ目の角を曲ると、直ぐに日本人会館があった。それは体育館の様なアーチ型の屋根を持ち、ピカピカ光ったトタン屋根と末だ少しの汚れも無く陽光をはね返している裏白な石膏の壁は全体に落着かぬ印象を与えながら、あの安手な新築の建物に共通した見え透いた決心、これから力一杯風雨と闘ってやろうという性急で見かけだおしの闘志に溢れて居た。良一は道路に散乱する光線にちよつと目を細めながら建物に入った。五百人程を収容出来る広さのコンクリート敷きの内部は、折り畳み式の椅子とミカン箱の台に板を渡した急造の長椅子が半々に置かれ、もうほとんど満員だった。入口には寄付を受け付けるテーブルが置かれ、その横に作られた売店には若い娘達が氷の入ったバケツから水を滴らせた飲物の瓶を急がしそうに取り出して、客に渡していた。

正面に綿会社の寄贈した、G町日本人会様江と縫いとりのある

黄色い幕が、畳んであつた皺を残したまゝ下つていて、その間からチョビひげが忙しく飛び出して来ては下の人と何か打ち合わせをして、又舞台に駆け上つて行つた。馴れない関係者達の無駄の多い慌しさや、取るに足らぬ出来事をも直ぐに開幕の希望に結び付けて見守る観客達の動きを見ると、コンクールが始まるの間が無いらしかった。チョビひげと打ち合わせをしていた男が、更に二人の青年に何か云うと、彼等は煮詰まりかけた煮物を思い出した様に、慌ててどこかへ出て行つた。

舞台に近い左手に審査員席が設けられていて、日本人会の二人の老人と並んで振袖姿の順子とゆみ子が坐っていた。隣の老人がますます老人臭く見える程二人は若くて、大輪の花を活けた様にそこだけ明るく見えた。少し緊張して坐っている二人を見た時、良一は改めて姉妹の美しさに愕ろいた。二人は化粧をしていた。

（巧緻な柄の和服。うっすらと端麗な薄化粧。そういうものが女を綺麗に見せることは知っている。しかしそれにしても美しい。）
順子が良一を目敏く見付けて、ちよつと会釈をした。その視線を追つて、何人かの待ちくたびれた観客が後を振り向いた。首だけを後向きにして斜に彼を見上げている目の上を、流れに逆らうように飛び越して順子に遠い微笑を送り返しながら、良一は少しの気恥かしさと、それにより更に少しのあまり理由のない優越感を感じた。人々が前に向きなおると、照れた良一は、「だけど、ほんまに美人やな。」と声に出して呟いた。本音を吐いたにしても、

関西弁なら自分の云い廻しではないという逃げ道が何処かにある。

老人達の聴きとりにくい挨拶が終るとようやく幕が開いた。舞台は思ったよりも明るく照明され、両側に灯の入った赤いぼんぼりが置かれ俄造りの乱雑さの内にも、日本舞踊らしい華やかさが漂っていて客席の動揺の中に、そこだけがシンと静まり返っていた。しかしその静けさは直ぐにレコードの針音に破られ、頬を赤く塗った幼女や刀を差した少女達が次々に出て来て、橋幸夫や島倉千代子の歌に合わせて緊張しながら踊った。少女達は習い覚えた踊の手順を間違う事ばかりを恐れていたので、試験所の入口で昨夜詰め込んだ勉強の項目を急いで反復して居る中学生の様に、目を宙に据えて一心に考え込むような表情をしていた。

三十人程の少女が踊って予選は終わった。

「これで予選は終了しましたが、サンパウロからおい出になられた花柳金栄先生の踊りが御座居ますから、お帰りにならずお待ち下さい。越後獅子、長唄越後獅子を踊っていただかれます。」と進行係の声がマイクに響いた。

やがて観客のざわめきが静まると、カチカチと柝が鳴り幕が開いた。先刻の静けさが夕暮れの為に、もっと濃密になって舞台を支配していた。淋しい笛の音が聞こえ低い太鼓の連打が始まると、金色の獅子頭をのせ、キリリと膝から下の締った黒っぽい獅子舞いの扮装をした女が滑るように舞台中央に進み出た。姉のゆみ子だった。拍子定まり

● (017. j p a g) 打つや 太鼓の 音も澄み渡り。

彼女は両手に持った小さな撥で胸に下げた小鼓を軽く叩いた。短かい三味線の独奏が終り一瞬の停止の後、ヤツと徴かな思い入れの掛け声に誘われる様にゆみ子は舞い出した。

角兵衛 角兵衛 と招かれて 居ながら 見する石 橋の 浮世を渡る風雅者。

観客は静まり返って見ていた。(思ったよりもずうっと上手い)。良一は快い驚きを感じながら舞台のゆみ子を眺めた。やがて長い乱調子の囃子が始まると彼女は後向きになって上の着物をおろし襷をかけた。赤い派手な着物が現われ晒を両手に持ったゆみ子が、流れる水のように白い布地を舞台一面に乱れ咲かすと、観客たちの歎声に続いて熱心な拍手が起った。

○

踊りが終ると、人々の混雑の間を縫って良一は審査員席の前へ来た。

「大変ですね。」採点紙を整理している順子に声を掛けると、彼女は上気した顔をあげた。

「宮沢さん、夕食御一緒にいたしません。」

「えゝ」良一が少し躊躇うと、

「先刻吉田さんがそう云われたのよ。」

「吉田さんて、……あゝ。」良一が鼻の下に指を当てチョビひげの真似をすると、順子は笑いながらうなずいた。

「何処ですか」

「ホテル・サン・ジョージですわ。」

「では僕は友人に断ってから行きますよ。」

宮沢が綿会社に寄ると、電燈の点った事務所で会計士と助手が仕事をしていた。池田はそれが終る迄は出られないらしく、所在無きように煙草を喫んでいた。

良一が夕食は日本人会の連中とするからと云うと、

「へえ。」と云って池田は良一を眺めたが、直ぐニヤニヤして、

「まあ、大いに頑張ってください。」と云った。

「そんなのではないのだ。」良一が云い訳をしながら外へ出ると、池田の気張って吹く「軍艦マーチ」の口笛が背後に聞こえた。

○

ホテルの食堂にはテーブルが幾つも続けて並べられて、二十人ほどの人々が坐っていた。

入って来た良一を見ると、チョビひげはどうぞ、どうぞと掌を抑向けにして、順子の隣を勧めた。どうやら彼は早計な臆測をして、良一をサンパウロから付けて来た順子の恋人だと決め込んでいた。

この町では、粹な人間だと目されている彼に従って、土地の人々も姉のゆみ子にばかり話しかけたので、良一と順子は自然二人だけで話をする羽目に成った。二人は最初この妙な行き違い、根拠の無い黙認を不当にも感じたが、やがて本当に、大人達の中にまざれ込んだ少年と少女の様に、二人だけの話題に熱中して

行った。

「貴女の姉さんの踊りは素晴らしかった。ブラジルであればほどの踊りを見たのは始めてだなあ。貴女達は随分長い間踊りの稽古をしたのでしょね。」

「えゝ、両親が好きなものですから、小さな時から習わされたの。去年迄二年間、二人で日本に行ってお茶と踊りを習いました。姉さんは主にお茶、私は主に踊りを勉強したの。」

「成程ね、上手なものも道理だ。貴女は今夜、踊るのでしょう。」

「えゝ。」

「楽しみだな。何を踊るの。」

「清元で『折紙』という曲。」

「その曲は僕も知っている、確か清元梅吉と云う人の作曲でしょう。」

「えゝ、香取仙之助という人の作詩。」

「僕はあまり日本音楽に詳しくはないのだけれど、どうして『折紙』を知っているかというのと、あの曲の最初の琴の導入部が堪らない程好きなのです。」

「アメリカの曲などにヴァンプと云う部分があるでしょう。聞いた事ありますか。」

「いゝえ」

「つまり、ちよつとリズムのある曲などで唄に入る前に四少節ぐらいリズムを主にしたメロディーを繰り返すのです。それを聞くといかにも唄を誘い出す様な雰囲気満たされる。あの『折紙』の

最初の琴の導入部はモダンだし丁度ヴァンプの様な効果を持って居るけれど、それよりも、更に深い翳りを感じさせるな。つまり曲の内容を暗示して唄を誘い出すだけでは無く、聴く人の心の奥深くにあつた色々な想い出をもまざまざと甦えらせ、悲しくなる程想い出させるでしょう。

「私も一番好きな曲です。でもこう云う処で踊るにはちよつと地味かも知れないわ。」

二人が話している間も「吉田さん」は相変らず忙しそうに気を配り、あれが足りない、これを持って来いと云っては、近くに女給仕が居るのに「オーイ山さん。山さん。」と一々主人を呼びつけては注文をした。

夜の部は三十分程遅れて始まり、コンクールの決勝には昼の出演者達が一人も欠けずに踊った。良一には、予選をした意味が無い様に思えたが、それも「吉田さん」が「気を使った」からに違ひなかつた。

コンクールの終り近く、良一は池田が同僚の夫妻と何時の間にか来て居たのに気付いた。近寄って顔見知りの夫妻と挨拶を交すのを待って、池田は、

「何時、帰るのだ。」

と聞いた。

「うん。明朝十一時のバスで帰ろうかと思う。」

「もう一日、釣でもして行かれれば良ろしいのに。」

と同僚の妻が云つた。

「え、今度前もって連絡してから来ますよ。まだ大分間がありますが、九月になったら鶉を射ちに来たいな。」

と良一が答えると、彼女は、

「是非どうぞ、主人はとても鶉が好きですから、是非おい出ください。」

と夫を見た。口数の少ない御主人は、黙って笑いながらうなづいた。

「では賞品授与をこれで終わります。これからサンパウロから御いでになられた花柳金鈴先生に、踊って頂きます。滅多に見られない素晴らしい踊りですから、どうぞ其のまゝ今しばらく御待ちください。」

アナウンスを聞いて、良一は「では失礼します。」

と云って前の方に席を探した。何となく、彼は一人で順子の踊りが見たかったのだ。

やがて「曲目は、清元『折紙』と、進行係の畏まった声が聞こえ、場内は暗くなった。コンクールの間、場内の照明は点けられたまゝであったから、思いがけなく襲った薄明に人々は緊張した。

良一は、やゝ落着かなく、幕の開くのを待った。

それは、夏の夜空に打ち上げられた花火の曳光を、目で追いながらも、それが開く寸前に闇に紛れて仕舞う、あの須臾の間を待つ苛立たしさに似ていた。

不意に、あの良一の好きな、繰り返される琴の分散和音の頂点に鏝められた、美し過ぎる程澄んだ節が杳渺と聞こえ始め、幕が

引かれ、順子は開いた銀色の舞扇を目の高さに右手で支えて、坐つて居た。

彼女は何かを、いぶかし気に想い出そうとする様に、首を傾げて扇を見つめて居たので、舞扇の銀色の仄かな反映は、彼女の表情を一層覚束なくし、白痴の様にさえ見せて居た。

琴に三味線が加わり、やがて拍子が弱まり、唄を待った。(確かに前奏がああ澄んだ湖のような琴の節だけであつたなら、どんな声の持ち主でも最初の一声を投ずるのが躊躇されただろう)。立ち上つた順子の白い羽二重の襟を覗かせた紫色の裾の長い衣装には、金糸銀糸の折鶴が縫い込まれて冷たく光つた。

その紫色の高貴な輝きと折鶴の懈怠るく重い光は、順子を病身の少女の様にも、山深い奥社に籠る巫女の様にも、人々の目に容易には触れ難い女に見せた。

前奏の調べが緩やかになり、そして途絶えると、彼女はふっと我に還つた表情をした。その時、静寂の中に舞扇が銀に燦めいて落ちた。

折紙の 蓮 浮いてゆく みずすまし、

過ぎし日の 幼な心の 遊び種

友ときそひて 折鶴を

数へならべし 夜の夢に、

○

長い裾は美しい線を描き、扇を拾つた順子は、静かな沁みとお

る様なまなざしをして踊っていた。

ゆっくりとした琴と三味線の主題、そのうらに遠く速足で通り過ぎるような太鼓。右手の舞扇は段々体から離れ、纒かに震えた。

良一は、舞台の順子に魅了されて居た。そして、酔ったように彼女だけを凝視し続けたので、彼の視覚はやがて距離の感覚を失い、順子が非常に遠く見えたり又近くに見えたりした。それについて彼女の周囲の空間も、暗く稀薄になったり大劇場の舞台のように脹れ上った。

その時、不意に良一は急に胸に突き上げて来るものを感じた。彼の裡に今迄潜み隠れていた何物かが、どつと堰を切って溢れ出ようとしていた。彼はその感情の流れを押えようと努力し、その逆流の強い力に抗いながら、咄嗟にはその感情の源をつきとめられず混乱して居た。(何故、順子の踊りがこうも俺を感動させるのだ)。順子を好きになったのではないか。彼の脳裡を掠めたものを、彼は強く否定した。

池田にも語ったように、彼は確かな存在感を持った女との交渉を避けていたので、女性に対して感情が動きそうになると自分にも気付かぬ程素速くそれを絶縁する習性を持つ様になっていた。その感情のヒューズを信頼し切っていた良一にとって、女に感動するなどと云う事が起り得る筈はなかった。

とすれば、不意に邂逅した日本古典芸能の美しき伝統の刃が、彼の血脈を不意打ちにしたに違いなかった。学生の頃、彼はよく日本の古典芸能を観た。

しかし、それは知るべき教養としてであったから、筋書きとか巧みさの理解はしても、心の底からうたれた事は無かった。他の若者達に比べたら、伝統芸能を終り迄あまり退屈せずに見通せる程度の知識や観賞眼を持っていた、と云うに過ぎない。しかし突然にそれ等のものと無縁になり忘れ去ろうとしていた五年の間に、彼のかって観た数々の浄瑠璃や能の舞の断片は、彼の内部に邃く滓のように淀み、醗酵し、気付かぬうちに繁殖し、彼を冒していたに違いなかった。そして、それらは順子の踊りを観ているうちに、針で刺された膿のようにとめども無く滾れ出て来たのではなからうか。単に郷愁と呼ぶにはそれはあまりに深く、彼を冒している様に見えた。それは、彼が築き上げ何かを待ちながら棲んでいる観念の城、すなわち卒塔婆の立つ小山、暇な仕事、小さな家、マリヤ等の上に組み上げた、完璧とも思える彼の城の内部から湧き出し、溢れ、彼の城を一举に崩しかねなかった。

（今、日本の芸能に感激し始めたら、お前の事だからそれに心を奪われてしまうに相違ない。お前はどうか成るのだ。いつも日本に目を向け、憧れて生活する心算か。それこそお前の魂は暗い海の上を果てなく彷徨なくてはならない。）

（お前は月に一度日本映画を観、食堂で月遅れの週刊誌をめくり、日本人街にたむろする日本人達の悪口を云って、それで日本とはケリを付けていた筈だ。）

（闘へ、闘うんだ。膿なら流して仕舞え。みんな流して仕舞え。）
さまざまな想念の渦の中で彼は混乱し、困惑して居たが、何と

か平静を取り戻そうと努力した。その間も、彼は順子から目を逸らせなかったが、彼女の動きは何一つとして記憶していなかった。彼がやっと気付いた時、順子は幼い子のように、くるくると毯つきの仕草をしていた。それから、急に成長した娘になって恋人と向い合うように立ち止った。

通ふ思いも いつしかに

色 鳥の子に

燈火は ゆれて

ときめく 恋衣。

その風情があまり可憐で良一の心になつたので、彼は不意に嫉妬を感じた、相手の無い空しい嫉妬を。

もしかしたら、先刻の彼の感動の大半は、日本の伝統芸能もさる事ながら、むしろその演者たる順子の美しさに起因していたのではなからうか。踊りと踊り手の不可分とも見える微妙な境界に、良一の意志ははっきりとした線を描いたが、彼の嫉妬はそれを暈し再び曖昧にして仕舞った。だが良一は嫉妬をも黙殺した。漠然とした不安を感じながらも。

それに、たとえ良一が本当に舞台の順子に心をひかれ好きになり始めていると気付いたとしても、それを容認する事を躊躇っただろう。何故なら、良一はかつて彼を裏切った彼の理性と情念に対する不信感を持ち続けていたし、華やかに照明された舞台に、黄

金色の折鶴や、白いうなじの酔すうつろいやすい夢幻の美は、あの乞食の様に飢えている共犯者達への又とない好餌だったから。

浜唄、武者人形、奴と折紙を折り進んで、曲は終りに近付いた。大名奴の賑やかな調子が続き、そして子供達が日暮れに一人二人と家に帰るように囃子が消えて、三味線だけが残りそれも音階を途絶えがちに弾いた。

七色の紙 それぞれの

様かたち さて三方に なつかしき

その思い出の 数々も

順子は、後ろ向きになってキチツと立て膝をついて、折鶴を舞扇に乗せた。開いた扇を両手に持って立つ時の、見え始めた端麗な横顔を良一はことに美しいと思った。中央に戻った彼女はそれを床に置き、折鶴を手にとって愛しそうに眺めた。そして扇の上に戻し、両手で扇を捧げてゆっくりと立った。彼女は微かに汗ばみ、長い夢を見終った人の放心した表情をしていた。

いまは おぼろに

遠き初春。

堪えていた激情が堰を切って流れる様に琴と三味線が鳴り、直ぐにあの最初の淋しく心に泌みる琴の変奏が奄然と戻って曲は

終わった。

幕が引かれると、良一はほっと歎息をついた。疲れたのを感じた。

俺は順子があまり上手に踊ったのでショックを受け過ぎただけだ、と彼は自分に云い聞かせた。彼女の処へ行つて褒めてやろう。彼女はスラックスを穿いた普通の娘に戻り、明日からは縁の無い女になるだけだ。サンパウロで行き逢う事があるかも知れないが、お互に挨拶を交して別れるだろう。

観客の大半は既に外に出たらしく、良一の背後の人々の足音や話し声は急速に弱まっていた。

たゞ褒めて、さよならを云うだけか。……そうだ、それだけだ。……とらえどころの無い淋しさを感じながら、彼はのろのろと椅子から立ち上った。

舞台裏に行くと、順子は楽屋にも入らず、薄暗い片隅で顔に手をあてて向うむきに蹲って居り、傍に姉のゆみ子が困った様子で立っていた。

「どうしたの。」

と良一が訊くと、ゆみ子は、

「あの曲は長いので途中を抜かそうと思ったのですが、レコードの係りの人が間違えて裏返しにして仕舞ったの。私がすぐに直したけど、それで踊りが駄目になったと云って順は悲しんでいるの」と答えた。

「そう云へば、途中で少しレコードの変な個所があったな。しか

しちよつとだったし、あんな事は地方に来ればよく起る事ですよ。気にする事は無いな。とにかく貴女の踊りは良かった。とても素晴らしかった。」

良一が気軽な調子で云うと、

「気休めなんか云って欲しくは無いわ。本当の事を云って。」

今迄、良一が思いもかけなかったほど厳しい順子の声が真正面から彼を凜乎と撃った。

「レコードも悪かったけど、それが直ってからも、もう私の踊りはめっちゃめちゃになって仕舞ったわ。何を踊っているのか自分でも分らないくらいだったのよ。私はみっともなかったでしょう。あれくらいの事で駄目になってしまふなんて。宮沢さん。気休めなんか云わないで。貴方の感じた本当の事を云って欲しいの。」
順子の言葉を聞いた時、良一は矢に当たったようにびくつとした。そして、何かを必死に耐えているように震えている順子の後姿を、茫然として眺めていた。知らない女を見るように、だが打ちのめされて。

良一には順子の踊りに欠陥があったとは思えなかった。だが「本当の事を云って。」という順子の言葉は、彼女の予期しなかった効果と強さで良一を篋深く貫き通した。その言葉は鋭い剣のように、彼の観念の殻を破って心に突き刺った。その鋭い剣によって、彼の築き上げ、執着していた美しい城の城壁には大きな穴が開けられ、剥き出しになった彼の心からは夥しい血が迸り出していた。それは、もはや良一には止める事が出来ないほどの勢いで流れ出

し、歓喜の叫び声を挙げて盈溢していた。本当の事を云おう。

順子の踊りに心を奪われた。順子が好きだ。順子を好きになった。順子にひかれている彼の心を遮っていた彼の観念の城は破壊されたのだ。彼は蒼ざめて、その叫びを恐ろしいもの忌わしいもののように聞いた。だが一瞬のうちに、溢れる血は彼を蓋い、溺れさせ、全体が同じ喚びを挙げた。本当の事を云おう。

順子が好きだ。お前を失いたくはない。

良一は、言葉を失った人のように、夢中で順子の肩を両手で抱きしめた。彼女は愕ろいたようにびくつと身を固くしたが、そのまま動かなかった。泣いている順子の肩の震えが、彼の掌に優しく伝わった。

怖じている雛鳥、膝に眠る猫のしなやかな重さ、ソロを終ってポーズをしているバレリーナの押えた呼吸、夜繕い物をする母親の後姿、それらに良一が感じる生命のやさしさ愛しさが、今、彼の掌に伝わり語りかけていた。良一の心の激情は去り、彼は不思議なほど安らいでそれが心を満たすのに委せた。何か大きくて優しいものに抱かれたように、彼は平静だった。順子もすでに泣き止んでいたが、じつとしていた。二人は黙っていた。暮れて行く大きな山の前に無心に佇む少年と少女のように、静かな感動に包まれ、心を奪われて。

大きな山は、良一の過去も城もゆみ子も池田も呑み込んで、隠して、二人の前に隆くそびえていた。

ゆみ子は、意外な成行きに目を瞠ったが、やがてそんな二人を庇うように黙ったまゝ後向きになってトランクの整理を始めた。時々、後片付けの人が忙がしそうに通ったが、出会い頭に姉の広げたトランクを避けて通らねばならなかったもので、片隅の二人からは注意を逸らされた。

(四)

着替えを済ました順子は、

「頭を冷したいから歩いて帰るわ。ゆみは先に車で帰って。」と云った。

「ハイ、ハイ。」と拍子をつけてゆみ子は云い、手伝いの人に頼んでトランクを運ばせ、出て行った。

残された二人は向い合って立ち、しばらくお互を見詰め合った。試練に堪る人のように目を逸らさず、黙って。

二人が外へ出ると、あたりは降るような星空の下だった。しかし、降るような……という表現は適当ではない。昼の紺青が、其のまま濃度を加えた夜空に、星は大きく確実に無数に輝き、一つの星の光りが他の星に反射し更にその星の光りを増し、空全体が高らかに共鳴していた。見上げると、たちまち群星の強い光に包まれ身体がふわっと浮き上り、宇宙に漂っている感じがした。この圧倒的な群星の音響に比較すると、都会の星空は団員の半分が風邪で休んでいるオーケストラみたいだった。

二人が舞台裏で向い合って立っていた時、良一はホテルに着く前にこの女と接吻しなければならぬ、と思った。その暗示は綿密で周到な計画の断片のように、何を意味するのか分らぬうちに説得力を持っていた。彼は命令された人の様に、その実現を、接吻の場所と機会の作り方を大急ぎで考えた。（女は最初臆病だから、無理に接吻しようとしては不可ない。接吻を望んではいるが、決してそんな振舞いはしないという感じを与えるだけでホテルの近く迄行こう。女の家「此処では、ホテル・サン・ジョージ」が見えた時、女は不意に気を許す。すぐ家に逃げ込めるぐらいの距離。しかも決して家からはこちらが見えぬ暗がり。） 楽屋口から出て、左手の道を行けばホテルには近かったが、道は一直線になり、遠くからホテルの明りが見えている筈だった。右手の道は、それに並行していたが、最後の角迄ホテルは視界に入らなかった。それで良一は外に出ると、右手の空に輝くオリオン座を見上げ、順子が彼の視線を追って星に向うのを待って、歩き出した。

「こっちなの」

順子が訊ねた。

「どちらからでも行けるんだ。」

良一が答えた。

手を繋いで暗い道を歩きながら、良一は何故自分が性急に順子を得ようとしているのかを、はつきり理解した。観念の城がその破壊された城壁を至急に修理して、再び彼を迎えようとするのは確実であった。その時、彼は城か順子のどちらかを選ばねばなら

ないだろう。それはもはや時間の問題である。住み心地の良い城、
静浄な天壇、何かを待つ澄んだ緊張の日々。それらを捨て去るの
は容易な事ではなかった。それに反し、良一は順子をどれだけ
知っていたろう。激情だけが支配し、全てはまだ曖昧であやふや
だった。いづれを選ぶにせよ、順子の存在を城に対抗するだけの
確実なものにしなければならなかった。つまり外的な順子の存在
の確実さではなく、良一の裡に確実に存在する順子を急いで作り
上げる必要があった。……………

約束の時刻に遅れまいと新らしい靴をはいて午後の公園を横切
る時、乗物に乗って二人分のキップを買う時、……恋をする歓び
は恐らくそんな些細な事柄の積み重ねから成り立っていた。しか
しその時、人々はいかに想像力の支配に身を委ね、その跳梁を許
していただろう。張子の人形を作るように、些細な紙片を糊に浸
し愛しげに張り合わせている時、その人形の空洞の内部には恋の
憧れや希望や悩みや哀しみが一杯に詰まっていたらどうか。
それらは全て想像力の生み出したものだった。だが観念の城に対
抗する順子は、想像力を洗い落されていなければならなかった。
彼は決して順子に対し、悩んだり憧れたり哀しんだりしてはなら
ないのだ。彼の裡の乞食どもに餌を与えてはならないのだ。情念
にふくらまされた順子の像を彼の裡に造ったら、それは泥土の
混ったセメントのように脆く、一天の驟雨に忽ち崩れ去るだろう。
強固で確実な順子の像を作らねばならない。それには順子に対す
る想像力を消し去る事、つまり最初に順子の体を知る事だ。それ

も今夜中に。―今夜か。―彼は気が重くなった。―だが今夜だ。彼女は旅先にいる。サンパウロに帰り彼女の生活する秩序に戻ったら、機会は無いら。

先ほどからの良一の沈黙は、順子に気がかりだったに違いない。そんな良一は、なにか遠い事を想っているように見えただけ。だが順子も黙って歩いた。

その時、賑やかな音楽が聞えてきた。

「フェスタ（パーティー）だわ。」

救われたように順子が云った。

その家の中庭では、沢山の人が踊ったり、踊りを挑めたりしていた。

「覗いてみようか。」

「えゝ。」

二人が庭に入り、吊した裸電燈の下に坐っている主人らしい肥った女に会釈すると、その女は笑顔で踊りに加わるようにすゝめた。二人が顔を見合わせると、女はさあ早くと手振りをした。

「踊ってみよう。」

「いいわ。」

二人が踊りに加わると、タンバリンやアコーディオンを弾いていた素人音楽家達は何か云い交して氣勢をあげ、一層演奏に熱を入れた。歓迎されている気配が二人を幸福で打ち解けた気持ちにした。

陽気なバイヨンから緩やかなボレロに曲が変わると、踊りの組

が少し乱れ、恋人同志が組んで踊った。時々頬をつけ合い、息苦しくなり離し、微笑み合った。

やがて二人は踊りの輪から抜け出て、女主人に礼を云い、さつきより、もつとゆつくりと歩き出した。

二人の間のぎこちない垣根が消えていた。良一は、控え目に順子の両手を握ったり、髪をなでたりしながら、どんなに順子と知り合えて嬉しく思っているか、二人がこんな風に恋し合うのが不思議で信じられない、と云い、そして先刻の泣いていた順子は、少年の時の僕にそっくりだったと云って笑った。失敗をして、周囲の誰からも悲しみや口惜しさを理解してもらえず、一人で泣いていた少年だった良一の話は、順子を感動させた。順子は、ほとんど話さなかったが、良一よりも幸福そうだった。

恋の初めには女は言葉を必要としないのだろうか。

最後の角に來ると、ホテル・サン・ジョージの入口の灯が見えた。良一は順子の頬に口づけをし、二人は纏れるように遅くなり、接吻を交した。良一は直ぐに順子を離し、歩きかけ、再び順子を抱きしめ激しく短かい接吻をした。二人は手を離し、黙って歩いた。

ホテルの明るい灯の中に入った良一は、二人の身体が透明になるように感じた。

○

人気の無い食堂には、三人の為に暖められたコーヒーと細長い

パン、チーズ、甘く煮た果実が用意してあった。お風呂に入ったわ、と云いながら浴衣を着たゆみ子が坐り、三人は暫く話をした。明日、良一も一緒にサンパウロに帰る事に決め、それから今朝の故障のこと、車の古さや順子の出しゃばりや湖のように見えた靄や紺青の空の事を三人は話したり、笑ったりした。

それらの事種は三人を親しげに結びつけていたが、特に順子には大切なこと、決して忘れられぬ事の予感がした。順子は心に刻印するように、うっとりとして注意深く話したり聴いたりした。最初に良一を見た時の小さな関心。「やれやれ未だ大分貴女達と居なければならぬ訳だ」と云われた時のはぐらかされたような気持。バスの中で良一が示した落ちついた親しみ。それらの場面の一葉一葉は、未だ不安や焦慮や憧れの薬液に浸されていたが、やがて薬液は洗い落され、あの一碧の空のような明確で喜びに満ちた発色をして、順子の思い出のアルバムの第一ページを飾る筈だった。順子は車の近くに立っていた良一の姿を思い出した。あの明るい空色の服はとても良く似合う。良一にも、周囲の景色にも。少し気難しそうで美しい良一。順子はアルバムの表装を青で統一する事にした。詩人のように青について思いめぐらせ、そして本当に即興の詩を披露した。

「G町の空は、あく迄青かった。

風は、そよそよと、すぎ去り、えーと、それから、小鳥は、えーと。」

良一とゆみ子は微笑しながら聴き、途中で車の事も入れた方が

良い、とか白い雲などは浮んでいなかったなどと、意見を述べ始めたので、順子の詩は旨く纏らず中途半端に終わって仕舞った。

………

しばらくして、良一は「お休み」を云い、ゆみ子は自分の部屋に戻り、順子は風呂場へ行った。

○

順子が、自分の部屋で髪を梳かしていると、軽く、だが躊躇いの無いノックの音が聞えた。順子が、

「開いてるわ。」と云うと、入って来たのは姉ではなく、良一である。彼はシャワーを浴び、白い木綿のスウェーターを着ていた。

良一は、「君ともっと話しがしたいだけだ。」と云い、ドアを完全には閉めずに、何でもなような顔をして古めかしい安楽椅子に坐った。良一が入って来た時、咄嗟に身をこわばらせた順子も、彼がそれほど順子に関心を持っているようには見え、むしろ懶げで投げ遣りな風だったので、いくらか警戒心を解かされた。髪を束ね終った順子がもう一つの椅子に坐ると、良一は「今日は疲れた。」と云ってやたらに煙草を吸った。彼はとりとめの無い話をし、それから順子に日本での生活はどうだった、と訊ねた。

順子は日本でのあれこれ話し「でも私はやはり日本には住めないと思つて、それから急にブラジルが懐しくなつて急いで帰つて来たの。」と結んだ。

「何故、日本には住めないと思つたの。」

「分らないわ。でも何かそれに成り切れないものや、考え方や感

じ方の違うものが日本にはあるわ。」

「そうかも知れないな。」

日本の友人や別れや旅を想い出して少し感傷的になった順子の手の上に、良一は手を重ねた。良一がそのまゝじつとしているので、順子は段々息苦しくなったが、彼は順子の顔も見ず、どこか別の想念の世界に居るようだった。(又、何か遠い事を考えている。)順子は思い、今度はそれを口に出した。

「何を考えているの。」

「いや。」

彼はやっと順子の顔を見、手を離し「帰る」と云って立ち上った。この順子の質問に対する彼の拒否ともとれる無関心さや、それに続くあつけ無い別れの告げ方は、順子を少し苛立たせ不満にした。順子が立ち上ると、良一は順子の背に軽く手を廻し、頬ずりをしてから、順子を見つめた。

「さっき考えていた事はね、裸の君を抱きしめたいと思ったのだ。」

順子は驚ろいて息をつめ、彼からはなれ、激しくかぶりを振った。

「いや、心配しなくても良い。Sexual(性的)なDesire(欲望)ではないんだ。僕は君を知り、今迄に誰にも感じた事がない程、君を好きになった。

君には想像も出来ぬほど、君が好きだ。それで僕は不安でたまらない。……君は誰だろう。君は僕の何だろう。僕はこの手で君を

抱きしめたいのだ。君そのものを知りたいのだ。」

順子は目まいがしそうだったが、言葉の激しさに似ず、良一は平静で動かなかつたので、彼女はやゝ落着きを取戻した。良一は順子の肩に優しく手をかけ、彼女の目を覗き込むようにしながら言葉を続けた。説得しようとはせずただ説明をする様に、しか

し情熱をこめて。順子は、良一が決して彼女の意志に反して、彼女に力を加える危険が無い事を感じた。

彼はむしろ悲しそうに見え、順子の前で自分の裡の何かと闘っているようだった。順子は観客で、良一は演技し、彼がどの様な演技をしようとも、二人の間には順子の意志に委ねられた安全な間隔が存在する事を、順子は感じた。(それは良一が仕組んだものだった。良一は、観客が距離を忘れ、舞台にひき込まれるのを待てばよかった。)

「女と違い、男は好きになると相手を欲しいのだ。

僕は順子が欲しい。絶対に欲しい。しかし、其処には順子に対する愛と、男としてのSexualなDesireが混ってはいないかと思うと、僕は不安になる。欲望は人を盲目にし、あやまたせる。欲望ではなく、君を愛している事を確かめたいのだ。

君はブラジャーやパンティをとらなければ良い。

僕が無理に取ろうとすれば、当然君は抵抗するだろうし、僕は君の望まぬ事はしたくない。又それほど子供じやない。」

順子は黙っていたが、良一の云う事を全部理解し、納得した訳

ではない。しかし彼の云う事は大人のように、むきになってそれに反対するのが子供っぽい事のようにも思えた。

「花を摘んだ順子、踊った順子、泣いている順子。みんな好きだ。しかし独立したそれらの順子は、もし僕が君をしつかりと抱きしめられないとしたら、どこに其の根拠があるのだろうか。みんなバラバラで、体中に突き刺ったクリスタルの破片のように、その痛みは華麗に僕を苦しめるだけだ。

ねえ、順子。僕は貴女の外貌、つまり *Exteriorida de* だけでなく、貴女 の存在を *Recónsolidada* (更に堅固にする) したいのだ。貴女の心配するような事は起らない。僕の願いを聞いておくれ。」

すでに、順子の持つ貞操観念や羞恥心は、良一の頼いを退ける積極的な根拠を失っていた。見事な程、良一は順子に対し性交の危惧を抱かせなかったし、実際、彼はそれを希みもせず、むしろ避けようとしていたのだ。湯上りに香水を塗り、新らしい下着に着換えた事が、順子の羞恥心に微妙な作用を及ぼした。彼女は身嗜みのよい娘だが、毎晩香水をつけたり、流行の下着ばかりを着る訳でもない。良い香りの香水や流行の型の下着は、むしろ人の目に触れたい、という願望によって作られている。順子はそこ迄は考えていない。だが、いつ人の目に触れても恥かしくないようにと躡けられて身につける香水や下着が、今迄決して人の目に触れなかったが故に、含羞の中に清潔な淋しさを持ち始めていたとしても責められるべきではない。

順子は黙ってうなづいた。此処がサンパウロであつたら、順子はこんなによすやすとは良一に同意しなかつたろう。良一はいたわるように彼女の髪をなで、ドアの鍵を閉め、天井の電燈を消した。スタンドの灯りだけが残り、その淡い光は急に小さな部屋を秘儀的な雰囲気で満たせた。良一を愛していると思ひながら、順子は少しふるえた。

良一は、彼女をベッドの端に坐らせ、

「着物をとる間、電燈を消すよ。」

と云い、暗闇の中でゆつくりと順子の浴衣をとった。そして順子を横たえると、彼も裸になり、しっかりと抱きしめた。順子は身を固くじつとしていたが、息が出来なくなりそうだった。闇の中に、

「ブラジャーは固くて邪魔だなあ。」

と、しかめた声がした。順子は、まるで自分のものをとる様に良一が云うので、腹立たしくもあり、可笑しくもあつたが僅かしか抵抗出来なかつた。

張りつめた音がしてホックが外れ、背の下でブラジャーがずるずると弛むと、順子の心も支えを失ってしまった。

○

順子は毛布を胸にしっかりと擦し当てていた。良一は、順子の獣のように激しい息使いと動怪を聞きながら毛布をずらせ、折り重なつて抱きしめると、乳房の火のような熱さが彼の胸に伝わった。

彼は、順子の解けた髪に顔を埋め、サラサラした髪のおいや、

のどや、肩の骨を感じていた。それらは確かな存在の感覚であった。やわらかな肉とその中のしつかりした骨格を感じ、更にそれを抱きしめる自分の筋肉や骨格を感じる事は、喜びであり、生であった。

（この感覚は決して俺を裏切らないだろうか。不意にその価値を失い、色褪せないだろうか。それは分らない。明日にも色褪せるかも知れぬ。だが少くとも順子はもう俺を悩ませない。二人はお互いに手の内を見せ合ったのだから。明日から俺は順子を、自分の手に入れた絵を眺めるように、落ち着いた愛情を持って観察するのだ。そうしたら、順子が俺にとって本物かどうか、必要なものかどうかを、誤たずに見抜けるだろう。）

彼はスタンドの灯をつけた。順子は潤んだ目を灯に向けて、呟いた。

「S e r a q u e e s t o u s o n h a n d o ? 。」

（夢を見ているのかしら）

「T a l v e z 。」（そうかも知れぬ）

「E s t o u c o m m e d o 。」（こわいわ）

「怖がらなくても良い。何でもないのだから。」

良一は順子に口づけをした。湯上りの彼女は熱して汗ばんでいて、その僅かなしおの味は、良一に彼の育った港町を少し想い出させた。彼は体をずらせ、順子の乳房や腹や腿を感じ、又口づけをした。それからスタンドの灯を消し、服を着て、お休みを云って静かに出て行った。

翌朝、順子の夢を見ながら、良一は九時頃目覚めた。太陽の光りが窓の板戸の隙間から細くさし込んでいて、室内の白い壁や天井に反映していた。人や動物が庭を通ったり、風が木の枝をそよがせたりすると、板戸を通した細い光線に微妙な縞が混ざり、壁や天井はゆらゆらと浅い海底のように揺れた。良一の体の裡から夢の中の欲情と不安が、潮のひく様にゆっくりと去って行ったが、順子の唇の感触だけは生々しく残っていた。しかしそれが夢の中の記憶か、昨夜の想い出かはつきりしなかった。

ガラス窓を押し上げ板戸を少しひらくと、朝の太陽に曖められ上気した微風がそよそよと良一をなぶり、彼は目を瞑ってうとうとしながら、唇に蘇る感触を反芻していた。

「天気の良い朝は、いつも良い夢をみる。」彼はそう思いながら、再び新鮮な眠りに落ちそうになった。

「宮沢さん。カフェ（コーヒー）よ。」

ゆみ子に呼ばれ、彼は起き、顔を洗って食堂に行き、二人に挨拶をした。

コーヒーを飲み、三人が出発の支度をしていると、チョビひげがやって来て昨日の札を姉妹に云った。

彼は謝礼の袋をゆみ子に渡し、ぜひ来年も来て欲しいと頼んだ。十時半に迎えのシムカが入口に停まり、三人は数人の人々に送ら

れて出発した。車はすぐに角を曲り、人々の笑顔はあつけ無く見えなくなった。

助手席に坐った良一は、運転手に綿工場に寄るように頼んだ。この車はG町の自家用車で、運転をしている日系の青年は、今日は貴方達を送るために仕事から開放された、と云った。池田に別れを告げ、車は再び走り出した。

○

町はづれになると、道端の広い空地の中央に、六・七メートル程の高さの大きな素木の十字架が見えた。もう新らしくはなく、雨にうたれて黒ずんだ十字架は薄気味悪く、不吉な感じがした。礼拝堂や教会の屋根に白く輝く十字架は宗教的に昇華され、安らいだ気持を人々に与える。それは祈りと救済の象徴であった。だが今、目前にあるこの荒けづりで大きな黒い十字架は、直接に大地に立ち、その本来の目的、即ち“殺戮”のために存在しているように見えた。紺青の空を截切るその直角は、呵責の無い懲罰の意志そのものだった。更にその大きさが人の背丈に比べてあまりに大きかったので、それは単なる肉体の流す血やその苦病だけではなく、もつと大がかりな殺戮、底の知れない懲罰を望んで立っている様に見えた。

「あれは何にするのですか。」ゆみ子が訊ねた。

「ナタールに豆電球を沢山つけて、町の入口を飾るんですよ。」と青年が答えた。

「すると、あとは何にもしない訳か。」

「大きくて、とるのが大変ですからね。」

順子が口を開いた。

「でも、夜此処を通ったら淋しいでしょうね。」

「夜、歩いて此処を通る用事を持つ人は居ませんよ。」屈託なく青年が答えた。

これほどの明らさまな裁きの意志、恐怖の表象が単なる当局者の怠慢によって町の入口に打ち立てられて居るのは、奇妙で感動的な光景だった。

順子が懸念したように、夜になると此の空地には様々な悪霊や魔族たちが群がるに違いないと良一は思った。順子に向って彼は云った。

「夜中の十二時に、あの十字架の前を走って通ったら、きっと M u l a s e m c a b e c a (首無し牝騾馬)が出るだろうな。」

「出ないわ。」

「出るさ。金曜日の夜中に現われて、行き合った人の目と爪と指を吸いとるんだ。」

「こわいわ。」

「あんなの嘘よ」順子。

「本当に出るかも知れない。だけど首が無かったら、口も無いのだろうな。どこで目や爪を吸うのだろうか。」良一が云い、三人は真険なふりをして考えた。たしかに、首が無ければ、口も無い筈だった。

「そこが、お化けの偉いところよ。」

と順子が神秘的で、はっきりしない結論を出した。

「へえ。お化けは順子よりも偉いのか。」

と良一が聞くと。

「そうねえ。」

と順子は自信を失くした。

「僕は、きつとあのドロドロと血の流れている首から吸うんだと思うな。深夜の路上で恐怖のために気を失って倒れている人の傍に、首から血を流したラバがゆっくり近寄り、目や爪を吸うなんて、凄愴なエロチシズムさえ感じるな。十字架には霧が流れ、暗闇の中にラバの毛はつややかに光っている。」

「宮沢さんて、変っているわね。」

とゆみ子が云うと、

「そんな事ないわ。」

と順子がむきになった。

ともあれ、三人はピクニックをしているように浮き浮きとしていた。運転をしている青年も楽しそうだった。それでゆみ子と順子は、来る時に渡った大きな美しい川のほとりで、ホテルの主人が作ってくれたサンドイッチを食べる計画をたて、青年に都合を聞いた。彼は、自分は汽車が出る迄駅に居るように頼まれたし、一時間半程の余裕がある、と答えた。

今は一月の終りだった。雨季も終り、暑い日が続いた。だが空気が乾燥しているから汗にはならない。今日は夜行バスのように急激な気温の変化を心配する必要が無いので、姉妹はスカートを

はいている。

建設中の一直線に延びた国道を横切ると、川はすぐだった。

古い橋の手前で車は速度を落とし、柏のように葉の潤い大きな木の下に停った。州道の幅は橋によって少し狭ばまれ、長い橋はちよつとでこぼこして見えた。それは、低い木製の手摺が不揃いの為かも知れない。五〇米程川下の柔らかな芝生の広がりを目指して、四人は橋の脇を降りて行った。川下で網を打っている小さな人影を見付けると青年は、やあ友達が来っていると云って足を速めた。ゆみ子はサンドイッチの包みを差し出して、彼を呼び止めた。残された二人は、川に面したなだらかな斜面の芝生迄行き、廻りの景色を眺めた。其処は低い灌木の枝が強い日射しを弱め、梢には絶えず静かな風が戯れていた。左手に懸る橋は細っそりと川を渡り、そこからアスファルトの道が緑色の綿島の中を、緩やかな曲線を描きながら上昇し、丘の向うに消えている。時々、丘の合い間から小さく自動車が現われ、塗装した車体をカナブンブンのように固く輝やかせながら橋を渡った。雨季が去って一月程もたつので、川は澄み始めていた。幾つかある小さな島の下辺で、半透明の水は白い波を見せている。良一達は和やかな気持になって、サラサラと光って流れる川面を眺めながら、暫く口を噤んで居た。美しくて見飽きない風景。それは、何ものにも煩らわせられぬ明るい気持を見る人に与えながら三人の前に拡がっていた。

良一は坐り、早速サンドイッチに手を延ばし、姉妹は少し歌った。二人ともあまり音程は良くなかったが、あたゝかみのある声

で自然に歌い、時々失敗しては笑った。良一は梢や空を眺めている。茶色い蜂雀が飛んで来て、順子の赤いブラウスの近くの空中で不審気に一瞬停止し、それから素速く木立の中へ消えて行った。彼は草の上に仰向けになって目を瞑った。暖かくて眠くなりそうだった。彼は、ゆみ子と順子の会話をぼんやりと聞いた。

「この川を丸木舟に乗って下って行ったら素晴らしいわ。」

「インディオみたいね。」

「そうよ、真っ黒に陽に焼けて魚を獲ったり、砂金を探したりするの。」

姉妹は何時の間にか、そんな状景を映画に撮影しようと思いつき、寝たままの良一も口をはさんだので、三人は眼前の風景に似つかわしい筋書きを考え出そうとして、いちぢるしく空想的になった。途中で順子が、この映画は興行的にも成巧しななければならないから、観客を満足させる丈のスリルとサスペンスを加えなければならぬと云い、今度は三人共抜け目のない興行師のような顔付をして筋書きを検討し合った。

隠された黄金の秘密を知るインディオの美少女の役を、誰が演るかで姉妹はふざけながら口論し、結局ゆみ子が折れて、順子が決った。交換条件として、ゆみ子は良一が悪漢の役を演るよう提案し、順子は不精無精承諾した。良一の扮する悪漢は、黄金の秘密を知る順子を狙って、昨朝のボロ車を運転しながら出没する事になった。順子を悪漢の追跡から救う順子の恋人の役は、チョビひげが似合うと良一は云い、三人は笑いころげた。三人は段々

にこの空想的で他愛の無い遊びに熱中し、良一は立ち上って順子に演技をつけ、ゆみ子は木蔭からカメラを廻す仕草をした。

そんな遊びにも飽きると、三人は一仕事した様に、芝生に寝そべった。川は相変らずキラキラと流れていた。良一は、首をもたげて川面を眺め、それから目を細めて、木の枝と紺青の空と丘の頂きを眺めた。静かで強烈な風景。濃く澱みそうな光線の堆積を、川は何食わぬ顔をして溶かし、流し去っているようだった。低く語りかけるようなせせらぎの音がゆっくりと時の推移を告げている。それに比べると時計は何故、あんなにせましく時を刻むのだろうか。

あゝ、目前の充足して美しい世界。

豊かで平和な自然、満ち足りて完全な空間が良一に語りかけていた。良一は、此の美しい景色の中に小屋を建てて、順子と住みたいと願った。素直な幸福。彼よりも、もっと大きなものに従って、何も考えず素朴に生きて行けたら。単純だが深い意味を持った一生を送れたら。だが、「彼よりももっと大きなもの」とは何だろう。それに従って素朴に生きるとはどういう事なのだろう。身を捨てて無心になれば、良一の欲している自由が得られるのだろうか。しかし、身を捨て無心になっても、無知と惨めさしか得られぬのではないだろうか。自由は、もっと劇的な行為や輝やかんい思考によって得るのではないだろうか。

強靱な克己心や困難な犠牲の代償によってのみ。それとも、無心で平凡な日常の中に。風に流される蒲公英の種子の様に、良一の

心は定着したい種子の重さと、求め飛びたい冠毛の軽さの中で苦悩していた。

彼は、そつと上体を起して隣の順子を見つめた。

彼女は軽く目を閉じて、木の葉を通った陽光の斑の中に横たわっていた。此処に小屋を作つて順子と住みたい、と良一は再び思いながら順子の胸や唇を眺めた。実現不可能では無いが、実現させたら無意味な事かも知れぬ。そしてその故に、それは一層甘美な空想だった。川のほとりや、粗末な窓辺で、順子と愛し合おう。若草のようににおい、驛馬のように汗ばんだ欲情。神話的な性欲。この完全で美しい景色の中で、太陽のように順子の体を犯そう。川の白い反照や黄金色の木洩陽をうけて、順子の裸体は今迄見た事も無い優美な野獣の様にも、神秘的な文様を持った蛇の様にも見えるだろう。

良一は彼女の唇に揺れる光の輪を見ていた。小さな光はチラチラと戯れ、微かに開いた唇の奥の白い歯並を覗いたり、急に頬え移動したりした。

その時、気紛れな風が、木の葉を振って過ぎ、彼女を囚えた強烈な陽光に愕ろかされて、順子は目を瞠いた。彼は、順子の顔にかがみこみ、順子は素速く隣の姉が目を閉じているのを見てから、短かい口づけを交わした。そして二人は微笑み合った。

恋の初めに、何ものにも煩わされず、唯、相手の事のみ想う時期、純粹で喜こぼしい時期が在るとすれば、それは今終り、過ぎ去ろうとして居たのだ。

やがて青年が戻つて来て、四人は再び車に乗った。丘を越える時、良一達が振り向くと、橋や川や林が眼下に瞰え、隣接した景色に続いて果てし無く拡がっていた。

(六)

小さな駅では、いつも汽車は何気なく静かに発車する。遽しいベルや走り廻る駅員、騒がしい別れも無く、絃楽四重奏の第二楽章の様に。

三人はデッキに立ち、改札口の青年に手を振った。プラットホームを歩む制服の駅員を追い越し、ホームの屋根を抜けると、明るくなった汽車は速度を増した。赤い煉瓦の工場と倉庫を過ぎると町は終り、畠の中に家や小川が見えた。家の庭で子供達がこちらを見ている。彼らはひどく熱心に汽車を見ていたので、汽車の通り過ぎる間は、口に手をやったり棒切れを持った俣、呪縛にかゝったように少しも動かなかつた。

もう一時半だったので、三人は食堂車へ行った。

あまり空腹を感じては居ないが、二時頃に食堂車の昼食は打ち切られ、あとは軽いものしか出ない筈だった。銀製の細い花立てにカーネーションの挿してある広いテーブルに坐ると、三人はメニューを眺め、良一はビツフェ・パルミジャーナを注文し、姉妹も同じものを頼むことにした。ビツフェ・パルミジャーナは牛肉をパン粉で揚げ、薄く切ったチーズとトマトソースをかけてあり、

それらの個性の強い味が不注意に発掘された古墳の様に混ざり合い、訳の分らない味がする。どこの店でもおおよそ同じ味がするの
で、恐らく肉の吟味や焼き方の巧拙にあまり左右されぬ料理らし
かった。三人は食後、小さなカップに入った濃いコーヒーを飲ん
だ。砂糖を入れて混ぜる時、コーヒーの強いむれるような香りが
三人を包んだ。

大きな一枚ガラスの窓越しに、牧草地が続いている。だが牛や
人影はほとんど無い。順子が云った。

「来週、ゆみの婚約パーティーがあるの。ぜひ家に来てくださ
い。」

「ほう。」

この思いがけぬ招待に、良一は顔をあげてゆみ子を見た。ゆみ
子はうなづいた。

「それはお芽出度う。どんな人かな。」順子が答えた。

「銀行に勤めている人よ。でも未だゆみと同じ大学の学生よ。」

「それでは結婚は卒業してから？」

「そう思っています。」

とゆみ子が云った。

「婚約パーティーですから、極く親しい方々に来て頂く丈です。
ぜひいらしてください。」

ゆみ子に云われて、「ええ」と答えながら彼の心は逡巡した。良
一は順子を、もはや単なる女友達だとは思っていない。だが順子
の恋人として、彼女の家族や親しい人々、相互関係の密度の高い

集りに招待される心の用意も出来ていなかった。良一は未だ自分と順子の事しか考えていなかったのに気付いて愕ろいた。彼は不意打ちをくった様に少し狼狽しながら、二人に家族や親類の事を訊ねた。二人の家は農産物の種子の間屋で、家業は結婚した長兄が継ぎ、次男も結婚して独立し、三男は法科の学生だった。

順子は五人兄妹の末っ子であった。それに一ダースほどの親類、趣味の広い両親の持つ夥しい知人。そんな事を良一は知った。順子は住所と電話番号とパーティーの日付けを紙に記して彼に渡した。それは嬉こぼしい招待であり、出頭命令でもあった。パーティーには出席しないかもしれないと思いながら、彼はその紙片をポケットに入れた。

○

三人は指定席に戻り、順子とゆみ子は向い合って窓際に坐り、良一は順子と並んだ。姉妹はゆみ子がパーティーで着る洋服のデザインや、期日迄に仕上るだろうか、などと話していた。良一はそういう女性の話題を聞きながら、彼の婚約パーティーの日の出来事を想い出した。

彼は、順子を見た。彼女は姉と一心に話しをしている。若し、俺が順子との生活を望んだら、又あの繁雑な日々を過ぎねばならぬのだろうか。それに続いて、日曜日毎に義父や義兄の家を訪問したり、子供が生まれるだろうし。家庭を持つと云う事は、恐らくそれらの日々の繰り返しであった。愛や恋はどこへ行つて仕舞うのだろうか。もしかしたら、愛とか恋とかは、それらの生活を成

立させる為の触媒に過ぎないのだ。

順子が、良一の注意を惹いた。姉妹は会話を中断し、三人は窓を眺めた。草原に一メートルから二メートル程の高さの蟻塚が無数に群立していた。トルコのカイセリ地方にある水蝕作用によって形成された奇妙な形の岩のようだった。蟻塚の群れは二キロメートル程も続き、それから段々に粗らになった。

此の汽車はサンパウロに向っている。夜になれば確実にサンパウロに着くのだ。と良一は思った。其処には彼の家があり、マリヤが居る。二階の書斎の机は美しく照明されていた。語学の勉強の為に訳して居るポルトガル語の厚い本、ページの書き込み、辞書をとる時のずっしりした感覚、そのページのサラサラとした薄さ。彼の集めた多くの本。彼は読み、思索し、待った。階下には貸りているピアノや集めた古い絵があった。ソファに坐り絵を眺めたり、ピアノを弾いたり。彼は日本の童謡をローマ字で書き、マリヤに教えた事がある。彼女は幾つかを直ぐに覚えた。あの生活で充分ではないだろうか。何物をも失う恐れのない生活。自分の生き方を真険に求めている場所。彼の城。あれで充分ではなげか。頻繁に順子の家を訪問し、多くの人に会い雑談に耳をかたむけ、週に何度か順子と約束して外出し、歩き廻り疲れて家に帰って来るのか。それは無駄な、後退する日々ではないか。そのあげく、何をやるのだ。日曜日毎に義父を訪ねる事か。テレビや電気洗濯機を買う事か。

良一は、

「少し頭と胃を冷やして来る。」

と云つて立ち上った。姉妹は、何も欲しく無いと答えたので、彼は一人で食堂車に行き、ビールを注文した。食堂車に客はほとんど居なかった。彼の斜向うに若い女が一人で茶を飲んで居るだけだった。どんな種類の女か分らないが、少しくずれた感じを持っている。テーブルの下に大胆に組んだ足が目に入って、良一は思わず女の顔を見た。女は挑発するように良一を見つめた。彼は、その視線を無表情に受けとめてから窓を見た。夕立の方向に汽車は進んでいるらしい。女はもう良一を見なかった。汽車は丘陵地帯にさしかかっており、低い谷底には、煉瓦作りの家が四、五軒かたまつて見える。急な傾斜面にはバナナ林が作られている。風はしばらくバナナの幅広い葉を思いきり騒がせていたが、一滴か二滴のほんの短かい予告のあと、ガラス窓に隔てられて居ても思わず浮足立つほどの激しい雨が降り出した。

一キロメートルほど離れた向いの山迄の空間は、みる間に白い水しぶきに満たされた。

雨を眺めながら良一はビールを冷たく感じた。女はいつの間にか居なかった。テーブルは片付けられている。激しい雨足。溝の上を渡った時、濁った水が奔流の勢いで落下しているのが見えた。軽い酔いを良一は感じていた。何故俺はこんなに悩んでいるのだろう。全てにどれほどの意味があるのだろうか。

全てを押し流す水の狂奔を眺めながら良一は、ぼんやりとそんな事を思った。彼の思考も水しぶきと酔いの中で稀薄になった。た

だ、順子と同じ汽車に乗って居る、という感じだけははつきりとしていた。

それはやはり喜びであった。

だが彼は順子を見る事を少しづつ延ばし、誰も居ない食堂車に随分長い間坐っていた。

彼が食堂車を出た時、雨はすっかりあがり、再び陽がさしていた。

「随分、長い間ビールを飲んでいたのね。何ダースぐらい飲んだの。」

良一は、たちまち順子の明るい声に迎えられた。

「二本飲んだ。」

「へえ、たったの二本。日本に行った時、友達と喫茶店に行ってもネバる事を覚えてたけど、きつと宮沢さんは未だその癖がぬけないのね。」

「君はおひやに砂糖を入れて飲んだりしたんだろう。」

「まあね。ねえ、宮沢さん。何かお話して。」

「では人生について何か話しましょう。」

良一が真面目くさって云うと、姉妹は急に学生の表情をした。彼は内心ふざけて云いだしたのだが、何時の間にか彼も二人よりもやゝ年上の顔をして、彼の知っていたヒンズー教の僧侶の話をした。それから林語堂の話をした。リン・ユータンと云えば、

日本よりもブラジルの方が知名度が高い。恐らく彼の大陸的な考えが、ブラジル人の共感を呼ぶに違いない。林語堂が、日本の茶

道をせよこましいと書いた事から、話題は茶道の事になった。ゆみ子はサンパウロでそれを教えている。ゆみ子は彼女の考えを述べてから、

「そんな訳ですから、ブラジルで日本文化を学ぶのが無意味だとは思いません。ですがお茶の様に生活様式に密着して発達したものは、困る点や不自由な事が幾つかあります。例えば、あまり日本語の話せない二世の人に『お棗、お茶杓拝見を』などと云わせるのは六力敷いわ。早口言葉を云う様に、口の中でモグモグ云うだけで。」

「それなら、道具の組み合わせや立ちふるまいを変えようとは思はないの。」

「今は、定められた事に従うだけでやっただわ。」

「でも私は時々、純ブラジル風の茶室を空想することがあるわ」と順子。

「ブラジルの農家の納屋のように築てて、壁は真っ白で扉はトルコブルーに塗って、家具や土器をなるべくそのままに使うのよ。」

良一が、白い石灰の部屋で茶をたてる順子を想像する、それはなかなか美しかった。

それから三人は地名のしりとり遊びなどをした。

時々、変った景色が見えると、三人は窓を眺めた。

川とか、牛の群とか、大きな岩とか。だが、それらを除くと景色はほとんど変らなかつた。なだらかな起伏の牧場やコーヒー園がどこ迄も続いている。森や林は稀だった。いつの間にか良一は

眠った。

彼は長い夢を見た。

夢の中で、彼は大きな城に一人で住んでいた。彼は王だった。或日、彼は城から出て刑事になった。

たった一人の泥坊を捕える為に、彼は大勢の配下を呼び集め、追ったがどうしても捕える事は出来なかった。不意に良一が盗人になり、たった一人の刑事が、おびえた彼を追った。彼は群集の中や淋しい露路を逃げた。どんなに速く逃げても、危険をおかして屋根を越しても、刑事は不意に彼の近くに現われた。群集は知らない顔ばかりだった。彼は絶体絶命だった。その時、良一は群集の中に順子を発見し、順子のかげに身をひそめ、刑事は彼を見失った…。

良一は野原を歩いていて、もう誰も追って来なかったが、彼は未だ少し落着かなかつた。木の下で一人の聖者が死のうとしていた。彼は横たわっている聖者にお辞儀をして歩き出した。小さな村に入ると、一人の女が彼を待っていた。順子のようなだった。彼は自分が盗人ではなく、王であったのを想い出した。

彼はその女に挨拶をすると、城の方へ歩き出した。

野原の中を去って行く良一に向かって、女は彼の名を呼んだ…。いつの間にか「彼は順子と街の中を歩いていた。夜だった。二人は行く処が無いらしかつた。

二人が抱きあおうとすると、街燈の灯や通行人が邪魔になり、二人は空しく欲情した。広場から順子を呼ぶ群集の苛立った呼び声

が聞え、彼は不安になった。それから、又良一は野原を一人で歩いていた。

○

彼が目覚めた時、汽車は夜の中を走っていた。窓の外は真っ暗だった。終着駅に近いので、一等車は静かに空いて居る。姉妹も眠っていた。窓外は星も見えず、ガラスに順子の横顔がはつきりと写っていた。良一は身体を斜めにして浅く腰掛け、長い間二人の順子を眺めていた。二人の美しい順子。窓に写る順子は抽象的な美しさを持ち、逆光に浮んでいる髪や額は想い出の中のきらめきのような懐かしさがあった。それは彼に何らの重量をも投げかけず、彼はそれを額縁に入れて彼の心の裡に飾ることさえ出来そうだった。不確かでキラキラと耀やいた存在。

………坐っている順子は、一切の喜こぼしさと煩らわしさを内包していた。小さなニキビやほつれた髪。まつ毛の翳りが彼女を少し疲れたように見せている。彼女は深く呼吸をしていた。電燈は長く一列に並んでいるから、横から眺めた彼女の面影にはほとんど陰影が無かった。ただうつ向いた顎から頸、胸元へかけて幾重にも翳っていた。真上の電燈は濃く深い影を彼女の胸元に塗り込め、電燈が遠ざかるにつれてその放った光は、淡く浅くなりながら光りの輪を描いて頸元に浸蝕していた。順子の呼吸につれて、その胸元の影の濃淡は乱れた。浜辺に波の戯れるように。良一は自分を舟のように感じた。その小さな浜辺に憩おうとしている舟

のように。……………

良一は夢の中で、女が彼の名を呼んだことを思い出した。どんな風に、なんと彼を呼んだのかはつきり思い出せなかったが、確かに彼を呼んだ。その声は、「本当の事を云って。」と叫んだ順子の声と同じ響きで、彼の脳裡に焼きついていた。鼓の残響のように、澄んで鋭い声だった。……………彼は昨夜のことを思い出した。あの時、順子に「本当の事を。」と云われて、良一は縛めを解かれて五体が自由になったような気がしたのだ。そして、一瞬の間何かを考えたのだ。だが直ぐに順子を愛する歓喜の叫びに気をとられて仕舞った。……………

(そうだ、俺はあの時観念の城の束縛から身をとかれて自由になったような気がしたのだ。……………俺は魂の自由を求めて城を築いた。だが、城の中で待つという不自由で限定された日常の姿勢そのものが、自由を求める精神を規定し、思考を妨げてはいなかったか)。彼の裡で、何かがびしっと音を立てたようだった。彼は坐りなおし、真剣な顔付になって考えた。

彼の求めた魂の自由、精神の自由を得る為に、そして果てし無い移民の歩む道を超える為に、彼は観念の城を築いたのだ。不要な因子を拒否し、城の中で待つ事によってのみ、自由への啓示を得る筈だった。そこから輝しい未来への糸口を得る筈だった。

だが、観念の城に閉ぢ込め待つという不自由で限定された姿勢そのものが、何時の間にか彼の自由であろうとする思考を妨げ、

規定していたのではあるまいか。彼は城を、精神の思索場瞑想台として築いた。確かにそれは居心地良く出来た。しかし、彼が彼自身の存在に立ち戻り、自己の真実の声を聞こうとした時、瞑想台はそれを妨げるようになっていたのではなからうか。つまり、彼が自分自身に立ち戻ろうとした時、彼は何時の間にか自分自身にはなく観念の城そのものへ立ち戻っていたのではなかったか、城の居心地の良さ故に。そうだ、城はいつの間にか彼の思索を限定し、ついには彼の精神そのものに変容しつつあったのだ。

………

良一がそう考えた時、彼の観念の化城は崩れ去ったのだ。彼を束縛していた順子と良一の間、厚い透明な壁は消えた。そして彼は真正面から順子と向い合ったのだ。だが良一は拠るべき城を喪つてしまい孤独になった自分を感じた。そこには築き上げた防壁を失い、頼るものもなく野原に立つ己が居た。そして一人の女と対い合つて立っていたのだ。それは淋しい荒野で一人の見知らぬ人間と正対したような畏れに近い愛の感情であった。

彼は順子をじっと眺めた。彼は孤独だった。だが又、この時ほど強く人を愛していると思つた事もない。

（俺はやはり順子を愛している。順子を愛しているのだ）。

順子を愛している、それは彼の裡にあつて疑念の余地が無い確実な感情であった。再び全てのものを失つて、荒野のような彼の心の裡にあつて、残つた唯一の確実な存在であった。そして確実であると同時に未知なものでもあった。未知なもの。彼はおそれ

た。又、誤とうとしているのではないか。だが彼はこの愛の上にこれからの生活を築こうと思った。

（俺は幸福になれるだろうか。順子も幸福になれるだろうか。）

又、失望するかも知れなかった。失敗して二人は不幸になるかも知れなかった。だがそれを怖れるのを止そう、決して後悔しまいと彼は思った。（この確実に未知なもの）。愛しそうに良一は、眠っている順子を見つめたり小さなニキビやほつれた髪を、まつ毛の翳りを、形よく閉じられた唇を。昨朝からの出来事が一瞬間に彼の脳裡を飛翔し去った。それは読み始めた本の最初のページのように短くあっけなく、そして期待に満ちていた。彼は身体を近づけ、そっと順子の髪に顔を埋めた。微かな気配に醒めた順子は、そんな良一に気付いて急いで目を閉じた。その頬に美しい微笑が浮んだ。

○

間もなく終着駅だった。暗い窓外に一つ二つと現われ始めたサインパウロの灯は、急速にその数を増してガラスに写った順子の横顔を消していった。

（終）

交流団体の機関誌

◇コロニア文学会では、日本及び、コロニアの文化団体、文学団体と常に交流連絡を保ち、手をつないで、前進したいと希望している。そこで、機関誌の交換を申し入れており、現在、連絡がついて、刊行物を交換している団体、結社に、次のようなものがある。

◇コロニアでは、短歌結社「椰子樹」(サンパウロ市)。文学結社「スバル」(マリリア)。俳句結社「火焰樹」(サンパウロ市)。川柳結社「ドラセーナ川柳」(ドラセーナ)。地方から出ているユニークな邦字新聞として有名な「バストス週報」(バストス市)。「グワイラ新聞」(パラナ州グワイラ市)。その他、雑誌では「農業と協同」(サンパウロ市)。

「産業のブラジル」(サンパウロ市)「婦人と生活」(サンパウロ市)「女性の友」(サンパウロ市)などがある。

◇北米ではカリフォルニア州から出ている文芸同人社「南加文芸社」と連絡がつき、機関誌「南加文芸」を頂いている。同誌は、年間一回又は二回くらいの発行で、同人数も、多くないようだが、文学活動をたくましく盛りあげている。この間、本会中央委員に回覧して頂いたが、その文学水準は、コロニアを上廻るのではないかということであった。購読希望者もあろうかと思うので左に宛名を記しておく。

加屋良晴(代表者) Yoshiharu Kaya

Nanka Bunguei Sha

1934, Lansdowne, Avenue, Los Angeles

California, 90032, U. S. A.

◇日本の文学団体では「作家」(名古屋市)、これは有名な作家小谷剛氏編集の月刊一流誌である。「犀」(東京)、これは、不定期の文学同人誌で、芥川、直木賞作家を次々と出した有名誌である。「暖流」(徳島) 地方同人誌として、内容の充実した、立派なものである。また「小説と詩と評論」(東京) という、小冊ながら内容高度な文学誌も恵送頂いている。これらは、事務所に保管しており、会員の借覧に供している。

創作



枯木のある遠景

(24枚)

弥高 文男

路を歩くとき、木野はときどき体の中にごろつくしこりのようなものの存在を覚えた。そこから起こる不規則な音にいらだった。

木野は、ある日医者を訪れた。病気の自覚症状をたずねられたが、はつきりとした答えができなかった。日常、よく舌がただれること、食物を摂った後に、不快なげっぷが出ること、下腹部がすつきりしなくて、妙な圧迫感があり、ひんぱんに下痢をもよおすことを告げたに過ぎなかった。

診察が終わると、木野は診察台から上半身を起こしながら、医者顔をうかがった。

「胃も少し傷んでいるが、腸がわるくなっています。

なるべく消化しやすい食物を摂り、薬を十日ぐらい飲みなさい。」

若い二世の医者は、少しくせのある日本語で、そう言った。

「この種の病気は遺伝するものでしょうか」

「と、いわれるのは……」

「ええ、父が直腸癌で亡くなっています。」

「そんなことないですよ。遺伝なんて、十日後、もう一度いらっしやい、レントゲン透視をやりましょう。」

こともなげに、紙に処方を書き込む医者 of 繊い指先を見ながら、木野は苦い笑いかみしめた。自分の体を試験台にされたことに対する軽い気がかりと、患者の持ちやすい、あきらめに似た脆い感情の交錯を覚えながら……。

診察所を出たその足で、木野は本田の店に立ち寄った。本田の経営する雑貨店は、ガルボン・ブエノ街から少し離れた場所にある。木野と本田は、はじめ、客と店主の間柄にすぎなかった。話あってみると、戦争中、海軍々人として同じような体験を経ており、渡伯年歴も似通っていた。コロノ時代になめた辛酸の想い出も含めて、同時代を耐えてきたものの連帯感や、ある種の頹廢的な匂いをお互いに嗅ぎあって、急速に親しくなっていたのだった。

「おっ！ 久しぶりだな、しばらく会わんでどうしたかと思っていた。」

「少々、体の調子がよくないんでね。」

「へえ、気をつけないといけませんよ。そういうわたしも、ここ二カ月ほど、休養の意味で、体に気をつけてますよ。煙草も酒もやめて、薬を飲みました。でも、おかげでこの頃は食欲がぐんと出てきたし、それにあの方も調子がよくて、ごきげんですわ。」

木野は、本田の言葉に、区切り区切りで、合槌をうちながら、彼

のやや充血して、濡れたような目を見ていた。

「医者の方のことですが、都会の人間は、精神的な疲労が積つて、それが肉体の弱い部分に、何かの形で出るそうですよ。だから、一年のうち、何日かは、休養の意味で、どこか遠い所でも旅行する必要がある、というのですが……。私も、病気が動機で、先週ミナスの温泉で遊んできましたよ。」

本田が並べたてる、その旅の話は、なかなか魅力に富んでいた。だが、木野にとっては、遠い地の果ての物語りであり、夢でしかなかった。

高血圧症が原因で、あっけなく去った妻の二周忌を迎えた現在、子供二人を学校に通わせている木野である。時おり、都会の喧騒からの脱出を計画するが、いつも未遂に終わっている。長男は昼間働きながら、夜間中学に通っており、長女は、中学予備校に学んでいる。木野自身は、ある日系会社の事務所に勤め、一日中陽射しの届かない窓口に立って、手垢に染まった金の勘定をしているのだった。

その彼の姿は、野中に立つ枯木にひとしいものである。「枯木は、枯木の宿命をになって、やがて野に死ぬ。」この詩句は、木野が青年の頃、好んで口ずさんだ、ある不運な詩人のことばである。この詩句には、木野自身のいまの生態に、どこか通じるものがあった。

夜、味気ない夕飯をかきこみ、親子三人が三様の満たされぬ想

念を追いながら寢床につく。眠られぬままに、木野は胸にさまざま
まな光景を描いてみる。

うつらうつらとまどろんで、そして明け方ふたび、とりとめも
ない空想をくりかえす。それは、将来、老いて世間を狭くした一
人の男の存在が、子供たちの世界に、どういう形で受け入れられ
るか、という事にかかわる想いであった。

妻が健在の頃、ガルボン・ブエノ街に近い場所で、木野は勤め
人相手の下宿屋を営んでいた。悪友に誘われると、妻の眼をかす
めて、紅燈の巷にさまよい、ホステス相手に浮気もした。だが、働
き者の妻をうしなった現在では、下宿屋の権利も他人に譲り、郊
外に移り住んでいるのであった。

思春期に入った子供たちの手前もあるが、一つには、苦勞しな
がら死んだ妻への罪ほろぼしの気持もあつて、以来脂粉の世界か
らは遠ざかっていた。ところが、本田が並べたてたミナス温泉で
の行状物語りは、木野の心を刺激した。そして、久しく異性の肌
に接していないことを想いおこさせた。

皮膚の底に抑制していた肉慾のうづきが、中年男の機能をゆさ
ぶり始めたのだった。―伯人女の閨房はすばらしいぞ。よかった
ら、明日午後、案内しよう。とびきり上等の女が、電話一本で馳
けつけてくるんだ。たまらんぞ。それを紹介しよう。元気出せよ
――。別れぎわに、肩をたたいてささやいた本田の声が、木野の
胸に強い力と響きとをもって、からんできた。

よし、試してみよう。――不意に、木野の胸裡に、新しい冒険

にいどむ斗志に似た気持が湧いてきた。

驟雨が地上をさつと撫でるようにして通り去った。

雨で蘇生した広場の芝生に、赤い地肌がのぞき、その上に無数の青い葉が散っていた。そして梢には、もう白く柔かな新芽が吹き出ている。この広場を横切って、のろのろと坂をくだる。S・P新聞社の前を通りすぎ、しばらくゆくと路が急勾配になった。息を切らしながら、木野は思った。―俺はなぜ、こんな所を歩いているんだ。ひき返そうと思えば、今からでもおそくない。―。尤もらしい口実を設けて、会社を休んだことも悔いられた。木野は、眼尻をさげて、にやにやした本田の顔を思い浮かべ、いまいましてうに舌打ちをした。

あの時から、黒い病気に対する反撥と、肉欲を求める濁った血の騒ぎが、皮膚の底からしみ出てきたのを感じはじめたのだった。急勾配を登りつめ、そこを曲って路は下り坂になった。雨あとの濡れた路を爪先に重心をかけて、のろのろと下っていく。その時、下腹部に鳴る、あの不規則な音が渦のようにひろがって来た――気持を楽に持つことだ。ものごとくに拘束されてはいけない――。口の中がしきりに渴くので、ボールに立ち寄り、コーヒ―を注文した。

その時、軽く肩を叩かれ振りむくと、本田が、にやにやして立っていた。

「今日の約束、すっぱかすか、と思ったよ。さあ、早く行こう」

本田は、寸刻も惜しむようなそぶりでも、靴音を鳴らしながら、さっさと、横道へそれていった。

ビルの入口には、守衛が二、三人の男を相手に、呑気らしく話しあっていた。その横をすり抜ける本田の背に、かくれるようにして、木野もついていった。あらかじめ、本田から注意をうけたように、顔の表情をつとめて崩さぬように気を配った。だが、皮膚の裡にくすぶる焦燥と、自己嫌悪と期待、そうしたものの入り混じった感情が仮面の下で息苦しく喘ぎ、――逃げろ、逃げろ――とささやく。それを繋ぎとめるのに、木野は必死であった。

一端地下に降りてから、今度は上層にむかい、昼も薄暗い階段を登っていく。すると、急に張りつめていたものが、冷い汗となって両腋からしみ出てきた。

「いいですか。人眼があるから、きよろきよろしないで……。ビルの住人たちに感づかれないようにね。」

本田は小声で注意を与えながら、せっかちに階段を登りつめていく。

「ここが四階。いいですか、向うの突き当たりの部屋、気をつけて！」

本田は、すばやく四方に眼を走らせると、壁の小さなボタンを押した。木野は、はじかれたぜんまい仕掛けの機械のように、壁に身をはりつけた。

重苦しい時間が過ぎ、内側から小刻みに扉が開いた。――早く

「。低く殺した語調であった。本田と木野は、その内側の世界に体をすべりこませた。

扉がしまると、本田は少しばかり、装飾した言葉で、その部屋の女主人を木野に紹介した。

見た目には五十過ぎの彼女は、白い首筋に色気をたたえていた。これが、本田のいう、組織の世界に生きる女なのだろうか、と木野は思った。

「この女主人は、後家さんだが、昔は中学校の校長だったそうだよ」

女主人の話をきいているうちに、木野の内部のしこりも、少しずつ解きほぐされていった。

「次の部屋が、その場所だよ。ちよつと見ていくか」

木野はうなづいて、本田の後に従った。

「ああ！」

木野は思わず、呻くような声をあげた。両眼を射るような深紅の光が網膜の底に焼きついた。それは、窓を覆ってあるビロードの紅いカーテンが透す陽光が、部屋一ぱいに充満していたのだった。

柔かいダブル・ベッドも、青い周囲の壁も、等身大の鏡も、箆も、すべて幻想的な世界を作りあげていた。

「どうだい、ここに来たら、しよぼついた老人だって、少しは興奮するだろうさ！」ダブル・ベッドの上に上体を投げ出している本田の声も、官能的にうわずっていた。木野はふるえる体を支え

るようにして、女主人のいる部屋に戻り、ソファに腰かけた。煙草を取り出して火を点けた。冷静な自分を取り戻そうとしたが、胸の動悸はなかなかおさまらなかつた。

「おいどうする。はっきりしろよ。」

次の部屋から挑発するように言葉を投げてよこす本田の声に、逡巡していた木野の心も決まった。

「どうするの、日本人……」

と、たたみかけてくる女主人に対して、

「明日、二時頃来る」

木野は、そう答えて煙草を灰皿にもみ消し、ソファから立ちあがった。小さなのぞき窓から廊下の気配をうかがい、やがて扉を開けた女主人に背をむけると、木野は急いで廊下に出、階段を追われる者のようにおりていった。

その日の夜、木野は寢床にはいつてから、なかなか眠れなかつた。妻と重ねた幾春秋が思い浮かんできた。しかし、妻の顔形が、どうしても、ふだんのようにには思い描けなかつた。脳裡をかすめる妻の面・輪が、ある時は、分解した古い機械の部品のように、ある時は、錆びついた鉄屑のような形で、味気なく彷彿とするのだった。

木野は、寝苦しそうに、寢床の上を転々とした。

表通りを疾走する車が、地表をゆるがせ、その余韻が長く頭の中に残った。やがて眠り、そして夢をみた。

そこは曖昧な広さを持った所で、まわりは未知の青い風景であった。しかし、木野は、過去にいちど、その場所を散歩したことがあるようにも思った。周囲の山も森も、土地の起伏も判然としない、広大な平面。木野は、霞に視野を遮断されたような、漠々とした気持ちでその場所に立っていた。

その時、野の果てから、白い小さな物象がゆっくりと風にあおられて飛んで来た。――何だろう？――木野は、その方向に眼を凝らした。はじめは、白い紙屑のように見えたが、近づくにつれて、それは白い蝶の群であることがわかった。数百、数千の蝶が、ついに花の群落となって木野の周辺に降りそそいだ。

限りなく柔かく、限りなく温かく、限りなく甘美な愛撫の羽根をゆり動かせた。

木野が、ふっと眼ざめたのは、明け方の五時過ぎであった。体がむやみにだるかった。これからはじまる一日の重苦しさが思いやられた。そして、ふたたび淡々と眠り、はつきりと眼ざめたのは、七時三十分であった。木野は洗顔しながら、会社を欠勤する為の口実をあれこれ考えた。

長男は既に服装をととのえ、家を出ようとしていた。

「俺は、今日、会社を休むよ。頭痛がしてならないから――。」
呟きながら、自分の体内に棲息する獣性に、やりきれない思いを味わった。長女は、まだ眠っていた。

何気なく、木野は娘の部屋をのぞいてみた。ほの暗い部屋に充滿している空気には、かすかな女の匂いがあった。それは、一瞬、固

い果実の肌を思わせるような匂いであった。眠っている娘の顔をみていると、なぜか切なくなつて部屋の外に、ひきかえそうとした。

その時、娘は眼をあけて二、三回まばたきすると、とつさに身を固くして上体を起こしかけた。だが、立っている男が父親だと解ると、安堵の表情にかえつた。

「なーんだ、パパイか」

「ああ、あまりよく眠っているので心配してね…。」

近所のボールから、会社に欠勤の電話をかけるため、木野は、表通りに出た。一瞬冷たい風が頬をなでつけた。―やはり今日は、女と遊ばなければならぬ。―それは、当然の義務のような、規定の行事でもあるかのような厳しさで、木野の胸をおおつた。

午後二時、木野は、その秘密の部屋で、金髪の女、エレーナと逢つた。深紅のビロードのカーテンを通す明かりは、密閉した部屋の中に、羞恥心を徐々に解きほぐし、体温でふくらんだ部屋の空気を官能的に波立たせた。女は、服を脱ぎ、薄いナイロンのパンティを取つた。そして、深紅に染まったベッドの上に裸身を沈めた。その姿態は、木野の心身を現実からひきはなして、別の世界に導くのに充分であつた。木野は興奮し、そして濡れた。

その週の日曜日の朝、木野はひっそりした部屋の片隅に気だるい体を横たえていた。二人の子供は、早朝義兄が自動車に乗せて

サントス港に行っている。

日本から来る遠縁の青年を迎えるためであった。—— お前も行くう—— と誘う義兄の厚意も、病気を口実に退けた。かつてのよくな斗志もなく、日々枯木の生態に近づきつつあるこの身をサントスの港に曝すのは、何としても耐えられないことだった。

今日も、外は温かそうである。部屋の湿っぽい空気の底に横臥していると、肌にしっとり汗がにじんで来る。木野は、今日いち日、寝床にくぐまって過そうかと考えたり、市内バスに揺られて、目的もなく乗りまわし、時間を消費しようかと思ったりした。思案をくりかえすうちに、十時過ぎになった。空腹もあまり感じなかった。少しそのあたりを散歩してみる気になった。ぬるい湯を浴びて服を着た。家の扉に鍵をかけ、表通りに立つと、教会へ行く人の群が、路の両側を通っている。明るい色彩を撒き散らしながら……。彼や彼女らの唇から洩れる会話は、いきいきとしていて、若さだけがもつはなやかな響きを伝えていた。

木野は、それらの人々にまじって歩きだした。不意に、教会に行ってみたくなくなった。坂を下り、坂を登ると、その地区にふさわしい白亜の教会がある。

ここに移転した頃、この路をよく散歩した。だが教会には、一度もはいつてみなかった。何かためらいを感じさせるものがあつたからである。

それは、木野が育ち、祖父母たちを葬ってきた日本の国の仏教や、狭い民族性に染まった自分のかたくなな根性のせいかな——

この国に移住してから十年、一度も宗教の世界に近づくことはしなかった。

あくせくと生活の垢によごれた身として、そうした世界をのぞき識ろうとする行為を否定し続けたのかも知れない。

しかし、今自分から進んで神の前に額づこうとする心の動きが起こったのは、なぜだろう。生活に疲れ、人生の目的を喪失してしまったからだろうか――。

木野は教会の前の広場に立った。その時、神を否定する声が、身内よりきこえてきた。あの不規則な音を伝える下腹部の怒りであった。“ちくしょう”、木野は思わず声に出してうめいた。その声にすぐ前に立っていた若い金髪の女がふりかえり、そして微笑を投げてよこした。

木野は、急に金髪の女、あのエレーナに会いたくなかった。あの日別れる時、女は、自分の住所を書いた紙を木野に渡した。

「主人とは、もう半年以上別居していますの。わたし、ほんとうにいけない女なのね。」

女はためらい勝ちにそういって、また逢う日を求めた。今の木野として、あの言葉を虚偽とは思いたくなかった。

今の自分が求めているのは、裸どうしのぶっかかりあいだ。短くてもよい、なまなましい生命の散華に似た激しい交流なのだ。そうだ、エレーナと、もう一度だけ逢ってみよう――。

路に出てタクシーを拾った。――女はいるだろうか――。木野

は自問した。いくぶん期待と不安とのいりまじった感情が皮膚の下でひしめきあった。その感情は、タクシーが十字路に来て、ゴー、ストップのかかるたび、徐々に強まり、切なくふくらんでいった。

タクシーは、やがて、その街にはいった。街路樹の青い繁りと湧きあがる噴水のある広い公園をはさんで、寂かに連らなる住宅地だった。タクシーをおりて、十メートルばかり歩くと、その女の家はすぐに判った。木野は並木の下に立ち、胸の動悸を静めながら――行くべきか、引きかえすべきか――と反問した。だが足は自動的に進み、その白く塗ってある玄関の前に来た。

ベルを押すと、窓が開き、黒い髪の若い女が上半身をのぞかせた。

「エレーナさんの家は、こちらですか」

木野は、ためらいがちに、たずねた。女は、最初うさん臭さそうな顔だったが、木野を日本人だと知ると微笑した。

「ええ、でも今日、彼女は留守ですわ。」

と揶揄するような口調で答えた。そして、昨日からある若い黒人と外泊したままだ、ということも言いそえた。

木野は、吐きけのするような気持になり、それをもてあましながら、きびすを返した。背後で――ふん、日本人――と軽蔑を含んだ声が起こり、その語韻は糸のように語尾を長く引いて、木野の耳底に残った。

何メートルか足早に歩き、木野はふりかえって見た。若い女の

姿はなく、窓は固く閉ざされていた。

これ以上、路上に伸びている醜悪な自分の影を見て歩くには、耐えられなかった。――これが四十路を半ば過ぎた男の生きざまか――木野は自嘲の言葉を吐きすてた。

バスが来た。

木野は犯罪者のような気持を、やっと支えて、空席に腰を沈めた。二十人ばかりの乗客はみなブラジル人だった。異質な視線がいまの木野の心を見すかしてでもいるように集まった。

木野は、このままバスに揺られて、遠くへ旅発ちたい衝動と、硬質なバスの空気から一刻も早く逃れたいという思いを同時に抱いた。そうした矛盾した感情に耐えるため、じっと目を閉じた。

木野が目を開くと、バスは街を走り抜け、橋を渡って、K街道に入っていた。細目にあいている窓硝子の間から、流れこむ風が、頬を逆なでする。時々路にゆき交うトラックが黒煙を撒き散らす。バスは次第にスピードをあげた。視野に、緑の木々や、遠くかすむ山並みが、映画のシーンのように、美しく展望された。

先刻のうちのめされた気特から、いくぶん自分を取り戻すことができた。バスの震動に身をまかせて、四方に拡がる景色を追っていた木野は、三十五Kの標札の立っている地点で、おりた。

都心に遠い郊外の空気は、清々しかった。薄い午後の光を浴びて、木々の葉は淡い影を地上におとしていた。木野は街道から山道にそれていった。そして雑草の密生する傾斜地に分け入って

いった。その時、木野の体の底から例の不規則な音がわき、だんだん、その音は高くなった。そやつは、どうかすると、木野の心の隙をうかがい、冷酷な爪をといだ。

ある時は、不意にせせら笑いをして皮膚の底をかきむしった。

― 執拗に、執拗にかきむしった ―。

そやつから逃れないと、自分は滅亡するのだ。木野は焦躁と絶望に沈む眼を、かっと見開き、傾斜地を、しやにむに登っていた。まるでその傾斜地の果てに、自分を救ってくれる何物かがあるかのように……。―俺は登らなければならない。いや、逃れなければならない、黒い病氣から―、身辺によどむ重苦しい問題から―。

目まぐるしく歯車が回転するように、もろもろの物象が脳裡を駆けめぐった。

その時であった。

“ゴボツ”

と、胸もとを突きあげた熱いものが、喉に満ち口の中に溢れた。そして、どつと足元の青草をまっかに染めてほとばしりおちた。

「これが黒い病氣の正体か！」

木野は眩きながら、その場にくずれ、意識を失っていった。

遠くで誰かが呼んでいる。その声の主は、なかなか近づいてこない。早く来いよ、木野はもどかしそうにもつれる言葉をしきりと口走っていた。

風が出で、野の果てに夕日が抽象のようにかかっている。野の枯木の遠景が、夕日に映えている。その枯木の枝に五、六羽のウルブーがとまっている。
なぜか、ウルブーは夕日の色に融けこんでいかなかった。

(終り)

『コロニア新刊紹介(1)』

正木思水歌集

正木思水氏(本名良武)が没してから、昨年(一九六七年)は丁度十年目に当たる。令妹高橋よしみ氏は、十周年忌供養として、亡兄の歌集を編み、本年初頭、知己の間に配った。

本書は、菊版、謄写印刷、本文一五八頁、一、一二二首の短歌がおさめてある。出版に当たり、選歌は、彼の短歌の師酒井繁一氏が担当し、編集印刷には、高橋氏の歌友安良田済、大原友重両氏が協力して完成をみた。

年譜によると、正木氏は、高知県出身。一九三三年渡伯。一九四五年カンポス・ド・ジオルドンのフランシスコ・シヤビエル療

養所に入所。一九四六年酒井氏に師事して、本格的な作歌に入る。そして、一九五六年九月、享年四〇才、同所にて逝去した。

正木氏は純情一徹、責任観念強く、友情に厚い人柄で、入所以後十年間を作歌一筋に生き、そして死んだ。全作品がよくその人物を物語っていて、療養吟として幾多の秀れた作品を含んでいる。

我が病癒えて必ず帰りゆかむ車外の桃の花眼にしみる入所当時、快癒を疑わず、こうした作品も作っている。しかし、その後病症は一進一退、入所六年日頃には、

病み馴れて日は移るなりこもごもに湧き来る悲願に身は支えつつというような、しみじみとした歌も詠んでいて、幾分諦観に近い心境を訴えている。それが、酸素吸入と強心剤の力にて辛く生きつぐこの幾日か

美しき臨終を残さむと思いつつひそやかに酸素吸入をする というような作品となつて、終に他界している。感動的な歌集として、一読を勧めたい。 (黄)



(31枚)

三瀬 喜代志

創作

流 りゅうり 離

(第一部)

これで、何回目のムダンサだろう。指を折って、数えても、本気にならなければ正確に数えられない程である。流れ流れてなどと、軽い口調で、自嘲じみた笑いでまざらわしてはいるけれど、本間三夫の本心は泣いているのかも知れない。彼は、何処へ移って行っても、仕事は一生懸命にする男なのである。

「さあ ― 乗った、乗った。おい ― 恵美子百合ママエは？」

「仕度よ」

子供達は、それでも、一番上等の着物を着せて貰って、みんな

嬉しそうである。長女の百合子はまだ十一才だが、下に弟と妹が四人もいるので、一っぱし姉さん顔で、忙がしくよく動き廻る。積荷を終えて、カミニオンのそばで、自分で運転して来た、今度のパトロンになるフェルナンド氏と話をしていた父の三夫は家の中に引き返して行った。

「恵美　―　おや、ちよつと塗ったな　―　」

「私がお化粧するのはムダンサの時だけよ」

「ふふ　―　ええ女子になったぞ　―　」

「いやなパイ」

恵美子は、彼女が言った通り、お化粧などするのは滅多にないことなのだ。お白粉や口紅やクリームむ相当古い品物だが、使ってみれば、やはり化粧品の芳香がするので、悪い気持ちではない。

「このルゴールが私に一番合うのよ」

「安いからな　―　」

「それもあるけれど、品もいいわ」

「三年も使えりや只より安い　―　さあ、もういいぜ、フェルナンドさんが待ち兼ねておるぜ」

「ハイ　―　」

恵美子は、殊更に急ぐ手付きでハンドバックを抱えると、部屋の中をグルリと見廻した。三夫も、もう忘れ物はないかと、台所の方まで見て歩いた。粗末な小さい此の、シャツペー屋根のあばら屋も、もう一生再び見ることもあるまい。三年間住まわせてもらったなつかしい家だ。ここで、デアアとパウロの二人の子供を

儲けた。夫婦は家の中に、つつ立って、しばし別離の感傷に涵つた。

フェルナンド氏の指示で、運転台には、三才になる二女のデイアと、妻の恵美が、末っ児のパウロを抱いて乗った。

「何んと、ボロばかり山のように有るな」

三夫は日本語で誰にともなく言つて積荷に掻き登った。既に、子供等、長男の忠志、次男の孝志、長女の百合子、此の三人は、他の州で生れて、伯国名はない。三男のジヨルヂ、四男のラウロ、五人とも荷物の凹みにうまく陣取つて、ニコニコと父親がかき上げるのを見ていた。

「ジヨルヂーしっかりコールドに掴つておるんだぞ。よしよし、ラウロは、忠志と孝志の間に挟んでおけ。落ちんように気い付けておれよ」

「パ。パイ——此処がいいよ」

次男の孝志が、父の坐る所を教えた。工合よく、荷物をしめた綱の隙間に、腰を下ろせるだけのコルシヨンの上だ。

「ジヨルヂ —— リキを抱いとつたら小便するぞ、カミニオンが揺れるんで、アゴミツタもするぞ」

「うん —— 此の箱ん中入れるよ。行きだしたら ——」

「よしよし」

「パ。パイ —— ファゼンダ・パライズ迄遠いなあ——フェルナンドさん、百二十料あると言つたよ ——」

と、孝志は、眼を輝せて言つた。

「うん——ちよつと遠い。だがいい所だぞ。お前も頑張るんだ。今度こそは——な」

「リッコになるね、パイ」

忠志に抱かれるようにしているラウロが言った。

すると子供等みんな大きな声で笑ったので、フェルナンド氏が何事だろうと笑顔で見上げた。忠志が、葡語で説明してきかせると、彼も笑い乍ら、

「その通りーガラランチード」

と言つて、運転席へ顔を引つ込めた。

見送る人もないムダンサだった。近所に住んでいる人といつていないのだ。本間三夫一家は、三年前に、日本人が一人も居ない外人耕地へ移つて来て、又今度も、日本人の一人も居ないフェルナンド氏のファゼンダへ移つて行くのである。

彼は、本道以外は道に凸凹が多く、徐行するカミニオンの荷の上で、何回目のムダンサになるかなあと、思つて、知らず識らず指を折つて計算した。

「パイ——何してるの？」

揺れる車から護つてやる為に左手で抱くようにしている百合子が、父の顔を見た。

「ムダンサだよ——」

三夫は右掌の指を折つて、また逆に開いて又二本折つた。

「十二回目だ。パイがね、ブラジルに来てから十二回目のムダン

サだよ」

子供等は「わあ」と囃し立てた。

「今度行く所、家はマテリア？」

百合子は父に訊ねた。煉瓦建ての家に住んだことのない此の子は、そんな夢を見ているのかと思うと、三夫は、やり切れない思いがした。三夫は、百合子に前以て、今度自分達が住む家に就いて話すのが苦しかった。それでこんな冗談で、子供達を大笑いさせた。

「立派なお家だから、バラツタが沢山居るだろうな。百合子はお友達になるさ」

三夫は真面目な男だが、勇氣に欠けている平凡な男だった。彼は、事業をするにしても他から資本を借りるのを嫌った。腕と汗だけで家族を養って来た。

借金は一文もない。が儲けもしなかった。或る銀行に口座は持っているけれど、それはもう二十年近く前に預けて、僅かずつだが引き出す一方で、取るに足りない金額が残っているだろうが、引き出しに行く程のものでないので何時か忘れたように放つたらかしてあった。毎年、働きに働いても、一向にまじな暮しも出来ず、他人の土地を転々として渉り歩くので、家具らしい道具は何もなく、誰が見ても貧しい生活の永年だったが、此の夫婦は非常に仲が好かった。

「なあ、恵美子、俺達は貧乏だが、幸福だなあー」

「ええ、そうよ、幸福よ。此の上、もう少しお金が出来たらまだ幸福よ。そして、自分の土地があったら、尚——」

そう言う妻の顔に暗い影は一つも無い。

「それが、欲というものぢや恵美子——考えて見ろよ。身体が元気で、夫婦は楽しくてさ子供も皆元気に育つ。これはな、貧乏を甘んじて受けている代償に、神かつ与えられた幸福なのぢや。金が出来たら、途端に崩れてゆくぞ」

「まあ、そうか知ら。本当だわ。貴方は楽天家ねえ。あたしいつも幸せだと思っではいるのよ。でも、女って欲が深いわねえ——」
「それでいいんだ。お前のは欲って言んぢやなくて向上心なんだ。人間には無くてはならないものなんだ。俺の考え方は敗北主義って奴かも知れん」

「でもいいわ。何時かは、もつともつと素晴らしい幸福が来ることよ。子供達が大きくなったら、ねえ貴方——子供にはいい親になりましょうね。どんなに貧乏でも、子供に慕われる親に、ね——でない」と

「うんそうだ。好かれる親でないとは損するからなあ」

こうした会話が、此の夫婦の日常、繰り返えし繰り返し交されているのである。

三夫は、妻を考える毎に幸福感で充されるのだった。これという特技もない平凡な女だけれど、貧しい家庭を幸福にする円満な性格と、夫に反抗して自我を通そうとする個性も持たない従順さのために、家は常に明かるかった。人の悪口も言わず、揚足取り

もしないので日本人からも伯人からも好かれた。

結婚当時は両親があつたが、その両親に仕えることが、自分の義務であるかのように思っている女であつた。古風な此の思想が家庭を温かいものにした。

両親が続いて死に、自分の所有である土地が瘦地である為に、棉作農である彼は土地を棄てて、それ以来流離の人になつたのである。其の当時は、土地が、古く瘦地であれば、売れる時代ではなかつた。此の家族は無一文で各地を流れ歩いた。その間に、貧しさとは関係なく、次々に子供が生れた。長男の忠志だけは植民地の小学校をやつと卒業させたが、次男の孝志と長女の百合子は中退のままである。今度のフェルナンド氏のコロニアには学校があるといふので移ることにしたのである。

四時間もかかつて、やつと車はフアゼンダに着いた。子供達は、広々とした牧場と、遮ぎるもののない大きな波状の山に先づ歓声をあげた。緩やかな丘の裾が、低く落ち合っている壁には、可成りの水量がある川らしく、繁みが線になつて長く続いている。

綺麗に整備された牧草の青さの中に、一際濃い緑のマンガの大木の中に、白い建物が鮮やかに見えるのが、フェルナンド氏一家の住宅である。三夫は一度訪ねて来た事があるので知っているが、子供達は、その美しい景色に圧倒されたように眺めていた。

家の前の可成り広い車寄せに、カミニオンが着いた時、家の中から二人の女性が現れ出た。

「パ、パイ、此処がエウ等の家？」

百合子が、そんな質問をすると、忠志がすぐに叫んだ。

「違うー ファゼンデーロの家だ」

忠志は、知らないけれども、彼の年令と経験から、こんな豪壮な住宅が、コロノの家なんかでない事を直感したのであろう。

三夫夫婦は車から降りて、二人の女性に挨拶をした。それは、フェルナンド氏の母親と彼の妹とであった。三夫は以前、入耕の相談と視察に来た時、フェルナンド氏の家族を知った。そして、これ程の耕主に不似合な家庭の淋しさを感じていたのである。

フェルナンド氏は独り息子で、尚独身である。母のマリアは未亡人で、妹のアイジニヤは三十才の未婚者である。他に、家族の一員として、マリア夫人の弟のゴームス氏が居る。彼も独身である。その他には、牧童カスカベル一家が居る。

マリア夫人は愛想よく三夫一家を迎えて言った。

「珍しい日本人の家族。私達は日本人が欲しかったのです。日本人が正直で勤勉なことはよく知っています。どうぞ、私達のファゼンダの為になって下さいね」

そうして子供等の一人一人と握手した。小さな子供には頭を撫でて抱きかかえるように喜びを現したので、子供等にはよい印象をあたえたらしかった。

彼女は、色白で、でっぷり肥っているが、品のよい容顔で卑しくない素性らしく、艶のよい肌をしているので、髪には白毛が混っ
ていても若々しかった。

娘のアイジニヤも愛嬌を溢れさせて、子供等に何かと話しかけ

た。耳から頤への線が美しく、差し延べた掌の指がアツと驚く程、華奢で、アグアマリンニヤらしい指輪が高貴な女性を想わせた。

応接室に招じられて、コーヒーをご馳走になった。

それは時間外れで冷たかった。マリア夫人は、そこで、三夫とも恵美子にともなく自分の家庭の事を話し始めた。余程、退屈しているか、話好きなのであろう。亡くなったフェルナンドの父の事、フアゼンダの歴史などをくどくどと話すので三夫は一寸うんざりした。そして終にこんな事を訊ねた。

「貴方は、立派な日本人らしいのに、何故、こんな所へ来たのです？ 貴方は山の仕事なんかする方でないように見えますが――」

マリア夫人は、小鼻の脇にある鮮明な黒い痣を爪で搔きながら、やっとお喋りを中止した。三夫は、簡単でうまい理由を考えていたが、

「事業に失敗して、百姓になったのです。それに私は、馬鹿正直で、百姓が性に合っています。そこへもって来て、フェルナンドさんと知り合って、彼が好きになりました」

「ああそう――あの子はお人好しですから宜しく頼みますよ」

裏に出たり入ったりしていた息子のフェルナンドもその時卓の前に腰を下ろしていたが、彼はニヤニヤと笑っていた。炊事婦をしている真つ黒なテレザがバナナの熟れたのを持って来て、子供等に別け与えた。

荷物を積んだカミニオンは、それから三軒程走って、小高い丘

陵をぐるりと廻った。

その辺りから珈琲園が始まっているのである。牧場と区切って有刺鉄線が張ってある。

ポルトンを抜けて珈琲道路を走ると、点々と人家の前を通る。皆歩合作の人達の住居である。三夫達一家が入る家はその一番奥の端にある。今迄通って見た、どの家よりも貧弱で小さかった。フエルナンド氏は、一年だけ此処で辛棒して呉れたら、来年退耕する人の家が空くから、そこへ移ってもらおうと言った。さすがに、恵美子もその茅屋ぶりには驚いたらしかった。屋根は、割り板で葺いてあるが、板家ではなく、周囲も中仕切りも泥を塗った壁である。

それも雨に打たれ落ちて、所々、中の竹が覗いている。無惨とも思う小屋だった。三夫は、妻に対して恥かしかった。けれども、彼は次々と、日本語で、妻や子供を励ますようなお喋りをしながら車から荷物を下した。フエルナンドが、気を利かせて、丁度手際きになっている牧童のカスカベルを連れて来てくれたので、またたく間に荷降しは終わった。一時間許り後に、フエルナンド氏はカパティス（牧童）を連れて帰って行った。

その夜から、今迄の所と違った風景の中、夜のさざめきを見たり聞いたりする生活が始まった。

小屋住まいにとって、有難いことには、綺麗な泉に恵まれていたことと、家のすぐ下から緩やかな傾斜になっていて、水量の豊

富な溪流があり、対岸は広々とした大牧場が展開しているので眺めが、すばらしい事である。家の中も、至って殺風景で、戸棚も寝台もメーザも手製のものばかり、時間を見るための時計一つ無い暮らしには、全く似合った仙人生活と言うべきだ。

夜になると、蛙の鳴き声がすばらしい音楽を聞かせてくれた。彼等一家にとって一番心配されたことは、こんな境遇が子供達をカボクロに育てはしまいか、ということだった。

フアゼンダに、学校は有った。だが、先生が無資格な為に三年生迄しか学年がないので、四年生の授業を受けたければ、片道九キロも離れた所にあるパトリモニオに行かなければならなかった。

三夫は孝志と、百合子と、ジオルヂの三人を連れてフアゼンダの学校へ入学依頼に出かけた。学校はフェルナンド氏の住宅の裏にあった。耕主の家の裏口迄行くと、妹のアイジニヤが鶏にミーリヨをやっていた。す早く三夫等父子を見付けると先に声を掛けできた。随分朝寝坊らしく、未だピジヤマ姿で、髪には櫛も入れてないらしかった。

「お早う ― アイジニヤ。ドナ・マリアは？」

「まだ寝てるわ ― ミツオ、お入りなさい」

彼女は、家の中を通り抜ける引き水の流れに懸っている小さな橋迄歩いて来た。唇の紅と手の爪の朱色が緑のマンガの影の中で冴え冴えと色つぽかった。

「此の子達の学校を先生にお願いに来たのですよ、アイジニヤ ―

「そうですか　―家に入って、カフェを飲んでいらっしやい。丁度頃合ですわ　―」

学校では、もう子供達の騒がしい声が聞えていた。

言われる通り、流れの橋を渡って、台所の方へ、アイジニヤと肩を並べて歩いて行った。

「パパイ　―エウ等は？」

孝志が、父の背に向って訊ねた。返事をしようとする前に、アイジニヤがくるりと振り向いてお出でお出でをしながら、

「パパイと一緒に行けばいいのよ、先生は、こちらに居るからこちらへいらっしやい」

と言った。

「先生は？」

「ええ　―私ん家で寝泊りしてるわ。オリンダという名でモレーナの娘よ」

そう言って、その頃になって、アイジニヤは右手を出して、ボン・ヂーアと言った。

三夫は慌てた。そして彼女の掌の軟らかくて吸着力の強い振り方にも戸惑った。

コーヒを招ばれ乍ら、三夫は台所を眺め廻した。

牛寄場の方で、牛の啼き声がしきりに聞えた。

「今、レイテを絞ってるの、もう持って来るわ。ミツオ、あなたレイテ好き？」

「大好きです。でも滅多に呑んだことなんかありませんよ」

「そう ― お好きなら、毎日」

と言つて、孝志の顔を見て、

「あんた、名前は？」

「タカシ」

「そう、タカシ、タカシ、あんた帰りにレイテ持って帰りなさいね。毎日よ、あんたレイテ好き？」

「ゴースタ」

孝志は、嬉しそうに、大きく肯いて、そう言った。

その仕方が面白いと言つて彼女は大きな声で笑つた。

向うの部屋で、欠びの声が聞えた、と思つたら、寝間着のままのマリア夫人が、片手に歯ブラシ、片手に義歯を持って、台所に降りて来た。寝起きの顔は、日本人にないきつさがあると三夫は思った。直ぐ、その後で変化する笑顔の美しさも、日本人には無いものだと思つた。立つたまま、夫人は突然こんな風にお喋りを始めた。

「去年、一年ずっと私と、娘とは、リオのアパートに住んでいたのですよ、ミツオ。だけど、リオは駄目。ねえアイジニヤ。盗人が多くて、油断も隙もありはしないですよ。私達には、カンポグランデ市にも家がありますけど、カンポグランデの方が、ずっといいですわ。」また、来月からはカンポグランデで住む積りですわ。ミツオ ― 遊びにお出でなさい、ね」

「奥さん ― 結構なご身分ですね」

「いゝえ、フェルナンドが早く結婚してくれたらいいんですが ―

「
そうして、娘の方に眼を向けて、

「この娘も　―　早くいい相手を　―　」
すると、アイジニヤは間をおかずに、母に言った。

「わたしは、ママエと暮すんが一番よ」

マリア夫人は、ニヤツと笑って言った。

「この娘、いつもあんな事言って。この娘にはね―

―ミツオ。三百エクタールの山があるんですよ。兄のフェルナンドがそれを借りて牛を入れて、ね、毎年三百コントこの娘に払ってるんですよ」

牛一頭の値段が、五コント位のその頃だから、娘一人の収入としては莫大なものと言うべきである。

結婚を急がない理由の一つであろう。

その時、学校の教師オリンダが、登校の仕度で台所へ入ってきた。アイジニヤが、三夫を紹介して、三人の子の入学のことを話すすと、

「結構です。さあ行きましょう。ね、名前は学校で、ね」

色は白くないが、顔立ちの整った背の高い娘であった。口調が、歯切れよく、声も悪くない。三夫はいい娘だ、と思った。

それを機に三夫も帰ることにして、恵美子に頼まれている洗濯石鹸のことを思い出し、

「サボンを分けて頂きたいんですが、」

とアイジニヤに言うと、彼女は、三夫を連れて倉庫に行った。

「お嬢さんは、結婚しないんですか一生？」

アイジニヤは瞬間、驚いた風をした。そんな風な質問などする男とは思わなかったのだろう。

「そんな事ないわ。ミツオ。男はね、ミツオみんな私の財産をねらうのよ」

「そんな男ばかりではないでしょう。貴女を愛するが、その愛する貴女には財産があるというだけの事ではないですか？」

「えっ——」

アイジニヤは驚いたように眼を円くした。

「それは、そうかも知れません。ミツオ、貴方の御言る通り、財産が有るために、あたし男に対して臆病になっているのかも知れませんかわ」

「いい人が見つかったら、結婚する事をお推めしますよ——」

「有難う、ミツオ」

そうして彼女は、満足気に言った。

「貴方は、インテリジエンテね。私の理解者になって頂けそうだから」

「ええ成りますよ、アイジニヤ、女の幸福は結婚にしか無いということに僕は知っていますから」

「ミツオ——あたしの事より、兄ですわ。兄の結婚を、母はどの位待っているか。」

「ないんですか？ いい相手が——」

アイジニヤは顔を寄せて低声になって右の人差指を立てて唇に

当て乍ら、

「有るんですわ。でも、兄はその娘さんを嫌っていいいるんですわ

——」

「何故でしょう？」

「女の方の家柄が好くないと言つて——」

三夫は、おや、伯人にもそんな考えを持つ人があるのか、と不思議に思った。

アイジニヤに、五キロのサボンを秤にかけさせて、古いサツコストツパを一枚貰い、帳面に附けておくよう頼んで家を出た。

裏口迄出て、三夫を見送ったアイジニヤが、三夫が豚の柵の方に廻ったので、また彼の側に寄つて来た。

「僕はねえ、豚も分けて貰いたいんだよ、アイジニヤ——」

「いいわよ、わたし兄に言つとくわ。どれがいいの？」

家の中から流れ出た水が、裏庭を通り、マンガの大木の、岩のような根を洗つて、家敷から牧場に出る所に豚の柵があり、平たい自然石をふんだんに使つた床に、大小三十頭ばかりの豚が、朝の餌を喰い終つて寝そべっていた。流れが、其の一辺に沿うて清冽な色を湛えており、三夫は、さすがにフアゼンデーロらしい豪壮な造りだと感心した。

「中位の奴なら、どれでもいいですよ。序の時にカミニオンでお願いしておいて下さいよ」

「いいわ——ミツオ、雄がいい？ 雌がいい？」

「どちらでもいい、が、出来れば雄がいいですよ」

「貴方は、カップ出来るの？ ああ — それよりミツオ、孕み豚が
いいんぢやない？」

「成る程、それがいい。」

「ほら—あれ、あれがどう？」

彼女は、腰を屈めて小石を拾って投げつけた。驚いて起ち上つたその豚は、孕んでいるのが目立つ程になっていた。

「いい豚だ — それをお願いしたいですね、アイジニヤ」

「豚小屋を作っておきなさい、ねミツオ」

彼女と別れて、三夫は、途々、心の温まる思いに包まれた。人懐っこい人達だ。特に、あの娘の明朗な言動に心を索かれた。誰にでも、あの調子だろうか、と思つたが、後に、そうではないという事が判つた。三夫以外に珈琲園の分益農は十二家族も居るが、其の誰にでも余り親しく言葉をかけないのである。それは、彼等、分益農の人々の噂で判明したのである。すると、三夫は特別な存在だつたのだ。日本人として尊敬を受けたのだらうとその時思つた。分益農の人達の多くは半黒という種類の、教育の無い卑しい育ちが一眼で判る人達であつた。教養と、生活の差から生れた別世界がそこに在つたのであろう。そうした差別待遇が、色々な形で三夫一家の上に現れて来たので、心中、日本人であることの衿りが実感として経験の中に生れ育つて行くのであつた。

或る夜、もう夜中頃だらうと思われる時刻に眼が醒めた、永い習慣になつて、夜中の小用は夫婦一緒に外に出るのであるが、その時も、夫婦で、手燭—下げランプは家にはなく、手頃な瓶で作つ

たもの―を持って小用に出ようとした。そして、台所のクドの側の土壁を見て二人は驚いて棒立ちになった。

壁一面、バラツタ（油蟲）で真っ黒になっているのである。移つて来た頃は、案外バラツタ等に関心を持たない程少かったのに、何時の間にこんなに増えたんだろうと呆れてしまった。手燭を近づけると、壁が、そのまま動くかと思われるように彼等は移動する。全く凄い眺めであつた。不気味でさえあつた。

「これはひどい―」

「胸が悪いわ ― こんなの」

「うん全く、」

三夫は叩いてやろうと思つて、何か手頃なものはないかと、ぐるりを見廻した、が諦めた。手を振り上げると、ザーツと大雨のような音を立てて四散した。

「あの音 ― 貴方あ」

それは、もう油蟲と言える音ではない。怪獣の鼻息である。こんなことは始めて経験したことである。

「恵美子―バラツタ退治の薬を買わにやいかんね。これも面白い人生の体験だよ」

「悲しい体験じゃないの？」

「お前がそういう風に考えるだろうと思つたので、俺は、面白いと言つたんだよ」

「貴方の癖よ ― 逆説は。生れて始めて見たわ、あんな油蟲」

「あれだけ、兵隊が居れば悪魔は寄り附けんだろうな ―」

三夫と恵美子は大きな声で笑い合った。

その声に驚いて、子供等も眼をさました。

「何？ 何うしたのママエ」

子供等は口々に母の名を呼んだ。恵美子は今見た情景を得々と話して聞かせた。子供等は、わっと声を上げて騒いだ。眼ざめたついでに小用に起きた子供等が、くどの壁を見て、

「居る、居る」

と一騒ぎした。三夫も起き出して行つて見ると、びつしり隙間なく居た先程ではないが、半分位が又壁に張り付いていた。人間が近寄ると四散する。その時は川の流れのような音がするのである。三夫は、子供等について又外に出た。もう、蛙の鳴き声はしないで、空が白金のように白く、星の色は暁に近づいてか、冷たく光っていた。

間もなく、フェルナンド氏の叔父のゴームスと親しくなる機会が来た。

珈琲は半分別けという契約で、此処に移つて来たのであるが、フェルナンドが、ミツオにだけ、特別に、米作地を、二エクター遣ると言っているのも、もうトラクターでアラーしたから測量を一諸にやってくれないか、と言つて来たのである。それによると、此の叔父はモートリスタで、トラクターの仕事を受け持っているとのことであつた。

「私にだけって、外のメエイエーロには？」

「ソウ、セニョールにだけだ。今迄そんな例は無い」

背が高く、骨張った顔に、眼が不似合な程やさしく、笑うと、俳優のように表情に富んだいい容貌をしていた。

「ほー」

三夫は、此の好適は、日本人だからという理由だろうと直感した。そして、別にゴームスに対してその訳は訊ねなかった。

「大変有難い、早速行きましょう」

恵美子は、急いでカフェーを沸かして二人の前に持って来た。カフェーのシーカラを置くのには一寸した注意が必要だった。それはメーザが、綺麗に鉋をかけた板で作られていないからである。恵美子は、ゴームスに、言訳を言い乍らカフェーを推めた。三夫は、今聞いた米作地ニエクタールの事を話した。

「そうおーゴームスさん有難う」

すると彼は笑い乍ら、

「甥のフェルナンドがパトロンです。彼の考えた事ですよ、奥さん」

と言った。

三夫の訊ねる事に、ゴームスは身の上を簡単に語った。

「昔、私はゴヤス州にフアゼンダを持っていた。二千アルケールもあった。だが妻に死なれてから私は事業に失敗して、姉——フェルナンドの母ですが、に縋って流れて来た。もう丁度七年になる。姉の夫が死んだ翌年だった——」

「その頃でした、フェルナンドは未だ若かったですね——」

「そう二十四才位だったろう」

「子供さんは？ 貴方の――」

「三人あります。みんな女で、結婚しています。」

「では貴方は独りぼっち？」

「そうですよ。」

ゴームス氏は、そう言って干からびた笑い顔をした。ゴヤスでの失敗の模様は、一言も言わなかった。

三夫は後に、アイジニヤから聞いて知った事に依ると、彼は、一見、普通の人ではあるが、何うかすると、別人になるとの事である。別に乱暴とか何とか、そんなではなく、何か亡霊にでも附かれたようになって、別な人の行動をするそうである。最も彼がそんな時だって、何も危険ではない。四日も、五日も家を出て歩き廻るのである。それは、金を探すのだそうで、何処で、どんな食事をするのか、母のマリアも兄も知らないとの事である。三夫は、直ぐ思い出したのは“ジキルとハイド”である。彼、ゴームスは二重性格ではないかと思った。アイジニヤにその事を話すと、彼女は静かに青味を湛えた瞳を大きく展げて、

「ミットー―貴方は心理学を勉強なされた？」

と訊ねた。三夫は、只笑っていた。

途々、勿論、三夫はその時は、彼のそうした変化する性格のことなど知る筈もなく、米作地に向って彼と歩いて行ったのである。

(未完)

『コロニア新刊紹介(2)』

歌集『二世』

細江 仙子 著

一九六三年から、一九六六年まで、ブラジルに滞在し、椰子樹の会員として、作品を発表して来た細江仙子氏の第二歌集である。

細江氏は、日本の、短歌結社『斧』の同人で、短歌研究、新人賞にも入選。新感覚に溢れた前衛傾向の新進歌人である。第一歌集、『異質の季』をひっさげ、ブラジル歌壇に登場した時は、一種の旋風を巻き起こした感さえあったものである。

本書は、滞伯二年間の作品(多くは椰子樹誌上に発表したものをまとめたものである縦一六・五糎×横一八糎という珍らしい版型で、活字、日本、短歌新聞社印刷、本文一二八頁、一頁二首組みで、一二八首の短歌と随筆風な文章五篇がおさめてある。

井本惇氏が、文の中で『なまな現実が、彼女の作品の対象となり得なかったのは当然としても、この “二世” 群作の試みは美事である。……風土は、すでに彼女の心のなかに、ぬきさしならぬものとなって骨肉化をとげているのであろう。』と書いている。又著者は、『私 “二世” は、限られた範囲の狭い意味の二世ではありません。一つの国に異民族が同化していく、その過程にある人間の心の営み、そのものなのです。』と書いている。

われも同じ顔もつより外はなし日本人街を通り過ぎたり

父と共に脱走せざりし君も理由なく寄りそい眠る森あり

たどりくれば祖の足跡の消え去りし渚に黒人きみと相呼ぶ

海遠く拓きすすみし父の辺に育ちきて裡に展けたる郷

その意図はよく理解されるが、それだけにやや観念的であろう。詠風は地味な自然主義的傾向で、親しみ易い。著者は再来伯とのこと今後の歌境進展に期待したい。

(赤)

コロニア新刊紹介(3)

『日々新たなりき』

—ある拓人の生涯—

本書は、コロニアの指導的立場に在った、力行会関係の著名人輪湖俊午郎氏遺作の、随筆、書翰、及び知友の書いた思い出などを取りまとめ、一周忌記念として出版したものである。

菊版、活版、印刷は日本の帝国書院、発行は力行会関係者を中心とする輪湖俊午郎氏追憶記刊行委員会、巻頭に輪湖氏遺影、その他関係写真一八葉、本文一九五頁、希望者には七新クルゼイロスで頒布するとのことである。

輪湖氏は、アリアンサ、チエテ両移住地の建設功労者であり、コロニア草創期言論界の雄であった。

口八丁、手八丁、コロニアの発展に生涯をかけ、一九六五年九月、享年、六六才、チエテ移住地で逝去した。

年譜によると、長野県出身、一六才で渡米一九一三年ブラジルに移住、一九二四年、アリアンサ移住地建設に参画、一九二八年、

チエテ移住地建設に参画、一九三三年、アリアンサよりチエテに移転農業に従事。一九四八年、学生会館建設に参画、一九四九年、ブラジル4H協会組織に参画。一九六五年、その生涯を閉じるまでに、コロニアの新聞雑誌に論文、随筆類を多数執筆した。また『パウルー管内の邦人』『ブラジルに於ける日本人発展史』『流転の跡』などの著書を刊行した。

本書を見ると、その交友範囲が広く、誰からも敬愛された輪湖氏生前のおもかげが彷彿として、読む者に親しみを覚えさせる。

コロニアの歴史も六十年。近年、老兵の姿は、齒のかけるように消え去り、さびしい限りである。刊行趣意書にも『今後、こうした人物（輪湖氏）の出現は、おそらく望めないと思われます。』とある。

明敏な頭脳、強烈な個性、豊かな抱容力、それらを兼ね備えた輪湖氏の面目を知るには好個の書である。広く一読を勧めたい。

（白）

絵画

コロニア人の日本美術巡礼 (2)

半田 知雄

一九五六年九月四日(火)

日本橋の白木屋へ円山応挙展を見に行った。朝日新聞社主催、文化財保護委員会、国立博物館後援である。

実にすばらしい。美術史家に云わせると応挙には深さがないと云うが、私には今迄日本で見たものの中ではすぐれたもの、気品があり、やはり深さがあるように思った。構図がいい。自然から学んだしっかりしたものを持っている。鳥類など特にすぐれている。時々水が気になる。人物もゆったりして気持がいい。池ノ大雅のような丸味はないかも知れない。しかし、レアリズムにはじめて目覚めた人として実に立派だ。大小あわせて百数十点あるうと思うが、一つ一つ安心してみられる。

九月六日 (木)

朝から暑そうなので上着なしででかける。近代美術館へ「日本彫刻展」を見に行った。古代と現代のもの。私は古代をよく見た。ハニワと伎楽面と小金銅仏。

ハニワには、あの有名な「少女」と「猿」があつたので、まるで鬼の首でも取ったようにうれしかった。

少女のかわいいたら何と云っていいかわからない。無邪気な一四、五の田舎娘、右側からみると何かをみてオツタマゲたよう

な表情だし、左からみると実にあどけない。しかし、そう思って作ったものではなく、作者の邪心のない心が自然にあらわれたにすぎないであろう。

猿はあわれっぽい顔を一寸かしげている。私はこんな動物の表情に、生きるものはかなさを感じて深い感動をうけた。胸がせつない思いであった。

古代人の心にあった人間共通の感情を、一千数百年後にこの私が感じることの不思議さ。

伎楽面では、やはりあの悠々とした大きさに感動した。今日のせせこましい日本に居て、あの面を見ると、雄大という感が、おつかぶさるようにせまってくる。そして、あれを楽しんだ古代人の生活が、郷愁のように胸を打つ。

あのホリの深い立体感、今日の生活とはあまりにかけはなれたものだ。

小金銅仏はアスカから奈良時代へかけてのものと云うが、実によく出来ている。おそろしく角ばった表情もあるが、また底ぬけに無邪気なのがある。

しかも共に天真ランマンだ。小さいだけに宝物でもつくるような気持でこしらえたものであろうか。子供のような気持でおがみたくなる。

帰途、また応挙を見た。

物すごい立体感の龍、岩のポリウム、たしかなレアリズムだ
と思う。ゆつたりとした人物の表情もいい。ハーフ・トーンのよ

うなうす墨でかいた人物や山水が美しい。あまり墨のつよい雪の松は、ドギツくて私にはいやだ。

大きな場所で遠くからみたら、案外いいのかも知れない。

九月九日(日)

日光見物だ。同行四人。

先ず大谷(おおや)へ行く。

途中の農村が昔ながらの姿で美しい、家も畑も。今年は稲の豊作らしい。台風もどうやらまぬかれそうだ。でも、こんなに隅々までたがやして、道路など最少限度にせばめているところは、やはり狭い日本の姿だ。広い田や畑も、どれだけの人間がたがやしているかわからない。美しい景色の中にも、どことなくいたましいものが感じられる。

大谷はオオヤ石の産地で有名だ。自然石をきざんだ巨大な平和観音は、将来ツーリストをよろこばせるものとなるろう。私は崖っプチにある古い観音堂におまいりして、内部の石像をみて、すっかり好きになった。崖の大谷石にきざんだ一丈五、六尺のもんだが、如来を中心にボサツをともなった像が二組あり、その間に、さらに小さな三体のホトケ様がある。小さい方の如来さまは非常に顔が立派だと和尚さんが説明するのだが、磨滅がひどいせいかよくわからない。光線を上方からとってみるとはつきりするのだという。よくみつめていると、おだやかなその顔がわかるようだ。

この左右に一組ずつある三体仏は、ながく見ていると、段々よくなる。その中でも、向って右側の一組の中の、さらに右端のボ

サツは、全体の彫が深く、衣のヒダなどにも変化があつて、見てみると実にゆったりとした大きさを感じる。左側の一組の中の右側にあるボサツも体の動きに無理がなく、長く見ていると一番いいのではないかと思う。ここにぎざまれたホトケ様は、もとは彩色してあつたらしく、そのあとが、ところどころ見える。彩色がとれ、その下地にぬった粘土も落ちてしまつて、もとの姿は想像もできないが、それでも、このホトケ様が一千年（？）も前のスタイルだということはうなづける。弘仁期のものだというが、どうして世の中に知られていないのだろうか。それとも、ずっとあとのものだが、たまたま、こんな傑作ができたのだというのだろうか。

（あとで上野博物館の野間清六さんにきいたら、五百年位前のものではなからうか、ということだった。）

日光へ通じる杉の並木は実にすばらしい。私はサムライ時代の昔をおもいながら、あの時代でこそ出来たものであり、又、その伝統が残っておればこそ、いまだに保存されているのだろうかと思う。

東照宮は、誰かも云つたように、あの自然とともに観賞するところに本当の美が感じられるのだと思う。三百年、或いはそれ以上にもなろうと思われる老杉を見上げていると、「あらとうと……」の感が真にせまってくる。陽明門その他の建築は、たしかに壮麗の名に値するものだ。將軍の墓所としてふさわしいものかもしれない。権力の偉大さが隅々まで感じられるものだ。私の好

みとしては、神楽殿やその他の部分に建築の美を感じるが、全体としては、あまりに華麗に過ぎてしたしみにくい感がした。あすこにある彫刻も単なる職人芸のすばらしさは感じられるが、気のぬけたようなものばかり、しかも全体としての統一はあまり考えられていないように思われた。絵の方にいいものがあった。

三回も観覧料をとられたのにはうんざりした。見世物だという印象を深くする。

中禅寺湖へ行く登り道の「いろは坂」はすばらしいながめではあるが、アルト・ダ・セーラの雄大さにはかなわない。華厳の瀧ではおすなおすなの観覧者にはびっくりした。東武鉄道経営のエレヴェーターとトンネルがあり、入場料はたしか五〇円だったと思う。

中禅寺湖は一寸さむいほど涼しかった。岸辺の樹木の葉が、ところどころ紅葉しはじめている。水がエメロードのように見えるところがあった。男体山は近くでみると、ただ形のととのった山である。雪をかぶっていたら美しかったろうと思った。

九月一三日（日）

また降りだした。いよいよ季節の変わり目かも知れない。上野博物館で午後、三時間ほどすごした。

鎌倉時代の絵画の中では、仏画がやはり好きだ。あれをみてみると、宗教心というものは、無我の愛だということを感じる。自他をこえた人間の運命に、深い同情をよせることだと思った。

その他の形而上的な論議は、時代時代によって、人間が築いて行

く哲学であるようだ。宗教画には壮嚴と温和との二つの感が必要で、脇侍をともなった三体仏の絵では中心の如来がゲン然としていて、脇に侍べるボサツは、おおむね温和な相をあらわしている。そして、多くの傑作は、(私の主観かもしれないが)ボサツの温和な相にあらわれているようだ。壮嚴は私に感じにいていものか、それとも、本当にむずかしいものなのか。構図には、シメトリックなものの中に、全体に円味を感じさせるものが必要で、色彩はやはり、おちついてシブ味のあるものが多い。

平安朝から鎌倉時代にかけてたものは、いわゆる仏画的な暗さが支配的で、神秘的な感じさせる。ホトケの相は、シナのものとかくらべると、日本的な清純さと「無心」を感じさせる。しかし、あまりにみな似ているように思う。シナのもは、複雑なものを通って来た温和であるが、日本のものは、生来の無心といったものを感じさせる。

藤原隆信(鎌倉時代)の藤原光能像は画面が大きく、色彩が単純なだけに堂々としていて、一つの傑作ではないかと思う。何度みなおしてもいい。

雪舟も一幅あったが、それほどたれなかった。蕪村のつまらない大作があった。土佐光起(?)の栗鶉図屏風は、いくらか見なおすことができた。

どうも彩光がわるくて見にくいところがあるのでこまる。

光琳は有名な硯箱の方を見た。どつしりと落ちついていて豪華なもの底にあり、それでいて構図に型やぶりなゆとりのあると

ころは、私などとは縁の遠いものだが、あこがれさせるものをもっている。

今日は新に陳列された近代のものをみた。橋本雅邦の山水屏風は、構図もとのついで筆勢もはげしいところがあるが、余韻のないのが、私の好みにピンとこなかった。

九月一八日（火）

午後また上野へでかけた。もう数回みたので好きな絵の題と時代と所蔵者とをノートしてみた。

山水屏風、平安時代（国宝）、京都教王護国寺蔵。ずいぶんはげ落ちていて、昔のおもかげはないと思うが、山水に風俗を配したものの、シナ式のものだが見えていたのしい。六曲一雙のように思うが、狭いかけ図を合せたもので、大きなものではない。

普賢十羅刹女像、鎌倉時代（重文）常忍寺蔵。かけ軸で、中心のボサツ共に一七人の群像だ。色調はセピアで、くすんだ卵色の白とわずかな赤青を点じている。暗い画面ながら、すっきりした感があり、やさしい女性の顔が、なごやかに全画面を支配している。

孔雀明王像、鎌倉時代（重文）、松尾寺蔵。孔雀に乗った明王である。蓮台の両わきにひろげられた二つの三角形の孔雀の羽根が、いくらかとげとげしい感を与えるが、引きしまった感があって好きだった。

虚空蔵菩薩像、鎌倉時代（重文）武藤山治氏寄贈。山と日輪の中のボサツ、荘厳なものだ。日輪全体に交叉した後光の線が美し

く、キ然とした感を与える。

来迎アミダ像、鎌倉時代（重文）、京都禅林寺蔵。アミダ仏は立像で、七、三の横むき。色彩はやはり暗いセピアが主であるが、ゆったりとした慈悲の相が魅力的である。

藤原光能像、鎌倉時代（国宝）、京都神護寺蔵。感想はすでに記した。

興正菩薩像、鎌倉時代

この時代に高僧の肖像画をかいたものと同じ様式、落ち着いたもの。

松崎天神縁起、六巻の内、鎌倉時代（重文）、山口、防府天満宮蔵。

応長元年（一三一）の奥書あり、数ある絵巻の中では、すぐれて美しく思われた。印刷したものどちがって絵具のかさなつたところの退色やかき起こしのあとが見えて、よく見ると苦心のあとがすっかりわかる。実物の面白いところかも知れない。

香厳撃竹図、伝元信筆（室町時代）大仙院旧蔵。筆勢にクセがあり（クギをならべたような衣のかき方）構図が散漫に思われる。大形軸二点、一組？、雑画帳、土佐光則筆、江戸時代、岡田静子氏寄贈。すばらしいミニアツラ。数十点つづいたもの。

九月二一日

朝から晴れて気持ちいい。（だが間もなく曇ってしまった。）今日は根津美術館と日本民芸館を見に行くことになった。

根津美術館は港区赤坂青山南町六ノ一一五、美術館の玄関ホー

ルには、インドのガンダラ仏やシナ古代の石像があった。ガンダラ仏は等身の石仏で、立像だった。ホリが深く、顔はシナのものどちがっている。まして日本のものとは全くちがう。そして、いかにも人間的な感がつよい。礼拝する仏像としてはふさわしくない感だ。これに反して、シナ古代のものは、形式化されているが、宗教味を持ったもので、形は稚拙といたい位だが、インドを遠く離れていると云う印象を与える。千手観音があった。時代はおぼえていないが、いいものだと思う。

一階展示室には「国焼茶陶」の陳列があった。国焼とは日本の茶道が創造した和物の陶磁器に対する総称だそうである。茶入、茶碗、花入、香炉、香合、水指、皿、鉢、向附、その他の茶器であるが、私はここに一つ一つの印象について記すことはできない。陶磁器に対しては、それほど深い鑑賞眼をもっていないし、今まで見ているものも少く、また特別な勉強は何一つしていない。けれども、ゆっくりながめっていると、その形、その色、その模様、その物質感に充分私を楽しませるし、こんなものを身近において、朝夕ながめたら、どんなに楽しいだろうと思うのであった。なぜなら、これら千変万化の器は、それぞれ置かれる所を得た場合、陳列棚では味わうことの出来ないニュアンスがかもし出されてくるのではないふと思うからだ。私はお茶を知らない。しかし、自分の生活の中にこれらの茶器をとり入れて（想像の中で）たのしむことができる。

一番好きになれるものは、形が単純でありふれたもの、

色は明るい方が早く目をひく。暗いどっしりとしたものや、デンとしてごついものは、一応ありふれた明るいものにくいたりなくなつたときに好きになれるだろうと思う。個性のつよいものは、それと合致するこちらの心がまえがないと、とりつきにくいにちがない。

香合などは、てのひらにささえ、或は両手ににぎりしめて愛頑したいようなものがある。これこそ自分が長い間さがし求めていた石ころだと、ひろい上げておどろく時のような、ひそかなよろこびを胸にひめて、なでさすりたい形、又、どんなに多くの人がこれを愛撫したであろうと思われる古い手ずれのあとのような様々な連想をよびおこす色と形と物質感。これはたしかに青春のロマンチズムは与えてくれないが、素朴な庶民のながいあゆみの、シンミリとした姿を想い起させるものがある。

それが侘びというものではなからうか。しかし、かわいいなアと叫びをあげるのは、どう考えても愛陶の入口に立った素人の気持であるように思われる。

茶碗も色のあかるい自分の両手を自然にそろえてすっぱりささげもつことの出来るような、ありふれたものがいい。底の広い抵抗のつよいものは、それにふさわしい心がまえがいりそうで、今は近づきがたい。しかし、色の明るいものは、一見して色調のニュアンスが見とれるので、わかりいいのではないかと思う。

ながいことつかいこんだ茶碗の美しさは、もう或る個人が制作した芸術品というより、生活の中で成長した美術品というべきだ

ろう。もし陶器などで、古いが故に尊いということが云われるとすれば、多くの人間の愛情の歴史がしのばれる点であろう。それは今日の芸術観では規定することの出来ない、生活が生みだした文化である。

水指などは、暗い色のものでも、なるほどと思う。私は岩石の間をながれる清水を想像した。今日では、水は透明なコップに入れることになれている。

ガラスの水指は美しいと思う。しかし岩石のくぼみにたまった水の美しさをわすれることができない。私は岩石のようにどっしりした水指の姿にあこがれざるをえない。

陶器の美しさは、本当に、これを手にとってあつかってみないとわからないだろう。しかし、目は手にかわって、いくらかこれを感じるができる。

二階にはシナ古代の青銅器（殷墓から発掘されたもの？）が一〇点ほどあったが、私はまだ、これほど豪壮な器物を見たことがなかった。型で铸造し、さらに模様をこまかい部分をほり起したような作品は、何か古代エジプトのものを思わせるが、これほど支配者の威力や権力を表わしているものはめずらしいのではないだろうか。堂々たるその大きさ、その形の荘重さに圧倒された。権力の象徴として最高のものだという気がした。（私は後にルーブル美術館で、アッシリアの彫刻の中に同じような壮太さをみた。）一階の一室には中国清代にヨーロッパ各国から清朝へ贈られた飾り

時計が、やはり十数個ならんでいたが、これは美術品というよりも素人の目をおどろかせる見せ物である。ただ百宝をちりばめたようなこの細工ものは、各国がシナに通商を求めたとき、朝廷の人たちをよろこぼせるために、こんな見えすいた細工ものを贈り、それがかなりよろこぼれたらしいことを考えると、清朝末のあわれな姿が想像される。

根津美術館を出てから電車で渋谷駅へ向いさらに井之頭線で駒場の日本民芸館へ行った。民芸館は、いわゆる美術館とは、また気分がちがっていて、ゆったりした気分で陳列品を鑑賞することができる。ブラジルならさしあたり、古い住宅といった感のところである。靴をぬいでスリッパにはきかえ、大谷石の床の上を歩く。

台湾の生蕃やアイヌの着物を見る。

台湾のものは赤がめだち、アイヌのものでは紺と白の対照が特長だ。共に原始文化をそのままセンレンしたという感。でも、アイヌには鉄製の細工ものがあり、刀剣などにはなかなかこったものがあつた。

民間に伝わったトックリやツボ、カメなど昔を思い出す器物であるが、生活の匂がしみこんでいたのしい。また、普通の職人が作ったにちがいない実用的な焼物でも、今日の型にはまった大量製造品とちがって、趣味と経験とを生かした、おもむきのあるものが多い。絵かきでない人間のかいた簡単な象徴的模様も、イヤ味がなくて楽に見られる。

民芸の強味は実用にあるだろう。役に立つから、使いいいからよろこばれるのであって、その上、見て、手にして気持のいいものだったら皆から大切にされる。芸術至上主義の立場から、実用ということは価値のひくいもののように考えられるが、実用という点から生活と直結し、同時に人生にうるおいを与えるとしたら、こんな力強いことはないだろう。私はいい美術品を見れば見るほど、美は善につながることを考えざるをえない。本当の美は善心のみが見だすだろう。

民芸館の二階の一室に英人バーナード・リーチのものがあつたが、日本のものをまなんで、やはり英国人の良さを出している。馬の下絵らしいものがあつたがよかつた。

芹沢銈介という人の染物や版画が別室にあつたが、いや味のないう純粋な感がしてよかつた。六〇才位の人だというが、工夫をこらした独特のもので、一つ一つ愛情を感じさせる。

たくらむ

横田 恭平

押す

ねじまげる。

投げる

引っぱる

人間のちからの風景の

悲壮さ

豪快を

そしてものうさ

つまらなさ

しきりにたくらむ

電流のように来て

一瞬に決するもの

精神と肉体を

垂直にたち裂くもの

あなたの善を

ただちに悪に変えるもの

そういう風のちからを

詩の行と行との間にひそめることを

老人とエスカレーター

可児 三平

始めて乗る

引きづりこまれ のめり込む

のると 新しい冒険にニヤリ

辺りを見廻わす

鼻唄まじり 歩いて上る

二階に昇り 三階に昇る

降りる

黙って降りる ときめきもなく

降りる

老人に戻る

高原抒情

耕 玄

荒涼と枯れ果てた野に
春がめぐりくる

枯草と埃の中に

萌えてくる、新緑の鮮かさ。

空を埋める白色の雲は

移り、変り、いとまもない

一団の児等の喚声が

無限の空に消える。

来る春に先がけて

ミモーザの、赤い花が

咲いて、散る。

人知れず、枯野の中で

高原の夕焼に燃え尽くす。

荒涼たる大地の底で

誰かと呼ぶ

誰かノックする。

《めぐりくる季節の使者か》。

荒地のなかの雑木のように

狩海 亘

荒地のなかの

雑木の群の一本のように

ぼくはじつと坐っていた

葉を振落とすように

言葉を捨て

尻に月光を浴びて

馬がつつ走る夜に

あっけなく誰彼と交接し

あとはただじつと坐っていたい

それなのに

ここへは冬が来ない

捨てても 捨てても

言葉はあとからあとから

ざわざわと生れ

蛍の乱舞で

ぼくの周囲を蒼白にする

ぼくの樹液をへらし

幹をひびわらせてなお

言葉を繁らせ

他者の方へと

ぼくを傾ける

おまえはなにものか

瘤鯛

水野 林

俺は黝くてでっかい瘤鯛のようなやつで

海の底を茫然と幽霊のように

泳いでいるんだな　とも思はない事はない

海草の揺らめく繁みに向って

海の水が押しているのだから

それとも本当に俺が動いているのだから

ともかく静かに繁みの中に入っていく

そして暗鬱な速度でまた出てくる

かと思えば

不意に身をひるがえし　上の方に行き

広くもない岩穴に好んで入っていく

それから

迷いもせず　からだを動かしていると

何となく別の穴から出て行く

いったい何をしているんだ

どこで何を喰っているんだ

いつ　んこをしているんだ

俺自身にも良くは判っていない
海の底はうす暗いので
たれも俺を知ってはいないだろう

白　い　陶器　と　日光　と　水　に
織り　な　す　幻　想

藤　田　勇

しろじろと

水の屍

曲りくねった

その垂直

の　爬虫類

ふるれば

ゆるる心

の　は紋

光り屈折

する壁に

ゆらぐ女

の　瞋恚のほむら

海と浜辺

永田 泰三

空は明るい天体の丸窓

そこには暑い日ざしのほぐれた束が映り

花卉のようなカーテンの端が見える

かもめが窓から飛込んできてまっている

海はその下で恋に狂った女のように髪をふり

乱し

あらわな胸をふくらませ 肉体をくねらせ

純白のバラの花束を投げかけては

しなやかな波の腕を伸ばして浜辺に抱きつく

あやしく悩ましい体臭を発散させ

なめらかな肌の感触をあたりにみたした海は

繰返すキツスで浜辺を濡らしているが

長々と横たわっている浜辺は身じろぎもしない

浜辺は林立した椰子の木を日傘にし

海の恨みごとの響く原始林の影を背にうけ

向こうにかすんでいる緑の岬迄足を伸ばして

いる

天体の窓のかなたをじっと見つめながら

だが誘惑の夜がきて
熟れてさけたザクロの実のような星座が丸窓
に映る頃

暗黒の地底からわきたってくる狂想曲の中で
浜辺は海と融合って海の愛撫にこたえるのだ

(六七・七・二五)

もの言わぬもの

小石 茂行

私は動物を愛す

その おどおどとした眼を見るとき
なつかしさを表情に示すとき

私の心は暖まり

涙ぐましくさえなる

時に反抗を示す時さえ

お前は

黙って居るから私は好きだ。

私は植物を こよなく愛す

培ったものゝ生育に希をかける

愛情を持って見る目に

どす黒いまでの艶を持つ葉のそれが答えてくれる
しかし

お汝の抵抗を悟らなかつたとき
愛情を裏切られて命失うときにどれ程
の叫びを上げたかつたことか
私は其を知るべくもなき エゴイスト

静けき木立の中

竹内 頼母

君 見たまえあの光景を

静けきあの木立の中を

風はそよとも吹かぬけれど

枝はよよともゆれぬけれど

枯れし一輪の葉は自然に落

ちてゆく

色とりどりの葉が舞い落ち

るさまは

すばらしく美しい

しかし君

この光景は

人の世の哀れさにも似て

なんとなくもの悲しく感じ

られるではないか

夜の悔恨

真木

衿子

あるかすかなる痛み

寝苦しき夜の悔恨

痛みと共に

波紋が広がるように

朝の眼覚めを重くする

おろかなる吾かと

夢にきく

何を求めてひそかな星に

ぬれて佇つ

裡なる女

あるかすかなる痛みよ

刻をきざむかのように

吾のおろかさを

痛みにかえてゆく

病める人

小野政子

病人は意外に明るいい顔をしてゐた。

不治の病いの末期の苦痛

やせて紙のように白い顔

傷ましさに言葉を失った私

それなのに………

これが最後かも知れない………

秘かに思つて 握つた

やせ細つた手のあたゝかさ

澄み切つた表情

これは？

信仰あつたこの女性の

来世への希望か

それとも？

感動に 私は くびをふりふり

街をあるいた

大陸の朝

黒田八重

身の ひきしまるような

早朝の 空気！

みどり濃き 森の 樹木は

朝露に濡れて 光り

うすもやに かすむ

遠い 山脈

微風は 爽やかに

広野を わたり

小鳥が 喜喜として

梢を 飛び交う時

山の かなたに

南国の 太陽がのぼる！

あゝ朝！ 大陸の朝だ

第四回

特集

私の終戦

執筆者

林 伊 勢

南 俊 夫

ブラジルに住む日本人が、祖国の敗戦をどう受け取ったか。私たちだけが知る特殊な心情なのだ。それは、書き残しておくにたりるものだと思う。本誌は、この特集を毎号続けている。会員は、どしどしその尊い体験記を投稿して頂きたい。後に一本にまとめて刊行したいと思う。

終戦

前後の思い出

林 伊 勢

数えてみればあれからもう二十年という歳月が過ぎ去っていたのである。

束の間に過ぎたようでもあり、また、遠い昔の、夢の中の出来事であったような気もする。

ともあれ、終戦といえばすぐ思い出す二つの事がある。一つは主人の病気であり、一つは、その主人から、後にも先にも、たっ

た一度撲られたことである。

その時、主人は胃潰瘍を患い、アベニーダ・パウリスタのサンタ・カタリナ病院に入院していた。手術は順調にすすんだけれども、衰弱がひどかったので、廿日ばかり入院していて、終戦の、そして、連合軍の勝利を祝う花火を聞いたのは、もう二、三日で退院出来るという日の夜だった。突然の花火に何事かと思ったら、看護婦やその他の人の話で、どうやら終戦と分った。

併し、まだ大本営発表を心から信じていた当時の私は、また、デマをやっているな、位に思っ、大して気にも止めずにした。

これより先、私達は、聖市のセントロの、主人の勤め先のすぐ近くに住んでいた。その頃の主人の勤め先であるH商会は、今のジョン・メンデスのボンデのホームのある所辺りにあり、私達の家は、そこから五分とかからないルア・タバチングラの教会の前にあつて、母国の戦争に心を奪われながらも、割合に平和な日々を送っていた。併し、そのうちに、ブラジルが参戦し、私達が敵性国家の人間になるに及ぶと、事態は一変し、だんだん圧迫が加わるようになって来た。邦字新聞は発行停止になり、商店街の日本文字は取払われ、日本語を話す者は容赦なく警察へ連行された。あの辺りは特に邦人が集団していたので、今日は誰それが連れて行かれた。昨夜はあそこに家宅捜査があつたなどと、毎日その噂で持ちきり、そして、それが、理由らしい理由もなく行なわれるのを見て、人々は戦々競々としていた。そして、中には、この国の事情にうとい邦人につけ入る悪い吏員もいて、そちこちで、

色々とう当な話も聞こえるのだった。

そのうちに、突如としてあの法令が出た。それは「諸官庁、及び、公共の建物のある周囲二キロ米以内には、敵性国家の人間は居住出来ない」というあれだった。

私達家の後は、堀一重へだてて、ボンベーロに接していた。それで、当然、その法令は私達の上にも適用されねばならなかった。五日という日を限られて立退きの命令が来た。

その頃も既に貸家は少なかった。主人は仕事を休んで毎日貸家探しにとび廻った。そして、ヴィラ・マリアナの日本病院の少しさきに、手頃の家を見つけて引移ったのは、丁度期限の切れる五日目だった。併し、廿年前のあの辺りは、乗物の便がなく、主人と子供達は、毎日、朝夕二キロの道をボンデまで歩かねばならず、その道は、牛が屯していたり、丈なす蒲が密生していて、見通しがきかないようなブレエジョがあったりして、とても、女や子供が一人では歩けない道だった。

終戦を私達はそこで迎えた。併し、デマは乱れとび、丁度、大正十二年の関東大震災の時を見るようだった。朝に敗戦の悲報を聞くかと思えば、夕には、尤もらしい勝利の模様が、真しやかに伝えられて来るのだった。

長男のSは、その頃、十か十一で、一年ばかり前から、シダーデの或柔道の道場へ通っていた。だが、その師範という人が、とても勝組であって、いつも威勢のいい話を聞いて来ては、私達

を苦笑させていたが、遂には、来る何日には、日本の軍艦が我々
在留民を慰問に、サントス港へ入港するから、これを迎えるため
に、一同は必ず袴を着けて来るように、そして、この時節に頭の
毛なぞ長くしては申訳がない、みんな坊主になって来るよ
うに、という達しなのだった。子供もいやがるし、余りにも非常
識な話なので、とうとう柔道を止めさせてしまった。

陛下の御詔勅のあったのは、その頃だったと思う。併し、我々
戦前の者には、陛下が直接マイクの前にお立ちになる、などとい
う事はとうてい考えられない事だったので、真偽の程を、その放
送を直接聞いたという俳人仲間のTさんの所へ聞きに行った。結
果、私は打ちのめされたようになって帰って来た。どこをどう
帰って来たか知らなかった。そして、家へ入ると声を上げて泣い
た。前途が真暗になったというのはあの事だろう。私はどうして
いいか分らなかった。戦いに負けた国の者が、敵国に在って暮す
これからの生涯、そして、子供達、考えれば考える程、私の目の
前は、真黒に塗られ塞がって行くのだった。

一体に私は、気性がはげしい上に、取越し苦勞する人間で、こ
の時も、それからそれへと、事態を悪い方にばかり解釈して、我
とわが身を悲しみのふちへ投げ入れていた。だが、主人は、私と
は正反対の、おだやかな性格であって、子供達に対しても、まだ、
声を荒らげた事もなく、もの事は善意に解する質で、私の方はい
つも、のれんに腕押し之感を味わわれているのだった。

この時もそうであって、主人は家にいたから、多分、日曜であっ

たか、まだ、病後の療養中であつたかなのであろう。

ソファに横になって何かを読んでいたが、私がいくら泣き悲しんでいても、ただいい加減に受け答えているだけで、一向に親身になつて相手になつてくれようとはせず、読みさしの本すら置こうともしないのだった。尤も、主人はその時既に、内心、事態を察知していて、主人なりに心構えはしていたのだった。だが、そんな事を知らない私には、そうした冷静な主人の態度がとても、あきたらなかつた。情なかつた。はては、そうした主人が、まるで、祖国の浮沈にも無関心な冷血漢であるかのようにさえ見えて来るのだった。

たまらなくなつた私は、むしゃぶりつくように、ありたけの罵詈雑言を投げつけて主人に立ち向つて行つた。

「あなたは日本が負けて嬉しいんでしょう。人非人よ、非国民よ、国賊だわ、あなたのような人を………」

私がまだ何か言おうとした時、

「なに！ もう一ぺん云つてみる……」

と云う声と一緒に、起上つた主人の手から、分厚い読みさしの本が、力一ぱい、私の頬にとんで来た。

私は予想外の事に「アツ」と云つて顔をおさえたまま、暫くは、ポカンとしていた。

併し、幕はこれで下りた。不思議に怒りも悲しみも消えて、さばさばとした気持になつた事を覚えている。

そのうちに、中立国の領事館を通じて、色々と、日本のニュー

スが廻されて来るようになった。何れも戦前には考えられないような事柄ばかり列記されていた。そして、最後の所に、一人でも多く認識して貰うために、一人でも多くの人に読んで貰いたい。と添え書きしてあった。

当時、私の家の近くにAさんと云う魚屋があった。江戸っ子で、私も東京の下町生れなので、話が合う所から、いつも、商売のあとで、暫く世間話をして行くのが常だったが、例の臣道連盟の騒ぎの起った頃から、Aさんの話の中に、少しずつ不穏な言葉が混るようになってきた。暴力沙汰のあった後など、さも、気味がいいと云うような言葉を吐き、時には、

「奥さん、見てて御覧なさい、今度は、こっちの方面の人がやられますよ」

なぞといっているので、まさか、とは思うけれども、気味が悪いので、その頃は、なるたけ時局の話はしないようにしている人であったのだけれども、このニュースの主旨に従って、私はそれをAさんの家へ持って行く事にした。

折悪くAさんは不在だったので、出て来た内儀に渡し、「信じると信じないとは、もとより、自由ですが」と云うと、内儀はそれを読んでいたが、やがて、もつての他、という態度で、私に向けて云った。

「奥さん！、奥さんだから我慢しときますが、他の人だったら、こんなもの、目の前で引っさぶいて見せますよ、日本が負けたなんて、それでどうやって子供を教育して行けますか。日本が負けた

時は、我々日本人は、ブラジルに火つけて腹切つて死ぬ時ですよ……」

私はもう一度、「信じると信じないとは、もとより、あなたの御自由です」

と云つて帰つて来た。

それから数日して表通りへ買物に出たら、或る商店の店先で、先日の内儀が、またも、今度は、伯人の婦人を捉えて、その話をしているのに出会つた。

相手が伯人なので、私は思わず足を止めたが、彼女のポルトゲーズでは、とても、相手に通じないらしいのを見て、安心して帰つて来た。

先年、日本へ行った時、この話をしたら、弟がとても面白がつて、それから、何処へ行つても、「君、あの話して御覧よ」と方々でさせられた事を覚えている。

日本は負けたけれども、未だに腹も切らないと見えて、先日或所で何年ぶりかで、彼の内儀に会つた。

私達も、その後、大した困難にも会わず、今日、明るい日々を送っている。

終戦

前後の断片

南 俊 夫

終戦の思い出も、すでに二昔前以上の物語りになってしまいました。したが、今色々と当時を回想してみても感慨無量と言う所です。

当時ソロカバナ線アヴァレー駅から六十五キロも奥へ入った棉作の植民地で日語教師をしていた、私は戦争が始まって間もなく――すでに戦争受難者の一人だったわけです。

と言うのは、土地の顔役（棉仲買人）が最寄りの町へ出て、口をスベラシタばかりに、日本語学校の存在が知られ――ある日の朝――視学官と兵隊二人が突如――乗り込んで来て、丁度――修身の時間でしたが――生徒一同の前で、お前達はこれから日本語学校へ来てはいけない――この学校も今日限り閉鎖すると宣言して、机の上に置いてあった修身の本を全部取りあげて持って行ってしまったのでした。

全くこんないやな暗い気持は――その惨さと共に――戦争というものの苛酷さをはじめて身をもって知らされたわけでした。

そうして――その時から終戦まで――棉作りに転向――コツコツとエンシャーダを引きながら――それこそ日本の人と同じように――勝つまでは何事も辛抱と――ただそれだけを念じて終戦の年を迎えたわけでした。

時折り山の中で聞かされる戦況では何とも物足りなく、町ね出

るトラックに乗せてもらって二週間に一度位の割合で日本からの短波放送を聴きに出掛けたものでした。

その頃の大本営発表は―来る日も来る日も―威勢のよい絶対優勢の戦況ばかりで、夢にも日本があんな惨めな結果に終わろうなどとは考えてもみませんでした。夜ニュースの終わった後―ペンソンのメーザを囲んで、日本軍の健闘振りに万才を叫びビールの満をひいたのも今では懐しく想い出すばかりです。

二月に入るとニュースの内容がグット変わって来て、我軍は戦略上南九州の一部を敵軍に渡すかも知れない―これを聴いた時の驚きは全く心臓の止まる思いでした。

この時すでに沖縄は日本の基地では無くなっていたわけで―敗戦色濃い日本がこの時から始まったわけです。私が終戦を迎えるに当って一番強く感じた事は、開戦から終戦に到るまで絶えず熱心に戦況を見守って来た人達は―深い悲しみと共に敗戦を認めざるを得ない心境に自然に入って行けたのに反して、普段はニュースも聴かず一向戦争の推移に対して関心を示さなかった人達が―一例をあげれば戦況ニュースを聴かせてあげても―すこぶる冷淡でフンフンと言った態度で熱心に聴こうとはしなかった。

このカテゴリーに入る人達と言えばごへいがあるかも知れませんが―このグループの人達が―八月十五日を境として、突如―正にこれは突如と言う形容がピッタリ当てハマル―豹変ぶりを示し、日本が敗けるなんて馬鹿な事があるもんかと言う信念に凝り固まった―いわゆる勝ち組運動の原動力となったような気がしてな

らないのです。敢えて彼等と言う言葉を使わしてもらいますならば―彼等の信念には―戦局の推移と言う重大な裏付けになる資料が皆無であった事が大きな原因の様に思われます。大変残念な同胞相争う事件が次から次へと拡大していった―もう一つの理由として―行き過ぎた認識運動があった事も忘れる事は出来ないでしょう―いわゆる敗戦の押し売り―得々として母国の敗戦を吹聴し歩いた軽ハズミな行動は―前者共々許す事の出来ない大きなミスだったのです。

さてここで特に述べて置きたい事は終戦後のブラジル人が我々に対して非常に友好的であった事です。いわば―もう戦争は終わったんだよ―いつまでもクヨクヨするなよ―と言わんばかりに暖かく見守ってくれた事が、どんなに大きな救いになった事か、忘れる事の出来ない重大なありがたい事でした。

―― 暗 転 ――

そんなこんなで何かしら奥地の生活が意味もなくイヤになり―サンパウロ目指してムダンサを始めたのが―九月の十七日と言う。天皇御詔勅の日からわずか一ヶ月目と言うスピード振りで、引越しのカミニヨンの荷物の上で、ミヅリー号艦上の大きな写真の出たブラジル新聞を拡げて見ていた、Kさんは声を張りあげて―この写真変だよ―勝った国のマツカーサー司令官がシャツ一枚で―おまけに丸腰だよ―それに引きかえ日本側の代表はみんな正装で―軍人は剣をつけてるぜ―ヒョットすると日本が勝ってるのかも

知れんぞーおいこの写真をよく見ろよーと興奮のため顔が赤く
なっている様だった。

ウン成程と受けた私はー急に悲しくなったー無条件降服ーの調
印式の写真が涙でボヤケて霞んだ中にー重光さんの緊張したー顔
と身体はー悲しみに耐え抜いている精一杯のゼスチアーに違いな
いーKさんは無神経にあんな解釈を平気でするがーとんでもない
事だー

代表の重光さんはもとより、武官の人々もー悲しみに耐えている
のだーどんなに辛い事か、

○ ○
一家を乗せたカミニオンは一路ー聖市を目指してガタンガタン
と走って行く。

さてこれからサンパウロへ行ってもどんな生活が待っているか
しら？ それにしても戦争に敗けた祖国は一体これからどうなる
んだろう？ この瞬間ー敗戦の悲しみが一度にこみ上げて来たー
この姿が本当の私の終戦時の姿だったに違いない。

(おわり)

○ ○ ○ ○

「感想」をどうぞ

◇コロニア文学会、会員六百名、(実は三分の一が会費未納)を越えてきました。◇会費の完納により、是非年間、四回発行したいものです。第七号は六月、第八号は九月、第九号十一月と発行すれば申し分ないのです。

◇投稿意欲は高まってきました。第七号の小説原稿、既に一六篇に達しています。だが、論文、随筆類が、チョいようです。御投稿を待ちます。◇本会、或は会誌に対する批判、感想など、どしどしお寄せください。誌上に発表して、みんなで考えていきたいと思えます。

特集

コロノ時代の思い出

ある殺人事件

佐藤閑人

私たちがブラジルに着いて、最初コロノとして珈琲耕地に入つたのは、一九三〇年六月二十八日の夜、所はモジアナ線ジュサーラ駅サンタ・ゼルツルデス耕地、サン・ペードロの前夜祭で、かがり火が夜空を赤く染めていた筈なのに、私にはその記憶がさっぱりない。

あるのは血生臭い殺人事件のことだけで、今でも恐々した人々の顔が思い出される。私たちはたった一晩ちがいでその現場を見ていないだけに、恐怖に対する実感がないので、さほど恐ろしいとは思わはかった。とにかく耕地に着いた瞬間から、耕地の中は夜となく、昼となくその話でもちきっていた。コロニアの前の珈琲樹の蔭からうかがっていたとか、分耕地のカンナ園の中にいるのを見たとか、ジュッサーラ駅へゆく途中の道で伯人が会ったとか、犯人藤原が逃亡の際ふりかえって、〃今に一家皆殺しにしてやるから〃と云ったことばが、又あの惨劇が起るのではないかと云った恐怖が人々を云いようのない不安におとし入れていた。この惨劇のおこりと云うのは、私たちより三ヶ月早くこの耕地に入っていた富山県の人で樺太あたりを渡り歩いたという、岩田という人の家族が、渡伯前目が悪いために乗船出来ず、家族が大阪で困っているとき、ふと知り合ったのがこの藤原という男で、いろいろ岩田一家のために親身の世話をして、以来物心両面でかなり深い関係にあつたらしく、いよいよ家族が渡伯するときには、岩田の長女を藤原の戸籍上の妻として家族を構成してきている。そうなるには着伯後正式に結婚式をあげるといふ默契があつたことは容易にうなずかれる。

それと云うのも着伯後藤原は同航の友人たちに、岩田が着伯後娘と結婚させると約束しておきながら、いつまで経つても、夫婦にさせないで寝台は別にして、親父が監視の目を外さない。今頃女もよそよそしく、洗濯もろくにしてくれない。など、よく愚痴を

こぼしていたということ、云うなれば岩田はうまく藤原を利用してブラジルへくるという目的を果したわけで、来てしまえばあまり頭もよくない藤原が邪魔にこそなれ、今更娘の婿になどはしたくないというところだったらしい。娘にしたところで、あまり好ましい男とも思っていないなかつただろうし親父の気持の反影もあつて、その頃すつかり冷たくなっていたようだ。こうしたところでに事件の起きた原因があつたということは否めない。事件の起きる少し前頃藤原はしげしげと同航の西本さんの家を訪れて、しきりに娘の冷たさと、親父の不義理をなじつて、今に娘を殺してやるんだ、などと口走つて西本さんになだめられて納得して帰るということが度々だった。その頃彼はフエイジョン一俵と古めかしいガルシャを一丁伯人と交換して、これで岩田親娘を殺るんだと云つて、よくの射ちなどやっていた。しかしまさかほんとうに娘を殺すなどとは誰も思わなかつた。藤原という男は頭は少し足りないが体格はがっちりしていて、年は三十を一つ一つ出していた。

力自慢で天びん棒でフエイジョンを二俵担いで毛唐共をびつくりさせたり、珈琲園でアルモツサの後などカリヤドールで黒奴など相手に相撲をとつて、見上げるような黒奴をコロリ、コロリ投げていた。多少柔道の心得もあつたらしい。事件当日も例によつて珈琲園から帰るなり西本さんの家へ行って、くどくどと父娘のことを愚痴つて、フエイジョンとトロツカしたガルツシャを出して、今度こそこれで殺してやるんだと云いながら、いじくつているのを見兼ねた西本さんが「オイ藤原お前そんな物騒なものをそ

こでいじくつちや危いじゃないか」と云いも終らぬうちに、そのガルツシヤが轟然と火を吹いて、傍らに立っていた息子の春夫君が悲鳴をあげて倒れた。アツという間の出来事に家人はうろたえて倒れている春夫君を抱き起すやら、大騒ぎだった。春夫君は銃声にびっくりしたただけで、弾は春夫君の耳をかすめて、後方のポルタを撃ち抜いていた。藤原は以外の出来事にその騒ぎの中を外へとび出して一目散に岩田の家へ向った。

藤原は西本さん息子の春夫君を撃つたと思ったに違いない。いくら過失にしても今人を撃つたということが彼を逆上させ、急に女を殺そうと決意したにちがいない。岩田の家へ急ぐ藤原は途中で人に会ってもわからないらしくなにかブツブツつぶやきながら急いでいた。それからものの三分もしないうちに、あの事件が起つたのだ。岩田の娘はそのとき、裏の台所の出口の階段のところへバシアを出して、バレ・カフエーで汚れた体を洗っていた。無論からだには一糸もまとってはいなかった。

藤原は表からまっすぐに入るなり裏へ抜けて、お湯を使っている娘を背後から抱きかかえて銃口を心臓と思われるところにあてて引金を引いた。弾は乳房の下側を貫通して、ザクロが開いたように赤く大きく穴があいて見るも無惨な姿だった。岩田の娘というのは色の白い丸ぽちな可愛い娘だった。無論致命傷で娘はその場で絶命した。藤原は娘を撃つとすぐ裏の階段をとび下り、下の小川の一本橋を渡りながら後を向いて「一家皆殺しにしてやるから」と一言残きて暗闇に消えていった。この藤原の残した言葉

が人々の恐怖をあおり”ほら、あそこに藤原が出た！”と云うようなことで、夜などはいい若い衆が、便所へゆくとすると二、四人でランプを提げて出かけるという騒ぎ、便所と云っても前の珈琲園でする野糞で、暗闇から藤原が出てきそうで、おちおち糞も出来ない始末だった。女たちに至っては、夜は、もう一步も外へ出られない。ギシンアンキにおののく人々の妄想が作り出す笑えない悲喜劇がくり返された。然しこうしたことも、月日が経つてゆくうちに、だんだん忘れられて行った。折からの未曾有の珈琲の暴落はコロノたちをドン底までみじめにして行った。珈琲手入賃千本百二十ミルレースでは丸米は食べられなかった。ピコンからカルル、ブレイジョンに自生する、里芋に似た芋も掘って食べた。マモンの木でも見つけようものなら、子供の拳ほどのものまでとりつくしてしまった。フェリダになった足を引きずって、アメーバでやせこけた一家がぞろぞろ歩いてゆく姿はこの世の者とは思えなかった。一農年が終わった頃は十八家族居った日本人も、三、四家族を残してみんな出耕して四散していった。ジャトバの石山、モーロアカバードの五年物の美しかった珈琲、あの山の頂上から見渡せる向うの平和でのどかな独逸人たちの植民地、ミカンやバナナがたわわに稔って畑には自然生えのカラシ菜が一面に生えていた伊太利人のシチオ、背丈以上に延びた草に悩まされたバシアの古珈琲園、オラリアの分耕地、サント・アントニオの耕地、と思えばなつかしい想い出切数々ではある。あれからやがて四十年になる。生死の境をさまよったあの耕地が今はなつかしく目を

閉じるとはつきりと見えてくる。さて私の語りたいのは前の殺人事件の後日談である。

小説よりも奇なりということがあるが、推理小説を地でゆくような、不思議なめぐり合せとも云える話である。サンパウロから七十キロ余、イビウーナのレプレーザ近くのK氏の耕地、私は近郊視察をかねて久々に氏を訪ねて行った。モジアナで同じように辛苦をなめた間柄であつてみれば、会えば話はつきない。次から次へと懐旧談に夜も更けた頃、ふとK氏は顔を緊張させて、君世の中はずいぶん狭いもんだよ。不思議なことがあつたんだ。と云いながら氏の語るところ、或る日のこと、隣り耕地の同じく日本人のところでもバタタ植をしていたとき、大勢のカマラーダたちが水を貰いにK氏のところへ入ってきた。次々と水をのんでゆくカマラーダの中に一人の日本人がまじっているのを見るときもなく見ていると、どうもその横顔に見覚えがあるような気がする。どこかで見たような顔だと思つているとき、電光のように「ああ、藤原だ」と直感的に思い出して、吾を忘れて近づいてゆき、なつかしさに思わず「おお藤原君じゃないか」と声をかけると、男は愕然として顔面蒼白になつて声を低めて、私は今高橋と名乗つていゝるんです。女房と子供が一人いるんです。お願いです、高橋と呼んで下さい。というその声は哀願するように弱々しく、心なしかふるえているようにも見えた。K氏はそのとき初めて彼が殺人を犯して行衛をくらましたことを思い出して、彼を慰めるように「なに心配するな、俺は決してそんなことは口外しないから……」

と云ったが、彼はそわそわして、そうそう、K氏の家を出て行った。夜になってK氏は、藤原と会って話がしてみたくなって、隣耕地の彼の家を訪ねて行ってみると、彼はもうそこにはいなかった。彼はK氏と会ってすぐ家に帰り急にパトロンから暇を取って、わずかな荷物をまとめて、女房と子供を追い立てるようにして、行先も告げずに出て行ったとのことだった。K氏は誰もいない彼の住んでいた家の前に立って、今日まで彼のたどってきた日々を思ってみた。名を変え、なおかつ人の目をおそれて、かくれ住んでいることを思い、妻と子を抱えて、今日はどこに安らげるねぐらを求めることやら、いや永遠に彼の心安まるねぐらを求めることは出来ないであろうことを思うと、なにか今日の出会いが大きな罪でも作ったように思われて、心は楽しまなかった。ともあれ、世の中は全く広いようで狭いものであり、あの十五年も昔、モジアナの奥の一耕地から夜陰にまぎれて逃亡した男が、この草深いイビウーナの奥で昔を知る人にめぐり合うとは、夢にも思わなかったことだろう。恐らく彼藤原は今でも二人の人を殺したと思つて、日夜何物かにおびやかされながら自らの犯した罪のおそろしさに、さいなまされつづけていることだろう。とすれば彼を受ける天の刑罰は法の刑罰よりもはるかに大きいということになる。私もK氏の話聞きながら胸をおしつけられるような、もの哀れを感じずにはいられなかった。

旧作再録・その5

創作

野（やせい） 生（29枚）

田畑 三郎

「野生」は二〇年前のリベイラ河畔の風景である。現在アマゾン河やサン・フランシスコ河を航行しているような、当時の河蒸汽も今はない。道路が開通し、距離が短縮され、人間がみなかしくくなって、むかしのおもかげはだいぶん変っているのが何かさみしい気がする。

自然の中に生きたいと願う私は、ブラジルの自然をこよなく愛している一人であると自負するものである。ブラジルの自然は、ぼおっとしていて、とらえどころがないと言われるが、椰子の葉がそよぎ、サビアが啼き、イッペやジャカラランダが咲き、しずかなみどりに覆われた大自然がそこにある。

そこには、また、生のままの人間がいる。一杯のピंगा飲むのに隣を誘って、小さなボテキンで一日の疲れを忘れる生活がある。

ブラジルの自然は、いたる所が美しい。中でもリベイラ河を中心とした南聖の地は私の育った地でもあるせいかととても好きだ。

こんな気持から、今でも、かつての自分の作品を愛している。作の出来不出来は別としても、私のいつわらない気持から、作られたものである。（三郎記）

夜明前の河港は、靄に眠っていた。とおい河岸に鶏が鳴いて、繋がれたカノアの触れ合う、ごとごとと鈍い音がときどきひびいてくる。河岸の所々に建てられた小屋が濃い靄の中にうづくまって、船付場の、低いがつしりとした倉庫の軒に、小さなランプがほんのりとひとつ明るい。幾艘も並んで泊っている河蒸汽の黒い煙突から、ときおりは、薄闇の中に、ぱつと火の粉が吐き出されてはすぐに消える。あたりは、河波に寄せられたごみの甘酸い匂が漂って、べつとりと、砂地が素足にねばりつく。かさつと、水に垂れた葦のような草の葉のすれる音。

邦三は重い足どりで、黙ったまま、雇人のジョゼーと、繋いであるカノアの方へ、ジョゼーの妹ベネジッタを迎えに出て行った。今日は遠い河上へ帰るので、レジストロ港を、おそくとも朝五時半には漕いで出ねばならなかったし、この舟便で暫く泊っていた叔母の家からベネジッタは帰ると言うのだった。

泥の中に深く梶を突き差し、葛の皮で作った細い縄で繋いであるカノアを解き、ことんことんと、ほの白い河面を、ベネジッタの泊っている向う河岸の家へ漕いで行った。

朝の五時になると、ジュキア行の河蒸汽の重い汽笛が、なまぬくい河面にひびき、菩のえたような大きな水車がばたばたと水をかきはじめ。それが杳かな河南に倦いひびきを残して消えると、次はイグアッペ行の船が出て行った。朝焼のない日の出前、湿っけを含んだ穹がすみきって、次第に蒼みを増してくる。もう河面には、うすれた靄が、這うように、小さな塊となって流れてくる。

向う河岸にひろがったバナナ畑の蒼みを帯びたみどり、その間に散在する小屋の、腐りかけたサツペ屋根、そこから上る薄い煙が爽やかな日光に透きとおって見える。

邦三は、昨夜のうちに求めた少しばかりの買物を舟に積み、ズボンをまくり上げて漕ぎ上るのだった。

邦三らの住んでいる所は、リオプレット川に添った山の中で、セツテバラスから二十軒以上もある峻しい山道は草に覆われていた。

僅かに残った人々が、米や繭をカノアで売りに行く。

曲りくねった平和な河面を、一日がかりで下ってリベイラの平野に深い呼吸をするのは年に三度ぐらいで、大方は、谷合の沈んだ空気の中に一年を過ごしてしまう。

十月の眩い日光が、漕ぎ上るリベイラの平野に満ちみちていた。南聖の無風地帯の、湿気にふくらんだ暑さが、日が上るとともにじりじりと強度を増してくる。邦三はシャツの釦を外し、胸を広げて、大きな桿を突こんでは力いぱいに押す。ベネジッタが真中に坐っていて、時々はじいっと邦三を見ている。まだ年は十四というのに、はち切れるような褐色の肌と盛り上った乳房のカボク口娘を、邦三はそ知らぬふうにしては愉み見ていた。

赫土の懸岸が視野の限りつついて、ジユキア河の河口に近いあたり、広いゴヤバ林がつづき、それを過ぎると、杳かに広がった牧場、向う河岸には、色とりどりに、動くともなく牛が群れて、所々に立っている白壁の家が眩しい日光の中に音もなく生きてい

る。河岸のやや高い所には、丸太を立て並べたカボクロの小屋があつて、二三株の丈の高いバナナ、その前にいっぱいになったレモンが、美しく熟していた。

平野の涯に、パラナピアカバ山脈の高峰が蒼く浮き出て、杳かな平野に光の波動が、虹のように、土人の伝説への、ほの紅い幻影を今もなお描いている。

蒼いパラナピアカバ山脈の中の二つの高峰、眩い金塊がその山の精だった。それが年に一度、北から南に移り、また翌年には南から北に帰る。宵の明星の沈む頃、年に一度は大地をゆるがす轟音がして、山の精の移り代つて行く日や、澄んだ元日の日の出時、遙かな頂上を跳躍する金色の馬、その山の麓から流れ出るエタ河の注ぐ所、セツテバラスのある山の頂に、みどり深い一本のセード口の樹の下、グアラニー土人の埋めた壺にいっぱい黄金。

バイタカの、みどりと紅の羽根で飾った冠りを、ペリーの表皮を編んで紫色に染めた腰みをしたグワラニー土人、黒光りするバラジューバの弓、透きとおったトツクンの絃、赤く磨き白い羽根のついたグワラピシーカの細い矢が、しめり深い青空にひらめき、高く渡り行く、胸の赤い大きな嘴のトカーノを射落す。白い日が音もなく上り音もなく沈み、永遠から永遠に、ありとも知れぬ夢に生きている土人の息吹―白い雲、青い山、どの草の葉、どの木の梢もちらりとも動かず、燦々と注ぐ日光の中にかすかな呼吸をしていた。河岸の崖がなくなり河が大きく湾曲した所、砂原にはマンジューバを漁る網が乾してあつて蒸せるような匂いが

漂っている。

ジュキア河の河口は、どす黒く水が澱んでいた。

春、夏、季節の移りもただかすかなけはいでそれと知られる。黄色いイツペが、あたりの沼地の深いみどりの中にところどころ咲き出し、それがいつとなく、一つ散り、二つちりして、枝がみどりに覆れる頃は、水のような蒼穹に、夏がいっぱいになっている。イツペの花も散りつくしたジュキア河沿岸の森が、どんよりと水に映って、流れに倒れ込んだ巨木に、大きな牛の死体がかかって、ぶくぶくとふくらんでいた。

イピランガ川に入る頃は、もう日が傾いていた。

一面にペリーの生い繁った沼地がひろがって、林立したペリーの中に午後の日光が射しこみ、滑らかなみどりの茎が透きとおって見えるあたりでサラクーラがしきりに啼く。邦三は疲れていた。

「ジッタ……漕いでくれ！　もう疲れた！」

ベネジッタは重い梶をかるがると扱う。ぽんと前方に突込み、小さな体をひねってぐいぐいと押し出す。軽いはずみのある足と腕に汗がにじんで、あめ色に見える。午後の、手を出せば把めるような濃い森の空気、それがきめのやわらかなベネジッタの肌に溶けて、処女の体臭とせわしい呼吸の音。

小さな流の曲折が多くなって、小高い森が川に沿ってつづく。椰子で作ったカボクロらの家の、豚の囲いのように棒切れを並べた壁、庭先の屋根にはふるびたエステーラにマンジョカの粉がひろげてあって、腹ばかりふくれた裸のムラートの子供らが、大き

なピットをくわえて見下している。

起伏の多い森々の間を流れるイピランガ川の上流は、ところどころに小さなせせらぎを立てて、なごやかな諧調が、澄んだ空気をふるわせていた。夕の、紅みがかった空が森の枝越に洩れて、ことんことんと舟にあたる棹の音が、ひろびろとした沼地の彼方から、うす青く漂った煙の中に聞こえ、高く、森を超えて行く山鳩が二つ、遠くにぬき出た椰子の梢に消えていった。「ホーイ」……すきとおった声が森から森に伝い、それが消えると向うからも同じ合図が、森の深い呼吸のようにながいがいながい余韻をひいて返ってくる。苔の生い繁った巨木の枝が頭上に被ぶさった場所をすぎるとき、奥の遠くにホーホーとマクコが鳴いていた。

日は暮れて、邦三らが着いた頃は、小さなカンテラを前にして、赫ら顔のベネジッタの親父がマンジョカ粉をつくる臼に腰かけ、絃のゆるんだヴィオラを鳴らしていた。ベネジッタはしわくちやの母と頬ずりしている。父親はひげだらけの顔で、人なつこい眼をひからせて、

「さあ、ジャンタだ。今日はタツーの大きなのが焼いてあるし、ながく喰わなかったトシンニョとフエイジョンがある。」

「うん、けど、晩くなるし」

するとベネジッタが着物を引っぱりながら、じつと眼をすえて、
「ジャンタしたっていいじゃないか、暗けりや泊っていけばいいだろう」

と、すばやく皿を洗い、外へ出ると、暗い崖を川岸へ身をひるが

えして下りて行った。

壁には、黒いブドツケの弓と銃口の二つ並んだ猟銃、赫い毛並のままの鹿の皮で作った火薬を入れる袋、肩から胸にかけても余るような大きな角笛等が、すすけた小屋の中にかけてあつてほの暗いカンテラに照らし出されている。

山の匂いのするタツの肉と、かるくこがしたマンジョカ粉を皆が頬ばった。

夕食後、邦三は重い袋を担いで、森の狭い山道を上って行った。背中は汗にぬれて肌にべっとりとしやつがねばりつく。沼地に敷きこんだ丸木を渡る。

暗い。眉毛を唾でぬらしては見る。突然ぎやぎやとジャクーが鳴いて、枝から枝に移っていった。

邦三の家では両親や弟が灯をともしたまま帰りを待っていた。

山と山との間、傾面のなだらかな所に桑畠が少しあつて、前の方は米を蒔きつけた焼跡がくつきりと見える。養蚕小屋の屋根が半分見えかくれして、畠のすみに伐り残されたフイゲイラの大樹が正午の日に涼しい蔭をおとしている。近くの再生林が眠たげに静まりかえり、ペリキットの群が、青みどりの羽根を日にひからして空を渡ると、裏の森にスルクワがものやさしい声で啼き出す。谷合いの中に、邦三らの家が静かに二つ、白色の鶏が二三羽動いている。

もう母親が昼食の仕度をしているので、蒼空に煙が立ってぼんや

りと消えていく。

邦三ら父子三人は除草に余念がなかった。米の蒔付、桑の剪定から除草、蚕具の手入れと小さな仕事を毎日くり返す。それも茶の景気よかった頃や入植当時の隣の近かった頃は、皆大きな仕事をしていただた。皆茶摘に忙しかった。大きな帽子を被って手伝に行った、それも皆出て行ってしまい、残った僅かの人々が一軒も二軒も距って住んでいるだけだった。――一所に茶を摘んだ波子は、近くの道路工事の土方と逃げたし、初江は黒人の雇人にいたずらされ、それからその男を慕うようになっていた。

大きな窓が開けられてある。汗のにじんだ裸が時々寝返りを打つ。外は、きらきらとした日光が、前の沼地のみどりにむせ返えり、山の中腹に赫土の崖がつづいて小道が見える。通る人もない。鶏が口をあけたまま軒下にしゃがんでいる。見晴しのきかない森と森の間の空をバイタカがときどき渡る。それでも夕方になると、やや涼しさが戻って、小高い桑畠に働いていると、遠い隣家の、鶏を呼ぶ声や、薪を割る音が、谷々に漂ったうすら蒼い靄を通して聞えてくる。

天気の良い日は珍しかった。十月に入ると南聖特有の霖雨が濃い霧のように寄せてくる。前の小川がどす黒く溢れて、水が逆流するようになり、沼地の平地は一面水に浸ってしまう。森のしずくの音が夜も昼も、ぼさぼさと小やみなく、それが十日も二十日もつづく、どここの家でもことんことんと、米を搗く音が、うすく煙った小雨の中に聞えてくるようになる。

漸く雨が小止みになると、邦三はサツコを着て米を蒔きに出るのだった。森の間から、温泉のように山霧が立ち上り、それが消えると見るまに、また遠くから真白な雨が寄せる。ぼとぼと雨だれの音に暮れて、それがやわらかい夜の眼を誘い、幾日もそんな日がつづいた。

時々、雨の日に、邦三はぼろサツコを着て近くの森にシツポ葛を採りに出て行くのだった。暗い原始林の中に、ばさばさとしずくが騒しい。苔の生えた鬼蘭の葉に溜った水がごみと一緒にざあつと流れ落ちる。高い梢から真直に垂れたシツポ葛を、手元で輪に作って捻ると、つけ根から長いまま頭上に落ちかかるのを、ひらりと身をかかわして手早く輪に作って肩にかける。奥に入ると、猿の群が人の近づいたのを知って、枝から枝に移る音が無気味に聞える。

邦三は、竹を細く割って、葛でコーボを作るのに余念なかった。それを川へつけ、一夜たつと、産卵期のトライラや、カラーがいったいに獲れるのが楽しみだった。

雨にぬれたため、邦三は、一週間もつづいたマレッタの微熱に倦い体を壁にもたせて、ぼんやり戸外を眺めていた。土間の焚火がぱちぱちと燃えている。

戸外は、さあーと白い小雨がバナナの葉に吹きつける。マモンの熟したのに小鳥が集っていて、真紅の小鳥が葉から枝に移り代る。碧いやや大きな小鳥が、羽搏いて他の小鳥を追いちらす。裏のゴミ捨場にサビアがおそろおそろ餌を拾いに来ている。森の向うに

すんだ口笛が聞こえて、光男が白い馬に乗って来るのが見えかくれする。どこと馬の足音が静かな邦三の家に、人懐しくきこえてくる。サツコを背中に着て、すそからは雫が垂れている。よごれた脛をむき出し、のしのしと家の裏へ馬を繋ぎに行った。草屋根から上る煙がゆるく青く、小雨の中に溶けて、鶏が畠の方で二声三声鳴く。

「……………だけど、高田の文子、毛唐とナモラしてるって、——ほんとか」

「ああ、あいつ、こないだ逃げたんだ、それで兄キが迎えに言って連れてくると、親父が縁の下へもぐり込んだんだそうだよ。”無理に連れて来たから毛唐が怒って殺すかも知れん”てナア、あのバカ親父奴が」

「で毛唐はどうした？」

「そのままよ！」

「ふん……………文子のちきしよう、こないだのバイレの晩、エヨが、踊るに毛唐とエヨウとどっちがいいかって聞いたら”毛唐は踊るとき胸をきつくしめてくれるからいい”ちうんだ、ちきしよう」

邦三はぶつぶつと云いつづけた。

「初江だって、あの水車小屋でジョンにやられたんだろう。それであんなでっかい乳をしてるんだよ。あのでぶでぶのしりを見てみる。」

「それでこないだ、ジッタと帰ったのか？」

「うん」

「あいつ、綺麗になったナア、オッセを好なんだろう。」

「さあ、どうだか知らん！」

「こないだ学校の先生に会ったら、オッセのことを聞くから、知らん！　て言うと、又バイレしないかちうから、邦三に話すって来たんだが、どうだ？」

「やってもいいナア、ジツタにも話すことがあるし。」

「場所は先生が学校をかすし、オッセにエヨに、平山に梶田と五ミルずつ出すと……石油もカフェもフアリンニヤも買えると、……こんどの土曜日でいいなア、オッセの方からやつらに通知しろよ。で、あいつらに薪や何か、揃えさせてエヨらが後から行く。」

灰色の空が一日一日と薄くなって、やんわりと日光が、じつとりした崖の土に吸いこまれて、濃い陽炎が桑畠にもえる。ぐうぐうと鳴く蛙が、沼地の蒲の中や、油のような溜水の中におもい体を移す。濃い空気が湯気のように肌になべりつき、明るい日光が森いっぱいになると、カネーラの、黄色い小さな花が一度に咲き出し、強い香水のような匂いが、真昼の軒辺一ぱいに漂う。群れた蜜蜂の羽音が、ねむく、何所かに聞える。庭には、マンジヨカを薄く切って日に乾してあり、甘酸っぱい匂いをただよわせている。邦三はまた少しの掘り残しの芋を取りに山に登っていく。再生林の中の小道が雨にゆるんで素足にふくふくとやわらかい。やや高所から見ると重り合った山波の彼方にパラナピアカバの山脈

が北東から南西に縦って、夏の日がみどりの原野に沈んでいた。ぐつしよりと汗に濡れた肩にマンジョカを担いでは下る。それがすむと、除草に、少しばかりの茶の樹の手入れ、邦三は今夜のバイレのため、疲れた体を引きずって仕事をすまそうと懸命に働くのだった。

夕方になると、光男の家に遊びに行くといつて家を出た。

「あんまり遅そうならんようにナア……」

母親が戸口に立って見送っていた。

夜の森が四方にくつきりと、低い輪郭をあらわしていて、なだらかな山の傾面に、少しばかりの畠と牧場があり、古い家が二三軒ぼつりと灯をともしている。その中のやや大きな建物が学校になっていて、早くから集った者が外に焚火をして、ぱちぱちと上る焔に、昂奮したカボクロらの顔が黒く照らし出されている。室には、すすけた大きなランプが三つ、高く吊り下げられ、ヴィオラやカヴァキンニョを植えた者が音階を合わしている。光男もその妹も、文子も、初江も来ていた。ベネジッタが外から、窓に一寸顔を出し、にこつと笑うと、ひらりと外の暗がりに消えていった。

所々、白壁が剥れて、埃のにおいのする室は人いきれがして、ヴィオラやカヴァキンニョでサンバがかき鳴らされ、がかあんとした中に汗がにじんでいた。

赤いレンソの大きなのを首に巻いたムラート広い革帯に銀の鉾

をちりばめて、フアーカをさげ、シャツ一枚になっているモレーノ、真白い服を着た黒人。

胸ばかり張って足の細い娘や、頬紅を染めた半黒女の体臭、うめくように耳元にするせわしい呼吸、汗ばんだ薄着の胸に、べったりと重い乳房がおしつかつてくる。

フランシスカは学校の先生だった。栗色の髪を美しく巻いて、茶色の瞳をした背の高い女だった。何時頃からか邦三に親しくよつてきて、他の男と踊るときも、男の肩越しに、邦三にはげしい視線を送っていた。

音楽がひとやすみすると、皆が思い思いの場所に立って話していた。邦三はベネジッタからはなれなかった。休憩の時間も次に踊るように彼女の側にいた。ふと、ベネジッタが、二三人の娘や男と連れだって暗い戸口へ出ていった。すばやくその後を迫った邦三が、暗い階段の上に立って、

「ジッタ！ ジッタ！」

と狂うように叫ぶと、その後にフランシスカが一人で立っていて、

「どうしたの？」

「うん？ ……………」

「オッセあれが好き？」

「……………」

「シガーロをとりて家まで一緒に行こうよ？」

「いやだよ、わらわれるじゃねえか！」

「誰も見てやしないよ」

二人は連れ立って外に出て行った。

森の彼方がほの明るく、もう晚い月が登りかけていた。だらだら小道を登っていくと、静かな夜の遠くで、すきとおった、鹿の鳴く声がきこえ、白い月が森の木立の中にちらちらと見えだすと、やがて、明るい海底のような夜の静寂がかすかに息吹をはじめ。なまぬくい月光の沈澱した中に、吐く息だけがせわしく、二人は無言のまま、家の戸口まで来ていた。戸を開けてマッチをすり、小さなランプに火をともし、フランシスカは、乱れた髪をなで上げてにこっと笑った。

ほっと息をすると、戸をぱたんとしめ、向き直ったとたん、激しい吐息とともにささやくように、

「アイ！ コーモ・ゴースト・デ・ヴオツセー」

押しかかられた邦三の顔いっぱい、熱くぬれたキツスが覆いかぶさって、息するひまもなく二人は寝台の上に倒れた。

狭しい山の再生林の中の、小さな登道を、ときおりは真紅な小鳥が横切る。頭上にはあぶがうるさく、じっとり汗ばんだ襟首に二三匹が血を吸ってふくらんでいる。はあはあと激しい息をしながら、遠くの畠に蔵って置いた米を、邦三父子が一俵々運びだしている。邦三の父は、草鞋がけで背負子で中腰になり、日焼した皺だらけのくびすじに汗を流している。邦三は跣足のままで、肩に担いでは運ぶ。近くの、枯れたままになっているミーリヨを荒すぺリキツトがやかましい。かすかな人のけはいに、大きな山

鳩が飛び立って、繁ったファイゲータのかげに姿をかくした。森の中程に生えた赤肌のパオムラーラの火のような幹が、繁った枝と枝との間に、傾きかかった日光にひかって見える。

疲れた体を引きずって帰った夕方、光男が黒い顔をしてひよっこりと現れ、鶏小屋の戸を閉めて来た邦三に、

「どうした、こないだ？」

「うん……………フランシスカになア」

邦三は苦しそうに言うと、

「何、やれやれ構うもんか……………」

「おい、所で、ジツタがエヨに仕事させろって言うんだ、エヨの家では仕事はないし、下女でもなんでもいいからオッセの家で使ってやらんか？」

「ほうー、ちょうどいい、エヨも誰かを探してた所だ。ママイは弱いし忙しいしするから。」

忙しい中に幾月かすぐに経っていく。夏も春もない森に、紅紫のニアカチロンの花が見えだし、エンバウーバの実にたかる小鳥で、あたりの再生林が賑かになると、もう五月にも近かった。米の除草から刈入れ秋蚕の繭むしり、そして邦三は、三度目の繭を積んで、平山と一緒にレジストロに下って行く。

ようやくに出たりベイラ河は小波が立って、夕日の影がちらちらと流れていた。汗を流したような河蒸汽が白塗のマストを日にひからせて彼らを追い越していった。だぶんだぶんと大きな余波が岸にあたり、波頭が日に映えて、リベイラの平野になごやかな憩

の夕がきていた。

夜は、港のほの暗い所にかくれて、平山と邦三が、新しいコンチネンタルをそつと喫いながら、平山が声をおとして、

「オイ、光男の所のジツタは腹がでかいって言うぞ。」

「本当か？」

邦三はぎくりとして唾を呑んだ。

「光男の野郎、やったんだそうだ。何でもジツタが体の具合が悪
いって、クランデーロに見せたら、三月目だそうだサア、親や兄
弟が騒ぎだした。カーザするか金を出さかって光男の所へ押しか
けた。」

それでとうとう警察までいったら、カーザしなけりやカデイ
アって言うんだ。何だかカーザすることに決めをらしいぞ！ い
ずれカーザするんだなア、バカが」
邦三は顔をゆがめていた。

珍しく天気がつづいて、蝉が再生林の中で鳴き、蒲の穂が出
揃って、沼地近くのイビリスの木綿がぼつくりと開いて、秋が
かった大気を一寸覗く。ベンテヴィが黄色い胸を張って尾を逆に
立てて啼きしきる上を、野鴨が高く渡っていった。日が沈みか
かって赤く森が染っている。邦三は疲れた足どりで小川のコーボ
を見に行くと、光男が急いで来て、

「あのおナア……、エヨはジツタとカーザしなきあならなくなっ
てなア」

「ほう……………」

「で明日の晩、そっと、形ばかりの式をするって親父が言うから来てくれや……………けど……………そんなことになったんから仕方がないもなア……………」

前はやや大きな平地が広がって、その中を、一寸した川が流れる。後に峻しい山を背負って、サツペで葺いた屋根が二つ三つ並んでいる。夕日のいっばいにあたった庭には、少しばかりの縄たばこが乾してあった。黒い汁が垂れて、強い匂いが鼻をつく。土手の下にバナナの大きな葉が夕映の中に静まりかえって鶏がその間に、かさかさと餌を掻いている。近くにカフェの樹が一本あり、濃いみどりの葉の間々に、つぶらな実が真赤に熟れていた。

邦三はゆっくりと土手を下りて行った。もうベネジツタの親族やカボグロらが集っていて、片方のズボンをまくり上げたもの、大きな帽子を被って、胸毛をむき出した年寄り、仕事帰りのついでにフオイセを担いたままの者などがわやわやと話していた。光男が遠くから小さなカノアで上ってきた。ズボンがずぶ濡れになって、右手の籠には、今夜の宴に使う魚がぱちぱちとはねていた。

遠い隣の日本人が一人二人と来る。籠を下げた光男から視線をそらしながら、黙ったまま頭を下げている。

日が暮れて、壁の破れた室に、ランプが二つ鈍い光を放っている。椰子を割って作った棚に、すすけた神棚や、ぼろ雑誌が二三冊重ねてあり、何年か前からのカレンダーが、よごれたままに掛

けられて、隅の方には、大きな鉄砲が立てかけられ、鹿の皮の巻いたのが横たえてある。しつとりとした気配がいっぱいになって、荒削りのメーザには、小さなカネカが幾つも並び、魚の天ぷらや茄子の煮物が二皿三皿、その前に雛くちやの服に体をかたくした日本人が四五人黙りこくったまま坐っていた。カボクロらが帽子を被ったまま、窓から重り合って覗いている。

水鳥の啼く声が遠くに聞え、うす暗いランプが、ときどきぽつぽつと音を立てる。

光男の父親は六十を越えていた。やせほほけた頬に荒々しいひげの剃りあとがよけいにやつれて見える。静に立上ると、ふるえる声で、

「みなさん………儂は、何んと皆さんに申上げてよいやらわからんのです。今更言うのも愚痴ですが、こんなことになるうとは………夢にも思わなかったのであります………」

うつむいたまま、漸く黙して居た。

「光男は、日本で、小さい時、何不自由なく育ったのです。儂は、この一粒子に嫁をもらって、孫の顔を見るのが楽しみで暮らして居ったのです。」

それがこんな女と縁のつながりになりましたのも何かの因縁でしょう。―諦めてはおりますが………お笑い下さい。もう、何んとも皆さんに合わず顔ありません。」

落ちくぼんだ目には涙がいっぱいになって頬をつたう。誰も顔を上げるものはいなかった。

「しかし、これは皆、僕の責任です。光男が悪いんではありませ
ん。親として、監督が不行届だった僕の罪です。――可愛いわつ
かりに、子供がどんなことをしているか見られなかった僕がバカ
だったのです。光男は何も知らない……どうぞこれからもよろし
く御願ひします。」

泣き乍らようやく言いおわると、ああと大息して、

「どうぞ皆さん、光男の前途を祝ってやって下さい。夜の明ける
迄唱い踊って下さい」

大きなガラフオンのピンガが少しずつ注がれる。

小さなカネカを各々口へ運ぶ、話す人としてなかった。

ベネジッタは知らぬうちにその場を出て居らず、

光男がうなだれたまま動かなかった。すると光男の父が、

「光男！ 飲めなア、……心配することはない、何も心配せずに
飲めなア………」

いたわるように言い聞かせていた。台所の方では近隣のおかみさ
んらが二三人ひそひそと立話しをしていた。

「マア―その前の小屋でねエー」

と驚いたように答えると、光男の母が、

「それで、女の方から媚をかけたらしいんでね、……知ってるよう
に、光男は内気だし、とうとう女の媚に負けたんですよ！」

雨が近くなると、森々が蒼みどりにすんで山の間には遠く見える
パラナピアカバが手にとるようにせまる。紅く空が焼ける頃、ど
こからともなく、地ひびきのような山鳴りがする。パラナピアカ

バの麓に大滝があつて、雨前には暴れるのだと言ひ伝えられる。そしてどんよりした日がつづいて、死のような静けさが森を覆つて、巨木の枝に覆れた小道の崖に、濃紫のニアカチロンがべつとりとした重い花びらを開らく。いつのまにか糸のような雨がしとくと腐りかけたサツペ屋根をぬらし初める。それがまた十日も二十日も、音もなく森々を包むのだった。桑畠の除草をすまして、暗くなつて帰つた邦三が、ほの暗いランプの下で夕食をしながら、「父さん、サンパウロ郊外へでもエンボラしたらどうやろ、こんなところに居てもちつとも面白いことはないし」

思い沈んでぼつぼつと話し出す。沼地の暗闇に、水鳥が無気味に啼いていた。

(完)

◆小説「野生（田畑三郎作）」は、一九四九年「よみもの文学賞」第三選に入選、一九五〇年二月発行の「よみもの」に掲載された。それを再録したものである。

『コロニア新刊紹介（4）』

「老移民の記録」

山藤伝著

本書は、ブラジル生活五〇年、多岐多難な拓人としての人生を歩んで来た筆者が、その体験を書き記したものである。

体裁は、菊版、謄写印刷、本文、一五〇ページ、一〇〇部限定

出版である。体裁から言えば、すこぶる素朴なもので、著者のつましい気持を表わしている。しかし、内容は多彩であって、充分読むに耐える。

ブラジルへの船出から、筆を起こし、安住の地を求めて、ブラジル各地方を巡歴し、最後にサンパウロ市に定住するまでの、著者の体験が書き綴られている。

こうした伝記にあり勝ちな、誇張や、独断がなく、淡々と、真実が語られているところに読者は好感を持つであろう。

本書には、著者の略歴が、添えてないが、本書の内容それ自体、経歴といってよい。だが末尾に、出身地、生年月日、学歴など、年譜くらいは載せておく方がよかった。

何げない口調で語られているが、ブラジル移民として、独特な、そして、貴重な体験がいくつも挿話として、さしはさまれており、興味深く読むことができる。コロニアも六〇年の移住史を持っている。近年、初期移住者の死亡は、急速にその数を増している。彼らの多くは、その稀有の体験を語り残すことなく、この世を去っていく。これは真に惜しいことである。

本書のように、体験者自身が筆を執るか、あるいは、その近親者が口述筆記の形で書き残すか、いずれかの方法で、できるだけ、記録として残すことがのぞましい。

これは、コロニアの貴重な精神的遺産ともいうべきもので、将来、ブラジルの日本人移民史を書く時の資料として、重要な役割りを担うものとなるであろう。 (紫)』

短歌

短歌

流浪の眼 (30首)

小笠原富枝

遠き夢に陽炎たちつつ吹き出する想いあり今日生れたりき娘は
逆光の冷えゆく玻璃に向う如蒼み来るなり孤りのめぐり
あくがれの流浪の眼に翳りつつ落葉は今し虚空なるもの
若者の心の中をゆくような危うさにガラス並び居るなり
入りたれば歩むほかなく踏みゆくを後ろに草の立ち直る音
黒き傘の中なれば汚点(しみ)の垂るる如歩める吾が雨より見え
ず

息つめて吾のミイラに向い居る寥しさに透けり蟬のうつろは
石像の翳るのみなる風過ぎき風より淡き吾のもの言い
身を透きてゆくものとして聴きており感情の音生活の音
あおむけば全貌となる空はあれより処なし人の象なせれば
ゆくりなき仏心とせむ吹き寄れる微風にそこのみ砂の膨らみ
片照らす中歩みつつ不意に吾が耳たば奇形になりゆく思い
若者汝が蹠紅く眠りおればはろばろと心幼き目をゆく
風に翳りシャツ膨らめば複雑な表情となる汝が後姿は
蠟燭の炎に似たる言葉とも暗き地面へ視線うつして

薄き影吾に重なりゆきたれど想わず霧の中なるひとり
風致地区へさきがけて翔く鳥の群聴きおり今の心のなごみに
冬草の粗き緑をぬけ来たる吾が呼吸ようやく人に交わる
吾が声に追われゆく犬隔たれば全貌となりて見ゆる尾の張り
夏の陽の入りしやすらい夕風の綴れる花の道を行きつつ
雨中の吾が遠景に浮び来る街ありしばし人住まぬ街
生活の底より生るるもの如小手毯の花は霧を透きつつ
何時よりか歩調合わずなりしこと射光強き舗道過ぎむとし
巴旦杏の残り実落ちたり其の幹と吾とのあい鈍き音曳き
ひとときの感情をぬけてゆきし如土より生るる風の濁りは
陽の中のマンホールの空洞過ぎしよりそらしようなき思惑に落ち
る

漠然と沼に写れる貌の如思えりひとりひとりのえにし
夏の彩染み来るような眩しさに醒むれば深く朝の流れの
一握となる小鳥なれひびき来る体温に心眩しみ居たり何の亀裂心
掠めしかふりむけばただ扁平に陽の照らす道

雪の下

佐藤 博 三

なまぐさき豚の蹄を鍋に煮る煮たぎるときによぎる欲情
パルミットあおき匂いがつつみゆく煙のなかに天き死がある
店先にアルカシヨフラの青あおと甦みがえりそのにがき革命
メレンゲの雪下に紅き苺選る君の眼がわれの死を奪いくる

重圧を脱れて月に噴射するロケットに昏らき夜があるばかり

通夜明け

小竹清子

友の通夜明けて帰りぬ底青く水噴き上げぬ噴泉の傍
師の墓に侍して無量の憶いあり吾が失いしものの多きに
護謨の広葉に小雨のかかる音さむし心まずしく吾がある時に
吾が干支に因みて子等におくらるる造眼赤き竜の落し子
愚かなる心あやつり生きてきて務めて老を養わんとす

夜の部屋

藤田美砂子

さかり住む君匂い顔つ闇ふかくひそかに青き螢放たむ

強いらるるそこより拒否を育てゆくバラの紅を見るともなしに

気負いなき一日見送る夜の部屋造花のバラの色彩冴えながら

逃れようなき哀しみを軋ませつわが掌が白きテープ編みあぐ

貪婪にうすき日曆剥ぎ奪りて街は歳末の息づき荒らし

机の翳り

川原比露思

贖罪のごとくに夜半のペン置きてこころ不思議に保つ明るさ
わがあゆむ道どこまでもつづきいて還ることなきひとつの起点
惰情なる心いましめいる視野に啓示のごときながき夕映え
昼よりもあざやかに見ゆる夜の樹々とわれとの距離に鳴りしずむ
風
触覚のごときもの言いとおもいつつ刻ながく在りし机の翳り

白き炎

南條由喜夫

山崩れの跡荒々し白亜紀のなごりの岩が赭くかさなる
さながらに白き炎の雨のふり祈心も湧かず街路に冷える
新緑の梢吹きくだる甘き風ゆれいる翳り量感をもつ
冬ぬくくま昼の陽光滴たりてほしいまま滲む湖に渚に
冬ぬくく甘き残照反すビル恍惚として吾のときめき

夜汽車

陣内しのぶ

縫る顔無きことせめて救いとし夜汽車は緩くわれをおき去る

影だけを残して去れり疾風のごとも夜汽車のわれを攫いて

すれちがう夜汽車おもてを剥ぎたれば見せしことなきおのれの笑
い

髪うすくなりたるわれと気づくときあたり茫々と猛りくる夏

川柳

川柳

”ものの命”

(50句)

藤田 蚊奇智

太陽の鼓動へ命の皆動き

道つきたところから広がる青い海

解放へ鎖とかれる日の墓穴

春風に光り猥談の眼は哀し

サングラスはずして己れの愚を悟る

引潮へ乗せた慕情の影ゆれる

風ひようひよう人救われる事ありや

生活の目盛り数える眼の暗さ

無学の階段に吾が詩を積み上げる

冷え切った世相の素肌に触れる日日

光陰へ妻も同じ貧乏性

酔いしれてから本音の唄となり

神前に額いて死を拒む

戦争反対という暴徒の群れ

ヴェトナムの喪章へ平和ぶら下げる

この海の蒼さは空の色だった

芸術の端に政治のヒモがつき

陽光がまぶしい心の氷点下

ひたすらに不毛の土へ鋤を振る

造花を賞める言葉を考える

薬の無い病を抱いて老いてゆく

奴隷蟻稼ぐ自由の鐘の下

幾山河移民哀しき詩を綴る

雲低く弔旗はためく空ばかり

清潔な政治が欲しい野の一と灯

月世界売り物にする日を競い

自己宣伝余生のつきる日を知らず

文化人通って雑草の生える道

献立に馴れ作法にも馴れる

熱風に追われて地表を逃げまどい

海へ捨てた孤独がひたひた寄せて来る

海黒く黒い波音あるばかり

孤独の創作続く冬海の昨日今日

海満つることなし潮路の春や秋

民衆の怒り足踏みするばかり

良心を捨て、現代に生き残る

進学へ親子の距離の伸び縮み

貧乏を喘い師走の街偽装

愛の灯は消えず薄幸の人生きる（救援）

逝く年へまたつまづきをくりかえし

陽に月にそむく心の失語症

断水、電減―文化が飢えている

人の世の栄枯は夢か紫蘭咲く

圧力で振りかざす嘘の権利

執念の風聞く夜が揺れ止まず

絶壁の心 ― 呵責なき十二月

星屑燃ゆる一と夜の物想い

猿智恵で動く人間の年が明け（六八年）

つゝがなく新春の詞 生る

発刺とものゝ命の初日影

“ 思考の壁 ”

安村 玉泉

金で処理して人情の紐とする

コンドームから洩れた子宝

脳味噌をめくれば小銭が一つぱい

お前一人の太陽じゃない俺にもよこせ

どちらを向いても資本家のワナ

一撃で死なない牛を大いに憤る

性器をとつたら人間消えちやつた

こんなに沢山人が居るのに他人ばかり

秒針まだまだ動き墓場のエロティシズム

思考の襞黒々打算の底なし沼

「我 欲」

坪 井 柳 念 坊

袖下で釣れば脆くもかゝる欲

煩悩を救うに布施の高を読み

神経の太さ天網せゝら嗤う

飢餓線に待たせてお手盛り審議する

バイブルの余白にメモする軍需株

倅せの扉に心の合はぬ鍵

一片の肉に打算の芸をさせ

人間に戻れぬ金を抱いて寝る

まだ生きる未練に珠数の撰り好み

子に残す心の遺産もなくて老い

韻文作者へお願い

◆「コロナア文学」は、韻文に冷淡なのではない。韻文作者は、それぞれに専門語を所有している。それに、流派とか傾向による対立（コロナア歌壇、詩壇には無いとのことだが）が見られるとのことなので、一般への投稿呼びかけを遠慮しているだけである。

◆「コロナア文学」は、韻文発展に協力する為、次のような、韻文の掲載方法を考えている。

一、「コロニア文学」は流派傾向にとらわれるものではない。

一、各地方の韻文学会主宰者、指導者は、会員の既発表最近作品中より、秀作と思う作品を選び、主宰者、指導者の責任において、取りまとめ投稿して頂きたい。

一、「コロニア文学」は、丁度、本号六三頁の「スバル・俳句」のような形で発表していききたいと思う。

一、こうした推薦者の責任に於いて発表する方法と合わせて、勿論、作者単独投稿をも歓迎する。その場合の載不我は、編集部にまかせて頂きたい。

◆これまでの「コロニア文学」に発表された韻文を見て、その作者と傾向を異にする作者の中には、その作品を貶すむきもあるとか。

しかし、編集部としては、門は誰にでも開いているのである。貶すよりは、自信作品をどんどん投稿して頂きたいのである。百花研を競う盛況をこそ、待ち望むものである。よろしく、誌上に実力を以て、互に他派、他傾向を圧倒して頂きたいものである。

(編集部)

俳句

兄・急死

川崎春芹

兄埋めし夜の
大霜に明けにけり

兄眠るパラナ
松山霜凧ぎて

霜山の兄よラザ
ロとなりて来よ

是音は帰宅の兄
か寒夜醒む

凍てし家のどこ
にも兄の眼がありぬ

描き遺せしパラ
ナ松樹も冬ざれて

声あげて泣き得
ず凍てし壁とあり

湯たんぽを蹴り
いたづちに腹だし

喪にこもり病に
克たん寒卵

侘みて母はナイ
ンのやもめなる

痒い石段

殿岡 萩花

蝶消えてまた青空の角崩る

華寓な兇器こゝにひしめき樹を枯らす

狐独これまでソプラノで咲く猩々花

女頓死風船売りが空に消ゆ

蛇の恋夜の石段痒ゆくなる

霜凝るや疼く瓦礫に鶏の首

バラの門此処にも寝棺売りが居る

蛇飼うや止り木の黄色い女

鳩水漬く寺塔ロウ涙は骨を積み

火を縛る火の縄づくり飛びたいヒキ

それは唾の夢・花屋蟬を飼う

無疵の虹

長谷川清水

行く年の落暉無疵の虹掲ぐ

聞き馴れし鐘殷殷と年行かす

工笛が割込み除夜の鐘犯かす

天球に充つる夏雲火をはらむ

峯雲が崩れ氷菓の流れだす

肢一本効かぬ蟻いて虫を曳く

陸深く海魚運ばれ蠅集む

陽の直下にて向日葵の受精終ゆ

一声もたてず螢の火を掴む

初産婦が母の瞳開らく紅薔薇

スバル・俳句

(59人・59句)

長谷川清水・推薦

汗の電工国中に灯をともしねば	林	越南
緑蔭を吾れ影と出て一人歩す	折笠あきら	
産れくる児のもの編まれ満月光	長谷川欣香	
番犬の吾が風邪声を聞き分ける	大屋	登志
泉湧く右切る山を母胎とし	浦畑	艶子
天も地も軋み不況の秋を越す	中野	敏子
白薔薇たゞ凝視めいて想いいる	瀬戸	春汀
夫の背に桃花一片止まれり	本庄	春江
ビル街の漏れる冬日を掌につつむ	木曾としを	
恋妻の心憎さよ春の舞い	遠藤	源泉
友送るいま冬落暉盃染めて	内田	暁香
日向ぼこ寄り添う貧者陽を分けて	滝内	一水
冬の菊添木にもたれ香を保つ	吉田	一步
離陸してたちまち雲の峯を越す	小川	輝哉
一片の雲なき秋空見て疲る	松本	安生
枯牧へ人工受精の牛放つ	小西	都路
夕餉には間あり小さき焚火守る	大城	城月

蟻の道国境を越えなおつづく	本田	城愁
岩清水顔を映して渴いやす	長島	松次郎
莓酒病体内をかけめぐる	本庄	義房
天高しオーム悪声憚からず	坂本	緑茶
秋空に腐臭ばらまきウルブー翔う	今本	明峯
春近し風媒嗤う牛の鼻	飯沼	山魄
山峡の聖なる川に髪濯ぐ	小清水	礼子
芽吹くもの小さき器満たしゆく	橋本	湖北
片蔭が退く酔漢が熟睡して	林	春美
黒蜂が花吸いからす人間留守	野口	一大
冬の雲処女には心乱す影	右田	春雪
向日葵の首がつくりと街不況	松岡	双葉
朝市場トマトの色の競い合	長島	花枝
花と巢のコース蜜蜂せわしくて	宇野	水甫
木をよじる仔猫尻尾に力箆め	佐藤	蒼夏
癌恐怖われに久しや春の逝く	水野	葉舟
蜂がいて木芋一株採り残る	加藤	正一
花粉着け蜂が花園を彷徨す	菊地	素天
ゆく春や老人畑に余念なし	富樫	越山
まろき膝仔猫がまろくうづくまり	篠田	絵馬堂
ゲバラ死す蜂は花苑に蜜漁り	谷口	喜将
膝頭によきによき寒波よせつけず	金井	青流
春隣り婆の不要な爺となる	江口	不知火

貨車発ちし獣臭乾期風の駅	小堀 歌川
春雷を背に蒔く慈雨を疑はず	塩見貞太郎
鶏魂をまつる碑も立て草萌ゆる	内藤 生雲
試歩の庭春陽眩ゆく歩き出す	竹内 三太
俸給の薄き合羽に冬の雨	西村 清泉
いざり行く寒月光の石畳	林 菊江
闇汁へちつとしてない太陽と犬	清水一角
祖先となる土葬の穴に冬の雨	林 静香
台風来る雨先走り脚太し	伊藤 金水
夜の列車汽笛するどし月おぼろ	市原 紫雲
逃避行夜汽車の春のとどまらず	沖野 可酔
浜木綿の全開眺め病みあがり	沖 南耕
椰子の秀に頻りに鳴くやヴンチビー	内藤 山風
パラナ路の光る穂麦を見て過ぐる	大屋 望月
啄木鳥の落せし朽木銃の手に	蒔田 南岳
李はずれのコンデ残れり三ツ四ツ	沖 周二郎
早春の妻が手がけし木葡萄咲く	山本堅太郎
珈琲の花の下よりたまご鳴ぎ	前畑 与四
雲が呼び雲の持ち去る朝の雷	原田 愛

異国の味

芦野民雄

食べることに楽しみを感じ、興味をもち、思出をもつことは悪いことではあるまい。食べるものに対しては人みずからの嗜好もあろう。いろいろな国の食物にかんして、私なりに味い感じたことを述べ、食物を通じてその国を語ろうと思う。

一、エウロッパ

一九五四年頃英国に行ったとき、ロンドレスのメトロのバンク付近でアルモツサをとろうとして歩き廻ったが、レストランらしい所は皆女性が入っていて男性の姿がないので困った気憶がある。慣れてから分った事だが、男性は皆ボアテでボデツカという地酒（セルベージヤ）を飲みながらアルモツサをとるのが一般の様である。ロンドリイノを自負する英国人に聞くと、ロンドリイノは毎日アルモツサをとる店を決めているそうで、今日はこゝ明日はあそこ変えるのは品がないとのこと、而も自分の座る常まできめて置いて、ちよつとのぞいて他人が座っていたら一度外へ出て散歩して空いた頃を見計って又ゆく。そして黙って自分の席について料理人の目と自分の目とが会うと、料理人は軽く会釈して客人の好みをすでに知っているのので、改めて注文きかなくともちやんと料理をそろえてくれる。たまたまその日に限って別の料理があるときは、今日はこれこれがありますが如何でしょうと客

人に聞くのだそうだ。そういえば毎朝のホテルの食堂の席も一度座った所は、英国では決して変えてはいけないといわれている。

ボデツカを飲むとき、どんなに暑いときでも英国人は決して冷やして飲まない。私も始めは生ぬるくてなじめなかったが慣れてくると仲々うまいものである。英国人はカフェの代りに紅茶を飲む、而もレイテは入れるが決してクリームは入れない。クリームを入れる米国は下品だと彼等は言う。暑いとき熱い紅茶をフリーふきながら飲む。

何故つめたくして飲まぬかと聞くと、成る程飲むときは暑いが飲んだあとの涼しさを楽しむのだと、分った様な分らぬ様な説明をした英国人が居た。

ロンドリイノというのは例へば三人でボアデに行った場合、先ず誘った男が三杯分を支払う。飲み終ったら次の人が三杯分を支払ひこれを繰返へすのだが、もう自分は飲めないときはその旨申出て二杯にして貰う。煙草が吸いたくなるときは必ず如何ですかと他人にすすめたあと自分が吸うのが礼儀で、吸ってる人はその煙草を相手に示して今吸ってますというジェスチャーを示して断わる。マドロスパイプ（カシンボ）というのは実はロンドリイノが発明したもので、煙草なら三人のときは二本損しなければならぬ、之が馬鹿らしいのでカシンボを考えついたもので、たまたまマドロス達が吸うのに極めて便利な為マドロスパイプと呼ばれる様になったがあれは実はロンドリイノが発明したものであると彼等はいう。

英国で一番有名な料理はソールムーニエル(舌びらめのバター焼き)でドーバーソールといってドーバー海峡のものは殊に有名である。しかし私には英国の柔かい鮭のクン製にリモンをかけて食べる方が遙かにうまく感じた。

偕英国こそは保守という言葉がピタリとあてはまる国で、その重厚な貴族趣味に心ひかれるものはあるが一方「大英帝国に日の没する所がない」というかつての栄光と自負の上に立つ虚栄心に結びつくものもある様だ。はたして激動する世界の状勢に対処して再び過去の栄光を取戻すことが出来るであろうか。

フランサはコミダ・フランセーザの本場である。セボーラのソッパを始めとしてビニョーをふんだんに使った色々の料理があるが、旅の者が時にうまいと感じるものに冬にかぎつてある生のオストラがある。大中小の三種類の生のオストラに塩又はリモンをかけて食べる風味は格別である。パリスのルクサンブル公園近くに、ア・ラ・クロレビレというカヘルとカタツムリを食べさせる料理屋がある。こゝはロンドレスの有名なダーティハウスという店に似ていて、店の様子は古めかしいがガルソネッテは皆若くて美しい。たしか日本人画家の水彩画が一枚店に飾ってあった。こゝで食事を終つてコンタを支払い最後にゴルジエッタを渡すのだが「メルシー」といってゴルジエッタを前掛けのボウソに入れると同時に、美しい顔を近づけて自分の頬を指さしてこゝにベイジョしろという。旅の客人はしめたと思ひ、美しい頬に自分のく

ちびるを持ってゆくと、彼女はその瞬間顔を動かし、頬ならぬ自分のくちびるを客人のくちびるに合せてくれてからサツと横をむいてしまう。如何にもパリスならでは見られぬシツキさで旅の男を慰めてくれる。パリスでのゴルジエッタは一割二分五厘出すのが通人だと言はれているが、私はこの店にゆくときはいつも二割出すことにしている。

さてパリスこそは世界の都市といっても恥しくなくシャンゼリイゼの大通りなどは品位を傷けない為にネオンの色を唯一色に統一しているし、都会の騒音を防ぐ為に、自動車は皆警笛を取外すか、又は鳴らすことを禁じられている。パリス近郊のヴェルサイユ宮殿の美しさと言い、まことに世界のパリスといっても過言ではない。しかも世界の流行の中心でありフランス特有のしやれたシツキさは心憎いばかりである

一方夜のパリスには有名なリドー、ムーランルウジュありで夜の更けるのを忘れしめる。パリスこそは世界の美の都、芸術の都であり観光の都でもある。

スウイッサやアレマニアで良くお目にかゝる料理に、ブンデンフライツシュとホンデユがある。ブンデンフライツシュは肉のおさしみである。上等なフレミニオンをアルプスの嶺で半ば乾燥してから非常に薄く切ったもので実においしい。ホンデユはホンデユブルギニオンとも言い、ブルギニオンとはその発祥の地名であり之は牛肉の角切りを銀の串にさして、ケイジョ又は植物油を鍋で沸騰させた中に入れ、自分の好きな様に揚げてから色々な調味料

をつけて食べる。特に寒いエウロッパではうまく感じる。アレマニアのエネルギーの源はバタタであろうと思う位あらゆる料理にバタタのゆでたもの又はすり潰したものが付く。しかしアレマニアの代表料理といへばザウエルクラウトであろう。之は豚の足を骨ごと切って白い脂をむきだしにしたものとリンダイツサ、バタタ、野菜等を煮込みにしたもので、コツテリとして如何にも精力が付きそうな料理である。

第二次大戦後数年してアレマニアを訪れたとき、都市爆撃の跡はそのまゝ放置されていたが、工場の復旧には目覚ましいものがあった。果してあれ丈叩かれたアレマニアの経済復興は実に目覚ましかった。アレマオンの負けじ魂というのであろうか。彼等が今真剣に望んでいるのは東西アレマニアの統一であろう。酒場などでも音楽が東西アレマニア統一の歌となると、見ず知らずの隣に座っている人と腕を組んで一丸となって歌う。一方ライン河畔のローレライといふ、ネツカ河畔のハイデルベルヒといふ、ゲーテを生んだ大アレマニアこそは、常に世界のホマンチコ達の憧憬の地でもあろう。

二、エジツト

エジツトは回教徒の国だから豚は食べない。もつぱら羊の肉であるがこれがすばらしくうまい。印度のマトシ（羊の肉）は臭気強いがエジツトの羊には臭気がない。おそらくは食べる草の関係であろうか。カイロ市の街頭などで見掛けるのだが、羊の肉を

太い火バシに串ざしにして垂直に立て、少しずゝ手で廻しながら側面から粉炭で焼く。客のもとめに応じて表面からフアツカでスパリと切取り、調味料をつけて立喰いさせる。慣れるとなかなかうまいものである。カイロに「コマイス」というレストランテがある。シンカバツプなど一連のアラブ料理を食べさせてくれる。ポンの代りに彼等が食べるのがエイシュウといって日本の大きなおせんべいの様なものをパリパリに油で揚げたものである。(印度にもチャパテイといって全く同じものがある。

特に日本人にうまいと感じるものに「モロヘア」という日本のトロロの様な感の青いソツパがある。「王者の食べもの」という意味でファルーク王が居た当時迄は、余りにうまいので王様以外は食べることを禁じられて居て、従って一般に栽培することを禁じられていたものである。あざやかなみどり色をしていて栄養価値も非常に高いそうである。大体アラブの連中は日本人の三倍近くの量の肉を食べ、お米もあるがお米は野菜としてしか食べない。

彼等の肉の食べ方を見て、成程回教徒は四人の妻を持てる理由が分った様な気がした。それと比較すると日本人は少食でしかも野菜を主としてたまに魚位しか食べない。まるでギリギリスの食事の様で、これじゃ妻一人がやっただと思はざるを得ない。そこにゆくとブラジル人の食べる量も吾々日本人に比較すると非常に多く、吾々は見習うべきだと思う。エヂットのカフェもブラジルに似て小さなシイカラに入れた濃いカフェだがザラザラした砕いた実が一諸にはいってその上ずみ丈を飲む。しかもカフェイン

を追出してないので飲みすぎると夜ねむれなくなる。

エヂットでもう一つ有名なのはハト料理である。臓もつまで上手に料理してあって、フランゴよりも味わいが深い様だ。とくに印象に残るのはハト一羽をそのまま照焼きにして、腹をさいてその中にご飯をつめたもので上部エデット(アスワンダム付近)地方では朝食にこれをたべる。そのうまさは今もって忘れ難い。エヂット一般の朝食は、まっ白いフェジョンの塩煮と、口が曲る位強いケイジョとエイシュとである。

熱心な回教徒は日に数回の丁寧なお祈りをする。聖なるメツカの方を向いて額を地にコスリつけては立上る動作を何回となく繰返すのだ。時間が来れば、やりかけの仕事を放って置いてお祈りを始める。又年に一回はラマダンといって一ヶ月の間断食をする。断食というのは太陽のあるうちは一切のものを口に入れてはならないのだ。その代り日が落ちると待つてましたとばかりモリモリ食べる。空腹なので一回位では足りないので何回も食べる、従って寝る時間がなくなる。その為ラマダン期間中は官庁などでも、ひるまは皆ウツラウツラしていて仕事にならない。政府の役人達でも教育のある連中はどんどんクリスタンに改宗してゆくのが多い。流石のナセル大統領も宗教に丈は手をつけかねているという。回教徒はビスミラヒ・ラフマニ・ラヒーム(慈悲深き神の名においてという意味)と唱えて殺した動物の肉でなければ食べではならないことになっている従って銃で鳥を覗い、いよいよ引金を引くときビスミラヒ……を唱えているうち大ていの鳥は逃げ

てしまうのだという笑い話がある。回教徒は妻を四人迄持つことが出来る。自動車の運転手位になるともう二人は持ちそれ以上は富に応いして持てるわけだ。私の知ってるある政府の偉い役人が、或る日真新らしい書類入れのカバンを持っていたので、すばらしい良いカバンですねと御世辞にほめたことがあった。所が翌日又用事があったので再びその男の所へ行ったところ、昨日のカバンをすっかり空にして、あなたにプレゼンテするという。私はしまったと思ったがもう間に合はなかった。彼等の風習では、何かをほめることはそれを呉れとねだることで、相手に依ってはそれを差上げねばならぬのだ。だからアラブに行ったら間違っても相手の奥さんのことをほめてはいけないという。四人も居るのだからそのうちの一人をプレゼンテされるおそれが充分にある。

冗談はさておいて、イスラエルと宿命の闘争を繰返しているアラブ連合の旗手エジツトも、その宗教故に、近代化は遅れ、多難な国際情勢下、すべての点で後手々々とならざるを得ないと想像される。

以上

田園詩情

務台一郎

一九四六年十月のある日僕ら親子八人は一家をあげてマウアの在に引き越した。

それは春とも思えない冷い風の吹きすさぶ日であって、無心の幼い子供らをすっかりしよげさせてしまった。

ジャバクワラからマウア迄の遠い道、更に駅から七Kの悪路、ようやく目的地のシャーカラを見下す峠の頂上までたどりついた時、日ははや西山に傾きかけて居た。

右手はユーカーリ樹林、雑木林、厚く落葉の散りしいた急なせまい坂道を荷物と人間を満載したトラックは車体をギシギシ言わせながらおそろるおそろる下って行く。

谷そこのシャーカラまで下り立つと流石の風もピツタリと止んで案外暖い。

住居の三四十米程手前の小川にかけた橋があぶないといって運転手たちは橋の手前に荷物を下すとさっさと引き上げてしまった。

今朝荷を積んだジャバクワラの家ของ相当なかまえと、ここの泥壁のみすばらしい家とを見比べて流石に年輩の運転手は気の毒げな表情であったが車の持主の息子だと言う若い助手は、よくこんな所に入り込んで来たものだななどと悪たれ口を利いて行った。

今迄住んで居たジャバクワラのイビツルーナ街では親切な邦人

の人たちにかこまれて居たが、覚悟の前とは言いながらいきなり山峡の荒れ果てた無人のシャーカラの真ただ中に山なすガラクタ荷物と六人の小さい子供たちととり残された僕は、元来呑気坊でやせ我慢の強い方だったが一時は呆然とするばかりであった。

所が東京浜町生れの家内の方は、やせ我慢の程度が僕より少し上だ。と見えて、

「静かでいい所じゃないの。さあ早く荷物を運びましょう」至極適切な言葉をはいた。

この環境への唯一の讃辞は静けさであり、目下の急務は日のくれないうちに荷物を家の中に運び込んでしまう事であった。

気を取り直して住家の方に行って見ると入口の戸があいて居て、どこかの放し飼いの牛が入ったと見え土間の真中にコテコテとおき土産がうず高くなって居る、皆に見られないように大急ぎでとりすてて、荷物を運び初めた。

この十ヘクター程のあれはてた農園の持主はインド系の英国人で、当時S・P・R鉄道の技師であった。

この土地にある大小六つの池を利用して養鯉を初めようという話がこの地主のロードさんと当時失業中の僕との間にまとまった。そして僕ら一家の移転となった訳である。

とうとうその日は荷物を運び切れず相当外に出しばなしで一家中あやしげな夢をむすんだ。

二三日してようやく住居の方も片付いたのですっかり荒れはてたシャーカラの手入れを初める。

幸い五百米ほど離れた隣のシャーカラに住むセバスチオンと言う青年がカマラーダに来て呉れる事になったので彼を相手に池の廻りの藪を片付け初めた。

「ポツポツ」と言う二声づつの小鳥の鳴き声がのんびりと又物悲しくやるせなく聞えてくる。

以前ビラマリアナやジャバクワラの森でよく聞いたなじみのあゝる声だ。それはサツシーと言うのだと教えられたが、この思いがけない旧知との再会はややもすると前途の不安に打ちひしげられそうな僕の気持をなぐさめ楽しませて呉くれた。

このシャーカラの東面はフンドンと言う一寸この附近では小高く奥深い山続きになって居り、西は地内を貫流し散在する池に用水を供給する小流の向う方向であるが、南北両側の高台地の支尾根が入り組んで見通しが利かない。

北側の一万本ほどの四年生のユーカリが可成りな傾斜地の山陵の項上までビッシリと植えつけられて居る。

南はここえ下りてくる小さい峠の地つづきの岡で低みには綺麗な水が流れ蒲が生い茂り年中絶える事が無いのでこのシャーカラの飲料水となつて居る。

もう二十年近く無住となつて居るが以前はあるドイツ人が農園を営んだあとでその名残りのジャボチカーバ枇杷オレンジなどが相当の老樹大木となつて岡にそびえている。この附近一帯は樹林の生い茂るに任せ自然の姿にかえりつつある所が多いが、ふと小道のそばの草むらの中に植え捨てられたしょうがの芳香などに、あ

あここにも人間の営みがあったのかと思う事などがよくある。

こうしたたらいの底の様な土地であるから黎明の訪れは少し後れるが、それは四方を囲む森の住人小鳥たちの大コーラスに依って先立たれる。殊に身も心も腐らせる様な霧雨の後のカラリとした好晴の日の朝は実にすばらしい。

ブラジルの名鳥サビアの声を初めて耳にしたのはこんな日の朝であった。

先のサツシーとは全く反対の朗々張り切ったその声は谷一ぱいにひびきわたった。このサビアの序曲から初まりそれを主題曲としたその朝の小鳥たちの交響楽は全くすばらしいものであった。それはバラ色の曙光に染まるフンドンの大岩の辺りから初まって順次前面のユーカリ樹林、背後の雑木林に移って行く。

この朝初まったサビアの鳴き声はそれから朝となく昼となく僕らの耳を楽ませて呉れたがそのうちに時いたったと見え何時ともなく立ち去り、しばらくはその名詞を聞く事が出来なかった。

海岸山脈に近いこの辺りは霧の日が多い。晴天の日でも午後三時頃になるとフンドンからサツと下りて来た山霧が忽ちあたりを立ち込めてしまう。まだ夏の日は中天近くにある筈なのに四辺はうす暗くなり、小鳥の声もピツタリ止んでしまう。

そんな日には一番大きい一町歩位ある池のはたの叢林や生い茂った水草の中からかん高い可成り強い鳥の鳴き声が聞えてくる事がある。

こんなひどい霧の後でも夜はすっかり晴れかえって一面の星空

になる事もあり、そのまま雨になる日もある。この鳥の名前サラクラと言うのを教えて呉れたのはジョンと言うカメララーであった。この鳥が鳴くと雨になると言うのが彼の説である。

彼はこの大きい池のほとりにある小屋に一人寝泊りして、食事の時だけ私らの家にやって来て居た。

霧雨の朝など頭から米の空袋をかぶって寒そうな様子でやってくる、

「ボンディア・シヨームタイ」

「ボンディア・シューバ、オートラヴエース」

「エー、サラクラ・ファロー」

之はどうもポ語でやらないと感じがでない。

この鳥は池の鯉を狙うので僕らにとっては悪鳥であった。

ウルブプンガ 大発電所を見る

堀江 一声

ウルブプンガ大発電所の建設工場の現場を年一回宛見学する村の行事もすでに数回繰返し本年は婦人会も参加を希望し六十数名にふくれ上った。

二台のカミヨンに分乗し八月二十七日の早朝一路電源地帯に村

中挙げての見学となった。大牧場の続く沿線の丘陵を眺めながら国道を風を巻いて疾走する事一時半、銀色に輝くパラナ河の鉄橋が目の前に迫った。其のすぐ上流に見える。これぞ、大発電所の水門だ。

七州を流れ来た水を堰き止める鮮やかな姿だ。目下工事中の心臓部ツルビナ並に発電機の堀付の最後の仕上げに河底より築いたビルデングは大戦艦を横たえた様にパラナ河を堰き止めていた。

其の光景を眺めながら延長一千三百メートルの鉄橋を渡るのは涼しい。下流にかけて在った砂丘も砂浜もゴツソリと取り消され島だけが思いもよらぬ程小さく見えるのであった。あの島こそウルブング建設初期の頃、ラヴンヤ、ミランドポリス、アリアンサの句友と共にこぞって吟行した想い出の島だった。

鉄橋を渡った。入所の手続をすませ総ガラス窓の大ホールの前で車から降り控室に這入って行く。ジュピア発電建設はこゝから初まるのである。

控室の壁はズラリとウルブング大発電所の地図で埋り、室の中央には実物模型が据えてあり完成後の世紀の偉業がしのばれる。

其の地図に向って一人の若きエンジニアロが大声で説明を開始した。

此のジュピア発電所が第一期の建設工事、ツルビナ（水車）十四基、一基のツルビナの出力は十万千瓦ワット時、十四基で百四十万千瓦ワット時となるものである事。水門の完成した現在はそのよりパラナ大河の水を吐き出し、四百メートルを一挙に堰止めた。

又連なる土提の堰提の延長は五千二百メートルにおよぶとの事だった。第二期建設工事は、イリア・ソルテラ、此のスケールは更らに大きく倍の出力二百八十万キロワット時、第三期建設工事はチエテ河のイリヤセツカを堰き止めて運河によりペレーラバレット移住地を挑みニヶ所より十五米も水位の高いサンジヨゼー河に放出する。其の巨大な人工湖に水没する地帯が地図に青く塗られていた。これ等を合計して四百五十万キロワット時のウルブング大発電所を説明するエンヂネーロも余りの人混みにもみくちゃにされそうだった。世界第二の水力発電所の電源地帯はあたかも飛躍する若きブラジルのシンボルであろう。伯人のエンヂネーロが道案内に現われ引卒する。

私共はそれに従い再びカミヨンに分乗した。引込線の鉄道の沿線の一方は鋼材置場、鉄骨、鉄帯、鉄筋の山山それに一方は火力発電所セメント製造工場、コンクリート混合機を据附けた大規模な工場高さ百メートル以上もあると思われる大起重機しかも三基其の他大小の起重機の林を抜け河中に築かれ岩石で補岸した土提を登って水門の上に出た。水門の高さ約三十米自動車三台並んで走れる。見下せばはるかな下に薄気味悪く。パラナ河の水がドス黒く水門より吐き出され砕けては激流となっていた。一つ一つの水門の口は十メートル以上もあるか？ 四十の水門の扉は今が開かれているがこれが閉され満水となると二万八千アルケールが湖底に沈むという。

まだ核心は鉄骨を組み更らに鉄筋で堅めてはコンクリートを注

ぎ上に上にと伸びている。ツルビナとヂャドール一基の重量は四百九十屯、十四基として実に七千屯の怪物がフルに廻転する、基礎工事とパラナ大河の水圧を発止と受け止める鉄壁の楯はまさにこれだった。

次に砂採り場に案内された。アスフワルト道路を十分も走ると到着した。

此の地帯何百アルケールとも覚しき山肌を深さ十メートルも剥ぎ取って堰提に運び去りその下に一大砂礫脈が分厚く横たわっている。其の砂礫を大形の無限軌道がゴツソリと掬い取り其のまま運んで断崖のようなところに仕掛けられた取り入れ口に投入する、投入された砂礫は、ベルトコンベアに乗せられ楽々と百メートルもある鉄骨の櫓の塔の上に更らに櫓より各ペネラにふるわれながら落ちるうち中石小石大砂小砂と四ヶ所に分類される。

私共は更らに六十五キロ隔たるイリヤソルテラに走った。用巾が実に広く麻州の岸は遠く霞んで見えるのであった。半島のように突起した円形の堰提はまだ低いが此の中の河底の岩盤を堀り堰提に盛り又掘っては盛りヒルミの岩盤を見つけるまで砕いては掘り下げる。やがては堰提は島よりも高く其の中に何千の人間が働くのである。

河底から湧き出す水を汲むポンバの音響は間断なく響き渡り、大統領が幾人変ろうとこれだけは休む事をゆるされないであろう。夕陽の沈む麻州の岸に向ってビヨロンを奏でながらパラナ河を渡って行くバルサが水に尾を引いていた。

映画

映画とせりふ

山添良一

演劇の場合はその動作が当然せりふの中にふくまれるからわれわれは人物の語る言葉を聞きながら劇の進行を追い駆けてゆく。しかし、映画の場合においてわれわれに示されるものは動作そのものが主で言葉はその動作の説明に必要な一つの補助として使われるべきものである。本当の演劇に接するメクラと本当の映画に接するツンボと、この二人はそこに表現されるものの一部分を失うに違いないが、しかし決してそのために本質的なものまで失いはしない。

このクレールの言葉のようにシナリオのセリフというものが果して「動作の説明に必要な一つの補助」としてだけ存在するものは多少疑問もありますが、しかしメクラがしばいを見てもその大切な点は分るし、ツンボが映画を見てもその大切な点は見失うようなことはないというこの比喻はまことに演劇と映画との本質的な相違を的確に指摘している名言だといえよう。

以上、少し長いが、故小津安次郎監督と名コンビを組んで数々の名作をものにした作家野田高梧氏の言葉を引用した。それは特に同氏の「秋刀魚の味」の切れのよいセリフに私は非常に敬服しているからである。

近頃の映画は、トーキーの発達にもよるのだろうが、余りにもトーキーに頼り過ぎていくらいが見受けられる。

映画は視覚から入ってこそはじめて映画なのであって、われわれは何もつまらないおしゃべりを聞きに行くのではない。もし、そんなに映画にしゃべらせたのなら、いっそのこと幻燈みたいにして、活弁でもつけてやらせればいいじゃないかと抗議したくなる。

一度「赤い風船」という映画を見たことがある。監督はルイ・マールであったが、一篇の映画詩とでもいうべき作品で、今でもあの映画は強く印象に残っている。古いパリの街中をふわりふわりととんで行く赤い風船を子供が追いかけてゆくだけが筋である。映画にはセリフも説明もなく、バック・ミュージックが流れるだけという、現在ののようなトーキー万能時代によくもあれだけのものが作れたものだと感心した。

その後作られた新藤兼人氏の作品でやはりセリフのない「裸の島」という映画を是非一度見たいものだと思っていたところ、たまたま昨年半ばごろ特別試写会があるのを知り、いつてみた。

以下、まずそのあら筋を紹介する。

ある小さい島に夫婦と子供二人が住んでいる。この島には水がないので約二キロくらいの陸地から毎日テンマ船で午前と午後二回水を運んでくる。子供はそのテンマ船で陸地の小学校に通っている。やがて麦のとり入れも終わったある日、子供がとった鯛を売りに行くのをかねて夫婦と二人の子供は町に行って楽しく過す、う

るおいのない毎日、自然とのたたかいに明け暮れている一家にもこんなひと時もあるのかと感じさせる部分である。ところが、間もなく上の子供が急病になりあつという間に死んでしまう。野辺のおくりもすませた翌日、夫婦はいつもの如く汲んできた水をさつまいも畠にかけている。

黙々とかけていた妻はとつぜん桶の水をひっくり返えすと、泣きくずれる。

夫は妻に平手打をくわせてはり倒すと、元通りに水かけを続ける。しばらく倒れていた妻は力なく起き上がると、水かけをはじめめる。

この映画には自然と闘って生き抜こうとする人間のたくましい生活力がこめられている。だが、どういう意図でセリフ無しに作られたのか知る由もない。

「裸の島」の主人公達は自然との闘いにおいて口をきく余裕もないというのだろうか。私は、一つのテーマをとことん迄煮つめて行けばセリフがなくても演技さえ完全ならば説明は要らないということはこの作品で監督は実証したのだと思いたい。

もし説明をつけるならば最初、島が出てくる時、これは小さな島で水も出ないような所ですので、夫婦は毎日陸地からテンマ船で水を運んできますという、まるで観光映画のナレーションみたいになってしまったことだろう。

ところが監督にとってはその島がどこにあるかと、夫婦が貧しかろうと問題はないのである。自然に立ち向い、水を運んで、不毛といったよいような土地に作物を作る姿を映画にするのがねらい

なのである。だから、彼等が何を食べようと、夜は何をしようといっさい省略している。無言で二人がせつせと水を運ぶシーンの繰り返しはナレーションの及ばないくらいの効果を現わしている。祭りの夜、親子四人が連れ立って歩くところなど動作そのもので楽しさを描き出している。

最近とくに感じるのはシネラマなどの立体音響と大画面の効果にだけたよったコケおどしみたいな映画が多いことである。しかし、大画面でなくてもクルーズの「恐怖の報酬」のような肝をひやすシーンも撮れるし、「ハイ・ヌーン」のようにセツパ詰った状況も現出できる。またチャップリンの無声映画を今見ても古く感じない。

シネラマなど音ばかり大きくして単なる見世物としての映画への後戻りではないかと、思わせるものもある。

ここでアラン・レネーの言葉を引用して見よう。

「シエークスピアやジロドゥーの芝居のように、言葉が話されるのに聞きいる映画を私は夢見ている。映画館の暗闇の中に坐っているながら観客が文学的な価値のあるせりふを耳にはいないということはどうしてあつてよいものか」

どうしたら無駄なせりふを切り詰めることができるか、どうしたらせりふにもっと含みをもたせることができるか、どうしたら画面にもっと多くを語らせることができるか、これはトーキーにばかり頼って映像による表現をなおざりにしてきた作家にとつては心すべき課題ではないかと、思う。

短歌

コロニア短歌の潮流

安良田 濟

まず、「コロニア短歌の潮流」というテーマを追求する前に、コロニア歌壇がどういう過程によって、現在の潮流を形成したかを、ごく皮相的にでも一瞥する必要があるようである。

その昔、コロニア移民の初期の頃、鈴木南樹氏が、折々の感懐を短歌の形式をもって、新聞紙上に発表したのが、コロニア短歌の発生の第一歩ではないかと考えられる。しかし、歌壇といえるものが形をなしてきたのは、各新聞が一頁を文芸欄に割くようになってからであり、それは、一九三三、四年頃からではないかと思う。

ところで、短歌など作ったこともない百姓移民が、短歌を作るという現象はどうして生じたのであろうか。勿論、いろいろの理由が考えられる。例えば、自分の名や作品が活字となることに魅力を感じる、形式が短いから作り易い、特別の教養がなくても何とか形にはめこむことができる、または、その折々の感動を表現し、記録するには最も手頃な形式である等である。つまり移民の郷愁をぶちまけるには、最も具合のいい道具であり、そして、感動を形式の中に定着することによって、一応自己満足も得られるのである。そしてそういう自己満足も、当時の殺風景な移民の生活には必要であったのである。

したがって、花鳥諷詠でなかったら、おおかたは啄木調か晶子ばりの傾向から出発するというのが普通であったようである。

あらゆる芸術の分野においてそうであるように、短歌も最初は好奇心や興味本位から作りはじめる。しかし、ある点に至ると大部分の人々は好奇心や興味を失って、中止または断念してしまう。しかしその中の少数は作歌が生活を支えているところの意義の一つであるとは認し、作歌をつづけていく、ということになる。そしてそういう人々の人口と意欲がある点にまでふくれあがると、自分等仲間だけで、作品や意見を自由に発表できる機関を求めるということになる。そういう要求が短歌専門雑誌「椰子樹」発刊の契機となったと考えられるのである。しかし、それは「椰子樹」発生の一つの契機であって、その当時発刊の中心人物であった、徳尾媛舟、武本由夫、富吉好人等を取りまく数人のあの情熱がなかったら、「椰子樹」は生れなかったであろう。実際、今考えてみても、彼等のあの情熱は一つの執念にまで凝りかたまっていたようである。何時の時代でも、こういう執念が一つの社会を動かす、一つの時代をつくるのである。と同時に、こういう執念をもった人々がいたということ自体、当時のコロニアの時代性や社会性の一角を反映していたのである。

以上は「椰子樹」発生当時の一瞥であるが、終戦直後のコロニア歌壇の潮流はどういう状態にあったかを考察することは、後の潮流形成の過程を知るためにはきわめて参考になると思う。

そして、それには人的関係からの考察とイデオロギー又は傾向に

ついでに考察との二つの方法がある。まず、人的関係からみると、敵性国民として扱われた移民われわれにとっても、四年間の戦争の期間は短くなかった。したがって、終戦後、日本語の出版物が許可されると、「椰子樹」も慈雨を得た草木の如く息を吹き返えしたのであった。いま、その当時の新聞雑誌歌壇の選者の顔ぶれを見ると、

パウリスタ歌壇Ⅱ岩波菊治

南米時事歌壇Ⅱ瀬崎涛声

よみもの歌壇Ⅱ徳尾援舟、清谷益次

新世紀歌壇Ⅱ酒井繁一

であった。コロニア歌壇の潮流を語るにおいて、これら選者達の及ぼした影響は軽視できなきであろう。いま、ここで、コロニア歌壇の師弟関係をみると、アララギ系の岩波菊治、詩歌系の瀬崎涛声と国民文学系の酒井繁一の三名が主なる潮流であった。まず、岩波系をみると、氏は実作に於ては、大御所的存在であったにも拘らず、理論派ではなかった。また後輩指導の点に於いても決して優れていたとも思えなかった。それにも拘らず、彼の輩下に、徳尾援舟、武本由夫、行方正治郎、中江克己氏等のようなすぐれた子弟が多くでたということは、彼の素朴な人格によるのかも知れない。しかもこの四人は師以上の理論派であり、これらの直系傍系によって、後のコロニア歌壇の形成の大部分はなされたといつてもいいのではないかと思う。次に瀬崎系をみると、実作に於ては、岩波菊治氏と肩を並べながら、遂に弟子の中から彼の衣

鉢をつぐほどの者はでなかったようである。次に酒井系をみると、氏は最も理論派であり、しかも後輩指導に最も熱心であった。したがって、方々の地方に歌会を組織し指導している。これらの輩下の潜在勢力はあなどりがたいものがあり、将来大きな推進力となるであろう。

ところで、戦後椰子樹も複刊し、歌壇も漸く軌道に乗ろうとしたときに、岩波氏が亡くなった。この衝撃はコロニア歌壇を歴史的曲り角に追いつめたのであった。もしその折に岩波系に前記の四名の優れた弟子等がいなかったら、コロニア歌壇の潮流は現在のものとはかなり異ったものになっていたであろう。

次に、短歌理念、思潮あるいは傾向はどういう変化をしたかという点を少し考察してみよう。われわれは作歌上、何々派、何々主義、または何々流と便宜的に区別する習慣をもっている。そしてそれらを大別すれば、結局写実主義とロマン主義の二つにしばられるようである。理論的においては、作歌以前に写実主義によるべきか、ロマン主義によるべきかの問題が各自によって解決されなければならない。しかし実際においては、写実主義にしてもロマン主義にしても、その限界を求めようとすると非常にあいまいになる。写実の絶対性はロマンに至り、ロマンの絶対性は写実に至るという結論さえもひきだせるのである。特に、コロニアでは写実にしろ、ロマンにしろ、その絶対性を意識的に求めて作歌するというより、その折々の気分によって作歌しているという見方も成立するようである。それを立証しようとするならば、

たとえば、瀬崎涛声、酒井繁一、井本惇の作品を五首ずつ無造作にえらび、それらが無造作に並べて、各首の作者をあてるという方法をとってみるとよくわかる。われわれは瀬崎、酒井、井本の三氏はそれぞれ異った作歌理念や作風をもっていることを知っている。

それにも拘らず、各自の無造作に並べられた作品から、各作者をあてるのは極めて困難である。ということは、一つの潮流と他の潮流との間には、それほどきざんとした色調の差異はないということの意味している。少くとも、コロナに於ては色調が平均化しているということができる。勿論、一生を通じての作風なり、一つの歌集を通じての作品と、他の人のそれとを比較した場合、おのずから、そこに異った何かを感じられるであろう。しかし、それは何々主義とか流派というものからくるものより、むしろ作者の体臭からくるものといった方が正しいであろう。

であるから、コロナ歌壇には、特にこれといって強烈な色調や潮流が対立し合っているとは感じられないのである。ただ、こういうことは考えられるようである。岩波菊治の存在が大きかったのと、彼の多くの弟子達が作歌的にも、後輩指導においても優れていたということが、現在のコロナ歌壇の色調を単一的に形成せしめたという考察は、きわめて合理的であるようである。コロナ歌壇の思潮とは、大体そういうふうを考えていいのではないかと思う。

以上のように、コロナ歌壇は一応岩波菊治のアララギイズム

によつて貫かれてきたが、げんみつに言えば、必ずしもアララギイズムが原型を保つてきたわけではない。そこには、時代の変化と共に、色々な面で変化をみせている。たとえば、そういう変化の一つをとりあげてみれば、戦前又は終戦直後の頃は、短歌の発想あるいは抒情契機というものは、日常的次元によつてなされた。あるいは公約数的美意識によつてなされた。それはいわゆる皮膚感覚の抒情性ともいえるのである。もつと具体的に言えば、ここに一つの花がある、以前はそれを、公約数的美意識によつて、花の美しさを詠んでいた。

ところが、現在では、花を美しく感じる視覚をさらに超えたところの自己の内部に花を美しく感じる何かがある、その何かを捉え、それを表現しなければならぬと考えるようになった。その場合、花は美醜の彼方にあつて、表現上の単なる媒介物にすぎない。それを新しい次元の創造という人もあり、もう一つの空間の発見という人もある。

以上のことを、更に作品の引例によつて比較すれば、もつと明瞭に理解されると思えるので、左に花、鳥、風、月を詠んだものを、戦前のものと最近のものと並べてその変化をみよう。

花

戦前Ⅱ 秋日和ようやく定まりたる如く庭の紫陽花は咲きしずも
れり (川原比露思)

戦後Ⅱ 誰がために生くる一日と自問しぬ園は結実の責を持たぬ

花達（西田季子）

鳥

戦前Ⅱ朝霧の牧原ゆけば巢籠りの鶉とび立つ音に鳴きつつ（瀬崎涛声）

戦後Ⅱ巧妙に操る人語あしたよりひびかせオオムが強いる結語を（陣内しのぶ）

風

戦前Ⅱ雨期明けし空のさやけき裏山のユーカリ林にどよもす風音（岩波菊治）

戦後Ⅱ新藁のにおいの如き風吹くと想えたちまちうつに紛る（小笠原富枝）

月

戦前Ⅱ真夜さめて廁にたてば月の光あやしきまでに照り極まれり（安部栄子）

戦後Ⅱ秋蘭けて悲しみ余る空遠く月に挑みしいけにえ一人（南条由喜夫）

余白がないために、多くの引用ができないのは遺憾である。しかし右の引例からでも、先にのべたところの、傾向や作歌理念の変化の一端がうかがえるのではないかと思う。

では、現在のコロナ短歌の主潮はどういう流れをもっているか、という結論を出さねばならないようである。

しかし、実際においては、この複雑なテーマは急拠の研究や、短い時間をもってしては、十分に説明しあるいは定義しうるもので

はないようである。

したがって、コロニア歌壇がいま目前に解決を迫まられているところのマンネリズム打破の問題―それは結局内面的空間の発掘とか、抽象的空間の発見とか、あるいは美意識の価値転換とか、その他色々の問題につながるものであるが―それらの問題と正面から取り組んでいる人々、つまり歌壇の推進力となっている人々の作品と作風を鑑賞し、あるいは検討するならば、おのずから、歌壇の潮流がどういう形態をもつて流れているかの一端はうかがうことが出来るであろうし、またそうすることによって、その概観を憶測することもできるにちがいない。とはいっても、いまここで、主潮をなす人々の全部にスポット・ライトをあてるということも、時間の都合で不可能である。したがって、最近最も意欲的に作歌活動をしている人々の中から次の五名をえらんでみた。

川原比露思

われにのみ光る一つの言葉あり孤独に居りし時よみがえる
汚点など拒む形に咲くつつじの白さが不意に自負よびもどす
かくてなお虚無の中にて燃え上るわが身をめぐる春の疾風は
喪われしもの還らねば燃えいたる雲のあせゆく過程見しのみ
雨あとをかがやき無為の羽蟻とび過去とは常に悔恨のこと

川原氏はコロニア歌壇では最も詩的密度の濃い人であり、言葉の使駆には一種の貴族趣味的な潔癖さがある。

氏の感性は常に、靄に包まれているような世界の中に、独特の美学的空間を創ろうとしている、とでもいえるようである。また、別

の見方をすれば、ペシミズムの世界を肯定した上で、なおそこに安住を見いだそうとしている、ともいえるようである。その中に流れているものは「柔軟な抒情性」といっていいのではないかと思う。

小笠原富枝

ひと色に真陽照りおればわずかなる吾が翳吾を支えている如
唐突に伸び来る軌条の冷たさに絞られてゆく自らの視野
わずかなる木の芽の緑膨むと爪立てばぎりぎりの吾が線崩る
雨あとの光ひびける樹々の中揉まるる吾も木の葉のにおい
新藁のにおいの如き風吹くと想えたちまちうつつに紛る

我々は、日常の生活の中で、感性の中を閃光のごとくよぎる何かを、瞬間的に感じることがある。そしてその正体が何であるかを捉えることなく過してしまふ。ところで、そういうものにこそ、案外、人間の本質的なものが潜んでいるのではないかと考えられる。

小笠原氏はそういうものを捉える優れた感性の所有者である。であるから、氏の作品の大部分は、人間の心理の中を閃光のごとくよぎった感性、又は感性の中をよぎった心理の描写によってなり立っている。そして、それは短歌独得の内在律と外在律の集約をなしているといえるであろう。

引中千賀子

紙の上の孤独な対語重ねつつまた年終る鐘の音聴く
言い切りて一しおさびし背面をしばしやさしく包む没り陽は

軽ろやかに樹々に閃めく陽よ風よ心自在にひらかむとする
伝いくる心哀悲に似つついて樹皮厚き老樹の幹に触れいる

引きかすよりなき笑顔そこよりは視覚届かぬ盲点として詩人は
感動の創造者であるだけでなく、言葉の魔術師でなければなら
ない。

コロニア歌壇では、弘中氏はその数少い言葉の魔術師の一人であ
る。その作風は、感情の起伏を中心にして知的衝動が求心的に回
転するといった、近代人の一面を描写することに特にすぐれてい
るようである。自己と背景との遠近法による描写は、単に語彙が
広いとだけで片づけられるまうな表面的な性質のものではなく、
言葉の魔術とっていいであろう。

陣内しのぶ

果てしなき拵り恋うゆえに擦りすりて行くわれの蛇身か
執念の揺らぐ淋しき日も経しと小さき耳朵の片側燃ゆる

偶然を信ぜぬ長き咀嚼にて溶けざる一つの言葉確かむ
告げ合いて埋むる隙の一襲に残されて暗し夢の部分は

語尾にまだ続く言葉は持ちながらその淋しさに唇は閉ず

コロニア歌壇で、観念形態と感覚形態との同時性を求める作品
があるとするれば、それは陣内氏の作品だと思われる。別の面から
いえば、自我と非自我との対決の場の追求ともいえる。もう少し
いい方をかえれば、一人の自分ともう一人の自分との相乗作用に
よって起るドラマの追求ともみることができるとは。したがって、そ
こからは人間の深部に棲んでいるところの美醜が量感をもって

迫ってくる。とかく、トリビアリズムが短歌を袋小路に追いこもうとしている現今、氏の作風は広さと深さが約束されてしる。

佐藤博三

はつ夏の街うねり行く運河みちわが裡の亀裂にそそぐ音する
森はてし空に浮きたるビル街に予感のような陽がそこに射す
つぶやきの低く聞こゆる草原にふり捨てし冬の幻が頭つ

絶えずわが心に触るる釘ひとつ光りいて傷はふさがらぬまま
幻聴のいずこかに聞こえ抽象の夢ひろげゆく古代紫

リアルとは何か、という問はあまりに素朴であるようである。しかし人間の心理の深層にまで立ち入り、その深層において、感性と知性が捉えたところのリアルとは何か、と聞かれると、リアルと考えていたものの実体が、必ずしも具象が与えるところの印象そのままの形ではないということがしばしばある。いや、そうした現象の奥に蔵されているものにこそ実体性があるのではないか、という考え方は当然生れていい筈である。佐藤氏は常識をのり越えたところにある、というより、常識の名のもとに覆われているものの実体を捉えようとしている、と思えるのである。ここから生れるものは未知数である。しかし、もし新しい次元を求めらるならば、常識に対する挑戦も必要なのである。それ以外に短歌が芸術性を保持する道はないであろう。

以上、五氏の作風と将来への見通しや期待について、ごく簡単に考察してみた。勿論、コロニア歌壇の潮流を動かしているのがこの五名に限られているというわけではないし、また代表者であ

るというわけではない。また引例作品が作者の代表的作品という意味でもない。しかし、もしコロニア歌壇の潮流の中から代表的作者を選ぶとしたら、誰が選んでも、右の五氏の名のもれることはないであろう。

時間がないために、実作者を中心に話を進めてきた。しかし、その他に実作者以外にも歌壇の潮流を動かしている人々もある。また後輩指導の面から一つの潮流を作っている人々もあるであろう。不幸にして、それらの人々の活動状態及び、歌壇にしめる位置についてふれることができなかった。

しかし、先にのべた五氏の作品なり作風なりを鑑賞すれば、どういう次元を求めて動いているかの一端はうかがえると思うのである。

コロニア歌壇の主潮流とは、概観すれば、以上のような状態にあると、私は考えている。

註Ⅱ本文は去る十一月十七日の研究会で発表したものを適当に書きなおしたものである。

詩

詩に就いて

横田 恭平

詩的という言葉がある。詩のようなどいう意味であろうが、この言葉はそれ自身すでに、詩というものは特殊な美を含んでいるということをはっきり表わしている、しからばその特殊な美とは一体どんなものか。

一篇のすぐれた詩篇に接して、読者はまず快美な衝動を受ける。それはどこから来るのか判らない。情緒や気魄は詩の全部に溶けこんでいるのだ。描くイメージの美、色彩感、対照の美、適切な修辞の美（美辞と異なる）、視覚にうったえる文字の美、適当に思念のながれを截る空白の美、等々。それらの美は、相共に牽きあい、交わりあいそして最後のものとして、実に漂茫として指し示すことの出来ない美をつくる。詩とはそうした美をもつのだ。詩人によって創造される美である。

詩人は美を追跡し、それを把握し、それを言葉に表現して即ち一篇の詩となす。

その詩を読んで、詩人の感じた美をそのまま感ずる人はある。少し感ずる人はある。なにも感ぜぬ人はある。それは読者その人の感性の相違、または自然観、人生観、社会観の相違によるもので、如何ともしがたい。

現代の詩は大いに主知的となった。

イマジストは、詩から音楽性を追放し、言葉を粉飾しない。明確な辞句を使用して、思惟思考のイメージ、即ち心象が描く美を創る。詩の基盤をなすものは、思想あるいは論理である。

イマジズムは現実主義であるが、私などは現実の事象から飽くことなく詩美を摘発する、即ち現実主義の方だが、音楽性即ち韻律というものは、それにおぼれてはいけなが、詩にはやはり適当に存在すべきものと考ええる。

そして、詩の本筋はあくまで、情緒を抒べる、即ち抒情にあると思う。しかし抒情の基盤をなすものはやはり思想あるいは信念でなければならぬ。

なぜならば、個々のいづく人生観、社会観、即ち思想、信念に基いて、一つの事象に対して個々の携え得る感情は必ず異なる筈である。しかし詩は論文でも評論でもない。一つの芸術であるから思想はまる出しではいけない。情緒の中に溶けこむべきである。

私はまた、詩に於ける暗示性、連想性を尚ぶ。私はひらめく詩、たち裂く詩、衝撃を与える詩を欲するが、そういう詩はかならず、思想の基盤を有する内的衝動によると信ずる。

詩は巧むよりも巧まざるもの、おのずからなるもの、そうなるのと、詩以前というものが重要であると思わねばならない。

自分のことを言っては恐れ入るが、私は年来抵抗の詩ばかりつ

くつて来た。

美文めいた詩語を嫌い、甚だごつごつしたもので、そういう好みにも抵抗思想があらわれていたのであろう。しかしあくまで抒情の生む詩美というものを確信するものである。そして内律の存在をも。

散文にも、また吾々が平素取交わす言語にも、おのずからリズムがある。

すべて、ながるるもの、過ぎるものにリズムはある。風、水流、人の歩み、犬の歩み、競走、自動車の疾走。詩の内面の深さにあるものは、思念、意識である。思念、意識のながれにリズムはある。

コロニア文学に載る、藤田勇氏の作品のような詩にも、リズムはある。彼はその意識のながれの途中に、大きな石を処々に布置し、リズムを破壊し、また生起せしめる。こういう詩も面白いと思う。

しかし、思想性や社会性のある詩だけが詩であるわけではない。詩の魂をもつものにとって、詩美というものはあらゆる事象に見出すことが出来る。人は詩感のひらめくままに、そこに触発する情緒を一篇の詩に表現すればよい。

小 扇

津村信夫

指呼すれば

国境はひとすじの白い流れ

高原を走る夏季電車の窓で

あなたは小さい扇をひらいた

この詩を四季派のアンソロジーの中で見出したときは、じつに鮮明に詩感を焼きつけられた。しかし二回三回読むたびに、大いに色があせた。とはいえ、こういう詩はそれでいいのだ。

思想の基盤をもつ抒情詩とは、ではどんなものか。卑近の例として、私自身の古い詩をあげてみよう。

こころなきものを

こころなきものを樹木というや

こぬれはたかくしてなごめるふりを

ゆうべの空にうつしみよ

むらさきがるその空に

藤たけくしてなみだながるる

この詩の発想の根底をなすものは、風神即ち万有神の思想である。この思想は、私の自然観（人間社会をも含めて）の根本をなすものだ。私はこの思想をもたない人は、自然をうたう資格のない人だとさえ考える。それはさて、二十才台の時につくったこの詩が、私自身にもまだ色あせて見えぬ、古い詩型ゆえに少し語呂

のよすぎるのが欠点だが、まだ読むにたえそうなのは、やはり根底に思想があつて、それが情緒化されているからであろう。

西条八十は思想性のない詠嘆調の詩ををたくさんつくった。主に恋愛と別離、追憶の詩であるが、そういう詩ばかりつくっているうちに、後年それなりに寂びた、いい詩をつくったから不思議である。私が青年時代に、第一書房版の彼のものすごい豪華な詩集からひろって暗記した次の詩なども、思想性はないが、やはり純粹ないい詩である。

パリ哀唱 西条八十

日ごとに馴れぬ 靴はけば

足のおやゆびの ひそひそと

きょうもいとしく いたむなり

青葉のパリの 町はづれ

みちべの石を 蹴るときも

わがふるさとは 遠きかな

ああくもり日の しづかなる

セーヌの岸を ゆくひとよ

こはあるまじき 日の本の

きみにも似たる　うしろかげ

しからば、詩の発想の基盤をなす思想とは何を指すか。それは
拠つて以て行為を律する精神的の把握である。要するにその人の
人生観、生命観、宇宙観のようなものである。それはまた不動の
ものではない筈だ。即ち思想の対象となる社会現象はつねに変転
し、さらにまた、個人の思想あるいは信念はつねに自己否定によ
り、揚棄せられて発展すべきものである。言いかえれば、思想
は不断に形成されつつあるものである。

現代詩は、批評の詩、抵抗の詩と言われる。ところで、思想が
なければ抵抗もない。自覚せる行動もない。実践もない。しかし
て抵抗こそ次の世代をつくる素因を孕む。即ち私は現代詩を予言
的立場に置くものの一人である。

まことに、詩人は時代の産物であり、時代を産むものと言うべき
である。

自我の自覚をもち、その自我を社会の中の個として認識するも
のは、すでに拠るべき思想の持主である。思想は行為にコレスポ
ンデする。文学的表現という一つの行為、特に詩作する場合、思
想はおのずからその抒情の中に、即ち表現される情緒の中に、香
りのように溶解していることは自明である。

読者はその詩篇の漂茫たる詩美にうたれると同時に、ほとんど
無意識にその奥がにひそむ思想を感受する。自身の場合を例にす

ると、私は若い頃読んだタゴール自身のベンガル語からの英訳詩から、すべて単純なるものこそふかい美をひそませていることを思い知らされた。また野口米次郎の詩によって凡神的思想を確実にした。余談になるが、萩原朔太郎の「月に吠える」「青猫」は、現代の詩人に実に大きな影響を与えた。彼の虚無感に富んだ詩篇は、若い多感な、所謂近代知識人の嗜好に叶い、多くの追随者を出した。

彼をのりこえた者も多い。蔵原伸二郎ははるかにこえている。即ち虚無だ、虚無だと怒号するだけの域を脱して、無あるいは無限大というものをつきつめていって把握している。

私自身の場合は、彼の詩に接したのは、すでに虚無を通過して存在の価値を追究していた時なので、非常に抵抗をかんじた。しかし抵抗をかんじたということは、そもそも彼の詩から何ものかを感じとったということに、異議をもつものでない。朔太郎は詩の音楽性の最後の擁護者だなどと云われるが、その思想性によって、詩は現代に於て読むに耐えると思う。

詩が読者の精神内部に影響をおよぼすことは予想外である。愛国詩や、叙事英雄詩のような特にそれを狙うものは別として、私などは若い頃、いい詩を読むといつも涙をながしたものだ。

それは、その作者のこころの本質的なものにふれるからであろう。それゆえ私は詩をつくることは、これを為すに足る立派な男児の仕事だと思っている。

ところで一つの詩を十人が読むとして、そのほとんど全部が詩感の享受の仕方がちがうということは前に述べたが、作者としてはそれはそれでいいと考える。すくなくとも何等かのエフエクトをその読者の精神に与え得たということで、作者ののぞみは達せられる。

即ち作者の「私は斯く思う。斯く感ずる。」という主観は、読者自身「私は斯く思う。斯く感ずる。」という信念に触発して、さらに新たなる思想、信念を内包するものに発展すると考えられる。また読者がある詩に抵抗を感ずるということも、すでに詩の放つエフエクトを受けたと見るべきで、それが詩の内容する思想への反撥、あるいはその表現方法への拒絶のどちらにしても、読者の内部精神にあるいは詩法に、異質のものが生起すると見られて、これまた作者ののぞむところというべきである。

自我の自覚は、おのずから思想もしくは信念を携えしめ、そこから更に、希求、憧憬、焦燥、批判、諷刺、憎悪、決意等詩に托し得る感情及至情緒が生れる。

情緒を誘発する感覚、現代詩人がメタフォアの技巧を用いて形象に表現する瞬間の感覚のようなものも、思惟、思考が伴わなければ盲目である。

恋愛詩のごときものも、思想の制約を受けて内容に差がある。古い時代に於ては、好ましいとか嫌いとかの大まかの感情をおお

らかに流露感を以てうたったものだが、現代では、こういうものにも自己のもつ社会理念が交錯してくる。そして出来るだけ感情をおし殺し、しかしてあふれしめてうったえてくる。

思想性を有する恋愛詩の一例をあげてみよう。陣ノ内宜男氏訳
中国現代詩選集より

どうして彼を好きなのだろう

黄 雨

どうして彼を好きになったのだろうか彼が、まっ赤に燃えた炉の
焰に照らされて千八百度の高温のそばで沸騰する青味を帯びた鋼
の熔液を凝視しているときわたしの目は彼に釘づけにされて一時
もはなされない

彼が注意ぶかく 密封した炉門をひらぎ

ギリシャ神話の英雄のように

噴出する鋼珠の間からからだをのりだして

灼熱奔流する鋼の熔液に対して微笑するときわたしの目は彼に
釘づけにされて一時もはなれない

彼が「黒色冶金学」をひもとき

闇の夜、険しい山路を探索するかのよう

根つめて一字一句をたどり

科学の高峰によじのぼろうとするとき

わたしの目は彼に釘づけにされて一時もはなれない

どうして彼を好きになったのか判らない

彼は言う　自分は一塊の礫石にすぎない

鉄の熔液と同様に鍛えられて成長してきたと

彼は自分の生命より鋼鉄が好きだ

わたしは彼がいとおしい

彼が鋼鉄を一途に愛するように

人間がもし永遠に生きるものであるとしたなら、人生はいかに単調で退屈きわまるものになるだろう。しかし人生はみじかい。そしてそれゆえにこそうつくしい。いやうつくしいものに吾々がせねばならない。

私は存在を無のとなり位置せしめる。有と無は、私にとって鏡の両面である。ゆえに、存在即ち現実を把握するには、無を把握する以外に方法はないと考える。これは情緒の問題になる。

現実の万有について、いかに科学的知識、哲学的認識をもち得ても、そのことで現実を把握したとは決して言い得ない。把握とということの決定権は、ただ情緒だけがそれをもつのだ。

現在、私の詩の方法はこの觀念に立脚する。社会思想の面から言えば、無に立脚する思想は、必然的に、実存思想につながると見る。しかしこれに就いてはつぎの機会にゆずって、自分の詩法を次の詩に示してみよう。

詩法

白い雲が

頭上を逝く

無限の とある一齣をかがやき過ぎるもの
無のうた！

つまり

存在はそれ自身

茫洋たる無のひろがりの中に建築された
明哲な美学だ

生命はながれる

否、万物はながれる

うごく

過去は現在に集積し

現在は未来を孕む

孕むものはうつくしい

うごくものはうつくしい

ひとよ

空想を天翔けしめて

超越の詩を成せ

ひとよ

もうろう秘密の境に

そこはかと捉えがたい色調を追え

私の詩はそこにはない

私の方法は、過程の一瞬に於て

無限を奪うことを試みる

その切開面に

孕み、ながれ、うごくものに精神をおよぼし

そこに融合しきたる詩美を

鮮明に表象する

おかしな話だが、こういう立場から一本の道路を見るととき、なんと云えぬ詩美をかんずる。

道路こそ、人間同志がお互いに持ち合う愛情とか希求とかを、なんのうたがいもためらいもなく表象するものと思われ、道路のつながるはるか彼方のいろいろの人生とその歴史、その未来を思うのである。

道路をながめていると、高山幽谷の所謂絶景も見たくない。思えば私はむかしから道路の詩ばかりつくってきたような気がする。

しかしこのことは私の思想から来るもので、私は決して他にこの思想を押しつけるものでない。

他の人は他の思惟と情操をもって道路を見るだろう。そしてそれによって詩を書くだろう。思想とか観念とかは、その人ごとにみな異なる。文学は各自が各自の個を展開して表現すべきである。

そしてその表現方法も、全く各人の自由で、これを規制することは出来ない。

ブラジルに日系人六十万、たとえ使い馴れた日本語を以てするとも、世界人の広い視野に於て、各自のオリジナルの手法で自由に奔放に、人間開放の文学を詩を書く人が出てもいい頃だと思ふ。いやその可能の予感のようなものを私はいま持っている。

いかなるイズムにもとらわれず、自由に奔放に詩をつくってそして死んだ男に、山之口獏と高見順がある。

天 山之口獏

草にねころんでいると

眼下には天が深い

風

雲

太陽

有名なものたちの住んでいる世界

天は青く深いのだ

みおろしていると

からだがおっこちそうになってこわいのだ

僕は草木の根のように

土の中へもぐりこみたくなってしもうのだ

天

高見 順

どのへんから天であるか

鳶のとんでいるところは天であるか

人の眼からかくれて

ここに

静かにうれてゆく果実がある。

おお その果実の周囲はすでに天に属している

いかにもつまらぬことを書いているように見える作品である。
だがそうでない。その人にとってはじつに重大なことを、さりげなく言っているのだ。

現代詩はこうした性格をもっている。

最後に、ウイリアム・シェリーの言葉をしるそう。

「詩人はまず哲学者である。

画家であり、音楽家であり、彫刻家である。

時代の産んだものであり

時代を産むものである。

それから、も一つ。これは、だれが言ったという言葉ではない
が穿ち得ている

「詩論は、ことごとくドグマである。」

創作

真夏のできごと (42枚)

杉村志朗



(一)

青年は、寝台を兼ねた長椅子に、身をよこたえて、考えにふけていた。彼の顔は、こけて眼の下には、黒い隈が浮きでている。それに、ぼさぼさの頭髮、濃い無精ひげが、まるで病人を思わせた。ただ、大きく見開かれた双眸だけが、鋭い緊迫感をただよわせていた。

青年は、この二、三日ろくに睡眠をとらず、水以外なにも口にしていなかったのである。

半地下にある、天井の低い小部屋は、汗と垢の臭が、むっと淀んでいた。歩道と同じ高さに鉄枠をはめこんだ小窓があり、外の熱気と騒音と埃を吸いこんでいた。小窓に面して一對の小机と椅子がおいてある。机の上には、読みさしの歴史書、ノート、ギターの楽譜、それに歯刷子、石鹸などが、いっしょくだに放り出されである。横の壁にそって、古本が乱雑に積みかさねてあり、わきにギターがたてかけてある。出入口の扉の横に、古ぼけてガタの

入った洋服箆笥が、あやうげに据えられている。これだけのもので、部屋は、足の踏み場もない。一、三のものを取り除いたら、監獄の独房といってもよい。

青年は、この一年間、この穴庫に閉じこもり、食うや食わずの日を送り、東西文明の本質に思念をこらし、この両者がどのような影響しあい融合すべきか……、というような問題に就いて思い悩んできた。

だが……、いまは、すきつ腹に責めさいなまれていた。何はさておいても、すき腹をなだめなければならぬのであった。これには、彼が頭の中にえがく、東西文明の融合に対する思念とはちがって、何ひとつ、よい案が思い浮かばなかった。だが、青年にとっては、ひどく厄介で面倒な問題であった。というのは、肝心の金が無いのである。

青年は、長椅子から、もそつとおきあがった。何を売って飯代にしようと、思案しながら部屋の中を見廻した。金になるものは、とつとつに売りつくされていた。残っているのはギターだけである。それは、今更さがすまでもない。金になるものは、ギター只一つ、ということを知っていた。本当は知るのを恐れていた。大都会の片隅に息づく貧乏と孤独の日々、彼を慰めてくれたのは、このギターの柔かい音色だけだったのである。

青年は、ギターを手にとって、そつと糸をはじめてみた。そして心迷った。だが迷ってみても、結果は同じであった。ギターを売るよりほかに、金を得る手段はなかった。

友人に、金を無心するなどということは、はじめから相談にならなかった。友人はおろか、知人さえ、このサンパウロ市内にはなかった。それも、青年が、人間嫌いの為ではなかった。こんな、もぐらのよう

な生き方をしていたので、他人と知り合う機会がなかったのである。たまたま、その機会があっても、相手は、青年のかもしれない出ず異様な雰囲気を感じ、敬遠するか、馬鹿にして取りあわないかであった。

青年は、まともに相手にされないということで、自ら求めたわけでもないのに孤独な世界におち入っていたのであった。

青年は、ギターを手垢のついた布製のケースに入れ、小脇にかかえて部屋を出た。台所の裏へ通ずる階段を忍び足でのぼった。台所には誰もいなかった。

だが、むこうの居間からは、ミシンを踏む音がきこえていた。青年は、顔をしかめて、ちよつと立ち止った。そして今度は、やけに足音を荒くして台所を通り抜け、わき目もふらずに居間を横切った。玄関の扉に手をかけた時、ミシンを踏んでいた主婦に呼びとめられた。青年は、さも意外だ、と言うような表情でふりかえったが、主婦がなぜ呼び止めたか、よく知っているのであった。

「部屋代、入れてくださいよ。もう三か月もたまっているんですから……」

「ああ、部屋代ですか、今月末に清算しますから御心配なく。」

「なにか、当てでもあるんですか。」

「ええ、日本から金が届くはずです。」

青年は、そらとぼけていた。主婦は疑わしげな眼差しで青年を見た。

青年は、自分の返答が、信じられていないことは知っていた。これまで、何度となく、溜った部屋代のこと、主婦から、くどくどと催促され、その都度、いろんな言い訳をしまかしていたのである。いまでは、気のきいた口実も種切れになっていて、こんな見えすいた嘘をつかねばならぬ破目におちいつていた。

「いい若いもんが、ただ部屋の中でごろごろしているのはよくないですよ。まともに働かさえすれば、生活に困ることなんか、ないんですがね。もういい加減に、心を入れかえて、職を見つけたらどうですか。」

主婦は親切のつもりで、おだやかに、口をきいた。

だが、青年には、それが気に喰わなかった。

「そんなことは、ぼく個人の問題です。他人から、とやかく言われる筋合は無いと思いますね。」

「あなたの為に、わたしたち一家は、ひどい迷惑をうけているのですよ。」

一瞬、青年の蒼白い顔が紅潮した。青年は、主婦の言い分の正しさを認めざるを得ず、恥かしさに、穴にも入りたい思いであった。と同時に、傷つけられた自尊心が、不当な怒りをかり立てた。

「それでは、ぼくが強盗殺人をしても、部屋代さえ払えばいいと

言うのですか。」

二人の視線が激しくぶつかりあった。やがて、主婦の目に動揺がきざした。彼女は怒りとも悲しみともつかぬ歪んだ顔を、ふいとそむけた。

「では、まあとにかく、月末まで待ちましょう。」

主婦は、こうつぶやくと、逃げるように、ミシンの方へ戻っていった。青年は、これみよがしに、肩をいからせ、胸を張って、ゆっくりと玄関の扉をあけた。

(二)

青年は、外へ出た。とたんに、西に傾きかけた太陽の強い光りをまともに受けて、軽い目まいを感じた。書年はしばらく眼を閉じて壁にもたれかかった。

米穀、玉葱、じゃがいもなどの問屋街であるこの界限は、地勢が低く、おまけに、いつもごみごみしている。昼過ぎの太陽が照りつけると、まるで蒸し風呂にでも投げこまれたような暑さであった。道端に捨ててある腐ったじゃがいもや野菜の山から、強い臭気が発散している。それを乞食の群がひっかきまわしており、問屋の前には大型のトラックが列を作って止まっている。半裸の黒人人夫が、汗を光らせながら、荷を積んだり、おろしたりしている。

青年は、この見馴れた光景を無表情に眺めながら歩きだした。流れおちる汗と息切れに背をよじるように振りながら歩いていっ

た。洪水のように自動車の流れるメルクリオ大通りを、やっとなり、ドン・ペドロ二世公園にたどりついた。

青年は、泰山木のつくっている木蔭のベンチに腰をおろして、ひと息ついた。乱れた呼吸がおさまるにつれて、主婦とのいさかいで昂っていた気持も静まっていた。

瞬間的な感情に支配されて、一人の貧しい同胞の主婦を、愚弄したことが、深い後悔となつて、青年の心にくい入った。青年は、主婦やその家族と、親しくつきあつてきたわけではないが、その苦しい家庭の事情は知っていた。

主婦の夫というのは、以前奥地で、ちよつとした農園を經營していた。何時からか賭博に凝つて、農園も人手に渡り、あまつさえ莫大な借金さえ残した。

そして、妻と十九才の娘を頭に九人の子供とをすてて、いづこでもなく出奔したとのことである。残る家族は土地にも居たたまれず、サンパウロ市に夜逃げをしてきたという。

主婦は夜の目も眠らず内職に精根をつくし、長女は、商店員として働き、かつかつの生活を支えてきた家族が居間に雑魚寝してまで半地下の部屋を他人に貸しているのは、いくらかでも家賃の負担を軽くするためであった。主婦一家は、貧しいながら、信じられないほど仲むつまじく暮していた。母子の口争いさえ一度も見ることがなかった。長女は日曜日でも遊びに出ず母親の内職を手伝っていた。彼女は、特別に器量よしというわけでもないが、目立つ程の醜女でもなく、ごく平凡な娘であった。

青年は、ときどき、彼女を見ると思った。この女は、人生で最も多感な、そして夢多い時代を、いったいどう思つて生きているのであろうか、と。

長女のほかに、もう一人、青年の注意を引いた者がいた。それは小学校に通っている男の子であった。

この子は外の兄弟に比べて、きわだつほど伶俐な顔だちをしていた。ひどく勉強の好きな子で、いつも教科書とノートに向かつていた。母親も、この子だけは、将来を見込んでいるのか、日本語学校にも通わせていた。

青年自身も、貧しい家庭に生まれ育ってきたのであった。だから、不平も言わず、みんなが心を合らせて、地道に生活と斗っているこの一家に、内心敬意さえいっていた。それにもかかわらず、僅かな部屋代を溜めて、一家を苦しめ、あまつさえ、素直にあやまるべきところを、逆に罵ってしまった。それを思うと、書年は、やりきれない思いに胸が閉ざされるのであった。

(三)

青年は、木蔭から腰をあげた。公園を縦断して流れるどぶ川の橋を渡った。どす黒くよどんだ水からはたちの悪いガスがたちのぼっており、橋桁から下をのぞくと川べりに野糞のあとが、点々と見える。

その傍で陽気な男女の浮浪者が、石油缶の中で火をたき飯を煮ていた。

青年は、ジエネラル・カルネイロ街へ出ていった。

両側に並ぶ洋品店や雑貨店は、クリスマスをはかえた買物客で、ごったがえしていた。レコード屋は、クリスマスの唄をがんがんで流していた。青年は、市民たちの欲望がかもしだす活気を、まるで別世界から来た者のように眺めながら歩いていた。ボア・ビスタ街へのぼりきるまで、何度も突きとばされたり、怒鳴りつけられたりした。おりから銀行のひげ刻で、さまざまな階層の老若男女の群れが、それぞれの目的や関心を刻みこんだ顔をして歩いていた。

彼らには、その一人一人に、仕事があり、仲間があり、そして帰っていく家庭があった。誰も彼も、堂々と胸を張り、自信に満ちた足どりで歩いていた。

青年は、生気にあふれたそれらの人々を、美しくも、羨ましくも思った。そして、その群像の中に青年は、まぎれこんで行った。だが、誰一人、この憔悴しきった、みすばらしい日本人に、注意の目をむける者はいなかった。青年は、カテドラルのわきを通り、ジョン・メンデス広場を横切って、日本人街へむかって歩いた。

日本人街は、ゆるやかな坂街になっている。その両側には、日系のいろんな商店、旅館、映画館、食堂などが、軒を並べている。日暮れ刻には、おでんを突つきながら爛酒を一ぱいひっかけることもできる。この通りに、古い移民たちは郷愁を覚え、新来の者は、故国の延長を見い出すのであった。

青年の前を、地方から出てきた色の黒い家族連れが、きよろき

よろしながら歩いている。むこうの街角には、細身のズボンをはき、頭髪を短く刈りこんだ、眼つきの鋭い新来の青年たちが立話しにふけている。その少し先には、顔に似合わぬ派手な身振りを混ぜて、二世の若者たちが、何か打ち興じている。

これら日系人にまじって、中国人、朝鮮人などが歩いている。黒人や白人も歩いている。青年は、つと一軒の店にはいった。店内には、さまざまな日本品が所狭ましと並べてある。腹の突き出た年配の店主は、低頭して、一人のブラジル人を応待していた。

その客は、好奇心にみちた質問を發し、品物をいじくりまわしていたが、何一つ買わないで出ていった。

入れ替わりに、青年は店主の前に出た。店主は、それまでの愛想笑いを急にひっこめ、青年をじろりと、うさん臭い眼で見た。

「これを引き取って貰いたいんですが。」

青年は、ギターをケースから取り出し、バルコンの上においた。店主は、ギターを手に取って、品定めをしていた。そして、また青年の顔を見なおした。

「きみ、こんなものは、さばけないよ。正直なところ、持って帰って、しまっておいたほうがいいと思うね。」

店主は、渋い顔をつくって、青年が泣きついてくるのを待った。だが、青年は、黙ったまま、店主を見つめていた。

「きみは、金に困っているのかね。」

店主は、少しの軽蔑と優越感を示した。それでも、青年は、何の反応も示さず、黙っていた。

「ギターなんてものは、この不景気で、誰も見むきしないね。おまんまの方が、歌やおどりよりは先だからね。まあ、ギターなんかかかえこんで、お上品にすましこんでいるのは、君くらいのもんだよ。」

「で、引き取るんですか、引き取らないんですか、はつきりしてください。」

薄笑いを浮かべている店主に向い、青年は結論を急いだ。

「もちろん、値段しだいでは、引き取らないこともないがね」

「いくら、出すんです？」

「まるつきりただとは言わないよ。」

「では、いくらです。」

店主は、急に笑顔をつくった。

「お互、外国ぐらしの日本人同志だ。七コントでどうです？」

店主は、これで話をついたと、一コント札七枚を取り出して、バルコンの上に並べた。青年は、それをわしづかみにすると、ものも言わずに店を出ていった。

青年は、馬鹿げている程の安値であることは知っている。しかし、彼が、我慢できなかつたのは、その値段ではなく、取り引きにかこつけて、店主と自分が、強者と弱者の関係におかれたことであつた。

青年は、店主のこざかしそうな顔に、思い切り唾をはきかけてやりたかつた。だが、金を手にする為には、その屈辱も、じつとこらえなければならなかつた。その代償として、ようやく、二、三

日飢餓の心配からは解放されたのであった。

青年は、さつそく、近所の中華料理店へかけこんだ。むさぼるように焼そばを食べた。たいらげたのちも、お茶のおかわりを重ねて、すぐには腰をあげなかった。青年は、たまたま得た、この自由を、どのように有効に使ったらよいかと思案していた。彼は今、自分の気持ちひとつで、その札の数だけ、自由を行使することができると思った。実際には、使わなくても、ポケットに、それだけの金があることを確認するだけで、気分が軽々とするのであった。

部屋には帰りたくなかった。主婦と顔をあわせるのが、うしろめたい気持ちであった。それに部屋代を溜めたので、だいぶ前から、電気を切られていて、帰っても部屋は暗いのであった。

青年は、ひとまず、料理店から出た。だがどこにも行くところがなかった。あてもなく日本人街をぶらついてみた。映画館の前を通りかかると、中からぞろぞろと人が出て来た。ちょうど上映時間の区切りであった。何という気もなしに、青年は、入場券を買って内へはいった。

古びた、みすばらしい館内を暗い電燈が照らしていた。島倉千代子の唄う流行歌が、はりさけんばかりに鳴っていた。

客席は、まばらであった。とろんとした眼の老人たちが、固い木の椅子に、小さく腰かけていた。一日の仕事を終えても、帰る巢のない新来の独身青年たちが、時間つぶしに来ていた。みんな床にっもっている埃の中にはびこった蚤に攻められて、ぼそぼそ

と、足腰をひっ搔いていた。

レコードが鳴りやみ、場内は暗くなった。映画がはじまった。スクリーンには、東京の街を舞台に、健康で、澁刺とした男女の大学生が登場した。彼らは、温い家庭にまもられ、屈託なく、その実り多い時代を享受している。彼らは、学び、歌い、夏は海に、冬は山に、思い切りはねをのばしている。彼らの唯一の悩みは、恋にかかわるものだけである。

青年は、未知の国の物語りを画面に見るような気持ちであった。ちようど、銀行街の人々の中を歩いた時のように、自分を場ちがいな異邦人のように感じるのであった。青年は、街を歩いても、映画をみても、すべての光景は、彼の緊迫した意識とはうらはらに、平穏で、こともなく展がっていた。

青年は、再び、街に出た。すっかり夜であった。

が、まだ、昼の暑さが尾をひいていた。青年は、行き先のないまま人々にまじって、足を運んでいた。

さつき見た映画は、彼を追憶へとかりたてた。

もし、大学を途中でやめず、続けていたとしたら、自分はいまごろ、どうなっていたであろうか。いや、そんなことを、今更考えても埒があかない。たしかなことは、俺と仲間、権力者を相手に激しい闘争をくりひろげ、そして、遂に破れたのだ。身も心も傷つき、倒れ、俺たちの願いは、すべてむなしかったのだ。俺は、故国のどこにも、身の置き場がなかった。俺は、疲れ果て、一切の意欲を失った。

俺は、静謐にあこがれた。俺を誰一人知る者のない異国に放逐したかった。草深い田舎で、ひっそりと、つつましい百姓として暮らしたかった。

俺は、家族とも、学業とも、仲間とも、一切の絆を断ち切って、独りブラジルに渡ってきた。希望どおり、原始林にかこまれた開拓地に入ることができた。それは、素朴な生活であった。来る日も、来る日も、朝日と伴に起き、夕日と伴に仕事をやめて家に帰った。 昼の耕作に疲れた体は夜の深い眠りにいやされた。一日一日、それ自身で完結された時となって、考える余地もなく、流れ去っていった。

いまでも、おれは、忘れることができない。処女林の上に落ちていく夕日。爛熱した夕陽の壮厳さ！ が、たちまち冷涼の風が夜を運んでくる。 大気はしっとりぬれ、自然は、深々と生命の息づきをはじめ。

夜。静寂。土の上にたてる足音は耳にはねかえり、微風は鼓膜をふるわせる。ノートの上を走る。ペンのうめきも響きわたるような静けさ。その中で交わす自分自身との孤独な対話。

ギターを買ったのも、その頃である。爪先から弾き出される絃の音は心をひたし、 暗い夜の沈黙の彼方に埋められていった。かつてなかった牧歌的な日々であった。二か年は疾風となって過ぎていった。

そして、ある日、この長閑なアルカディアに、居たたまれぬ思いが、胸を突いた。激動する不安な時代のなかで、果たすべき自

己の役割りに対し、思念を注ぐ自覚が、鎌首をもたげてきた。矢も楯もたまらぬ思いで荷物をまとめ、サンパウロ市に移ってきたのであった。

そして、既に一か年が過ぎた。しかし、何時になつたら志を遂げることができるとか、それさえ見当のつかぬありさまである。

(四)

青年は、いつの間にか、サン・ジョン大通りに来ていた。どこを、どう通つてきたのかおぼえがなかった。

大通には昼をあざむくばかり、ネオンがきらめいていた。映画館や飲食店がたち並び、陽気な人の群れで賑わっていた。青年は、この華やかな雰囲気をさけて、薄暗い、人通りの少ない横道を選んではいっていった。それは、なじみの無い、名も知らない通りであった。ただ、軒かげをうろつく怪しげな女たちと、安ホテルが目につくだけであった。

青年は歩きつかれて、とあるバーへは行っていった。それは、短いカウンターと二組の卓子しかない陰気なバーであった。客といえば、一人のやつれた老人だけで、カウンターにひじを突き、もったいそうにビールをのんでいた。カウンターの内側には、肥満した主人が、手持ぶきたそうに、ぼそぼそ老人の話相手になっていた。

青年は、手近な卓子について、ピンガを一ぱい注文した。久しぶりに飲んだ一ぱいのピンガに、頭がくらくらするようであった。

だが、自分以外のものに身を委せるという、なんともいえない心地よさも味わうことができた。

しばらくして、青年は、暗い通りから、自分を見つめている一人の女に気がついた。女は彼の視線が送られてくるのを待っていたように、微笑を浮かべて、卓子に寄ってきた。

「ねえ、わたしにも、一ぱい　ごちそうしてくれない。」

青年は黙ったまま、見返した。

青年は、不意に眼の前に現われたのが、灰色がかった碧い眼をもった二十前の女であることを知った。

彼女は、小柄で、ほっそりとした体を、水玉模様の粗末なワンピースでおおい、明るい栗色の髪を短くカットしていた。そして、白いハンド・バッグを小脇にしている様子は、どことなく田舎育ちの野暮たさが感じられた。青年は、この女が、一見ある種の女とも、また只の女とも思われないので、そのあつかいに戸惑いを感じた。

「ピングをかい？」

「そうよ。あなたは、若い娘が、そんな強い酒を飲むなんて、みっともないと言いたいんでしょう。」

女はさぐるような眼で青年の顔をみつめた。それから、眼を伏せて、

「でも、わたしには、ピングをあおって、忘れたいことがあるのよ。」

「別にすすめはしないが、飲みたければ、飲んでいいよ。」

「ありがと。では、一緒にすわらせて。」

「ああ。」

青年と向いあつて椅子に腰かけた女のために彼はあらたにピンガを注文してやった。女は顔をしかめながら飲んだ。するとすぐ頬が紅く染まっていた。

「ねえ、あなた、日本人、それとも中国人なの？」

「日本人だよ。それが、どうかしたのかい。」

「いいえ。なんでもないの、わたしには、どちらでも同じことよ。」

「じゃ、きみは、どこの人間だい。」

「両親はポーランド人なのよ。ねえ、パルメイラスというパラナ州の小さな町、知っている。」

「いや、知らないね。」

「わたし、そこで生まれたの。」

「田舎がいやになって、出て来たって、わけだね。」

「そうじゃないわ。いまも、家のものは、あそこにいて、百姓をやつてるわ。わたし一人だけ、みんなと違った道を歩くことになってしまったのよ。」

きゆうに、ポーランド女の顔がくもった。彼女は、青年に、酒のおかわりの許しを求めた。彼は、坐ったまま、あるじに向かつて、空のコップをさしあげ、手まねで、合図した。あるじは、酒びんをたずさえて、カウンターを抜け、二つのコップに、白い透明な液体をみたした。

さつそく、ポーランド女は、一口ふくんだ。それから、たて

続けにあおった。青年は、なにか、いわくありげな女の身の上に、強い好奇心を覚えた。しかし、無表情のまま、黙って、コップを口に運んだ。

そうやって、二人は、しばらくのあいだ、無言で向かいあっていた。やがて、ポーランド女は、酔うにつれ、感傷をさそわれ、遠くをみる眼付きで、ゆっくりと、かみしめるように語りはじめた。「いまから思えば、両親や兄たちと一緒に、田舎で静かに暮らしていたときが、一番仕合わせだったわ。でも、そのときは、それに気がつかなかったのよ。そして、別なところに、別な仕合わせが待っているのではないかと、いつも秘そかに夢みていたの。もつとも、わたしは、三人の兄のほか、末子の一人娘に生まれ、両親は、目に入れても痛くないほど可愛がってくれたので、それまで、不仕合わせだったわけでないの。だけど、毎日、牛の乳をしぼったり、畑を手伝ったりしながら、なんとなく、なにかを望む気持ちだったのよ。

あるとき、サンパウロから、アラブ人の若い男が大きな鞆にいっぱい着物を詰めて、わたしの家へ売りに来たの。ナジールといったわ。そのナジールは、真黒い髪の毛、太い眉、それに美しく輝やく黒い眼をもっていたの。彼は鞆をひろげて、あきないしながら、わたしに、ちらちら流し眼をくれ、ほおえみかけてきたの。わたしは、びっくりするやら、うれしいやらで、胸がどきどきし、ぽーっと顔が赤くなってしまったの。家の人に、気づかれないようにするのに、とても苦勞したわ。

ナジールは、わたしに、いろいろな服をみせ、そのうちの、気に入ったものを、着てみていいと、いうの。お母さんは、そんな必要はない。見るだけにしなさい、というの。だって、家には、そんなお金がなかったんですもの。それを、ナジールは、さかんに、着てみるとすすめるし、わたしも、そうしてみたかったので、お母さんは、しかたなく、うなづいたの。

わたしは、赤色のカーデガンを選んで、着てみたの。ナジールは、あなたのように、可愛い娘さんには、とてもよく似合う、とほめてくれるの。

お母さんが買ってくれないのを知っているから、すぐに脱ぎようとしたのよ。すると、ナジールは、無理におしとどめ、これからお近づきに、これをさしあげます。そのかわり、今後よろしくごひいきにお願いします。と、みんなに向かってにっこり笑ったの。はじめ、両親は変な顔をしたけど、ナジールがうまい具合に、気嫌よくさせてしまったの。

でも、結局は、その赤色のカーデガンが、一生、取りかえしのつかないような、高い値に、ついてしまったのよ。」

ポーランド女は、沈痛な面持ちで、口を閉じた。

青年は、依然として、表情を崩さず、黙っている。

彼女は、胸のうちに渦巻く思いを静めるために、しばらく手間どったのち、再び語りだした。

「ナジールは、帰りがけに、そつと、わたしに紙きれを手渡したの。さっそく部屋にかくれて読んでみたら、自分の泊っているホテル

で待っている、という伝言と、そのホテルの名と場所が書いてあったの。わたしは迷ったわ。でも、心はきまっていたの。いつも、待ちに待っていたことが、いま、やっと起こったような予感がしたのよ。だから、もし二人で逢ったのち、彼が切り出さなかつたら、自分から、サンパウロへ連れ出してくれと、言うつもりだったわ。わたしは、昼の仕事が終わり、夕方になるのを待って、なんとか、もつともらしい理由をつけて、町へ出かけることにしたの。そして、それに成功したとき、二キロの道のりは、心もうわのそらだったわ。ナジールは、逢うなり、俺は、お前が大好きだ。サンパウロで一緒に暮らそう、というの。わたしは、承諾の返事のかわりに、彼のさし出した腕に黙って抱かれたの。そうときまったら、一時も早く、家の人の手の届かないところへ、逃げる必要があったので、次のバスをつかまえて、クリチーバへ出ると、すぐサンパウロ行きの長距離バスに乗りかえたの。」

「しかし、もし、夫婦になるつもりだったらどうして、家出なんかしないで、両親の許しを得ようと、しなかつたんだい。」
青年が、ぼそつとたずねた。

「まだ、結婚なんか、許してくれないわ。かりにさせてくれたとしても、同じ植民地のポーランド語を話す男としか。」
青年は、眼でうなづいた。女は話を続けた。

「サンパウロへ着いてからは、部屋を借り、二人一緒にベッドに寝て暮らしたわ。一度妊娠したけど、ナジールのいいつけで、おろしてしまった。ナジールの家族は、田舎におり、そのうち紹介し

てくれると、いつていたけど、まだ会ったことがないので、どんな人達だか知らないわ。わたしは、好きな人と、水いらずで過ごせることで、もう、有頂天だったの。

ナジールは、一か月のうち、半分は田舎をまわって、あきないしなければならなかったの。それでわたしも一緒にいてまわって手伝ったわ。わたしには、新しい生活のなにもかもが、歓びのたねだったのよ。またたく間に、半年が過ぎたの。ところがある日、ナジールは、今度は、自分一人で旅してくる、といったまま、それっきり、姿を消してしまったのよ。今日は帰るかと毎日望みを託して待ったの。だけど、とうとう戻ってこないの。

そのうち、月賦で買いこんだ世帯道具は、払えなくなる。部屋からは追い出される、といった具合で、無一文になってしまったの。」

それから先のことは、話をきかなくても、青年にはわかったが、ひとつだけたずねてみた。

「男にすてられたと知ったとき、どうして家へ帰らなかったのかい？」

「わたし、帰ったのよ。でも、かえって、余けいな悲しみと、苦しみを味わっただけだったわ。」

「どうして？」

「わたしが、ナジールと手に手をとって逃げたことは、その翌日、家の者ばかりか、植民地じゆうに知れわたったの。父は、手塩にかけて育てた娘に裏切られた怒りと世間に顔むけできない恥のた

めに、一時は病床に臥しほどだったということだわ。

わたしが勇気をだして、やっとの思いで家へ帰ってみると、父は、ものすごい剣幕で、こう言ったの。"二度とお前の顔は見たくない。今更後悔して戻って来ても、もうおそい。お前は道をあやまったのだ。いったんあやまったかぎりには、その道を最後まで歩め。さあ、今すぐどこへでも消え失せてしまえ。"と、取りつくしまもないの。母はそばで、おろおろするだけだし、兄たちは口もきいてくれないの。わたしは、顔がふくれあがるほど泣いて、あやまったわ。それでも家の人は許してくれないの。自分の家へ帰りながら、水一杯飲まず、また、すごすごと、サンパウロへ戻ってきたの。もう、今日で、一週間になるわ。"

ポーランド女は、がっくり肩をおとし、力なくうなだれた。それから、ふいに、恥しそうにつけたした。

「わたし、こんな話を、あなたにするつもりじゃなかったのよ。」
「いや」

と青年は、短く、打ち消した。彼は、女の身の上話を、人間のいるところ、何時でも、どこにでもあるごくありふれた物語りに過ぎないと思った。それだけに一層の深刻さをも感じたのだった。青年は、今自分が、この女に、何もしてやれないことを知っている。るので同情もしないが、軽蔑もしなかった。ただ、そこに、悲哀に責めさいなまれ、誰かと分ちあわなければ、立っていられない、一人の若い女がいる、という事実だけを認めたのである。

青年は、なぜ、このポーランド女が、身の上を語る相手に自分

を選んだのだろうと思った。たまたま出くわしたからであるだろうか。それとも、彼女は、彼の中に自分との同類感を感じたのだろうか。あるいは、彼に好意を感じたからだろうか。いや、そのいずれでもないのかも知れない。

「ねえ、なに考えているの。わたしが、いやになったの」

「いや、そんなことない」

「じゃ、わたしを好き？」

「……………」

「あなた、これからどうするの」

「別に、予定なんか無いよ。」

「わたしも。」

しばらく、女は青年の顔をうかがうようにみつめていたが、やがて、思い切ったように言った。

「今夜、わたしと、一緒にしない？」

「でも、君にやる金ないんだよ。」

「ホテル代だけ払って……。わたし、お金いらないわ。」

青年は、返答に窮した。青年は、このポーランド女が好きでも、嫌いでもなかった。

「とにかく、ここを出よう。」

そういつて、青年は立ちあがり、勘定を済ませた。

女は白い歯をみせて、にっこりと、うなづいてみせた。

二人は通りへ出た。女は青年の腕に自分の腕をからませ、しなだれかかるようにして、歩いた。

「ひどく暑い夜ね」

だし抜けに女が言った。その声には、昔からの知りあいのような、親しい響きがあった。

(五)

部屋には、雨のしみた天井から、裸電球がたれさがっていた。その鈍い光りに、こわれかかった洋服箆筒と、二本のうす汚れたタオルが枕もとにたたんでおいてある黴臭いダブルベッドが照らしだされている。板で仕切られた壁は、あちこちペンキが剥げおちている。

この暑さにもかかわらず、通りに面した窓は、あたりをはばかって、鎧戸をおろし、固く閉じられているので、室内は息苦しいほどであった。

青年は服を脱いだ。女も裸になった。青年は、粗いシーツの下へもぐりこみながら、まぶしげに、女の黄金色のうぶ毛におおわれた肌を、しげしげと見た。すると、青年は、自分でも思いがけない欲情がむらむらと燃えあがるのを覚えた。ベッドに近づいた女を激しく抱き倒し、やわらかい頃から乳房のあたりにところかまわず接吻した。顔を肌におしつけていると、白人特有の強い体臭が鼻をついてきた。

それは、ますます青年を刺激し、官能のただ中へ追いやった。右手を背中から、ふくらんだ尻の方へずらしていった。女は身をくねらせ、あえぎながら、青年のなすがままにまかせた。

「明りを消して！」

「なぜ？」

青年は乳房にうずめた顔をあげないでききかえした。

「恥かしいわ」

しかたなく、青年は、枕元のスイッチを手さぐりにつかみ、女の顔を盗み見た。女は悩ましげに眼を閉じていた。だが、その表情は快楽のあげ潮に溺れているとは思えなかった。むしろ殉教に耐えているといった表情であった。スイッチを切ると、部屋は暗闇になった。しかし、青年の指先は、女の躰を正確にさぐり当てていた。やがて、二人はからみあった。

青年の男性は、正常に機能した。二つの肉塊は、汗にまみれながら、単純な動作をくりかえした。が、ことはあっけなく終わり、肉塊は二つにほつれて、人間にたちかえった。

女は、まだ眼をつむったまま、胸を波うたせているが、青年は、虚脱感にひたっていった。青年は暗闇にむかって、眼を開いたまま、じっとしていた。

「明りをつけていいかい。」

「いいわ。」

二人は枕を並べて、放心したように天井を見ていた。しばらくして、ふいに、女がいった。

「もうじき、イエスさまの、お生まれになった日ね」

「そうだな」

「そうだなって、あなたはクリスマスを知らないの」

「知ってるさ、でも、関心ないよ」

「まあ！ 罰あたり。そんなこと言うもんじゃないわ」

「あいにくと、キリスト教徒でないんでね」

「いったい、わたしたちの、ただひとつの神さまの外に、どんな神さまがあるのかしら？」

「神つてものを信じないんだよ」

「神さまのことで、ひとをからかうのは、よくないわ。」

「からかう？ 、ぼくがかい。とんでもない、真面目な話だよ」

女は、身をのりだして、青年の顔をのぞきこんだ。

そして、きっぱりと断定した。

「からかっているのではないなら、嘘をついているんだわ」

「そりゃ、また、どうして」

青年は、女の頑なさに呆れた。

「だって、わたしは、神さまなしでは、生きられないもの」

「ぼくには、わからないな」

「わたしは罪深い身だから、毎日神さまにお赦しを乞うて、お祈りしなければ、とても生きていけないの」

「きみには、神が必要だというわけだ。だがぼくは、きみと同じではないよ。」

「あなたは、自分を罪びとだと思ったことないの」

「あるね。だけど、それは神に、ではなくて自分の良心に対してだ。」

「人間は神さまによって創られたのです。だから、罪は神さまに、

なのよ」

「神が在ると思うからだよ。神がなければ、その罪もないわけだ」
「そんな話、わたしわからない。」

女は不服そうに話の腰を折った。そして、ちよつと考えていた。
「じゃ、あなた、これまで、悲しみや、苦しみをぜんぜん知らない
できたの」

「いや、数え切れないね」

「そんな時、どうするのさ」

「じつと、耐えるだけさ」

「それは、正しくない生き方よ。」

「きみは、また神を尺度にして、正しいとか正しくないとか言うんだ
だろう。だがね、人間の生き方では、正しいとか正しくないとか
は、自分自身の問題なんだ。一人一人の人間のそとに、客観的で
普遍的な正しい生き方なんて、あるわけないんだよ。」

「あなたは、なんでも、わざとむつかしく考えるのね。でも、あな
たの言うとおりでとしたら、どうなるの。ひとは、生きるために
は、何をしてもいいというの？」

青年は、返事をしなかった。青年の脳裡には、今日、いさかい
をした下宿の主婦、通りすがりに見た乞食や浮浪者の群、自分の
かたわらに居る転落の女、そして自分自身の姿、それらが入り乱
れてかけめぐっていた。

「そうだ。とにかく、人間は第一になんとしてでも生きることだ。
正しい、正しくないは、それからのことだよ。」

青年は熱っぽい口調で、言い放った。女は何もいい出さなかったが、眼を異様にきらきらさせて、じっと考えこんでしまった。

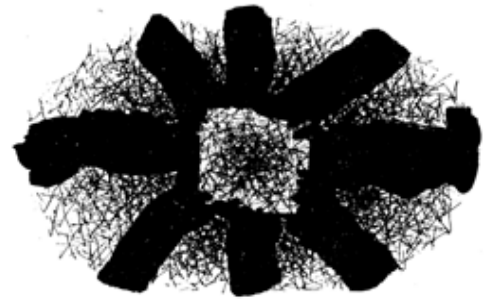
青年は、自分の身を売って生きる、この女のなかに、神聖で無垢な心を見いだした。いきなり、青年は強い愛情の発作に駆られ、まるで子供のように、女に抱きつき、その胸に顔をうずめた。そうしているだけで、十分に満ち足りた思いであった。また、今の自分の気持ちを、女にうちあけるこせもしたくなかった。

青年は、そつと、自分に言いきかせた。ホテル代を払っても、残りの金がいくらかあるはずだ。明日になったら、あるだけの金で、女と一緒に飯を喰おう。それで、また一文なしになってもかまわない。

それからのことはその時のことだと、……………。

青年の顔は、だんだんおだやかな微笑で、ほころびていった。そして、そのまま、かつて一度も味わったことのない、深い安らかな限りに落ちていった。

(完)



創作

日照り雨

(75枚)

川原奈美

日照り雨(75枚)

川原奈美

雨季というのに、最早二ヶ月余りも雨を見ずに過ごしている。雨壺とよばれている西南方の空に、雨をはらんだ雲が湧くことはしばしばなのに、なかなか降雨とはならない。埃っぽい空気は健康な肺臓にさえ、荷重い感じ。その上、夜昼みさかいなしの暑熱である。

酸素を補給されながら美輪お婆さんは、静かに打ちひしがれてきる。病苦を訴える力さえ今は尽き果てた病人を、家族中が、ハラハラとして看まもっているのだから、此の部屋には殊更に熱気が籠る。裏庭に向いた大窓は開け放つてあるのに、水色ジョゼツトのカーテンさえ、涼味を失って重く垂れ下がっている。夜更けになっても、そよとの風も起こりはしない。

病人の枕辺に活けてある白百合の清新さだけが救いであった。百合は蕾をわったばかりの瑞々しい花が十輪ばかりもにあってゐる。

然し、その百合の花さえも、家族の者の心をかえって暗くしているのだった。

二日前の夕方、来診した医師は幾度も頭を横にふって見せた。会わせたい人があったら呼んで上げなさいと言った。会うべき人は皆此の町に住み、毎日交替でつめかけている。孫のジョルジだけがサン・パウロ市の大学にいたので、重態になったお婆さんのことを知らない。ちょうど年末試験の最中なので一刻のばしに報らせをおくらしているのであった。

昨日の朝百合の蕾がようやくほころびた。それは、医者から安静を命ぜられたにもかかわらず、支柱を立ててやったりして、美輪お婆さんが花を待っていた百合であった。孫娘の文絵は、惜し気もなく百合の花をきった。末だ蕾のかたいのまできって、お婆さんの枕辺近く活けたのだった。

「婆ちゃん、百合の花が咲いたよ、ほら」と、鼻もとによせても、頬を花びらで撫でるようにしても、病人の顔には何の感動も表われはしなかった。哀しいまでに静かであった。

「婆ちゃんは、百合の花もわからなくなったのね。」

そして、日照雨のことばかりわかるのかしら。」

文絵はべそをかきながら、百合を花びんに活けたのだった。病

人の声が出なくなつて四日。僅かに頭を動かさし、瞼の下の眼球がそつと動くのを見ると、

「婆ちゃん、日照雨なんか降ってはいないのよ。婆ちゃん、とても良いお天気よ、ほら」

と、病人の耳に口をつけるようにして、ささやき続けてきたのであつた。今夜もそれをささやいた。二度目である。

「日照雨のこと、本気で心配していたのかなママイは」三男の信三が呟やく。

「そりや本気よ。降ってないことを言うと、婆ちゃん、安堵したような顔になるもの」

文絵は稚い確信をもつてそう答える。

「文絵の一人合点ではないのか」

「ちがうよ。婆ちゃん、ずっと前から、そう言つてたんだもの、婆ちゃん、日照雨が怖いのは、死ぬのが怖いのは」

病室の外で信三や美沙、文絵たちがコソコソと、日照雨の話をして聞きながら、長男の信一は、発病して間のない頃の、母の言葉を思い浮かべていた。

その夕方、信一は何かの都合で、常より早目に帰宅していた。美輪お婆さんは一人で夕飯を食べていた。「婆ちゃん、気の毒だな」

「塩無し料理で」と言うことは、言葉にしないで通じ合う母と息子。

「そうよ、皆より一刻先に食べとかんと、どうも喉を通らんごとなるもんでね」……………「それでも、食べんことには……………末だ死なれ

んけに」……。「さつき日照雨が降つつろ……この次の日照雨は若しかしたら御来迎かも知れんけに……それまでに、しとかんならんこともあるしね。」美輪お婆さんは、塩気のないサラダを箸でかきまぜながら、雨あがりのマモン葉がふりこぼす滴が夕日にきらめくのを見守っていたのであった。

「しておかねばならない事」とは何だろうか？ と、信一は、心にかかったのだけど、其の時は、そんな話題からは、唯、逃げておりたかった。今は、しきりに、それが気にかかる。「何をしたかったのだろうか？ あれから今まで、母は何かをしたのだろうか、自分達にかくれて、小鳥に餌をやったり、百合の支柱を立てたり・そんな、たあいもない事だったのだろうか……いや、あの夕方の母の眼差しは、冗談らしい声音の底深く沈んでいるようであった。何か秘密な事があり、それを解決しておきたかったのではなからうか」……信一は少年の頃、おぼろに感じた一つの事を思い浮かべたが、それは然しきほど重大なこととは、信一には考えられないのであった。「父親が亡くなって、貧乏のどん底に落ちていた頃、いや、あの貧しさが、多少ゆるくなりかけた頃だった。母に何か変化がおこったのは……だが自分は強いてそれを知ろうとはしなかったし、母は、四人の子供を育てながら、仕事の鬼となっていた。自分達も貧乏から脱け出そうと必死であった。そして此処二十年くらいは、母にとっては満ち足りた生活であった筈だ。父がいらないと言う一事をのぞいては……」と心の中で時やいてみるのだが、

次に降る日照雨は、若しかしたら御来迎かも知れない。それまでにしておかねばならない事があるので、塩気なしの食事にはげまねばならない。と言った母の言葉が、信一の胸に、鉛の様に重く沈んでいた。

「あの夕方、何をしておくことがあるのか、自分は訊ねてやらねばいけなかった。母が直面している“死”と言うものに、何故、自分も共に直面してやらなかったのだろうか。」

信一は自分の愛の足りなさを知った。稀にみる辛酸を共になめて来た母と子として、妻より子より母を愛していると思ひ、大事に母に仕えて来た、と思っていた自負は音もなく崩壊していくのであった。

○ ○ ○

「わしはね、日照雨が降つとる時に死ぬることになってるよ。生まれたのが、日照雨の最中だったらしいからね」

こんな事を美輪お婆さんが言い始めたのはもう何年も前であった。お伽話でも聞いた後の様な楽しげな声で「そんな事ってあるもんか婆ちゃん」と、孫達は笑いころげた。

「人間はね、生れた刻に、死ぬ刻も決まるって事を聞いてから、わしはそう思うようになったんだよ、きつと間違いないから、よう、おぼえとき。」

死と言うものの意味も良く理解出来ない孫達である。第一、病気などしたこともない、明朗なお婆ちゃんが、死ぬ日の事などを話してみたところが、孫達にとっては、実感の伴わない伽話でし

かなかった。

中学三年になっていた文絵は、「お婆ちゃんの日照雨説なんか、全く恨拋稀薄だわ。」などと、生意気な反撥を試みたりしたものであったが、此の理屈っぽい娘をして、あっさりカブトを脱がせる事件が、それから間もなく起ったのであった。

至って磊落で若ぶりな故が、六十幾才になる美輪お婆さんに再婚の話しが持ち込まれた。お婆さんは笑って、問題にしなかった。ところが、或日正式に仲人がみえて折目正しい嫁もらいの挨拶があった。

「お婆ちゃんがお嫁に行くかも知れない。孫達は興味に心昂ぶらせて、お婆ちゃんの日照雨説を待ちうけた。そして大いに失望したものだ。」

「今度の嫁入りは、極楽浄土と心得ておりますので……」きっぱりとした返答であった。

辞退したお婆ちゃんの口上をよく説明してもらった時、文絵は思わず膝をたたいた。「ソール イシューバ カザメント デビューバ」大きな声で二回も繰返した。「わあ！ 似てる似てる。日照雨の中で死ぬー死ぬと言う語の意味が、極楽浄土に嫁入りする、ということならば、ソール イシューバ、カザメント デビューバ、と、全く同じことではないか。」比の論法は愉快であった。

文絵の素朴な心の中で、お婆ちゃんの日照雨説が単純に肯定されてしまった。

お婆ちゃんにも、ブラジルのその俚言を教えた。

お婆と、孫娘は、日本人と、ブラジルの人の思考に似通ったもののあることを愉快がった。特にお婆さんは大層な御機嫌であった。しかし、それはやっぱり 現実的なものではなく、祖母の死、と言う悲しみなど伴ってはいない、単なる物語りのものであった。

そんなお婆さんが病気になってしまった。腎臓が弱って尿毒症になっている。そして、これは近頃が始ったものでないと診断された時、本人も家族の者も、大した事ではなく、すぐ元気になるものと、多寡をくくっていた。

前の月の初に七十才の誕生祝いをしてもらい、お婆さんは至極満足そうであった。

「立派なお子達や、孫さんに大切にして貰うて、幸せな事ですね。せいぜい長生きして上げなさい。」と、お世辞を言う客人の前で、美輪お婆さんは得意気に胸を張っていた。

「ええ、古稀の祝には、又、来てもらいます」と七年先の案内ままでしておきながら、それからいくらかも経ない間の発病であった。

少し風邪をこじらせた様だ、と寝たり起きたりしていたお婆さんの顔が膨れていると、言い出したのは文絵であった。気の進まないお婆さんを、信一は病院に連れて行った。

病院から帰った時、お婆さんは、わりと平気であった。「安静にせんといかんそうじゃ、塩気をとめられたで、いつとき、うまいもんは食べられんよ。

薬もよけいらんそうだからすぐ癒るよ」然し信一の顔は暗かつ

た。

「病気は大分前から始まっていたようだ。全快しづらい病気で、心臓が弱ったら、何時ポックリと逝ってしまうかもわからない。検尿の結果は極めて良くない。」

そつと信一に告げた医者 of 言葉を、一人の胸に収めている顔であった。

然し、さほどの苦痛も伴わない病気のことだし、お婆さんは信一の顔色を読み得なかった。

風邪が癒えると、病人扱いにされるのが、お婆さんには不服だった。油断をすると、家人の目を盗んで花畑の草を抜いたり、百合の支柱を立てたりした。

それがばれると、信一は、めつたに見せない恐い顔をして、お婆さんの不養生を叱る。そんなにやかましく言わなくても、他の者は、お婆さんをかばい、信一が見ていない処でのお婆さんの不養生は、厳しくとがめない事にしていた。それが十一月になってからは、不養生しようにも、お婆さんの足は起たなくなってしまう。次第に手も利かなくなり、舌もまわらなくなった。

両時期になっても早続きの十一月は最早真夏の暑さであった。尿毒症の重病人には、暑さも殊更応えるのだろう。「まるでパン種みたいだね、暑いとよけいに膨れるよ」黄黒く、ぶよぶよした腕を真白い敷布の上に投げて、美輪おばさんは哀しげに笑って見せる。以前のシヤキシヤキとしたお婆さんの面影は、顔にも声にも見出すことが出来なくなった。

十二月も中頃になると、全く食欲がなくなり、見開くことも出来ないくらい瞼は膨れ上がった。そして最早、日照雨のことを、声を出して訊ねることも出来なくなってしまう。「今夜を越せないかも知れない」と医師に言われて、信一は、サンパウロにいるジョルジに電話をかけた。ジョルジは留守であった。信二、信三、美沙の子供達も残らず集っている。ジョルジが留守であったことに、信一はやたらと、腹を立て、妻の敏子に、あたり散らし裏庭に建てた蘭小屋の前を、いらいらと、歩きまわった。

「これ程の高級蘭さえ、揃えることが出来ただけに、わしは、何時死んでもいいのだがね」リオから取り寄せ、D市やR市の蘭展にも信一は母を伴って欲しがる種類は皆買い込んでやった。その蘭を眺めた時すら、「何時死んでもいいのだが……」と、含むもののある言葉を洩らしたのに、自分は、その時も、迂潤に聞き流してしまった。

信一は、初孫のジョルジを今夜まで呼ばなかった自分の落度に併わせて、母に対する愛の足りなかった かずかずの事に 心が小突きまわされているのであった。

○○○

美輪お婆さんは 赤穂の山村に生まれた。比の町に日本映画の赤穂浪士が かかった時、お婆さんはマチネを観、夜二回も見続けても 未だ心残りな様子だった。赤穂の風物、赤穂時代の思い出話しなど、際限なく孫達は聞かされた。

「私の生家は村でたった一軒の二階家だった。お寺様を除けばね。二階の窓からは塩田を見渡すことが出来た。ええ、塩が取れたんだよ。瀬戸内海の朝景、夕景を、眺めて育ったのだからね。」
総瓦ぶきの二階建の家に生まれた自慢話しは、文絵達にはさほど興味を持たなかったけれども、お婆さんの恋物語りは幾度聞かされても飽きなかった。

村中の若い女達が（お婆さんは娘、と言わない。

若い女と言えば、娘に限らず夫持ちの女も含む、と言うつもり）想いをかけていた男を、美事射止めたひとくぐりである。お美輪さんは、十七才の小娘であった。男は、その村の真宗寺の院代をしていた。

「私がブラジルまで渡って来た、と言う事がとりもなおさず院代さんが、どれ程、村の女達に人気がありなかつたか、……の証拠なんだもんね、フッフッフツ：名前かい、信彰とおっしゃった。信一達は皆、院代さんの信の字を頂いているんだよ」

院代さんの話しとなると、美輪お婆さんの言葉までが変わってくる。ひたすら恋を遂げようとした女心が、ギラギラと、心の奥底から輝き出るようであった。

然し、実際の、夫婦生活は苦渋に満ちたものであった。

今から六・七十年余りも昔、赤穂の山村では、花嫁が必ずしも生娘でなければならぬと言う風には、男衆は考えておらなかつた。男衆は、夜おそく好きな女の部屋に忍び込む事が出来た。其の行為が、やがて結婚へと進展するもよし、そうならないとして

も、其の娘を創者呼ばわりする様なことはなかった。

唯、石塔倒しと言う習慣があつて、其処で始まった男と女の關係は必らず夫婦となつて、末通さなければ仏罰が当たると、言い伝えられていた。

五十戸足らずの村落の中央部にお寺は建てられていた。其の信樂寺では、毎年正月十日から宗祖聖人の御正忌法要が営まれる。五日間にわたつて法要の後には、おとき接待がある。檀家衆は区分けされ決められた日に、おときを頂く。精進料理ながら、酔いつぶれる者もあるくらい酒は豊富に振る舞われる。

その煮炊きや給仕の為に、村の娘等が駆り出される。

その期間中、娘等は自家には下がらず庫裡の屋根裏に寝泊まりをするならわしであつた。六日目の精進あけの夜（明日は自家に下がると言う前夜）村の若衆が屋根裏見舞をすつると言う奇異な慣習が長い間続いていた。その事を、石塔倒しと言い伝えられていた。石塔倒しに依つて結ばれた男と女は大抵、春になると結婚式を挙げる。伸びてもその年の秋には式を挙げ村人に祝酒を振舞うことになる。院主様の遠縁になる院代さんは寺内に寝泊りしている身でありながら、石塔倒しには少しも興味を示さなかつた。

そのくせ、檀家の若後家見舞にぬけ目のない院代さんの事をなかなか知慧者だと、村の衆は評していた。結婚に踏みきれない院代さんの境遇を揶揄した褒め言葉であつた。

十七才のお美輪さんが初めて御正忌の手伝いに、上がった。院代さんは二十六才になつていた。村の若衆の中でひととき目立つ

て学のある顔をした院代さん。剃りあとの青い顎。すがすがしい白衣にキリリと白帯をひきしめた姿。お美輪さんは、院代さん以外男の嫁にはなるまいと、心に決めた。そして、いじらしいまでのお美輪さんの誠意が、院代さんの心を、とうとう石塔倒しに踏みきらせたのであった。

枕を並べて寝ている娘達の中から、お美輪さんの頭をさぐり当て、院代さんは這入って来た。お美輪さんは生娘であった。末だかたい蕾を割って這入った。

院代さんの感動はたとえようもなく激しいものであった。

その年の春、二人の結婚式は挙げられた。村中の若い女達の羨望を稚い一身に集めて、院代さんの花嫁になるにはなったけれど、その歓びも束の間、彼女を脅かす女が幾人も爪を研いでいた。そんな女がいる家の月忌参りは特別時間がかかるので、いやでも察しがついてしまう。「致し方がない、院代さんは自分に過ぎた夫なのだから。嫉妬してみじめになるより、私は正当な妻であることを威張っていよう。」うら若い妻は一人でそう呟やく。然しそれは考え尽し練り上げられた女心の殊勝さではなく、未だ熟しきらない果実が持つあの酸味にも似た稚い爽やかさであった。

結婚生活も一年を過ぎた頃、院代さんは特に足しげくお参りをする家がある事に、お美輪さんは心をいためていた。その家には松乃と言う若後家がいた。彼女は怖ろしく情の濃い女だと噂されていた。「喰い」と言う言葉の意味が、よく解っていたわけでもあるまいが、お美輪さんは松乃の家には、院代さんに行つて

もらいたくなかった。稚い妻は夫の胸に頭をぶっつけて泣いた。松乃の許に行かない、と夫が誓うまで……。二ヶ月ばかり院代さんは松乃の家へ行かなかった。このいじらしい若妻を失ってまで通い続けたい程の女ではなかったのだろう。

だが、その稚妻をして、外国への逃避さえも決意させる事件は、其の後に起こった。或夕方、報らせる人があつてお美輪さんは本堂の前に馳けて行った。本堂からは夕方の勤行のお灯明が見えた。本堂へ上がる階段の下に人だかりが見える。お美輪さんは御門の石段を一気に馳けのぼり人垣の後ろに立った。

「松乃！ 馬鹿タレー」中年の男が、階段をのぼろうとする女を引き戻そうとしていた。松乃の兄であった。兄よりも松乃の方が力がある。「院代さんに会いたい。院代さんは私の男だぞ」と喚き散らしながら、ドンドコ・ドンドコ、足を踏み鳴らす。くるっと向き直ると、誰彼なしに荒々しい息を吹きかける。白地浴衣の裾は幾箇所も無漸に血塗られている。

哀しい女の生理が目をむいていた。

本堂から勤行の終わりの鐘が響いてきた。

お美輪さんは何処を歩いて家に戻り着いたか意識になかった。作りかけていた夕飯のおかずは黒こげになっていた。燃え落ちた薪が土間に白い灰を残し燃え尽きていた。「此の村にはもうおられない。日本の女が一人もない処へ行きたい。」白い灰を見るともなく見ている眼から涙が溢れた。ぼやけて見える白灰の上に、まざまざと文字が浮び出て来る。

「ブラジル移民募集」お美輪さんの心が、カッと、眼を開ける。最近、村の電柱という電柱に一斉に貼り出された広告紙の文字。細字で書かれた文句まで、お美輪さんはそらんじていた。その事は、極めて重大な暗示であった。

院代さんが戻って見えた時、仏様の啓示でも受けた様な心になって、ブラジル行きの事を院代さんにすすめたのであった。

なかなか煮えきらない院代さんの心を、強引な熱心さで、お美輪さんは遂に押し切ったのであった。

翌年の春、赤穂の山村から、ブラジル移民第一号として送り出された。お美輪さんの従兄弟が、家族構成の一員として、従いて行く。斯うして、若夫婦はブラジルに渡って来た。第四回移民であった。

「そりあゝね、コーヒーと言う金のなる木があることも、私の心を惹かなかった訳じゃないよ。それより何より、おっそろしく広い国土に、少しの人間しか住んでいない国と聞いてね。そんな処だったら、院代さんを盗みに来る女もおるまいと思っただけさ。金のなる木のある国、安心して院代さんと暮せる。すごく魅力を感じたなア……親兄弟と別れ、遙々、五十日も六十日も旅をしなくちゃならん遠い国へ行っても、此の恋を遂げようと思っただけに、今頃の若い者より、私の方がずっと勇ましかったね。ブラジルに来てからの事かい？ ……そりあね、院代さんを盗みに来る女は現われなかった。随分と悲しい事や怖い事にも出会ったけど、ブラジルに来て初めの十年ばかりの間が一番良

かったね。今の様に安楽な暮しとは全く裏腹な状態だったけどね、今流に言うると一等充実した生活だったろうね……毎日が、それこそ命がけだったから。……。」

ブラジル生まれの孫達なのに、彼等は庇の町以外の事は何もわからない。フアゼンダのコロノ時代の話しも聞かせてやらなければならぬ。中には小娘には聞かせられない事柄もある。そうしたところは程よくぼやかして話す。

「モジアナ線の丁耕地に配耕されたのだがね。耕地に着いた晩は倉庫に雑魚寝だった。え？ 雑魚寝て？……わからないだろうね。カーマなんかのないよ、倉庫の床に何かちよつとしたものが敷いてあった。十五家族の者が、ずらりと並んで寝たんだよ。そりあもう、何とも彼とも言えない気持ちだったね。夜中に、少し離れた処からすすり泣いている声が聞えたりして……。夜が明けて見たら、少し下の方にマツチ箱を並べた様に小屋が見え、その中の空家に、それぞれ配られて、自分の住居が決ったわけよ。家から少し降ると沼地があつて青黒くよどんだ水はギラギラと油気を浮かべていたし、沼地の向こうは原始森だった。その深い森をじつと見てみるとね、足がひとりで其の方へ歩いて行ってしまう様な心持ちになって、ほんとうに吸い込まれてしまいそうだった。従兄弟の義雄なんか、今にもその森の中から大蛇が出て来るのではないかと怖ろしがって沼地の方は見ようともしなかった。ものすごい蚊が昼でも出るし蚊よりもうるさく血を吸いにくる小虫もいてね。それが血を吸った跡の痒いことといったら……：……わしら

は小さな子供がいなかったので、それでもまだ辛抱出来たけど、赤ちゃんを連れている家族は、憐れなものだったなア……コーヒー園の草取りなどにはすぐ慣れたし、厳しい規則の中で働くのも苦にはならなかったけど、コーヒーの木が自分等に、いくらもお金もくれない事もすぐ察しがついたよね。

それより何より言葉の通じないことのはがゆさと言ったら！ 向こうは何を言い、自分は何を言えばよいのか、全くわからんのだじゃけに、まるで手がかりのない高い壁を素手で引つ掻きながらのぼるような、はがゆさだった。其の上に、日本人同志でさえ、言葉が通じんこともあったんだよ。……そうよ……ありあ、福島出身の人だった、日本からの初便りが着いた時だった。その時は二十三・四才位の通訳さんが来てござったが……勿論、日本の青年だよ……受の人が、一番道順のよい私の家に、皆の手紙を置いて行кинさった。夜になって、手紙を取りに見えたおじいさんが（その人の家には二通来ておって、それを裏表ひっくりかえして見ながら）何か、たずねごとをされるのだがね。わしらにはさっぱりわからない。どうしようもなくそのおじいさんは、帰って行かれた。翌日、その家の若い衆に会って話して見たら、「三十七番の人には一通も来ていないだろうか」と訊ねられたのだった、と言うことがわかって泣き笑いしたもんだった。日本の二十何倍もある広大な国に来たと言うのに、其の耕地の暮しは赤穂の山村より狭い土地にいる心持ちがしたのだったが、あれはやっぱり言葉が通じない故だったよね、どっちを向いても壁ばかりで息がつまりそ

うな心持ちだった。それに熱病が流行っていてね、大抵の家に病人が出始めた。熊本出身の人の家の病人が一番重態だったが……マラリア熱で寝てる間に金蠅が鼻腔の中に子を産みつけたのよね。鼻の奥が痛い痛いと言ってたけど、誰もその事に気がつかなかったのよ、その娘はどうとう死んでしまったけど……喉から、うじ虫がコロコロ、出て来た……いや……ひどかったなあ……わしはもう悲しくて悲しくて、何かにつかみかかって行きたがった。義雄とおなじに、家族構成の為に連れて来られた娘さんだった。親許に銭送って貰う事を楽しみに働いていた娘さんだった。そんなことがあつたりした後、わしらは、どうも其の耕地におりたくなくなってね。義雄も、浮かぬ顔をするし。広いブラジルと言うに、もつと良い処があるだろう、と思うと、もう逃げ出すことばかり考えたね。随分得手勝手なわたし等だった。とうとう一年もいないで、その耕地を逃げ出してしまった。そうよ、わしの家族だけよ。逃げるのは命がけだからね、やたら、他人様を誘えない。それに、他の家族は、小さい子連れが多かったしね……残る人達が気の毒だったけど……そのかわり家の道具なんか、大方、分けて上げてしまった。夜中にぬけ出してカフェザールを出ると、パスト。パストの鬼アラメを、くぐるのが一番つらかった。用心しても髪や、背負った荷物やらが、ひっかかる。ちよつとでも音を立てようものな物凄い声で犬が吠え出すからね。アラメは五十メートルおきくらに張ってあつた。真暗い夜中に、這うようにして歩いた。前もって、院代さんが道順だけは見定め

ておきなさったのだが、間違いなく、その方向へ歩いていくのかどうか考え始めると、膝がガクガクして歩けなくなりそうだった。やっと鉄道線路に沿った小道に出た時の嬉しかったことと言ったら……才前達には想像も出来ないものだろう……思わず腰を伸ばして大きな息を吸ったね……三人とも。それから歩いたね。夜の中に一歩でも遠くへ逃げねばならない。追手がすぐ後に来ているようで、自分の足音にも怯えたよ。

足が地につかない心持ちで走った。何処へ行くつもりだったかつて……サン・パウロの町へだよ。其処に熊本県人の〇と言う人がいる。その人を頼って行きなさい。と、連れ家族の娘を死なせた人が、〇さんへの紹介状を書いてくれた。それだけが頼りの夜逃げなんだから……ブラジルの地理も状況も知らないからこそ……だよ。後になつてのことだが、オンサによくも出会わなかったものだと言われて、怖ろしさに身震いしたものだ。……明け方ミーリヨ畑を見つけて、青ミーリヨを盗んで食べた。

勿論焼いてさ。森のかげの少し開いた土地で枯木を集めて燃やしたがね……パツと火が燃えついた時は、ぞつとする程怖ろしかった。院代さんも義雄も、すさまじい顔をしていた。まるで山賊が焚火を囲んでいるのと同じだったろうよ。黒こげになったミーリヨも残さず袋に詰めこんだよ。院代さんと義雄が小便をかけて火を消した時だけは、おかしくって、怖ろしさをちよつとの間忘れていたよ。ミーリヨを食べてから気持ちはずっと楽になった。すると水が欲しかった。お日様が大分高くなってから森の中に這

入って谷川を探して歩いた。獣の足跡をたどって少し降った処に、小さな流れがあったが、あの水はうまかったなア。顔も手足も洗った。手も足も、数えきれないくらい引っ掻き傷がついていた。傷は顔にもついていた。アラメをくぐった折についたのだろう。でも不思議に痛みを感じなかった。傷の痛さなど感じないくらい怖しさで一ぱいだったのよね。日が暮れるちよつと前まで、かわりばんこに、少しずつ眠った。それから又残りのミーリヨを食べ、水を飲んで森を出た。森を出ると、忽ち、追手のことが怖ろしくなる。鉄道に沿って歩くよりほか、何も知らないのだから……。森の中で地図を開いて見たのだが、義雄も私も、サンパウロの町までの距離感が、どうしても頭にこなかった。文絵達は知ってるだろう？ モジアナのJ耕地から、サンパウロ市まで、何百キロあるか……。さあ、それから線路伝いに歩いたね。道は線路からうんと離れることもあった。

そんな時はよけいに心細くなる。義雄が一等元気だった。町で暮らせると言う望み一つで、足が軽かったのだろう。御飯が食べたいなどと、愚痴ったりもしなかった。夜道に慣れると、案外、明るかった。

「ブラジルの星は良く光るね」と私と義雄が感心するのを院代さんはおかしそうに笑っていなさった。次の日は日中だけ森陰に休んで、ずっと歩いた。森の中の小道では椰子の実を拾って食べた。猿の食べ残しをだよ……。そんなに猿がいたかって？ おつたとも、おつたとも、群れている処もあって、そんな処を通り過ぎ

るのは気味が悪かったよ。木の枝をぴらっぴらっとなり渡って従いて来るんだから……。たまに黒人に出合ったけれど、黙ってすれちがうだけで、もう追手の事はそんなに心配にならなかった。それでも、夕方になっても、暗くなっても歩いた。歩いてさえおれば、サンパウロが近寄って来る気がしたし、サンパウロへ着きさえすれば、一回移民のOさんを頼って、何とか仕事を探すことも出来るつもりだったから……。若い時は、いいもんだよ。苦労が苦労にならないのだからね……。むしろ、あの旅が、私には一番満ち足りた心持ちだったかも知れない。院代さんと一分の隙もなく心が寄り添っていたのだから……。

その夜は道ばたの黒人の家に泊めてもらった。暗闇の道端に、ポツカリと灯がともっているのを見ると、もう私達は、その家の前を通り過ぎることは出来なかった。まとまった会話をしたわけでもなかったが、黒人夫婦は親切にしてくれた。煮豆に粉をかけた物と、肉の腸詰めを出してくれた。義雄は二皿も食べてしまった。ミーリョ小屋に、サツコを敷いてもらって横になると、ドロシコになって眠ったよ。

しんから屋根の下と言う事が有難かった。夜が明けない中に出かけたが、その黒人夫婦には日本の絹風呂敷一枚のお礼しかできなかった。四日目の夕方着いたG耕地に日本移民がいると聞いては、もう素通りすることがむずかしかったよ。日本人を一人も見ないで歩き続けた四日間は、ものすごく長い時間だった様な気がしていたからね……。まるで、日本からずっと歩いて来たような疲れが、

どっと押し寄せてそれはもう、日本の人なら、誰でもいい、身を
あずけ、運をあずけたい心持ちだった。

嬉しかったなア！！ 二十人余りの日本人に囲まれて、「どうし
た？！ 何処から来た？！ 何処へ行くつもり？……………それにし
てもよく無事に逃げて来たなア、通って来た道は、オンサも出る
所だったのに……………えらい無茶をしたもんだ」と言われた時には、
ほんとにぞっとしたね。膝の関節がはずれてしもうた様で、立つ
ておれない程だったよ。腹一杯御飯を食べさせてもらって、ペラ
ペラ日本語がしゃべれたら、胸がすつとしてね……………投げられた起
きあがりこぶしがころりと坐るような、あの心持ちだった。え？
起きあがりこぶしがわからない？……………そうかい、そうかい、
ワツハハハ……………」

美輪お婆さんは、起き上がりこぶしの説明はしないで、愉快そ
うに笑っているだけだった。体験をしなくては、おそらく理解出
来ないもの、思っただろう。下腹部にツシリと重味をもって、
すつきりと胸がすいた心持ちなど、生活体験の浅い孫達に無理強
いするのは無用であった。

「それから、どうしたかって……………サンパウロへ行ったさ。一晚
泊してもらって、それから、駅まで連れて行って汽車に乗せてく
ださった。汽車賃も皆で出し合って、米の飯のおむすびまで持た
せて下ださった。彼の頃の米の飯と言えば、今の何に当たるくら
い尊い物だったろう？……………おむすびには、マモンの漬け物が添
えてあった。それを食べながらわたしは涙がこぼれて、止まらな

かったなア。兄も知らない他人の善意と言うものは、心の奥底までも、あたためてくれるんだね……。湯のような涙になって、うれしさが湧いて来た。サンパウロの駅のペンチで、残りのおむすびを食べてしまい、それから、太田さんを探すことになる。お前たち、考えてもごらんよ……。白い袋をかついだ三人の日本人が、靴もはかないで、(四日も歩き続けて、靴ずれが、ひりひりと痛んで、びつこをひいてよ……。お前等は夏休みに遊びに行つて、サンパウロの町を見て来ただろう。それはね、今の様な大都會ではなかつたさ。四十八年ばかりも前の事だからね……。だけどなアその時でもサンパウロ市は気が遠くなる程、でっかい町に見えたよ。方角もわからないまま、歩いたもんよ。「ジャポネーズ・オオタを知らないかつてね……。笑っちゃいかん。笑いごとじゃなかつたんだよ。太田さんに出会わねば、どうするつもりだったかつて? ……考えなかつたね。会えるものと、決めてかかっていた。非常識と言われれば、全く非常識な話しさ。大院代さんを盗みに来る女がいない国に行きたい、と考えたのが根本で、五十日も六十日もの船旅をして来たくらいのわたしだから……。何か一つ、いや二つも三つも欠けているものが確に私にはあつたよね……。それにしても、院代さんも院代さんだよ、分別盛りの男がさ……。……。夕方になつても、町をうろついていた三人は、交番所みたいな所に連れて行かれた。

紙袋一杯の駄菓子を買って食べたが、恥かしいなどと言う人間らしい心は何処かに取り落としていたのよね。私等よりみすばら

しい身なりをした人とは出会わなかったから……。ジャポネーズオオタをたずねている、と言うほか、何を訊かれているのかわからないのだから、こちらから言うことはなかったし、たとえば、ブラジル語が話せても迂闊にはしゃべれなかった。フアゼンダとの契約を放棄して追げて来たのだから、言わば私等は、罪人だったんだよ。

その夜おそくなつて城塚氏の処へ連れて行かれた。

移民の親と言われた城塚氏だよ。大目玉を喰つて……。院代さんも小僧子扱いよ。でも、随分お世話になった。義雄と私はサツコ製造工場で機織り場に働くことになる。これはもう、魚が水を得たようなもので……。一日一日成績をあげていったもんさ。何故かって……。私はね、十五才の時から木綿織りなら村の娘達の誰にも負けなかった。その頃は、字を習うことより織物、縫物、芸事の稽古がやかましかった。

それが出来ない、嫁入りの資格無しと言うとこだった。木綿織りにきたえた腕が、遥々ブラジルまでやって来、食うか食わないかのどたんばで役立ったのだから面白いもんだろう。伯人娘たちが驚いて私の仕事ぶりを見に来るんだから、久しぶりに私は得意顔を取り戻したものだ。そうなるという言葉も良くわかり始めたし、義雄と二人で儲ける金で、食べるには不自由しないようになった。院代さんかい、……。院代さんは城塚様の傍で何彼と手伝っていなさった。中でも将棋の相手に随分重宝がられていなさって、何となく私も肩身の広い思いでいたんだけどね……。其の

うちビショ買いをおぼえてしまいなさって……義雄と私の稼ぎくらいで間に合わなくしまったんだよ。ビショのことかい……これはまあ、お前等がくわしく聞くまでもない事だが、一つの賭け事さ。院代さんは良いお人だったけど、女と賭け事に弱かったのよね。院代さんを可愛がっていなさっただけに、城塚様は厳しく叱りなされた。「フアゼンダへ行って、もう一度、苦勞しなおして来い」

汽車に乗せられ、送り届けられた処はD耕地だった。其処には真野と言う方が待ち受けていて、夜おそく着いた私等に米の御飯と、味噌汁を食べさせてくださった。お米は此処で穫れ、お味噌は手製だと聞いて、何だか、今度こそ、落着けるんじゃないかと言う気がした。御飯の後で、私等に当てられた小屋へ案内してもらった。一部屋だけの小屋の中には、草履や布端や釜など、紛れもなく日本品が散らばっていた。ああ、此処も誰か日本人が逃げ出したあとではないかと思ったり、それにしても、こんなに散らかして逃げる筈もあるまい、なんて思いながら、敷いてあったパイヤ布団の上の埃を払っただけで、その夜は眠ってしまった。朝になって散らかった物の中から末だ使いみちのある物と、捨てる物とに選り分けて掃除をしている処に、顔をのぞかした黒人娘の話聞いた時には、身の毛がよだつ思いだった。どうしてってお前、その小屋は日本人の一家族が全部死んでしまった後だったんだよ。私等三人とも死霊に取りつかれてしまった気持ちになって身震いがしばらく止まらなかった。蒲を抜いて

米田を作ろうと、腰まで濡れる沼地の仕事をしたあげく、チブスにやられたのだと、黒人娘が教えてくれた。日本人は小鳥のように米を食う人種だからって、肩をすくめる黒人娘を見ながら、真野氏の家で御馳走をよばれながら、私等も米を植えよう。お味噌も作れる。とふくらませていた夢が、忽ち萎しぼんでしまった。一晩の中にチブスの黴菌が身中泌み付いてしまったように怖ろしかったが不思議と、三人共、風邪もひかず、腹痛も起こらなかった。それについて面白い話があるのだよ。一通り掃除が済んだ後で、院代さんは、お経を読んで上げなされた。私等は、全滅した人達に心から供養して上げたのよね。その様子を、例の黒人娘が見ておったのよね。そして、院代さんの事を祈祷師と思いこんでしまったのさ。

私等三人が病気にもならないのは院代さんのまじないのおかげだと信じて、院代さんを尊敬するのなんのって……その為に、後には、其の娘の母親のお産の場にまで頼まれて行く事になるのだが……。

一日だけ休養させてもらって次の日からコーヒー園の除草仕事だった。様子がわかってみると、前の耕地よりもっとひどい病気が流行っていた。灼けるような熱病患者の頭に、キントの水を滴たらせて冷やしてやるのだが、発病の原因を治療するのではないから、ほんの気休めよね。頭から水をかけられながら、灼け死んだ人もあった。薬の調達で真野さんは夜も昼もなく馬を駆って走りまわっておりなされた。

白馬は土色の馬になり、とうとう足を悪くして使いものにならなくなつた程だつた。貧乏と、病気に心が荒れてしまつた人達は、それでも薬品不足の責めや耕主への不満を、真野さんにばかり向けて、命がけの対決を迫る人さえもいてね………ほんとうに惨澹としたものだつた。そんな中で、文絵のお父ちゃんは生れることになるんだよ。其の耕地はひどい石ころ山でね、力をこめて踏ん張つた足が、石を踏み転がしたりして、膝をついたり、尻もちをついたりした故か、一ヶ月も早目に信一は世の中にとび出してしまった。そうそう、それより前に、黒人娘の母親にも赤ちゃんが出来た。何しろひどい栄養不足だろう……母親には産みの力が足りない。オンオン泣いて苦しがるものだから、その娘が院代さんを頼みに来たのさ、院代さんがお祈りしてくれたら、きつとすぐ産まれる、それでなければ、自分のママイは死ぬかも知れないってね……院代さんは当惑しなかつたよね……浄土真宗では、そんなお祈りの為にお経は読まないのだから……でも、黒人娘は、私の家族だけが病気もしないでいるのは、院代さんの祈祷の利益だと信じこんでいるのだね……私は院代さんに言ったのよ。祈る形式だけでもして上げなさい、謡曲でも、うなつて上げたらつてね……謡曲のことかい？ ……困つたなア……お前達、日本の古いシネマを見たことあるだろう？……カザメントの場面が出るのを見なかつた？……見た、そりあよかつた。花婿と花嫁が誓いのお神酒を飲む時仲人さんが、大きな声でうなる場面があつたらうが、あのうなりが、謡曲の一つだよ……。ああ、ブ

ラジル人を孫にもてば、婆ちゃんもえらいしんどいことだよ。
……一張羅の洋服に着かえて、院代さんは黒人の家へ行きなされた。勿論、私も従って行ったよ。

黒人娘は母親の枕もとに行つて「とても強い祈祷師が祈つてくれるから、すぐ産れるよ」と母親をはげます。隣近所の女達も集つて来る。枕上の壁に向かつて、院代さんは厳肅な礼拝をなさる。すごく、念入りにだよ、それから腹力の籠った声を張り上げて、ターカーサーゴーヤーを始めなされた。私は産婦の耳許で、ソレ！力を出して！力を！力を！って励まして上げた。メーデーターケーレーと、一曲謡い終つても、産まれない。シーカーイーナーミーシーズーカーニーと、院代さんの声は、惚れ惚れする程、おごそかに響いたね。すると産れたよ！まっ黒い赤ん坊が。おかしくなかつたかつて？……………おかしいどころか……………私のお腹の中にも、信一になる赤んぼが、息をひそめておつただから……………他人事ではなかつたよ。私は其の時思つたね。自分は、誰も頼らないで、一人で産もう。こんなになしく、他人の目にさらされたくはないって。

産後の処置もじつと見ておつた。え？お産婆さんなんかいるものかね、近所の女達が、お互同志手助けの仕合いっこだった。臍の緒の切り方を、私は特に熱心に見て覚えた。それから、二十日もたたないで、うろたえ者の信一は生まれた。夜明けの光りと共にね……………前の日まで、私は人並みに畑の仕事をした。夜中になつて、変な工合で目が醒めた。良くわからないけど、何だ

か、産まれる様な気がした。その時の為に、用意して置いた物を出して、それから初湯を湧かす火を燃しつけた。火が燃える気配で院代さんも目を醒しなされた。

院代さんは狼狽してやたらと煙草をふかしてばかりいなされたものよ。才前達もいずれ母親になるだろうが、その時は、騒動せんことじゃね。落着いて身一つにならねば、死んでも死なない、と思つて、辛抱するんだな。生まれることは自然なんだから……：私は、黒人のお産を見て、つくづく、そう思った。

……ええ、勿論私は一人で産んだよ。院代さんは、私が臍の緒を切つて声をかけるまで、おそらく煙草ばかりすぼらせてござつたらうね……：それは、怖ろしかった。我れと我が心臓に鉄を突き刺すぐらいのコーラージュを出したよ。しばらくは、ドクドクと、心臓が鳴つて、止まらなかつた。義雄が駆け出して行って、近くの日本人の奥さんを頼んで来たら、私はもう、義雄も張りもなくなつて、横になつた。それからやたらと涙が流れたね……：文絵はお父ちゃんのお臍、見たことがあるかい？……：なかなか立派なお臍だろう……：アツハツハツハツ……：何も彼も足りない物ばかりの中で、信一は有り余る乳を持って生れて来た。ジンと、乳張りがして、ほとばし出る乳が、どんなに私を元気づけてくれたものか……：此の子はきつと、裕福に暮らすようになるだろうと思つたね。文絵達は、今のお父ちゃんをどう思つてるかな……：信一が育ち盛りは、つらい事ばかり多くて、学校へ行くどころか、靴もはかないで、働くばかりだった。だから文絵等のお父ちゃんは、

学問は無いけれど、自分の働きで財産を積んだんだよ。

お前達は不自由知らずに学問をさせてもらつとる……説教するんじゃないけど……多少は、お父ちゃんの昔話しを聞いておかんと、いかんよね……。

信一には運がそなわつてると思ったね。隣の黒んぼの赤ちゃんには乳がなかった。信一は、赤んぼの時から、他所の赤ちゃんに自分の物を分けてあげたのだからね……タドンのように黒い赤ちゃんの頬に、どんぶり位もある、白い乳房をおしつけてやるのは、楽しかったね……”飲みな、飲みな、腹一杯飲みなされ。信一の分は、新しく出るからつて”……そんな一人ごとを言う時私は何とも、豊かで良い心持ちだった。ふと、前の耕地を逃げ出して、サンパウロへ歩いた道傍の家で煮豆に粉をかけて食べさせてくれた黒人夫婦の顔を思い浮かべて、そのおかえしをしている様な、心持ちにもなつたりしたね……そんな時には……。時々信一と二人、コーヒーの木蔭にサツコを敷いて寝かせとくこともあった。小便臭いおむつはコーヒの枝にひっかけて乾かしたりして使ったが今思つてみると随分不衛生なことをしたもんだよ……お前等の育つた時は、一度だって、洗い上げて、アイロンをかけないおむつは使わなかったのにね……それに比べると信一達は、ひとりで育つた様なもんだよ、”母親でござる”なんて、大きな顔はできないよね、婆ちゃんは……。”

そう言つて、一息ついている美輪お婆さんの眼の中に、哀しそうな陰影が宿っている事など、孫娘等の気をつくことではなかつ

た。黒んぼ赤ちゃんとおもやいの乳を飲んだ父親の赤んぼ時代の話を聞き急ぐ。

「黒人娘は、自分等もめつたに食べない卵を指って来たりしたけれども、どうしてだか、その母親は一度だって、赤んぼを抱いて私の家に来なかった。

大方、お産の時、御祈祷までしてもらった劣等感が、そうさせたのだろうよね。院代さんはマモンを盗みに行ったりして、二人の赤ん坊を抱いている私の手助けをしてくださった。油いためにしたり、漬物にしたりして、青マモンはとても重宝だった。熟した実はおやつにもってこいだったし、しぼり汁は二人の赤んぼに喜ばれた。義雄は日曜日ともなると、川に小魚を釣りに行った。ランバリーの油揚げを骨ごとパリパリとかんで、栄養豊富な乳をふんだんに、二人の赤んぼに飲ませながら、産後の私は目に見えて肥ったものよ。そのことでは多少は恥かしい心持ちにもなったね……自分の軀に獣の血が流れてでもいるのであるまいかと思ったりしてね。耕地は次第に活気が見られるようになった。病勢が衰えていったからね。それでも院代さんは、四、五人のお葬式をして上げなされた。さすがの私達も、今度は腰をすえて、美沙もその耕地で産まれたのよ。四年間残した少しの資金を持って、いよいよモンソン植民地に移って行った。モンソン植民地の棉景気が、しきりに私達の気を引いたんだよ。十五アルケールズの借地農になったわけさ……ごむまりのように心弾ませて蒔いた棉は見事に芽を出した。紅がかった茎が、瑞々しい若葉をいただいて、

列をしいた棉畑の朝は、花畑より美しいと思つたね……正直、初めて金がる木、と言う期待を、棉の若芽に、私達はかけておつた。それが、あの憎らしい蝗に、あつと言う間になめ上げられてしまったのさ……そりゃあ凄いいものだった……ゴオーと唸りをあげて、やって来たなア……見る見るお日様もかくされてしまつて……ほら、いつかの日蝕の時と同じだった……いや、もつと暗かつたよ……勿論、手を拱ねて見ていたのじゃないよ。石油の空きラッタをガランガラン叩き鳴らして畑の中を駈け回わつたり、白布を棒の端にしぼり付けて振り回わしたりして、追つてみたけど、全くの徒労だった。棉は土ぎわからきれいになめられてしまった。あの時ばかりは、婆ちゃんも泣いたなア……泣かないと胸が破れそうだった。

院代さんの胸に頭をぶつけて泣いたよ。棉が穫れたら、日本に金を送ろう。元気で幸せに暮している、と言う手紙だけでは、日本の親達を喜ばせはしないことを、私達は知っていたからね……それが出稼移民の宿命だった。日本への送金。故郷に錦をかざる。ああ、何と、かなしい願望だったろう……。その願いを叶えてくれる筈だった棉畑は、束の間に赤肌むいた地面に変わってしまったんだからね……。人間ばかり泣いたんじゃないよ。蝗を食べて猫は死んだし、盲目になった犬もおつたよ。惨澹たるものさ……。でも、その夜は、大いに笑つたね。笑うほかはなかった。と言つた方がよさそうだが……。私等が借りた土地は、少し高みの処で下り坂を一キロばかりも行くと、鉄道が通じておつた。晩御飯

の後頃いつもサンパウロからの汽車が通るのだが、その夜に限って、汽車はもの凄いい火の粉をふいているのに、なかなか進んで行かない。義雄が一番に見つけて、変だ、変だ、と言う。私等も表に出て見た。火の粉は息つく様にして真暗い夜空にふきあがる。汽関車がガラガラとすさまじい音をたてる。「汽関車が空転しているんだよ」：「然しあそこは上ぼり坂でもないのに」そんな事をしゃべりながら、しばらく見ているところに顔見知りの伯人が通りかかって、「蝗が汽車まで泣かせとる」と言ったのさ……線路に積む程蝗が降りていて、それを轢き殺した油にぬめって空転するのだと、教えてもらった。汽車も火を吹いて泣いている。汽車も泣いている。と呟やくと嬉しくもないのに、笑いが止まらなかった。「姉ちゃん（義雄は私の事を、そう呼んでいたよ）気持ちがいいになったかと思った。」義雄を、そんなに驚ろかして、私は何故笑ったのだろううね……人間の一生には、いろいろな場面が巧まず演じられるもんだよね……。それからの事かい……。ぼつぼつ話しますよ……。蝗の生態を、知ってるかな、お前等は……。棉の若木ばかりでなく、青葉と言う青葉を食べ尽した蝗は御丁寧に二代目を産みつけたのさ……。奴等、ちゃんと知恵があるんだよ。子を産みつけるにもね……。ザラザラとした砂地はよけて、土のかたい処に産むよ……。そうだね、深さ七・八センチくらいの小穴を掘って産みつける……。砂地だと、子を産みつけた小穴に砂がこぼれ込んで、可愛い子供が窒息して死んでしまうことを、ちゃんと知ってるんだよね、カマキリの卵殻に似たものが小穴の上にかぶせてある。幼虫

はそれを破って、出て来るのだがね………そんな事ははっきりわかったのは、蒔き直しの棉芽を荒されかけてからだった。此の幻虫は成虫よりも悪かった。

早く成虫になって空を飛びたいんだよ。そいつらは……。片端から若芽を食べて行く。人間どもは今度は溝堀りだよ。五十米おきぐらいに、三・四十センチの深さの溝を堀る。それから、子供まで棒ざれで地面を叩いて追うのよね。乳色の幼虫が、鼻面を揃えて、溝の方へ進んで行くのは、随分、いい気味だった。それでも虫嫌いの文絵なんかにあれを見せたら、気絶ものだな……。溝にころげ込んでしまうと、土をかぶせて皆殺しだよ。高飛びする羽根がないのだから始末するのは楽だった。それでも二年ばかりは残り蝗がおって多少は作物をいためたね……。怖ろしい虫だよ蝗は……。その植民地の三作目は見事豊作をとったね、真白くふき揃った棉畑の真中の小屋で、夜の眠るひまさえ、惜しいくらい働いた。多少まとまった資金が出来たので、S植民地へ移って五十アルケールスの棉作りになった。その時には信二も生まれ、私は四人目の妊娠をしていた。義雄はもう院代さんより体格がよくなって、働き者だった。義姉と私は姉弟よりもっと気が合っていた。棉の芽生えも上々だし、徴兵検査前の義雄だけでも、日本に帰すことが出来るかも知れない、と帰せることを喜んだり、帰したくない心持ちになったりしていた失先、義雄の命を奪い去ってしまった奴がいた……。破傷風の黴菌だよ。D耕地では、あれほど怖い熱病の中にいてさえ、ろくに風邪もひかなかった義雄を、あっけな

い程、無抵抗に、死魔の手に渡ってしまった。

重々、あれは私の落度だった。茅を切りに行つて、少しばかりの怪我をしていた。本人も私も、気にもかけないでいる中、破傷風菌はその傷口から這入つて義雄の命を食い殺してしまった。今だったら、それでも、何とか、命をとりとめることも出来たろうに……突然、硬直してしまつた義雄の体を、夜通しさすつてやりながら徒らに死魔の手にゆだねてしまつたのだから……罰だよ。次の年には院代さんまで、死んでしまいなさつた。その年は悪い事づくめだった。でも人間てかなしいものだよ。一足先には、怖ろしい落とし穴があつても、見極めることが出来ないのだから……其の年の棉は普通作だったが値段は鰻のぼりだった。十ミル代から、三十ミルに届きそうになっていた。私等は最高の値段を待っていた。袋詰めした棉は町の仲買人の倉庫の中で値上がりを待っていたのよ。其処にあの革命騒ぎだった。

兵隊がどんどんやつて来て、市街戦の陣地築きの材料に、倉庫の中の棉は引ぱり出されてしまつたんだよ。戦終つた跡に踏みしだかれた棉を拾い集めた時は涙も出なかつた。泣けないまで、がっくりときたのだよ。革命騒ぎのあつた年の十二月だった。院代さんが死になさつたのは……たつた五日間の病気で、死んでしまいなさつた。急性肺炎だったよ……全く、私は罰を受けたんだよ。院代さんを他所の女に盗まれまいと、院代さんの死を願つてたりはしなかつただけど……？ 何でもないよ、ああ、疲れた」

美輪お婆さんは、それが癖の、左手で後ろ首を撫でながら、最

後の呟やきを、孫娘達が聞き直そうとするのには、とうとう口を開かなかった。しばらくして、パツと眼を開ける様な格好をして

「その中には、面白い事だっっていくらもあつたんだよ……あれは信一が八つか九つの時だった、いや、七つだったろうか……其の頃、森の中から猿がミーリヨを盗みに来るので、信一はそれを追いに行くのを面白がっていた。犬を連れてって、けしかけると、二匹の犬が吠えたてる。すると猿は、大あわてよ。猿は知恵があるからね、森に近いミーリヨ畑で、ちょうど食べ頃のをもぐんだよ……ええちゃんとむいて見るよ。そして、二つのミーリヨを結び合わせて、一層にひっかけて山の中へ持ってって食べるのさ、犬に吠えられ、あわてふためいて逃げる時木の、枝から枝へ飛んで行くのよ……町育ちの子供に、森の話をするのは、難儀な事やな……或日、猿を追いに行った信一が、まっさをな顔で逃げ戻つたね……ミーリヨ畑のへりに大蛇がいると言うんだ。「まさか」と思っても毒蛇の大きなのでもいたら大変だから、院代さんは鉄砲、私はホイッセを持って駆け出した。信一が案内役……うん、おったよ。両手で握りまわせないくらいの胴廻りに見えた。森ぎわに、ファイゲイラの大樹が横倒れになっていてね。

その木の下に、頭と尾を突っ込んで、胴腹がまるく張り出した格好だった。青黒くて、灰色がかった粉がふいている様に見えた。叢越しに、院代さんは鉄砲を構えなさった。私と信一に、後ろへ退がれと合図をなさる。信一を脊後にして私もホイッセを構えた。ズドン、鉄砲の響が森をゆるがした。今にも大蛇がおどり出るか

と思ったよ。ワアツハツハツハ……何だったと思う？ ……
大長かぼちやだった。

倒れ木の下から、弾をくらった大長かぼちやを引つ張り出した時のおかしさと言ったら……笑っても笑っても笑いが止まらなかった」

○ ○ ○

機嫌の良い時を見はからって話しの続きをねだっても、美輪お婆さんからそれ以後の昔し話を聞き出すことは出来なかった。
“それから後の事は、文絵のお父さんも美沙伯母さんも知ってるから、そちらで聞かせてもらいなさい”

いつも、そう言って逃げられてしまう。孫達にしてみれば、お婆ちゃんの口から聞かねば、意味ない様な心持ちになる。何故ともなく、そうなるのであった。

美輪お婆さんにしても、院代さんの死以後の事こそ、話さねばならないのであった。話す、と言うことは、罪の懺悔であった。懺悔をしたい。しておかなければ、日照雨が降っても、潔く院代さんや義雄がいる処へ行くことが出来ない。臨終のドタン場になって、醜態をさらすことになるだろう。愈々病を得て美輪お婆さんは懺悔をしそびれてしまったことを悔いた。そして、日照雨が降るのを怖れた。魚鱗をはぐように、人間の生活の間に作った罪は、人間の世に脱ぎ捨てて逝きたい、と美輪お婆さんは願っていた。然し、お美輪さんの心の中についた鱗は、お婆さん自身の腕で剥ぎ取るとは至難な事だった美輪お婆さんの頭の中では、孫娘等

に話して聞かせた、その後の事が、びっしりと詰っていた。

金のなる木の事などは、お伽話の部類であった。

だが、院代さんを他の女から盗まれたくない願いは叶えられた、と二十九才のお美輪さんは安堵し、それは数々の悲しみや苦労を埋めても余りあるほどの慰めでもあった。然し、男心の奇怪さ、と言うか、浮気っぽい癖のしぶとさと言うが、そうしたものは素朴で生一本な美輪の手の届かない処にあった。

院代さんの町へ出かける度数が多くなり、次第に帰宅時間がおくれるのに美輪が不審をもつ様になった頃、院代さんの色事は、植民地中、知らぬ人はいない程になっていた。院代さんの色事は月忌参りの場でばかり始まると思っていた迂闊さに、今更、ほそを噛んでも後のまつりであった。町の入り口で野菜作りをしている女、それは未亡人ではなかった。

何年か前、夫は発狂して何処かの精神病院で生きでいる留守妻であった。其の事を知った時、美輪は、初めて絶望を感じた。発狂した男の妻を、院代さんが愛していると言う。その事は、もう完全に美輪を叩きのぼしてしまった。まるで不死身の様な美輪の精神であったのに、ひとたまりもなかった。

赤穂の山村の松乃後家が、血塗られた浴衣の裾をひるがえして、院代さん恋しさに、足を踏み鳴らした姿が、眼先にちらめきはじめて、叩きのめされた美輪の精神を引っ掻きまわす。松乃後家を狂わせなされた院代さんが、今は、発狂した男の妻に惹かれていなさる。院代さんのまわりには妖気が漂っている様な気がする。

男心を追う女の心が、ギラギラと、院代さんの身边を飛び回って、妻の自分を遮っている。と、思うとやつれる事を知らなかった美輪が、見る間に痩ていった。さすがに院代さんの町行きが遠のいていた或日、院代さんは馬を駆って町へ出かけて行った。信三の三才の誕生日を祝ってやりたいから、と言って出かけておきながら、其の夜、院代さんは戻って来なかった。美輪は最早、恨む強情さを持ってはいなかった。夜を帰らない夫を待つ苦痛に、心はしぼりあげられていた。「もつと機嫌良く送り出せばよかった、今朝の私の顔は、院代さんと自分との間の最後の一筋の糸をも、断ち切る程、醜悪なものを浮かべていたに違いない」美輪は一睡もしなかった。未明に馬の足音がした。すべり降りる格好で馬をすてた院代さんは「頭が割れるようだ」と言ったきり、寢床にもぐり込んでしまったのだった。戻って来た夫を見ると、唯憎らしいばかり、一人寝の床で、転々として、自分を責めた美輪は消え失せていた。朝露に足を濡らして馬をパストに放しながら、美輪は心の中で悪態をついた。「頭が痛いなんて、何言ってる……野菜作りの女に大切にしてくれて、精根尽きるまで、お返えしをして来たくせに……。」

アルモツソにも院代さんは起きて来なかった。美輪も見に行く気にもならない。子供達も、母親の目色を窺って、父を見に行くことをためらった。おやつのカフェを湧かすと、さすがの美輪も悲しくなった。ひび割れた夫婦の姿が悲しくなって、美輪はカフェを持って寢室に這入って見て驚いた。院代さんは、暑気にあ

えぐ犬の様な荒い息ずかい。脂汗を滲ませ、鼻の穴を開いて熱気を押し出す様な凄じい呼吸である。一瞬死なせてしまった義雄の事が閃光の様に美輪の心の中を突走った「何と不吉な」と、自分を叱っても、此の人も死ぬ、と言う不安は決定的であった。後になつて、その不安が決定的であつた事が、むごいまでに、美輪の心を責め苛むことになつた。「他所の女にうつつをぬかす院代さんなんか死んでしまえばいい」自分は、あの時、そう願つたのではなかつたらうか……と意地悪いまでに、自分の心をほじくりかえすことが幾度となくあつた。自殺でも強いるような容赦ない苛責であつた。

隣の伯人を頼んで、町の医者呼びにやつた。町にたつた一人の医者は、留守であつた。それでも、薬局の主人を連れて来てくれた。熱さましに頭痛どめの注射をしてくれただけであつた。翌日の昼過ぎになつて、薬局の人が医師を連れて来てくれた。急性肋膜炎。此の病気は一週間目が病勢の峠。だから、峠を越すまで体力が保てるかどうか……心臓さえ強ければ、或は大丈夫だろう。すがり付く美輪の目に、医者言葉は、容赦はなかつた。伯人に教えられて、胸部に牛の生肉をはりかえ、はりかえ、浴びる程、薬を飲まされながら、院代さんは死んでしまった。発病後五日目であつた。

地球の裏側までもやって来て、その恋を遂げたつもりの美輪の心こそ哀れであつた。心も臓腑も根こそが奪い去られた様な空虚さで身の置きようもなかつた。最後が嫉妬の恨みごとで閉じられ

たことが残念でたまらなかった。私の毒気が、院代さんの容態を悪化させたにちがいない。愛とは何だろう、愛とは？ ……檻の中のライオンの様に、空虚な胸の中を悔が狂い歩くのであった。

○○○○

“ パパ・お電話、兄ちゃんからよ ”

ベッチーニヤが信一を呼んだ。うつら、うつらと椅子にもたれていた信一が、ゆらりと動いて立ち上がった。電話室へ行きながら、サーラでトランプ遊びをしている子供達を叱った。

“ 止めなさい、トランプ遊びどころじゃないのに… ”

“ ただ、すわっていたらねむたいよ ”

ロベルトの言い訳けなど聞き捨てにして、信一は受話器を取った。

“ あゝジョルジか…今頃まで何処をそつき回っていた？ ……時計を見ろ！ 十二時だぞ……え？ 試験勉強？… ”

自分の部屋で勉強できんのか…婆ちゃんが悪いんだ……今晚もつか、もたんか…うん、皆集つとる。ベッチーニヤもリカルドも、寝ないで婆ちゃんを見とる……足りないのは、お前だけさ……そうだよ……大急ぎで帰んなさい……試験がどうつて？……何？……三科目も悪いのなら、落第に決まつとるじゃないか……殊更、婆ちゃんの故にするなツ……え？……ナモラーダがどうした？……ナモラーダする為、サンパウロにやつたんじゃないぞ……連れて来るって？ ナモラーダをか……馬鹿！！ ……兎に角、車をよく調べて、すぐ発つようにせ。わ

かったな。気をつけて走らすんだぞ、」

信一の声が、次第に荒らく高まると、トランプのカードを握ったまま聞耳を立てているサーラの連中は、肩をすぼめたり、唇をとがらしたりして顔を見合わせる。サンパウロの大学で勉強しているのを、やたらと威張っていたジョルジが落第しかけているのは痛快だった。

こともあろうに、此の取りこみの中で、ナモラーダをパパに紹介すると言う、ジョルジに信一は、腹を立てている。腹立ちまざれに受話器を叩きつけんばかりにした信一の手は、ガチャンと音を立てる前一瞬の時点で、静止した。音もなく受話器は台の上におさまった。父親に若死にされた後の、貧困な生活を耐えぬいて、三つのガソリン・ポスト、二百アルケレスのパストに、牛を放つまでになった忍耐の習慣は、今の様な場合でも、我れ知らず、物を大切にする癖がついていた。

小さなキタンダを始めた頃、野菜を包む古新聞の使い方さえ、せまく使って上手に包む工夫を、美輪は信一たちに教えたのであった。破れて着れなくなったズボンには、足拭きから床拭きになり、最後は店の床にはき散らされる客のたん唾や、母親に従って来た子供がそそうする小便の拭き取りに使うまで捨てる事を許されなかった。妹の美沙と母の前掛は、男の子達のカミーザの古物を継ぎ合わせたものであった。売れ残りの菜葉を勿体ながって、二日間も菜葉の汁ばかり食べさせられたこともあった。母親と苦労を共にした四人の子供の辛抱強さは、血の中まで泌みついてい

た。

それでいて、いや、それだからかも知れないが、サンパウロの工科大学に入学したジョルジには自動車まで持たせてやってある。女の子たちは、めいめいピアノを与えられている。自分に出来なかった贅沢を、子供達に果たさせてやるのは、美沙も信二、信三といえども同じであった。

美輪お婆さんは満足そうに、それを眺めていたけれども、心の幼い我が子に、深い処に癒えない痛みを抱いていた。

幼い我が子に、何一つ満足させてやれなかった母親の心の痛みは、年を経るほどに、強くなっていく。時たま、小さなキタンダ時代の事が話題にのぼったりすると、物音に驚いた貝の様に、美輪お婆さんは口を閉じてしまうのであった。みじめな姿で働かせた子供達の幼児を思い浮かべる苦痛と、お婆さん自身の傷の痛みがそうさせるのであったろう。

信一と美沙には、お婆さんの心の中の戦いが幾分かわかるような気がしたが、何故か知らぬふりをして、やり過ごしてきた。

小さなキタンダから、エンポリヨにやりかえた頃、母に何かの変化が見えた。世話になった瀬口の小父さんを、母は愛したのかも知れない。それは極めて子供らしい、ぼやけた感じではあつたけれど、そう思い、而も、信一も美沙も、知らぬふりをしなければいけないと言う知恵のようなものも持っていた。二人の子供の、そうした、いじらしい思いやりに、美輪お婆あさんは少しも気がついていなかった。

ひた秘しに秘し遂げたものと、思っていた。罪の意識は、誰にも知られず、誰にも責められなかったが故に、ひたすら自分の軀内に籠る。そして、告白し、他からの叱責を受けるには、時期があるようだ。ひとたび機を逸してしまつたら、余程の勇気を以つてしても、最早、自ら求めて、責られようとはしない。

いや、安泰の惰性に流されてしまう。臨終の寸前までも、美輪お婆さんは、その流れに遂いに逆うことが出来なかった。そして今はもう、手を上げて、子供等を、孫等呼んで、懺悔するには遅すぎた。

○ ○ ○

お婆さんの瞼がかすかに動いた。眼を見開き、聞き耳をたてたいのだろう。透き通るまでに水膨れした瞼は然し、糸すじ程も見開かれはしない。

“お婆ちゃん。お月夜なのよ、まんまるいお月さまよ……えゝえゝ つ・き・よ”

わかったのか、わからないのか、文絵の優しい声の下でお婆さんは静まりかえっている。

“眠ってばかりいて、婆ちゃん苦しくはないのだろうか”

“さあ？ 若し、文絵の声がよくわかるのなら………心が苦しいのじゃないかな……” “ちがうよ、婆ちゃん、お浄土へのお嫁入りを今はもう、待ち遠しがつているのよ”

人間の愛とは、はかないものだ、と信一は思う。

あれ程の労苦を分け合い、いたわり合つて来た筈なのに、母と自

分の間に今は何一つ、確かにつながっているものがない。母は一番大事なことを成し果たさず、自分も、最も、して上げねばならない事をしないまま母を死魔の手に委ねようとしている。夢の中で叫ぼうにも声が出ず、走ろうにも足が動けない、あの焦りに似た心持ちで信一は母を見守っていた。

此の二・三年、美輪お婆さんはお仏壇の前で、じつと阿弥陀様を見上げていることがあった。子供や孫達に話せない事も、阿弥陀様には申し上げやすかった。

「革命騒ぎで踏みしだかれた棉は、いくらのお金にもなりませんでした。院代さんの病氣から葬式の費用、次年度の借地代、営農資金、母子五人が食うていく算段。何も彼も足りませんでした。追われるようにして、町はずれの空小屋に移りましたが、父を失って、しよんぼりしている四人の子供に、腹一杯御飯を食べさせてやりとうございました。一月分の食糧を借りに行きました店で、私を取り引きに使いました手段が 妊娠となったのでございます。払えないお金の代りに差し出した肉体に結ばれた実をしも、女であれば育て上げねばならないとは：阿弥陀様、私には、そんな事は出来ませんでした。四人の子供を守る為に、不当に宿した小さな命を消さねばなりません。そして、私はその行為に罪の意識を持つ必要を認めたくありませんでした。然し今は異います。確かにあれは殺人行為であった事に怖れを抱くようになりました。ですけれど、それ以後の私は、罪の意識に戦きながら、妻子がある男に、身をまかせたのであります。キタンダから小さなエン

ポーリョと、けなげな母子の店と言われて少しずつ拵げていきましたが、その資金を出して頂いた方を、私は、何時しか愛し始めていたのでありました。

之れはもう、院代さんへの大きな裏切りでありました。院代さんは生前幾度となく私を裏切りなさいましたが、私は生きており、恨みごとを言い責めることも出来ました。だのに、死んでしまった無抵抗な院代さんを私は裏切ったのでありますから、私の方が性悪でありました。そしてもつと悪いことには、私は一度も、自分の秘密を 他人にあげられませんでした。以前には、それで胸なでおろしたことでしたが、今は、此の胸の中の秘密を白日の下に暴りたいのです。親切な男を愛しみごもり、そして闇に葬りました。二度もくりかえしました。これはもう、一分の申し開きも出来ない意識しながらの罪な行為でありました。其の男はサン・パウロに移転しました。それ以後の私は、唯もう慎しみ深く暮して参りました。子供達は、いくら自慢しても、自慢のし過ぎではないくらい、立派な社会人になりました。

皆私を大切にしてくれています。ところが、私は、その労わりの坐に平気で坐っておれないつらさを今かみもめております。折角、私の肉体を縁として、此の世に花開こうとしました、三つの魂は、何処にいて、私を恨んでいることでございましょうか、」

美輪お婆さんは、読み慣れぬ「正信偈」を長い時間をかけて拝読することがあった。むずかしい偈文の意味など解りはしない。けれども、拝読していると、いくらか胸が軽くなるのであった。

戎朝の礼拝は特に念入りであった。

「ああ、罰でございます。生きているうちから、もはや、罰を受け始めました。それは昨夜夢になって現われました。私は山道を歩いておりました。一人きりでした。突如として怖しい嵐が吹き起こりました。言葉を絶する凄じい風でありました。不思議な事に、それは、私の身のまわりだけの限られた嵐らしく少し離れた処は、静かな畑で、綿の花や馬鈴薯の花らしいものが咲き 美しい色の蝶が舞っているのが見えました。私は龍巻の中に巻き込まれたのだと思い、逃げ出そうと、必死に走るのですが、龍巻は、強く私を吸い付けて離しません。そして何としたことでありましょう。両足の間から小石が私の下腹部に飛び込もうとします。ふと、その中に、私が消してしまった三個の魂が目をむいているのを見てしまいました。」

阿弥陀様に夢物語りをし、仏の慈悲にすがって、声のない告白ばかり繰り返している自分の狡猾さを、美輪おばあさんは悲しく思うのであった。

「私はね、三人もの我が子を殺した罪人だよ」と家の者の前に軀を投げ出し、嘲り罵られたいと思うことがある。それと同じ強さで、この稀なくらいの平和な生活の中で安住しておりたい、と願う心があった。両極の心に、引きずり回わされ、引きちぎられて、こま切りになった心が、罪の意識に小突きまわされる、それが夢となつて現われるのであろう。

「婆ちゃん、婆ちゃん」並んだカーマから起きて来て文絵が揺り起

こした。「わしは、うなされていなかっただかい？」美輪お婆さんは、罪の発覚を怖れる顔になる。「手を振りまわして、うん、うん言ってたのでびっくりしたのよ。怖い夢みたの？ ……」

「あゝ馬に追いかけられてね。白いあばれ馬だった。それが前足を私の頭の上まで立ち上がらせて、私を抱き込もうとしたのだよ」お婆さんは、ずっと以前みたことのある白いあばれ馬の夢と、石つぶての夢をすりかえて、文絵に話した。三つの霊魂が、石つぶてにまじって、私の腹の中に戻って来ようとする夢をみたのだよ昔、私が犯かした罪の報いだよ、悪い事したら罰が当たるものだよ。と言ってしまったえば胸が軽くなるものを……美輪お婆さんは、むぎむぎ告白懺悔の機会を逸してしまった後で、阿弥陀様の前に逃げていったのであった。それは七十才の祝宴をはってもらった前か、後の頃の事であった。

○ ○ ○

夏の夜明けは早い。此のまま、明日の光りを迎えるかと、家の者達は、ほっとし、そして、無性に睡気におそわれた。孫達はことごとく、ソファや、タペツテの上で寝くずれていた。誰よりも一生懸命、看護していた文絵さえ、椅子に脊をあずけ、口をゆるめて眠っていた。信一がふと目を開いた。病人が思いがけない力で両手を頭の上まで上げた。指がまさぐる格好に動いた。鼻腔を開いて深い息を吸った

そして、とうとう、次の息を吸わなかった。わずかに、ぐらりと頭がかしいだ。一千九百六十四年十二月二十三日午前四時五十三分であった。

苦痛も訴えないで、つききりの看護人さえ気づかない間に息をひきとった美輪お婆さんの死を、稀に見る大往生であったと、人々は褒めそやした。

信一は仏壇の中の父の位牌を見つめていた。一千九百二十四年十二月二十一日に父は死んでいる。その日から、四十年と二日間、母は生きのびたのだった。

ふと、四十年間の預りものを父にもどす心持ちに信一はなっていた。そして、母に代って、謝ってやらねばならない事がある様に思った。父の位牌に、四十年前の父の面影が浮かび出、半眼に開いた眼は慈悲に溢れ、母のなきがらを見迎えている。母を被うた白布が一幅の俯瞰図に塗られていく、四十年間の母の喜びと、かなしみと、怖れ、との色に……閉じた瞼の中で、しかとそれを見た信一は、何か大きな安堵をおぼえたのであった。お通夜も明けようとする刻、大夕立がきた。善き人の死を悼む雨であることを、居合わせた人々には　うなずき合った。

二十四日の午前八時、大雨のあとの爽やかな朝日が照り出す中を、お棺は出て行った。降り残りの太い雨足がまばらにキラメキ落ちているのを信一も文絵達もしかと見とどけたのであった。

作品選後感

選考委員

水野 林

山里アウグスト

武本 由夫



選 評

水野 林

「なでしこ」 蓼科 冨智雄

題名も「なでしこ」ならば、内容も少女趣味で、花泥棒のお話となつている。日本の母から手紙と共に撫子の種子が送られて来て、その播種、発芽、開花。そして花盗人の少女が現れる。

終りは少女の弁明で、死んだ母にそっくりの人にあげたいこと、その人はなでしこが大好きで……などとある。

プロットはあるにしても味気のない経過報告的なもので、小説的な、そして文学的な、作者の個性的なものが何ら加味されてはいない。作者はこの素材を書きかえられるよう望む。素材の選び方には別の問題があるにしても、素材に肉づけをしていく小説技術をもつにするには、それも良い方法でありましょう。

これはいわゆる生活のにじみ出た作品というものだろう。奥地農村を渡り歩く貧しい日本人家族。美しいフェルナンド氏の農場。牧場や、豚小舎や、半黒人の分益農たち。油虫でいっぱいな壁のある労働者住宅。農場主一家の生活と家庭事情。ときどき金(きん)さがしのために無遊病者のようになるゴメス氏などが扱われ、小説的な展開が伴っている。状況設定も面白いし、人物の配置もわるくない。私などが好きな、文学的小説にはならなくても、この作者がもう少し対象を生き生きととらえてくれさえすれば、我々の興味を呼び覚ます作品になるだろう。未完とされているが、一五〇枚程度の引締った作品に仕上げたい。少くともこの第一部では、タッチが粗い。細部にも、もつと作者の観察や、登場人物についての作者の想像を盛りこんでいくべきである。この原稿で見るかぎり、完成度はまだ低い段階にあると云える。

いつさい、うるさいことは抜きにして、人物の行動がドライに、無骨な筆致で書き進められてゆく。何が書かれているかという点、主に房事に関することである。女主人公のマチ子を中心に、色々な状況下での行為が、次から次へと六〇枚を通して紹介される。なかにはサンパウロでのその道の事情が明らかにされていて、我々初步的読者には有益である場合もある。マチ子は簡明に割りきって事態に処していくが、多様な相手のうちには、不倫な関係

に耐えきれず、自殺者も出るという様子である。作者は大マジメで、過度にわたるのも恐れず、直接的な用語で、述べたいところを述べる。しかし作者のこの作品に対する姿勢というものはどうなのでありましょう。何かテーマについて、真険な意図をお持ちなのでしょいか。もちろん真険でなくとも良いわけで、存分に不マジメであつても何のさしつかえありません。ではお楽しみで書かれたのでしょうか。そうでもないようです。読んでしまつてから、作者の作品に対する一貫した態度というものが感じられず、どうも、すつきりしません。

「日照り雨」 川原 奈美

どちらかというど退屈に書き出される。しかしこの初めの部分は、充分な取材を基礎にして作品を展開していくための、作者の意を尽した導入部であることが、わかつてくる。中心になつてゐる美輪婆さんの思い出話になると、話柄はよく用意され、よどみなく作品は流れ始める。構成の上でも工夫があり、思い出の初めは美輪婆さんの夫の「院代さん」との恋模様であり、明治の日本の因習的な地方生活の様子であり、読むほどに興味深くなつていくように書かれており、読者への牽制が利いている。聞き書きであるが、細部はよく作者によつて補綴されている。文章は、読者にこなれがよいように配慮され、老婆の話法を再現するに当り、ある程度忠実性をあえて欠くことにより、陥りやすい混乱を避けようとしてゐるのがうかがえる。要するに、作者の作家として

の理知は、行き届いていると云ってよい。それがこの作品を快よいものにしてている。院代さんは充分に描けてはいない。主人公と共に行動をとりながら、奥地農場からの脱走という道行きもどきのくだりなどでは、彼の姿が作中からかき消えている時がある。作品全体から云えば、このことは、なによりも院代さんは副人物なのであるから、あるいは作者の計量の結果ともとれ、強く印象に残るミスではないが、いま少し書き加えてほしいところだ。

悲痛な、まっ正直な苦労話は人を辟易させるが、これはその苦労もたのしみであった、というお話で、主人公のより高い人生知が、あたたかく心に残る。この作品は成功しています。正直に申し上げて、前作「移植」はこの同じ作者が男女の交渉を扱う場合の処理の仕方が嫌味であったこと、主人公に通俗的な意味でも魅力がなかったこと小説手法の上でも萎縮気味、無策であったこと、などで、満足な感想を持ち得ませんでした。そこでこの作者について、もつと軽い判断を持つという結果になっておりました。

しかし此の度の作品については、良い作品をお書きになったと思いますし、このような作品を持たれたことについてお祝い申し上げます。上げたと思うわけです。

「真夏の出来事」 杉村 士朗

作者の分身と覚しき青年のある一時期が描かれている。いわばラスコーリニコフ的に貧困な青年である。金に困っている。だが

売るものもない。ギターを売りに行く。下宿代がかさんでいるのである。青年はかつて過ごしたブラジル農村での生活を短かく回想する。

夜の大都会での独り歩き。そして真夏の出来事となる。つまり一人のポーランド系家出娘に合うのである。その身の上話。彼女は行商の若いアラブ人の男に恋し、家出し、捨てられたのである。やがて青年と家出娘は寝る。当国の真夏クリスマスのあるところである。神と罪の意識についての会話の後に、明日からは又一文なしであることを考える。

青年は安らかな眠りに落ちる。

考えられることは、主人公の青年は日系人社会にも、ブラジル人社会にも、籍を持たず、社会参加を怠っている。

独り下宿に棲み、独り街を歩き、独り考える。社会を傍観しつつけねばならぬ何らかの理由を持っている。下宿代を溜め、慢性文なし状態を堅持する生活態度の背後には、牢固とした固定観念がある。文学にとりつかれているのである。

これらのことは作中に触れられてはいないが、当然想定されるわけで、つまり作者を知る私にとって、青年は作者そのものである。そこでこれは一種の私小説になるのである。ポーランド家出娘との一件が事実ならば、より完全な私小説となり、またフィクションならばそれは作者の夢を語るものである。

作者はプロットを追うことにあくせくしており、小説的世界が文学的に展開されていない。性急で唐突なので、この作品はこの

ままでは読者に理解されないだろう。作者の人生傍観主義は、杉村君の文学を利するはずだが、それにしてはこの作品の出来具合はひどいではないか。

杉村君、君の生活の姿勢はもっと君の文学に収穫をもたらさねばならない筈だ。この君の作品では、動機は解剖されず事態は説明されず型式は考慮されず人物は工夫されていない。これが君の文学の最上のものなのか、最低のものなのかは知らない。これで見ると、君は単に文学病人に過ぎないのではないか。

「避暑期」

いこま 正

純愛物語である。ロンドリーナから三人の日系学生が海辺の避暑地ガラツバ市にやって来る。二ヶ月の避暑と受験勉強を兼ねている。そこで知り合った日系雑貨屋の娘が、主人公の恋の相手である。ありそうな話である。人生には似たような話が多い。小説にも似たような話が多い。これは、どのヤキソバの皿にも似たような材料が料理されて盛られているのと同じである。

そこで問題は料理の仕方がいいかである、というようなことになるとすれば、この作品はいかにもたどどしいのです。

おそらく作者が、長いこと胸の中で、とつおいつ考えながら型を成してきたプロットなのではないかしら。そしてついに書いてみたけれど、どうも我ながらうまく書けた作品とは思えず残念無念なり、というわけではないですか？ 良い作品を期待していません。

「赤い土壁の家」 平川 早美

よく出来た部分と、まずい部分のまざり合った作品である。読み終ってみて、結局うまい構成に支えられて、小説的世界が、不満足ながら展開しているのは認められる。この作者は、登場人物について、その行動と意志を集約し、抽象化して描いてみせる方法や、人間関係をシニックに見つめる目や、作品の意図に忠実な語句をとらえる感覚や、要するに作家の用意すべき素養を部分的に備えている様子が感じられる。ところどころそういう風に感じられるのは喜ぶべきことであるが、残念なことに作品を書き進めていく上でもう一步慎重さが欲しいところである。

取りこぼしが多く目につき、このままで作品を出してしまう前に十分な推敲を行なってもらいたい。主人公の正子は孤児であり、「私」は地方の素封家荷田家の一人息子で、サンパウロで大学生活を送っている。回想部分は、正子が荷田家の耕地に、その父に連れられてやって来るところから始まっている。その後正子の父は行方不明となり

正子は初めは荷田家の小間使として、後には荷田家の令嬢として寵愛を受けながら成長する。「私」長俊は母親の俗化したキリスト教主義とも、父親の実利主義とも相容れず、長らく帰省をせず、地質学を専攻し「科学趣味」(この言葉使いは一寸稚拙である)の生活を送っている。都会で(交友や青年の孤独が、簡単に描かれる。このあたりわずかにドイツ浪漫派の感じである。

久しぶりに帰省すると家業はますます栄え、正子は美しい女性になっっている。

家庭での正子と「私」と両親との人間関係、正子との危険なドラマイブなどが描かれ、正子の母親の唯一の遺品である、母親の日記の解読を二人でする件りがある。正子の過去はこの日記を通じて語られる形をとる。「赤い土壁の家」は日記に出てくる正子一家の思い出の地に建っているのである。二人の結婚は許されて、荷田家の大広間でのパーティーで披露の後、二人は赤い土壁の家に向かって新婚の旅に発つ。

「紺青の城」 醍醐 麻沙夫

これはブラジル日系の文学の世界で、初めて成功を見た恋愛小説であり、我々の仲間に、一人の作家の誕生を告げる作品である。宮沢良一という青年が、奥地の町の友人を訪ねるためサンパウロの中央バス発着所から長距離バスで出発するところから作品は始まっている。同じバスに、やがて恋愛の相手となる女性順子が乗っているというところを読むと、いかにも陳腐な気がする。ところが作者は敢えて陳腐を恐れないのである。かまわずに書き進めてゆく。

ささいなきっかけから生じた人間のつながりが、次第に深まっていき、一見下らないプロットが強固な作者の小説作りの意志のもとに次第に筋立ての中にきっかりと組み込まれて行く。これで良いのである。バスは進み、旅の一つ一つの過程はおろそかにされ

ることなく描かれて、それと共に「小説」が型造られて行く。

目的地に着くと、そこには適切な状況が用意されていて、その状況の中での人物の行動と心理についての作者の「読み」はほぼ完全であり、論理的、かつ明晰に作品は語り次がれて行く。

これは純粹な恋愛心理小説ではなくて、ブラジルの風物という要素がかなり作品に取り入れられており、小説の背景にブラジルの奥地旅行というシチュエーションを置いて、しかも人物とシチュエーションの熔接に見事な作者の手腕が感じられる。

作中にちりばめられた比喩は、適切であると共に奇警であり、大胆不敵である。

私が少し気に入らないのは、順子という女性は気品のある細っそりとした美人だと想像するのであるが、汽車の食堂での食事にあの油濃くてくどく野卑なビーフエパルメザネを食べさせるのはどうかと思います。これは作中の楚楚たる佳人の食物として少し実質的に過ぎます。それから、そういつてはなんです、このペンネームは三文時代小説作者みたいですが、この

選 後 評

山里アウグスト

◎真夏の出来事

杉村 志郎

今度の作品の中で一番興味をもって読んだ。青年の虚無感をた

んたんと追っている。最後に転落したポーランド女の中に人間の純粹性を発見したところに、この作品のぬくもりがあると思う。多少、乱雑さとかどさかところどころに見受けるが、なかなか魅力がある。

◎流 離

三瀬喜代志

耕地から耕地へと転々として移って、行く貧しい一家が、心と心とのつながりによって生活の喜びを感じている様子がよく描写されている。筋のおもしろさもあるが、彼（三夫）のことを書いていくはずなのに、最後にいきなり「私」なるものがとびだして面喰わされた。

◎日照り雨

川原 奈美

美輪ばあさんの半生をよく描いていて、おもしろく読ませ、文章もなかなか達者である。題材に新鮮味が欠けていることと、全体の構成とが多少気にかかる。

◎赤い土壁の家

平川 早美

ありきたりのヘプエンドもので、シネマの筋書みたいなものである。父親に捨てられた正子が成長する過程をよく追っているが、まだ表現不足なところもあり、母親の日記なるものが宙に浮いており、わざとらしさが見えすぎている。

◎枯れ木のある遠景 弥高 文男

初老の木野の不安定な心理状態が、彼をして性の冒険へおしやる過程がほぼ描かれているが、まだまだ表現不足のところが多いと思う。

◎脱 耕 井上 優

一生けんめい書いている様子はよくうかがえるが、表現不足なところが多い。題材は非常に興味をそそるものだが、もう少しねって見たら、おもしろいものが出来やしないか。

◎紺青の城 醍醐麻沙夫

旅先で知りあった男女関係を描いているが、退屈を感じた。描写はこまかくてうまいが、ブラジル語の会話を註入りの横文字書しているのが気になった。ブラジルの片田舎の町と、「折鶴」の舞いの肌合いが不自然に思われた。

◎避暑期 いこま 正

少女エレナのあわい恋を描いたものだが、登場人物がぼやけていて、生き生きとした感じが浮かんでこない。それに、全体の構成が気にかかった。

◎不快な覚書

矢島 健介

意欲なしでただ原稿用紙を埋めた感じが強く、しかも作品が非常に平面的であり、しりめつれつである。ベテランにもハツパをかける必要が大いにあるのではなからうか。

◎棄民

伊那 宏

「棄民」という言葉と、一生けん命にすもうをとっている感じである。一人でりきんで、結局、何をいわんとしているのかさっぱりわからない。書くのはよいが、その前に人が書いたものを参考にして少し研究をする努力も積んで欲しい。

◎なでしこ

蓼科冨智雄

感傷しかない。小説とは、およそ縁遠いものである。

◎盲点

田端 月詩

人妻マチ子が生活苦のために、だしぬけに売春をやったり、義父との間に子ができたりして、なんら心理的な葛藤を感じないという無神経ぶりな描き方には、背筋に悪感をおぼえた。不潔なエロであり、エロが主題であり、目的であるとしか受けとれない。

◎鷹

掘井 一声

分裂的で、何を書いているのか、ちんぷんかんである。まず自分の描く主題をしっかりと決め、それからその主題をどういう風に表現すべきかを考えてからペンを運んで貰いたいと思う。

一九六八年一月三十日記

選後寸感

武本 由夫

なでしこ

蓼科冨智雄

この作者は、カチツとまとまった小品ばかりを書いて来ている。この作品も八枚もので、お話としてはまとまっているが、味が浅い。一つ、骨格のがっしりした、重量感のあるテーマをつかんで、四つに取り組んだ作品を見せて貰いたい。筆使いも悪くないのだから、書ける人と思う。

流 離

三瀬喜代志

長篇ものらしいので、批評がしにくいですが、コロニアの土の臭のしみた作品である。出て来る人物が、みな善人揃いなので、甘つたるいものに流れる恐れがある。じっくり掘りさげて行って、シヨロホフの「静かなるドン」のような味のある作品にしあげて貰いたい。

枯木のある風景 弥高 文男

蝕まれた肉体を持った男の、鬱屈した精神が書かれている。遂に自己嫌悪に押しひしがれて、倒れた男の気持をかなりえぐり出している。最後のところが、なかなかよく書けていたが、全体としてカットが多すぎるように思う。

真昼の出来ごと 杉村 志郎

理想と現実との谷間におちこみ、少少虚無的に、人間不信になった青年のある日の行状がテーマになっている。自尊心が高く傷つき易い心のさまよいであろうか。自分自身に対するやりきれなさ、やはり、その底には愛に飢えた魂のうめきがある。

下宿の主婦、素人じみた娼婦、みなよく書けていた。最後のところで青年の胸に人に対する愛情のよみがえってくるところに、ほのぼのとしたものが感じられる。

紺青の城 醍醐麻沙夫

「コロニア文学」創刊以来の大作である。清らかな愛情物語りで、少々人間観に甘いところもあるが、よく書き込んであって、無理なく読ませられる。

言彙も豊富だし、現表も緻密で、苦心の跡がうかがえる。後感に残る何かさわやかなものが、あと味のよさを感じさせる。

恋を得たこと、その恋を手づるに観念の城から脱出するという設定もうなずける。しかし、実は、ここから小説ははじまるわけ

で、第二作に期待したい。

日照り雨

川原 奈美

手なれた書き振りで、とにかく読ませられる。文学的な見方からすれば底は浅いが、一種のよみものとしては、まとまっている。

これで、作者の書き難い、お美輪の若後家時代を取りあげれば、人間の本質に相当肉迫することができたと思う。

おいしい所をぼかしている。

赤い土壁の家

平川 早美

首尾ととのった一篇の物語りであるが、くだくだしい所が可成りある。やはり省略すべきところは、省略しなければなるまい。

女主人公正子の出生、少女時代、結婚と、三つの山に分け、頂上の部分は描写、会話で書き、麓の部分を説明で書いて結びあわせれば、退屈しないで読める小説になったのではあるまいか。

避暑期

いこま 正

海浜に合宿する学生の生態が、かなり、いきいきと書かれている。清純な少女の点描も気がきいていて頬笑ましい。だが、それが素描に終わっているところに、物足りなさがある。どぎつく書く必要はないが、もう少し、人間が浮き彫りされなければ、読者の感銘は薄いと思う。相当に書ける人であるから、今後に期待したい。

不快な覚書

矢島 健介

題材はなかなか面白いが、筆使いが粗い。もっと一場面、一場面、神経の行き届いた書き込みが希ましい。この作者のものとしては、不出来の方ではないかと思う。構想を充分に練って、もう少し緊縮したら、よくなるように思われた。

脱 耕

井 上 優

興味ある問題が取りあげられていて、好感は持てたが、可成り文章が読みづらい。小説に仕組まないで、記録風なものにしても、その事実だけで結構読ませ得るものになりはしまいかと思われた。いずれにしてももっと要約ということを効かせる必要があるだろう。

盲 点

田端 月詩

いり組んだ人間関係は、よくわかるように書いてあり、筋は面白いが、性の取り扱い方が低い。性は醜いなりに、美しいなりに、厳しく描かなければなるまい。何となくわらい絵の感じでは、どうにもならない。筆力のある作者であるから、本気で取り組めば相当なものが書ける筈と思う。

「コロナア文学」

作品募集

左によつて、本会々員より作品を募集いたします。

一、小説①一〇〇枚内外

②三〇枚内外

③翻訳物、三〇枚内外

二、評論（文学、美術、学術、社会）三〇枚内外

三、随筆 紀行文、二〇枚内外

四、韻文①詩（訳詩）一人二篇以内

②短歌一〇首以内、

③俳句一〇句以内、

④川柳一〇句以内

五、短文（生活文、地方通信）五枚以内

六、特別募集

①「私の終戦」二〇枚内外、

②「コロナ時代の思い出」二〇枚内外、

③「短篇自叙伝」五〇枚以内、

応募規定

一、必ず原稿用紙（20×20）を使用してください。

（本会調製の良質原稿用紙があります。一綴（一〇〇枚）を二、二新クルゼイロスでおわけしています。御注文に応じ直ちにお送りいたします。）

二、誌上筆名はさしつかえありませんが、原稿末尾に本名、略歴、

連絡先を明記してください。

三、掲載作品は返しません。掲載しなかった作品は、作者の希望により返還します。

四、掲載作品には、本会々計の許す範囲内で稿料を出します。

五、作品の採否は、本会の選考委員会におまかせください。

第七号の選考委員は、宮尾進、山添良二 田畑三郎

六、原稿〆切、

第八号、一九六八年五月末日

第九号、同 八月末日

七、投稿宛名

サンパウロ市サン・ジョアキン街三八一番

日本文化センター内

『コロニア文学会』

G r e m i o L i t e r a r i o " C o l o n i a R u
a S a o J o a q u i m , 3 8 1 - S a o P a u l o .

雑記

◆鈴木悌一会長は、日本で行なわれる日伯シンポジウムに出席のため滞在約一カ月の予定で、二日二四日空路日本向け出発した。

◆本誌、武本編集人は、日語講習会への出席を兼ねて、一月一日、北パラナ・マリンガを訪問。同地、ロンドリーナ、アサイの文学関係者と懇談した。又、二月二五日、パ線グワイラで催され

た、同地と聖市歌会の交流歌会に、聖市多数作歌者と共に出席した。尚、四月には、マリリアのスバル大会に出席同地方文学関係者と懇談する筈である。

◆サンパウロ日本文化協会は、本年授賞の「コロニア文学賞」推薦委員を、全伯文学関係者中より一〇九名及びマスコミ関係若干名に委嘱した。

◆なお、選考委員は左の人々に委嘱することになっている。

古野菊生、木村義臣、清谷益次、尾関興之助、宮尾進、鈴木悌一、島木史生、武本由夫、薮崎正寿、

◆推薦委員会、選考委員会の会長は共に、文協文化委員長が兼任する。

「コロニア文学会」

新入会員名簿（ABC順）

一九六七年一月～一九六八年二月

A：浅賀林蔵、有田市治

E：遠藤源吾、遠藤浩

F：船津礼作、藤重清

H：橋本寿郎、星弘、羽部素行

I：今信福美、井唯猛

J：陣内太

K：角藤忠雄、木村光也、川下亀雄、小島正徳、川崎春芹、関東忠吉、鹿毛至、菊地庄太郎、喜井重宜、加藤 操、梶本忠雄

M…間野秀夫、馬渕知世、前田芳子、水気憲光、望月鏡三、本山透、村田 実、本永群起

N…中川いさむ、中村耐志、野坂修、

O…大原正市

S…新志正夫、瀬古義信、篠原均、篠田馬蔵、鈴木欣策、坂光男

T…竹松猪太郎、富吉方暢、徳満毅彦、坪内広代、高橋誠敏、橘

卓滋

U…内田笑子、内田佳子

Y…山口友義、矢野かおる、湯朝清二、米倉茂

◆会員の方々は、一人でも多く、文学同好の友人、また、コロニア文化の向上に関心深い方々を、会員としておさそいください。

◆会員が多いほど、本会の経営はらくになり、本誌も立派なものにしていくことができます。どうか、お願い致します。

後記

◇本会は、だんだんと、その存在が各方面に認められつつあります。会員も六百の線を超え、まだまだ伸びています。

◇本号は、前号より、少し減ページしました。これは原稿不足からではなく、専ら、台所の緊縮によります。

◇原稿は、第七号への応募小説が既に一六篇も来ていて、引き続き第七号発行の準備に取り掛かってもいいくらいです。

◇原稿がどしどし集まることは心強いことです。しかし、随筆、論文はまだまだ少なく、韻文も余りありません。

いずれの分野も、優れたものの集まることが希ましく思われます。◇本号の掲載作品数は少ないが、かなりの大作が載せてあります。

読後感なども、お寄せ頂ければ、うれしく存じます。

◇本年から、サンパウロ日本文化協会が、文化部の事業として、「コロニア文学賞」を設定しました。会員の中にも、推薦委員に推された方が多数にあると思います。よい作品を推薦して頂きたく思います。

◇物価があがり、印刷費が高くなり、きゅうくつです。会費はできるだけ早目にお納めください。

◇コロニアの有名商社から広告を頂いており、感謝しております。今後ともよろしくお願い致します。

(武本生)

コロニア文学第六号

発行 一九六八年三月

(会員へ無料配布)

編集人 コロニア文学会編集委員会

代表 鈴木 悌一

発行所 サンパウロ市 サン・ジョアキン街三八一番

日本文化センター内コロニア文学会

G r e m i o L i t e r a r i o “ C o l o n i a ”

R u a S a o J o a q u i m , 3 8 1 . S . P a u l o

T e l . 3 6 — 5 2 1

印刷所 パウリスタ印刷株式会社

オスカル・シントラ・ゴルジーニョ街四六番